

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書37

— 多古町千田の台遺跡(1) —

令和3年3月

東日本高速道路株式会社
公益財団法人 千葉県教育振興財団

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書37

— 多古町千田の台遺跡(1) —



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的として、昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第783集として、首都圏中央連絡自動車道建設に伴って実施した香取郡多古町千田の台遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、古墳時代から奈良・平安時代の集落、中世の台地整形区画とこれに伴う地下式坑や井戸、多數の土坑が確認され、この地域に暮らした人びとの歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行にあたり、本書が学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願ってやみません。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

令和3年3月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理事長 稲葉 泰

凡　例

- 1 本書は、国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所および東日本高速道路株式会社による首都圏中央連絡自動車道（大栄～横芝）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録したのは、千葉県香取郡多古町千田字屋倉155-1の一部はかに所在する千田の台遺跡の第1次調査の成果である。遺跡コードは347-020（1）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所および東日本高速道路株式会社の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査および整理作業の実施期間、担当者は、第1章第1節に記載した。
- 5 本書の執筆は、主任上席文化財主事 萩原恭一・渡邊修一 上席文化財主事 糸川道行・山口典子 文化財主事 山岡磨由子・小川慶一郎が担当した。編集は、山口及び渡邊が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、多古町教育委員会、国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所および東日本高速道路株式会社の御指導、御協力を得た。
- 7 本書では下記の地形図を合成、編集して使用した。
第1図 國土地理院発行 1/25,000地形図「多古」(NI-54-19-10-2)
第2・5・6・41・49・69図 多古町発行 1/2,500地形図 IX-LF03-4 芝山町発行 1/2,500地形図 19
第91図 地図資料編纂会編 1989年「明治前期関東平野地誌図集成：1880(明治13)年～1886(明治19)年」
柏書房
- 8 図版1の航空写真は、國土地理院空中写真 CKT20011X-C3-17(平成13年10月撮影)を使用した。
- 9 本書で使用した座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標(国家標準直角座標第IX系)で、図面の方位は全て座標北である。
- 10 遺構図の縮尺は原則1/80として、必要に応じて1/40図を掲載した。
- 11 おもな遺物実測図の縮尺は土器、大型土製品・石製品(土製支脚・石塔・板碑など)は1/4、繩文土器・砥石は1/3、小型土製品・石製品(玉類・紡錘車など)は2/3、錢貨を含む金属製品は1/2などで、それ以外も含め、その都度スケールを示した。
- 12 遺構図および遺物実測図の凡例は下記のとおりで、これ以外は各図に示した。

遺構

 焼土  炭化物  カマド構築材  貝層

硬化範囲

• 土器 ■ 土製品 ▲ 石器・石製品 ★ 金属製品・錢貨

遺物

 赤彩・黒色処理・釉・漆塗・その他付着物(煤・ベンガラ・銅・木質など)  油煙煤

 胎土中に纖維を含有(土器断面図中)

本文目次

序 文

凡 例

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査の経緯と経過	1
2 調査・整理の方法と概要	4
第2節 遺跡の位置と環境	7
1 周辺の地形	7
2 周辺の遺跡	7
第2章 遺構・遺物	9
第1節 堅穴建物跡と出土遺物	9
第2節 その他の遺構と出土遺物	62
1 地下式坑	62
2 井戸	77
3 東調査区土坑群	82
4 西調査区土坑群	113
第3節 遺構外出土の遺物	134
1 旧石器時代～弥生時代	134
2 古墳時代以降	144
第4節 動物遺体	162
1 資料と方法	162
2 分析結果	162
3 考察	162
第3章 まとめ	166
第1節 千田の台遺跡第1次調査の成果について	166
1 古墳時代～奈良・平安時代の集落	166
2 中世遺構群	167
第2節 千田の台遺跡と通磁郡茨城郷	170
報告書抄録	卷末

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の地形	2	第42図 地下式坑(1)	72
第2図 周辺の地形と調査範囲	3	第43図 地下式坑(2)	74
第3図 グリッド分割図	5	第44図 地下式坑(3)	75
第4図 基本層序	5	第45図 地下式坑出土遺物	76
第5図 千田の台遺跡(1) 遺構分布図	6	第46図 井戸	78
第6図 壁穴建物跡分布図	10	第47図 井戸出土遺物(1)	80
第7図 SI001	12	第48図 井戸出土遺物(2)	81
第8図 SI002・SI004(1)	13	第49図 東調査区土坑群分布図	83
第9図 SI002・SI004(2)	14	第50図 東調査区土坑群(1)	84
第10図 SI003	15	第51図 東調査区土坑群(2)	86
第11図 SI005	17	第52図 東調査区土坑群(3)	88
第12図 SI006・SI007	19	第53図 東調査区土坑群(4)	89
第13図 SI008(1)	20	第54図 東調査区土坑群(5)	90
第14図 SI008(2)	21	第55図 東調査区土坑群(6)	92
第15図 SI009・SI010(1)	23	第56図 東調査区土坑群(7)	93
第16図 SI009・SI010(2)	24	第57図 東調査区土坑群(8)	96
第17図 SI011・SI012	25	第58図 東調査区土坑群(9)	98
第18図 SI013・SI014(1)	27	第59図 東調査区土坑群(10)	100
第19図 SI013・SI014(2)	28	第60図 東調査区土坑群(11)	101
第20図 SI015・SI017(1)	30	第61図 東調査区土坑群(12)	102
第21図 SI015・SI017(2)	31	第62図 東調査区土坑群(13)	104
第22図 SI019(1)	32	第63図 東調査区土坑群(14)	106
第23図 SI019(2)	33	第64図 東調査区土坑群(15)	107
第24図 SI020・SI021(1)	36	第65図 東調査区土坑群(16)	108
第25図 SI020・SI021(2)	37	第66図 東調査区土坑群出土遺物(1)	109
第26図 SI022・SI023・SI024(1)	39	第67図 東調査区土坑群出土遺物(2)	110
第27図 SI022・SI023・SI024(2)	41	第68図 東調査区土坑群出土遺物(3)	111
第28図 SI025・SI026(1)	43	第69図 西調査区土坑群分布図	114
第29図 SI025・SI026(2)	44	第70図 西調査区土坑群(1)	115
第30図 SI027	45	第71図 西調査区土坑群(2)	116
第31図 SI028	47	第72図 西調査区土坑群(3)	117
第32図 SI030・SI031	49	第73図 西調査区土坑群(4)	119
第33図 SI032(1)	51	第74図 西調査区土坑群(5)	120
第34図 SI032(2)・SI033	52	第75図 西調査区土坑群(6)	122
第35図 SI034・SI035(1)	54	第76図 西調査区土坑群(7)	124
第36図 SI034・SI035(2)	55	第77図 西調査区土坑群(8)	126
第37図 SI036	56	第78図 西調査区土坑群(9)	128
第38図 SI037	57	第79図 西調査区土坑群(10)	129
第39図 SI040(1)	60	第80図 西調査区土坑群(11)	130
第40図 SI040(2)	61	第81図 西調査区土坑群(12)	131
第41図 土坑群分布図	64	第82図 西調査区土坑群出土遺物(1)	132

第83図	西調査区土坑群出土遺物 (2)	133
第84図	遺構外出土遺物 (1)	135
第85図	遺構外出土遺物 (2)	137
第86図	遺構外出土遺物 (3)	138
第87図	遺構外出土遺物 (4)	139
第88図	遺構外出土遺物 (5)	141
第89図	遺構外出土遺物 (6)	143
第90図	遺構外出土遺物 (7)	145
第91図	奈良・平安時代の千田の台遺跡周辺の郡郷	174

表 目 次

第1表	堅穴建物跡一覧	11
第2表	その他の遺構一覧	65
第3表	土器観察表	148
第4表	中・近世陶磁器等組成集計表	155
第5表	土製品・石製品計測表	156
第6表	金属製品等計測表	158
第7表	錢貨計測表	160
第8表	錢貨組成表	160
第9表	旧石器時代石器・縄文時代石器計測表	161
第10表	SK072出土ウシ計測結果と推定体高	164
第11表	SK189出土ウマ計測結果と推定年齢・推定体高	164
第12表	動物遺体の同定結果一覧	165
第13表	墨書き土器等一覧	169

図 版 目 次

図版1	千田の台遺跡周辺航空写真
図版2	千田の台遺跡(1) 調査区全景
図版3	発掘調査状況
図版4	堅穴建物跡 (1)
図版5	堅穴建物跡 (2)
図版6	堅穴建物跡 (3)
図版7	堅穴建物跡 (4)
図版8	堅穴建物跡 (5)
図版9	堅穴建物跡 (6)
図版10	堅穴建物跡 (7)
図版11	堅穴建物跡 (8)
図版12	堅穴建物跡 (9)
図版13	堅穴建物跡 (10)
図版14	地下式坑 (1)
図版15	地下式坑 (2)
図版16	地下式坑 (3)
図版17	井戸
図版18	東調査区土坑群 (1)
図版19	東調査区土坑群 (2)
図版20	東調査区土坑群 (3)
図版21	東調査区土坑群 (4)
図版22	西調査区土坑群 (1)
図版23	西調査区土坑群 (2)
図版24	西調査区土坑群 (3)
図版25	西調査区土坑群 (4)
図版26	西調査区土坑群 (5)
図版27	西調査区土坑群 (6)
図版28	西調査区土坑群 (7)
図版29	堅穴建物跡出土土器 (1)
図版30	堅穴建物跡出土土器 (2)
図版31	堅穴建物跡出土土器 (3)
図版32	堅穴建物跡出土土器 (4)
図版33	堅穴建物跡出土土器 (5)
図版34	土坑等出土土器 (1)
図版35	土坑等出土土器 (2)
図版36	墨書き土器等
図版37	地下式坑出土土器
図版38	井戸出土土器
図版39	東調査区土坑群出土土器
図版40	西調査区土坑群出土土器 (1)
図版41	西調査区土坑群出土土器 (2)
図版42	遺構外出土土器 (1)
図版43	遺構外出土土器 (2)
図版44	遺構外出土土器 (3)
図版45	土製品・石製品
図版46	旧石器時代の石器・縄文時代の石器 (1)
図版47	縄文時代の石器 (2)・砥石
図版48	石塔・板碑
図版49	金属製品 (1)
図版50	金属製品 (2)・錢貨
図版51	羽口・鉄滓

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

首都圏中央連絡自動車道（圏央道）は、首都圏の道路交通の円滑化・環境改善・沿線都市間の連絡強化などを目的として、都心から半径40km～60kmの範囲を環状に巡る、総延長約300kmの高規格幹線道路である。

このうち千葉県内の区間は平成4年度から事業化され、これまでに神崎IC～大栄JCT（国土交通省関東地方整備局常総国道事務所）、東金IC～茂原・長南ICおよび茂原・長南IC～木更津IC間（国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所及び東日本高速道路株式会社）は開通し、これに伴う埋蔵文化財発掘調査の結果について、33冊の報告書が刊行されている。

また、東関東自動車道と接続する松尾横芝ICの18.5kmの区間の建設事業（略称「圏央道（大栄～横芝）」）については、平成26年3月に国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所が、事業地における埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県教育委員会に協議を依頼した。千葉県教育委員会は、これに対し同年3月に複数の埋蔵文化財包蔵地が所在する旨の回答を行い、その取扱いについて関係機関で慎重に協議を重ねた結果、事業計画の変更が不可能な部分は、やむをえ記録保存の措置を講ずることとなり、調査を公益財団法人千葉県教育振興財団が実施することになった。

発掘調査委託契約は、平成26年度～平成29年度が国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所、平成30年度からは東日本高速道路株式会社との間で締結された。

発掘調査は平成26年度に開始し、令和2年度現在継続中である。また、これに伴う発掘調査の結果については、令和2年3月までに3冊の報告書の刊行を行った。

本書では、平成29年度に実施した千葉県香取郡多古町千田の台遺跡第1次調査（以降(1)を付す）について報告する。発掘調査・整理作業の期間、担当者等は下記のとおりである。

発掘調査

平成29年度

文化財センター長 上守秀明

調査課長 蜂屋孝之

調査担当者 主任上席文化財主事 井上哲朗・沖松信隆 上席文化財主事 岸本雅人

調査員 石山 啓

調査期間 平成29年4月6日～平成29年12月18日

調査面積（確認調査）上層397m² / 3,967m² 下層80m² / 3,967m²

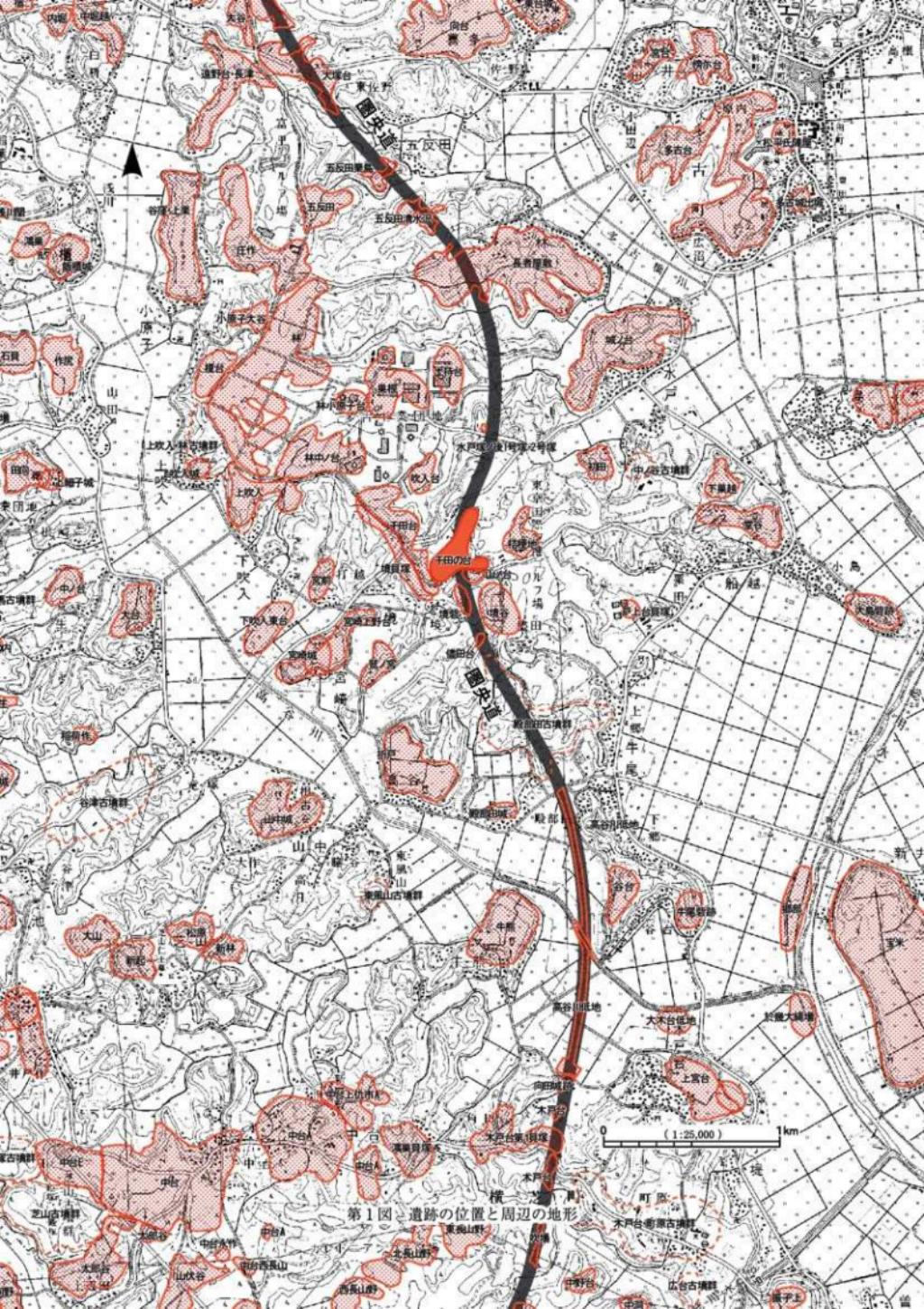
（本調査）上層3,460m² 下層0m²

整理作業

平成30年度

文化財センター長 島立 桂

整理課長 田島 新



第1図 遺跡の位置と周辺の地形



整理担当者 主任上席文化財主事 井上哲朗 上席文化財主事 糸川道行 文化財主事 山岡磨由子
整理期間 平成30年4月2日～平成31年3月29日
整理内容 水洗・注記～トレースの一部

平成31年度

文化財センター長 島立 桂
調査第一課長 田島 新
整理担当者 主任上席文化財主事 萩原恭一 上席文化財主事 山口典子
整理期間 平成31年4月1日～令和元年11月29日
整理内容 実測の一部～編集の一部

令和2年度

文化財センター長 福田 誠
調査第一課長 田島 新
整理担当者 主任上席文化財主事 渡邊修一
整理期間 令和2年4月1日～令和3年3月31日
整理内容 原稿執筆の一部～報告書印刷・刊行

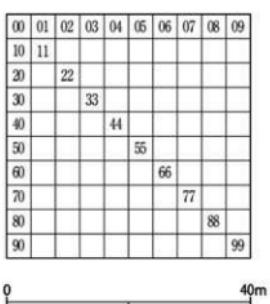
2 調査・整理の方法と概要（第1～5図）

首都圏中央連絡自動車道大栄～横芝区間建設予定地内に所在する遺跡の調査にあたり、世界測地系（平面直角座標第IX系）に基づく公共座標を基準とした方眼網を設定した。方眼は、成田市大栄JCT付近のX=+20,920,000m・Y=+50,520,000mを起点（1A-00）として、40m×40mの区画を大グリッドとし、起点から40mごとに南へ1・2・3…、東へA・B・C…Z・AA・AB…を割り当て、両者を組み合わせて、大グリッドの呼称とした。さらに大グリッドを4m×4mの区画で100分割して小グリッドを設定した。小グリッドの呼称は北西隅を00とし、東へ01・02…、南へ10・20…と割り振り、南東隅が99となるようにした。これを大グリッドの名称と組み合わせ「268DQ-55」のように表記し、遺構や遺物の位置はこの方眼網を基準に調査区内に打設した基準杭により測定し、記録した。また、遺構・遺物の記録に用いた標高は、東京湾平均海面（T.P.）からの海拔高である。

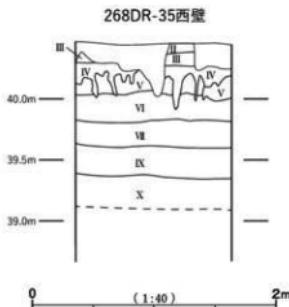
千田の台遺跡(1)の調査対象地区は、道路によって2か所に分かれた南北に長い長方形と東西に長い長方形を組み合わせたL字状を呈する。便宜上南北に長い西側を西調査区、東西に長い東側を東調査区と呼称することにする。調査区の大グリッドは、北西が267DQ、南東は268DSにあたる。

上層確認調査は、幅2m、長さ8m～20mのトレンチを西調査区に11か所、東調査区に14か所設定して行った。トレンチ内の表土を重機および人力により除去し、精査して遺構、遺物の分布を確認した結果、西調査区の西側に設定した3か所のトレンチではすでに遺構確認面が削平されていたことが明らかになつたため、ここを除く3,460m²を上層本調査範囲とした。

上層の本調査は、表土除去後、遺構の範囲を確認し、覆土の土層観察用のベルトを設定して遺構内を掘り下げて精査し、土層断面図や平面図、写真撮影などの記録を作成した。しかし、作業の安全のため、地下式坑については、地下室の天井部を除去し、井戸のように深さのあるものは、周囲を掘り広げてから調査を行つたため、地下室天井部の形状の記録や開口部の平面形、土層断面などを記録できなかつた場合もある。



第3図 グリッド分割図



第4図 基本層序

下層確認調査は、上層の遺構が確認できなかったトレンチ内、または上層の調査終了後に2m四方のグリッドを20か所設定して行った。全体で80mf(約2%)を人力により掘り下げたが、石器等が出土しなかつたため確認調査で終了した。台地中央部の立川ローム層の基本土層は第4図のとおりである。

また、発掘調査期間中の平成29年8月5日に遺跡見学会を開催し、周辺住民を中心に調査の様子を公開した。

遺構番号は、種別を表す二文字の英字の略号と通し番号を示す三桁の算用数字を組み合わせたものである。遺構の種別を表す略号は、SIが堅穴建物跡、SXが台地整形区画、道路、SDが溝状遺構、SK、SHが地下式坑、井戸、土坑である。上層本調査は東調査区から行われたため、東側から遺構番号を振っている。確認した遺構は、堅穴建物跡35棟、台地整形区画13か所、溝状遺構1条、道路状遺構1条、堅穴状遺構1基、地下式坑8基、井戸5基、土坑267基である。

整理段階の検討により、遺構の種類の変更や欠番が生じた場合があるが、調査時の遺構番号を踏襲することを原則とした。また、遺構の重複のはか耕作などによる攪乱が著しかったため、1遺構に複数時期の遺物が混在していたことが判明した例が少なくなかった。しかし、混乱を避けるため、調査時点での遺物の帰属(遺物台帳・注記)を優先して報告することとし、本来の帰属については、報告文中で説明することとした。

このほか、調査区全体に幅0.20m~0.30mの耕作による溝状の攪乱が縦状に入っていた。これらの平面図や土層断面図などへの表記は必要最低限とした。

遺構図の縮尺は原則として1/80とし、カマド図など必要に応じて1/40の図を併せて掲載した。また、地下式坑、井戸以外の多数確認した土坑類については、東調査区、西調査区ごとに台地整形区画などとともに位置関係がわかる図(1/80)を掲示し、遺構の説明は挿図に沿って行った。

遺構、遺物の基本的な計測値は、「第1表 堅穴建物跡一覧」「第2表 その他の遺構一覧」「第3表 土器観察表」はじめ各遺物計測表(第5~7表、第9表)に掲載した。



第5図 千田の台遺跡(1) 遺構分布図

第2節 遺跡の位置と環境

1 周辺の地形（第1・2図、図版1）

千田の台遺跡は、千葉県北東部の香取郡多古町の南西に位置する。遺跡西から東を通る調査区境の道路が香取郡と山武郡の郡境、また香取郡多古町と山武郡芝山町との町境となっている。

多古町は千葉県中部から北部に広がる標高30m～40mの下総台地の北東部、北総台地と呼ばれる台地上に立地している。北総台地は、成田空港付近を分水嶺として北は利根川に流入する河川、南は九十九里浜に注ぐ河川によって開析され、台地に複雑に谷が入り込む地形となっている。

千田の台遺跡が立地するのは、いずれも九十九里浜に注ぐ栗山川の支流である高谷川と多古橋川に西側と東側を挟まれる南北に長く広がる標高40m前後の台地で、低地との比高は30mほどである。台地は、両河川から分かれた支谷により樹枝状に開析されている。

千田の台遺跡の位置する台地は、北を頂点とする三角形を呈し、三角形の二辺にあたる西と東は、多古橋川から分かれて多古町戸付近から南西に入り込む谷に挟まれて、幅の狭い尾根状になっている。また三角形の底辺にあたる南側は高谷川から芝山町宮崎と芝山町高谷から北東に入り込む谷に面している。今回調査した第1次調査区は、台地南側の平坦地の中央部分にある。

2 周辺の遺跡（第1図）

第1図は『千葉県埋蔵文化財分布地図（2）』など⁹⁾に基づき、千田の台遺跡周辺の主な遺跡と圏央道（大栄～横芝）の計画範囲を示したものである。千田の台遺跡の所在する台地は先述したように、西側の高谷川、東側の多古橋川からのびる小支谷により囲まれる。2つの河川の両岸、また低地には多数の遺跡が所在し、千田の台遺跡も多古橋川水系の包蔵地・貝塚、城館跡として掲載される。

千田の台遺跡の調査区南を東西に走る道路の南東の芝山町山ノ台遺跡は、ゴルフ場造成に伴い、平成12年、平成17年、平成19年に発掘調査が行われた。その結果、堅穴建物跡のほか土坑、溝状遺構などを確認し、古墳時代から奈良・平安時代の集落であることが明らかになった¹⁰⁾。主体は8世紀～9世紀の堅穴建物跡で、千田の台遺跡で確認した集落の続いているといえる。

谷を挟んだ西側には芝山町境貝塚が位置している。境貝塚は多古町と芝山町の町境に広がる遺跡で、南東に向かって半島状に突出する台地上と斜面に貝塚と遺構が確認されている。縄文土器の採集によって昭和44年にその存在が指摘され、昭和54年、昭和62年、平成12年、平成13年、平成17年～平成19年に発掘調査が行われた^{2・4・11)}。昭和54年は農業用水管敷設、農道拡幅工事に伴い2地点を調査した。第I地点は、千田の台遺跡(1)調査範囲の南を区切る東西の道路と平行する地点で、山ノ台遺跡の北西になる。溝状遺構の一部を確認し、擂鉢や須恵器・土師器の破片を少量出土した。また第II地点では縄文時代の堅穴建物跡、溝状遺構、土坑、ピットのほか貝塚（第1貝塚）を確認し、縄文土器、石器、骨角歯牙製品を出土した。昭和62年の調査では、第1貝塚の貝層部を調査し、縄文土器のほか、土偶、耳栓、円板といった土製品、石鎌、石斧、石棒などの石器・石製品、生産用具や装身具類を含む豊富な骨角貝製品を出土し、縄文時代後期堀之内式1土器を主体とする時期の貝塚であることが判明した。その後の平成12年、平成13年、平成17年～平成19年のゴルフ場造成に伴う調査では、斜面に位置する第2貝塚～第4貝塚のほか、台地上に縄文時代から中世の遺構・遺物を確認した。縄文時代の貝塚、陥穴、堅穴建物跡のほか、古墳時代後期から奈良・平安時代の堅穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑墓、火葬墓、粘土採掘坑などがあり、千田の台遺跡とともに古墳時代後期から奈良・平安時代の集落が存在したことがわかった。特に千田の台遺跡西側の谷

の奥部に面した台地南では、古墳時代後期から奈良・平安時代の堅穴建物跡をはじめ掘立柱建物跡が多数確認されている。出土遺物には、土器のほか壺鐘、兵庫鎖、鉄具といった馬具類が出土している点が注目される。

多古町千田台遺跡は、谷を挟んで北に位置する。平成元年に遺跡の一部について発掘調査を行っており、旧石器時代の石器集中地点27か所、縄文時代早期の土器集中地点、炉穴、陥穴のほか奈良・平安時代から中・近世の集落跡が確認された^⑤。奈良・平安時代の遺構は堅穴建物跡18棟、土坑7基、柱穴群1群、中世の遺構は溝2条、土坑2基、掘立柱建物3棟であった。

境貝塚の南の標高40mの台地先端部には芝山町境跡があり、郭と土塁が確認されている^⑥。千田の台遺跡からは250m南にあたる。

千田の台遺跡が所在する多古町千田はその地名から中世の莊園である「千田庄」の役所があったところといわれている。「吾妻鏡」治承4（1180）年9月14日条に、下総藤原氏の藤原（千田）親政が「下総国千田庄領家判官代」と見えるのが「千田庄」の初見である^⑦。千田には「木城地」「古屋敷」「仮屋」「屋倉」といったそれに間わるような小字が残る^⑧。また、千田の台遺跡の調査地区南を区切る道沿いを東に行くと道が分岐し、分岐地点に千田諏訪神社（宇宮ノ前）があり、諏訪神社は「千田庄」の總鎮守であったと伝えられる^⑨。また、北西には壇宣寺跡があり、古くは台地上（字古屋敷）にあったが、現在の低地に移転したと伝えられる^⑩。

しかし、「千田庄」についてはその範囲が明らかではなく、多古町飯篠にも小字に千田があり、飯篠遺跡から「千」、保田遺跡から「千」「庄」の墨書きが出土していることから、こちらも「千田庄」の候補地となっている^⑪。

参考文献

- 1 井野・飯篠遺跡発掘調査会 1979年『井野・飯篠遺跡発掘調査報告書』
- 2 境遺跡発掘調査会 1980年『境遺跡発掘調査報告書－第Ⅰ・Ⅱ地点－』
- 3 多古町 1985年『多古町史 上巻』『多古町史 下巻』
- 4 多古町遺跡調査会 1987年『千葉県多古町境貝塚発掘調査報告』
- 5 (財)香取都市文化財センター 1993年『大塚遺跡群保田遺跡－保田遺跡No.1・2・3地点・条山遺跡』
- 6 千葉県教育委員会 1995年『千葉県所在中近世城館詳細分布調査報告書Ⅰ－旧下総国地域－』
- 7 千葉県教育委員会 1996年『千葉県所在中近世城館詳細分布調査報告書Ⅱ－旧上総・安房国地域－』
- 8 (財)千葉県文化財センター 1996年『多古町千田台遺跡－BR/W南側NDB用地（無線施設）埋蔵文化財調査報告書－』
- 9 (財)千葉県文化財センター 1998年『千葉県埋蔵文化財分布図（2）－香取・海上・匝瑳・山武地区（改訂版）－』
千葉県教育委員会HP内「ふさの国文化財ナビゲーション」
- 10 (財)香取都市文化財センター 1998年『大塚遺跡群保田遺跡Ⅱ－保田遺跡No.4・5・6地点』
- 11 (財)山武都市文化財センター 2008年『境貝塚 山ノ台遺跡 保田台遺跡 殿部田古墳群』

第2章 遺構・遺物

第1節 壊穴建物跡と出土遺物（第6図、第1・3・5～8・13表）

確認した壊穴建物跡は35棟である。34棟が東調査区、1棟（SI040）が西調査区に所在する。古墳時代後期から奈良・平安時代の集落である。

SI001（第7図、図版4・29・36・49）

東調査区北西に位置しており、重複する遺構はない。主軸は東西より北に振れ、2m南に主軸方向が同じSI035が位置している。

掘り込みが浅く、その影響か平面形の一部が不整形である。壁高は遺存のよいところで0.16mである。カマドは東壁中央に位置していたとみられるが、袖部や火床部を確認できなかった。煙道部の僅かな壁への掘り込みと焼土・炭化粒子の散布が見られるのみである。ピットは3か所で、カマド北側の東壁に沿って位置する横長方形のP3(0.40m×0.92m×0.14m)は貯蔵穴であろう。ほかの2か所P1(深さ0.11m)、P2(深さ0.41m)は不規則な配置で柱穴と断定できない。床面から炭化物を多数出土し、覆土中にも炭化物、焼土粒子を含んでいるため焼失建物であったと考えられる。東西方向に縞状に擾乱されているため、図示したような状態であったが、本来は全体に炭化物が存在していたとみられる。

遺物は全体に散在していた。掘り込みが浅いためか遺存状態がよいものは少ない。

1はロクロ土師器高台付皿である。皿部内面は丁寧にミガキ調整が施されている。内外面ともに黒ずみがあることから、もともとは黒色処理の土器で、何らかの理由で炭素が飛んでしまったものと考えられる。

2はロクロ土師器皿もしくは杯で、体部中位以上を欠失している。底部外面は、回転糸切り後無調整である。

3は土師器壺底部で、底部外面にヘラ書きがある。

4は下総地域産の須恵器壺の口縁部片である。口縁端部外面は折り返し口縁様のつくりである。色調は外面黄灰色、内面灰黄褐色である。5は須恵器の壺または瓶と考えられる。胴部外面は平行タタキ、内面は当て具痕がナデ消してある。色調は内外面ともに黄灰色である。4と同じく下総地域産と考えられる。

6は須恵器壺または瓶の胴部破片を砥石に転用している。内面に擦痕がある。

7は鉄製鎌で、基部は欠損する。裏面に木質が付着する。

SI002（第8・9図、図版4・29・36・45・51）

東調査区東端に位置する。東側は調査区外で全掘できなかった。西側にはSI003が重複し、西壁は壊されていたが、SI003の床下に柱穴P1を確認できた。また、東側の覆土上層で確認した床硬化面、焼土・炭化物は本跡の覆土中に構築していたSI004の一部とみられる。

北壁中央にカマドを設け、主軸は南北を向く。四隅の対角線上に柱穴P1～P4、カマドと対向する南壁際に出入口施設P5（深さ0.27m）を配置する。柱穴は深さ0.43m～0.46mで、壁際を除いた床面が硬化する。遺存する部分では壁溝が巡っていた。カマド袖部はよく遺存しており、一部は被熱により赤化していた。火床部もよく火を受けている。煙道部は壁を掘り込んで緩やかに立ち上がる。

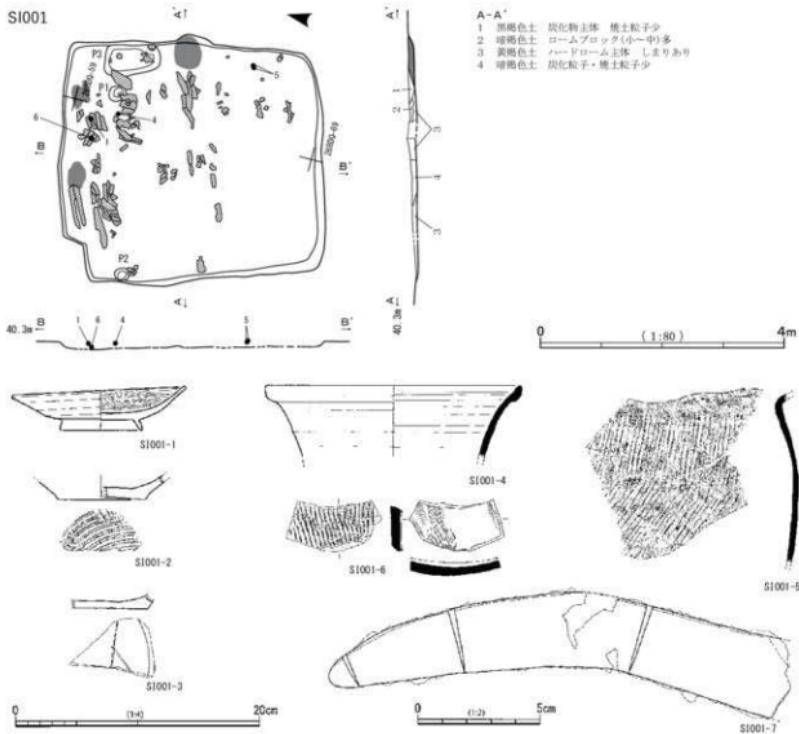
出土遺物はほかの壊穴建物跡と比較して多いほうであるが、図示できた遺物は少ない。この中で遺存状態のよい須恵器杯蓋2点がカマド周辺から出土している。



第6図 堅穴建物跡分布図

第1表 堅穴建物跡一覧

遺構名	位置	桿回	図版	時期	規模(m)			主軸方位	備考
					主軸	横軸	深		
SI001	268DQ - 58・59	7	4.29.36.49	9C中～後	3.92	×	4.34	×	0.16
SI002	268DS - 00・01	8,9	4.29.36.45.51	7C末～8C初	4.00	×	-	×	0.48
SI003	268DR - 09 268DS 00	10	4.29.49.51	8C前半	3.94	×	3.70	×	0.45
SI004	268DS - 01・11	8,9	4.29	10C	-	×	-	×	0.05
SI005	268DS - 30・40	11	5.29.49	8C前半	4.74	×	5.22	×	0.63
SI006	268DS - 30	12	5.29.50	10C	2.60	×	-	×	0.16
SI007	268DR - 39 268DS 30	12	5.49	7C末～8C初	5.18	×	-	×	0.37
SI008	268DS - 41・51	13,14	6.29.36.47.49.51	9C後半～10C	3.98	×	3.90	×	0.15
SI009	267DS - 80・90	15,16	6.29	8C前半	4.98	×	4.76	×	0.26
SI010	267DS - 80	15,16	6	9C後半	-	×	-	×	0.49
SI011	268DR - 38・39	17	5.7	9C中	3.54	×	3.82	×	0.58
SI012	268DR - 48・49	17	7	7C末～8C初	-	×	-	×	0.08
SI013	268DR - 38・48	18,19	7.29.30	9C後半	3.14	×	3.10	×	0.10
SI014	268DR - 37・47	18,19	7.8.30.36.49	9C前半	3.60	×	3.35	×	0.48
SI015	267DR - 46・47	20,21	7.8.30.36.51	8C後半	3.14	×	3.26	×	0.39
SI016	欠番	-	-	-	-	×	-	×	-
SI017	268DR - 38	20,21	7.8.30.36	9C末～10C	2.98	×	-	×	0.09
SI018	欠番	-	-	-	-	×	-	×	-
SI019	268DR - 14・15	22,23	8.9.30.31.45.47.49	7C末	5.18	×	5.66	×	0.55
SI020	267DR - 98・99	24,25	9.31.36.49	9C中	3.20	×	3.74	×	0.22
SI021	268DR - 08・09	24,25	9.10.31.36.49	8C末～9C初	3.40	×	3.08	×	0.47
SI022	268DR - 18・19	26,27	9.10.31	8C前半	3.58	×	3.50	×	0.44
SI023	268DR - 19・29	26,27	9.10.31	10C	-	×	-	×	0.10
SI024	268DR - 08・18	26,27	9.10.31	8C前半	3.12	×	3.96	×	0.25
SI025	268DR - 46・56	28,29	11.31.32.36.45.49	7C末～8C初	3.96	×	3.72	×	0.43
SI026	267DR - 96 268DR 06	28,29	11.32.36.49	8C前半	4.30	×	4.18	×	0.37
SI027	268DR - 06・16	30	11.32.45.47.49	8C後半	2.80	×	3.10	×	0.34
SI028	268DR - 17	31	12.32.45.50	7C後半	4.80	×	5.06	×	0.60
SI029	欠番	-	-	-	-	×	-	×	-
SI030	268DR - 07	32	12	9C後半	-	×	-	×	0.20
SI031	268DR - 64・65	32	12	10C	3.12	×	4.00	×	0.21
SI032	268DR - 43・53	33,34	12.32.49.50	7C末～8C初	5.97	×	5.76	×	0.44
SI033	268DR - 52・62	34	13.32	10C	-	×	3.04	×	0.12
SI034	268DR - 51・61	35,36	13.45.49.50	7C末～8C初	5.32	×	5.04	×	0.23
SI035	268DQ - 69・79	35,36	13.32	9C後半	3.60	×	3.96	×	0.07
SI036	268DQ - 39・49 268DR 30・40	37	13.49	7C末～8C初	5.70	×	5.64	×	0.38
SI037	268DR - 21・31	38	13.32.33.49	8C中	5.50	×	5.62	×	0.41
SI039	欠番	-	-	-	-	×	-	×	-
SI040	267DQ - 61・62	39,40	13.33.36.45.51	9C前半	3.54	×	3.66	×	0.30
					N-75°	-E			カマド構築材集積



第7図 SI001

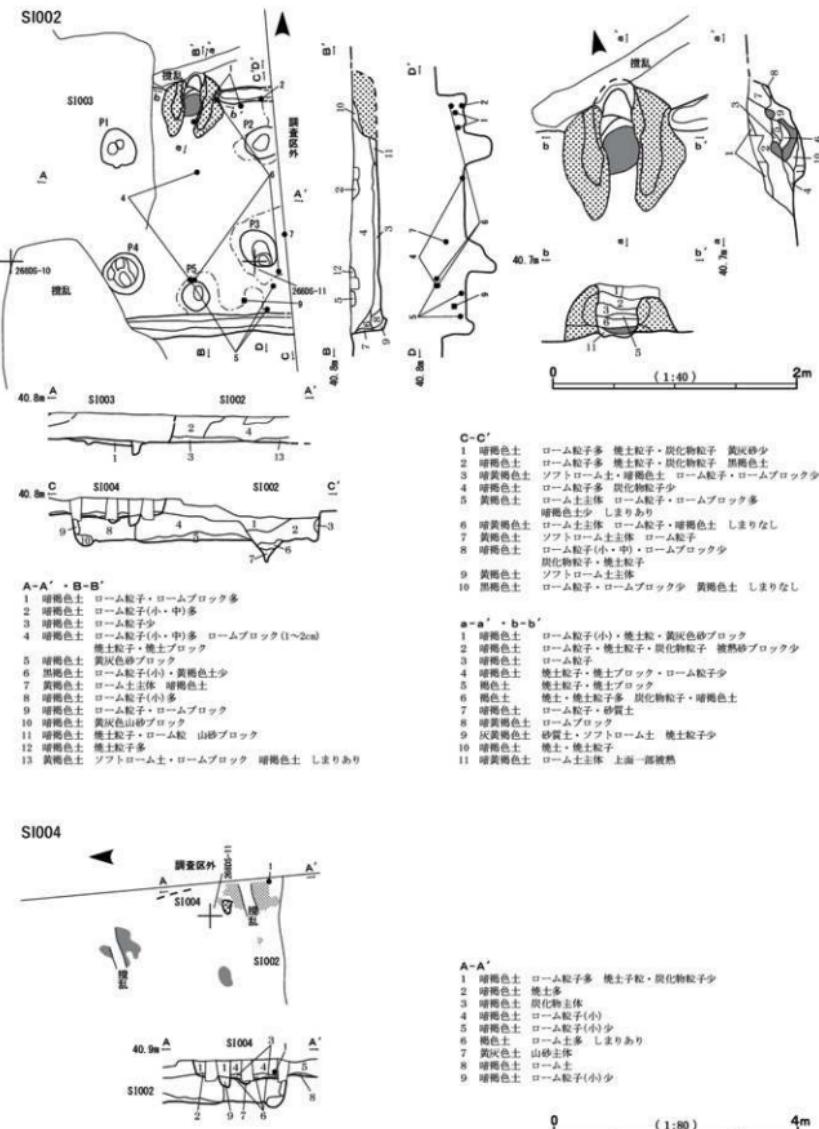
1、2はともに低い宝珠形のつまみをもつ須恵器の杯蓋である。カマド周辺から出土している。1はかえりをもたない蓋で、上面には部分的に濃い自然釉がかかっている。胎土や色調から湖西産と考えられる。2は内面端部近くにかえりをもつ。胎土中に白雲母粒は見られないが、長石微粒を多く含むことから新治産と考えられる。

3は土師器の丸底杯である。内面は丁寧なミガキで、いわゆる漆仕上げの黒色処理が施されていると考えられる。

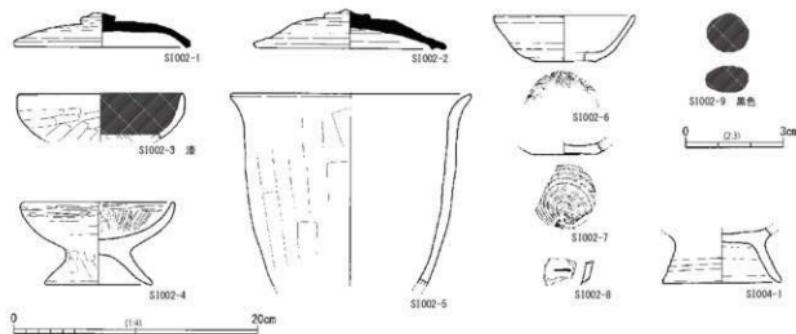
4はハの字に聞く短い脚部をもつ土師器高杯である。杯部は丸底杯と同じつくりで、外面は手持ちヘラケズリの後にミガキ、内面は横ナデの後にミガキで調整がなされている。

5は底部を欠失しているが、形状から考えて土師器瓶と判断される。内外面ともに器面の摩耗が進んでいる。

6はロクロ土師器杯である。底部外面は回転糸切り後無調整で、底部外面は一段突き出ている。7も同じくロクロ土師器杯で、底部付近のみの資料である。底部外面は回転糸切り後無調整である。8は土師器



第8図 SI002・SI004 (1)



第9図 SI002・SI004 (2)

杯の体部外面に墨書きの一部が認められる。

9は土製丸玉である。黒色処理により黒褐色を呈する。

このほかに図示していないが、羽口片が出土している(図版51)。先端部分にあたり、鉄滓が付着している。径は復元できないが、小径であるとみられる。

なお、6～8は時期が異なり、出土位置も覆土上層であるため混入品であろうと考えられる。遺構の重複などから考えて、SI004に帰属する遺物と捉えるのが妥当であろう。

SI003 (第10図、図版4・29・49・51)

SI002の西に位置する。東側はSI002の覆土中に床を貼って構築している。このため東壁の立ち上がりは不明瞭だったが、SI002のP4と重複する南東隅以外は壁溝により平面形を確認することができた。また、西側は南北にのびるSD001が重複するが、SD001の掘り込みが浅いため床面まで壊されていない。

北壁中央にカマドを設置し、主軸は南北を向く。四隅の対角線上に柱穴P1～P4を配置し、柱穴の深さは0.33m～0.59mでP3が浅く、P4が深い。壁溝の一部はSI002との重複や攪乱により確認できなかったが、全周していたとみられる。貼床しており、床硬化面はほぼ全体に認められた。カマドは北壁を僅かに掘り込んで煙道部とし、煙道は緩やかに立ち上がる。右袖の一部は上層を削られているが、比較的よく遺存している。中層に厚さ3cmほど灰が堆積していた。

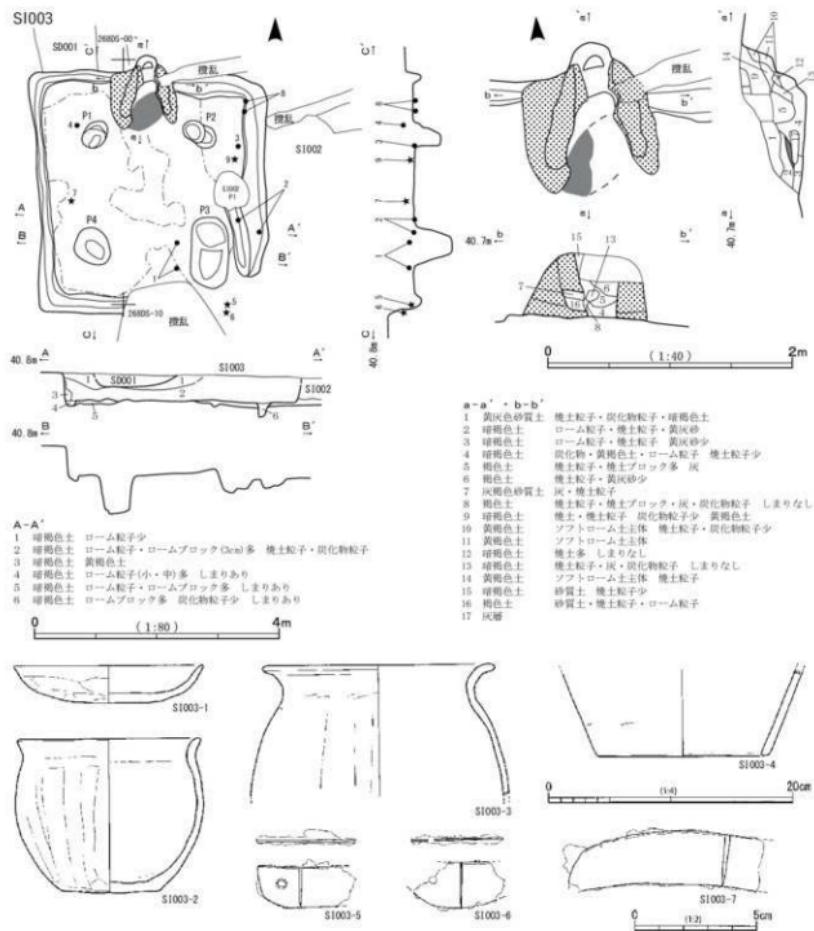
出土遺物は多かったが、それに比して図示できたものは少ない。図示できたものは壁際の床面近くを中心に出したものである。

1は丸底の土師器杯である。内面全体から口縁部外面は丁寧なナデ調整で、体部から底部にかけては手持ちヘラケズリ調整である。

2、3は土師器甕である。2は小型甕で、口縁部は素口縁で弱く外反する。3は口縁部から胴部中位以上までの資料である。口縁部は同じく素口縁で、端部で外側に摘み出される形状である。

4は土師器瓶の底部付近の資料である。

5～7は鉄製農具である。5・6は穂摘具で、どちらも薄いつくりであり、破損品である。7は鎌で、基部を欠く。このほかに図示していないが鉄滓(図版51)が出土した。



第10図 SI003

SI004 (第8・9図、図版4・29)

SI002の覆土中に、床硬化面のほか、カマド構築材・炭化物の散乱などを確認できたため、SI002の覆土中に構築された堅穴建物跡と判断した。調査区境の土層断面の観察から、北側はSI002内側に收まり、南側はさらに広がっているとみられるが、西側の広がりは確認できず、平面形や規模は不明である。深さは土層断面の計測で0.30mだが、確認面からは0.05mほどであろう。

SI002に本跡の遺物が混在しており、図示できた遺物は1点である。

1はロクロ土師器高台付杯の高台から杯部下端にかけての資料である。高台は3.4cmほどの高さがあり、いわゆる足高高台である。

SI005（第11図、図版5・29・49）

東調査区南東隅に位置する。中央部は攪乱により大きく壊されるが、南東隅を除いて、壁を確認することができた。攪乱により新旧の判断はできなかったが、出土遺物から南東に位置するSI008のほうが新しいとみられる。また、西側にはSI006、SI007が位置する。土層断面の観察により、覆土中にSI006の貼床を確認し、またSI007を壊して構築していることが判明した。南壁には土坑SK011が接していたが、新旧関係は判断できなかった。

カマドは北壁中央に位置し、主軸は南北を向く。確認できた柱穴は南西の1か所だけで、深さ0.36mである。ほかは所在が推定される部分が攪乱により壊されており不明である。壁溝は全周し、西側には拡張前の壁溝が確認できた。拡張前の壁溝底面には小ピットが並び、東壁溝にも同様の小ピットが見られるところから東壁から南壁の一部は共有し、北西に拡張したと考えられる。カマドは手前が攪乱により壊されていたが、袖部の間に構築材の堆積があり、崩落した掛け口かとみられる。火床面は窪んで焼土が堆積し、被熱による赤化が認められた。

出土した遺物量は多かったが、中央部が大きく壊されているためもあり、遺存状態がよいものは少なかった。図示できたものはカマド周辺と壁際の遺物が多い。カマド内に土製支脚が遺存していた。

1、2は土師器杯である。1はかなり扁平な丸底で、内外面全面に赤彩が施されている。2は全体に赤味を帯びているが赤彩は施されていない。体部はやや丸味を帯びているが、底部はほぼ平坦である。内外面全面に丁寧なミガキが施されている。

3～7は土師器甕である。3は器高17.8cm、口径16.1cmのやや小型の甕である。口縁上端外側面に弱い稜線をもつ。4は胴部中位から口縁部までの資料で、口縁上部外面の側面がほぼ直立しており、3よりも明瞭な稜線をもつ。5は胴部上端から口縁部までの資料で、同じく口縁部上端外面に明瞭な稜線をもつ。7は口縁上端外面に抉り込んだような形状の稜線があり、ほかの3個体とは口縁部付近の形状が異なることから、甕ではなく甌の口縁部である可能性もある。6は甌の胴部中位以下底部までの資料である。胴部は、外側が縦方向のヘラケズリ、内側が横方向のヘラナデ調整である。

8は土師器甌の底部から胴部中位にかけての資料である。胴部から底部にかけての内面には縦方向のミガキが、胴部下端は内外面にヘラケズリが施されている。

9は手捏土器の範疇に入るものと考えられるが、つくりは丁寧で、内外面にミガキが施され粘土紐の積み上げ痕跡もきれいに消している、小型容器と呼んでもよいようなものである。

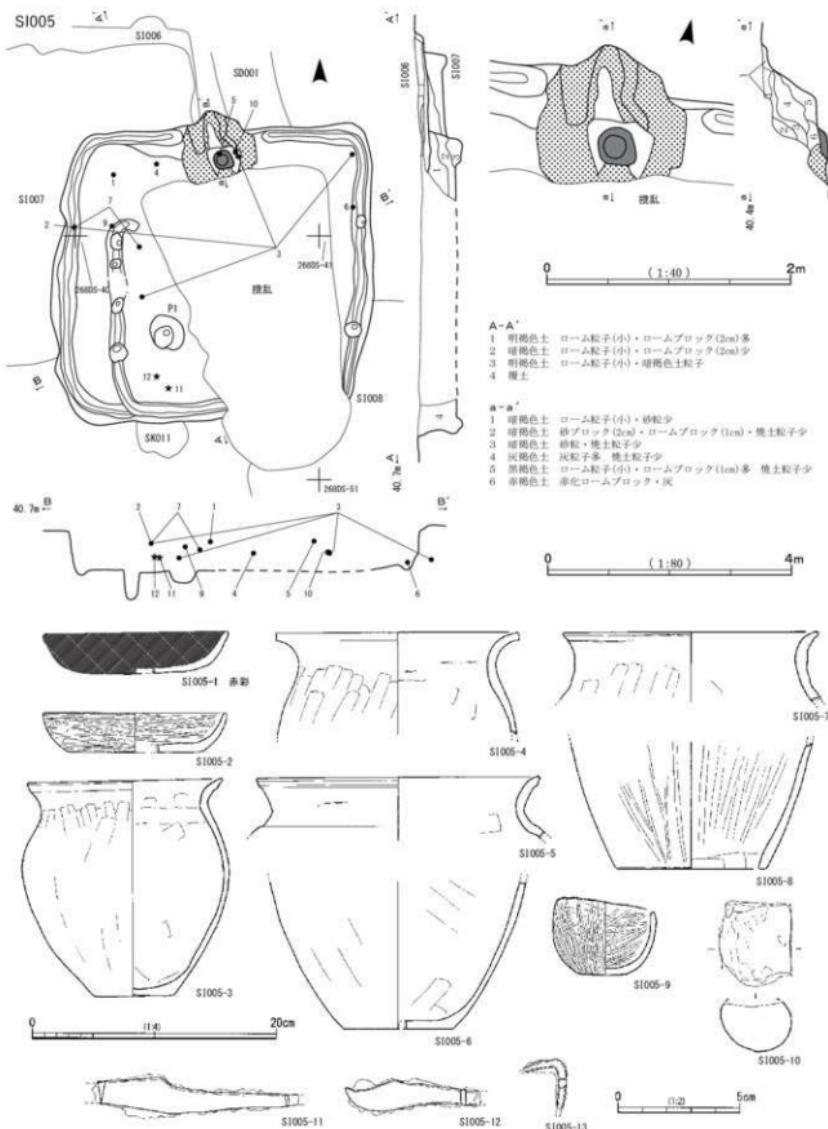
10はカマド内から出土した土製支脚である。被熱により脆くなってしまっており、上下部を欠く。

11、12は鉄製刀子で、11は刃部先端と茎尻を欠損する。12は刃部が曲がっている。13は両端を欠損するが針であろう。

SI006（第12図、図版5・29・50）

SI007の北側に位置している。南に位置するSI005、SI007の覆土中に貼床して構築していることが土層断面により確認できる。

掘り込みの深さが確認面から0.16mと浅く、北東隅付近に設けられたカマドとその周辺の壁や床面を確認できたのみであるが、遺存する北東隅、北西隅から比較的小型の堅穴建物であったと推定できる。主軸



第11図 SI005

は南北を向く。掘り込みが浅いため、カマド袖部は上部を削られている。カマド前を中心に床硬化面が広がっていた。

出土遺物は浅いにもかかわらず多かった。しかし、主体は壺類の破片で、図示できたのは僅かであった。

1、2はロクロ土師器の足高高台付杯である。1は高さ25cmの高台をもち、杯部は内外面ともにロクロ目が明瞭である。器表面は全体に摩耗がひどくザラザラに荒れている。2は杯部最下部から高台の中位にかけての破片資料で、かなり硬質な焼成である。

3はロクロ土師器高台付杯である。杯部内面は黒色処理で丁寧なミガキが施されている。高台は1、2に比べて低く、三日月形に近い断面形状である。

4は無高台のロクロ土師器杯である。底部は回転糸切り後無調整で、内面の器表面はかなり摩耗が進んでいる。

5は鉄鎌頭部である。僅かに基部が遺存する。

SI007（第12図、図版5・49）

東調査区南東に位置する。土層断面により西側はSI011、南側はSI005に壊されていることが確認できた。また覆土中にSI006の貼床を確認した。

カマドは北壁中央に設けられ、主軸は南北を向く。柱穴は四隅の対角線上にP1～P3の3か所が確認できた。南西の4か所目は攪乱により壊される。柱穴の深さは0.39m～0.63mで、標高で比較してもP1がやや深い。カマド袖部上面は、SI006が上に重複していたためか扁平ではあるが、比較的よく遺存している。火床面から袖部内側にかけて被熱による赤化が見られた。北壁から北東壁にはカマド部分を除き、壁溝がつくられるが南壁では確認できなかった。確認面から0.37m掘り込まれ、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。

遺存部分が少ないためか出土遺物の量は多くはなく、図示できた遺物は僅かであった。

1、2は土師器杯である。1はかなり小型で、復元口径は8.8cmである。丸みの強い形態で、外側は底部から口唇部の近くまで手持ちヘラケズリ、内面は全面にナデ調整が施されている。2は復元口径13.6cmで一般的な大きさの杯である。やはり外側には口唇部の近くまでヘラケズリ、内面には丁寧なミガキが施されている。

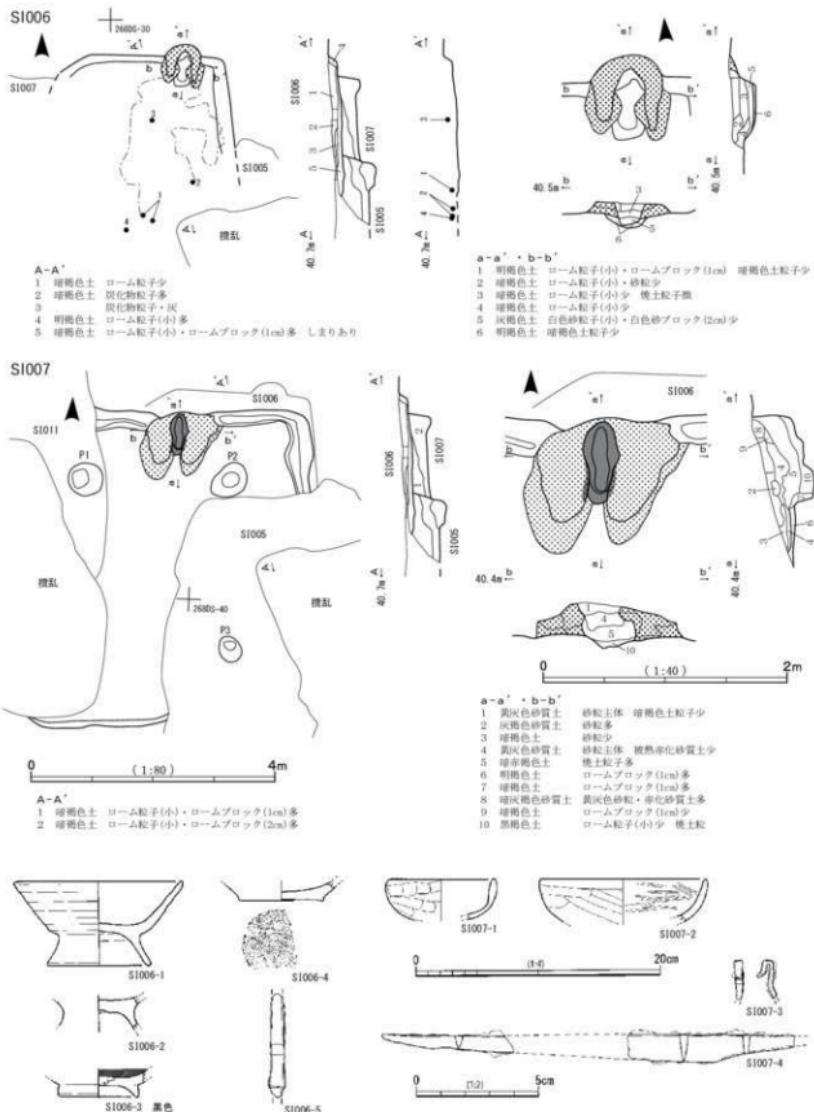
きわめて小さい破片で図示できなかったが、中国産青磁画花文碗が出土している。SX001あるいはSX002に帰属するものであろう。

このほかに鉄釘1点と鉄製刀子1点を図示した。4は刀子の刃部先端と茎部で、中央部を欠くが同一個体とみられる。背側は無闇で、刃関は緩やかな傾斜である。3の釘は刀子とともに出土しており、刀子の付属物かもしれない。

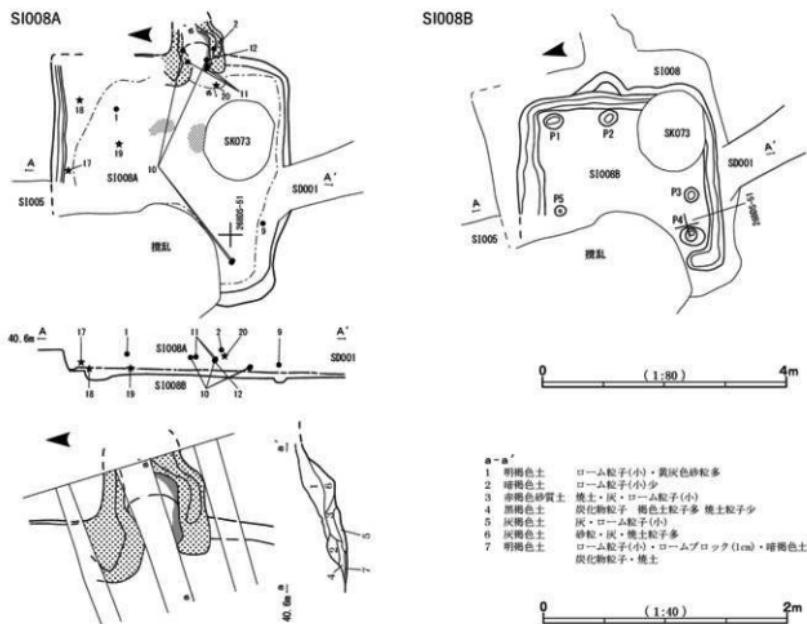
SI008（第13・14図、図版6・29・36・47・49・51）

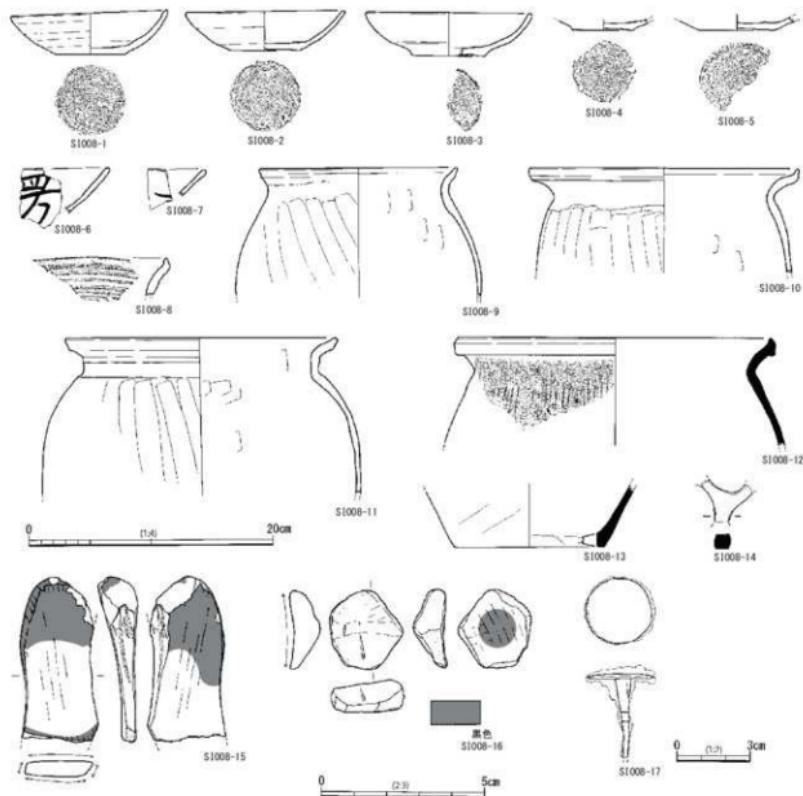
東調査区の南東隅に位置する。北東隅は調査区外で全掘できなかった。また、北西隅は攪乱により壊され、南東床面には土坑SK073が掘り込まれている。またSD001も重複して壁を壊される部分があり、遺存状態はよくない。しかし、南東と南西隅と北壁の一部が遺存するため、規模の推定は可能である。

カマドを東壁の中央から僅かに南寄りに設置する。主軸は東西を向く。柱穴は確認されず、部分的に壁溝が巡っている。貼床しており、遺存部分のほぼ全体が硬化していた。カマドは一部が調査区外で、袖部は複数の溝状の攪乱により壊されていたが、右袖内面が被熱により赤化していた。カマド覆土中から土器



第12図 SI006・SI007





第14図 SI008 (2)

瓶の、胴部上位から口縁部にかけての資料である。口縁部は折り返し口縁様の形状にしており、内面は受け口状になっている。胴部外面には縦方向の平行タタキが見える。13、14は瓶である。13は胴部下位から底面にかけての破片資料である。底部は、中央に正円の孔が一つ、周辺に長楕円形の孔が四つ配されるいわゆる五孔式と考えられる。14は五孔式の底部の破片資料であるが、13よりもやや厚いことから別個体と考えられる。

砥石は2点を図示した。どちらも白色流紋岩質凝灰岩製である。15は正・裏の機能面に縦方向の擦痕が見られる。右側面に4条の溝状痕（刃物などの工具痕）が縦方向に刻まれる。素材面右下部に素材時の面が僅かに残り、上・下面を除くほぼ全面が滑らかに磨耗している。上部を中心にして煤のようなものが付着しており、被熱や何らかの水溶液による変色が考えられる。16は平面形が丸みのある五角形で、全体が明る

い橙色に着色されているが、上面右の平坦面以外は表面の剥落が進んでいる。裏面には墨痕のような黒色の細かい点が円形に残る。平坦面に筋状の痕が2か所見られる。

17は円形の頭部をもつ鉄釘、また図示していないが楕形溝3点（図版51）を出土している。

なお、6と同じ「四万」の墨書のある土器は重複するSK073からも出土している。SK073の覆土中には焼土やカマド構築材が多量に含まれており、SI008の覆土を用いて人為的に埋め戻していると考えられる。このためSK073の出土遺物はすべてSI008に帰属するものである蓋然性が高い。

SI009（第15・16図、図版6・29）

東調査区の北東隅に位置する。南東隅は調査区外のため調査できなかった。西壁はSD001と一部重複するが、本跡のほうが深く掘り込まれているため、壁を確認できている。中央は土坑SK005により大きく壊され、本跡の遺物の一部が混入したとみられる。北東に位置するSI010とは僅かに離れ、重複してはない。

北壁中央にカマドを設け、主軸は南北より僅かに西に傾く。四隅に柱穴P1～P4を配置し、柱穴の深さは0.47m～0.69mである。壁溝は全周している。柱穴の土層断面から、柱は抜き取られていたと判断され、開口部が大きく広がっている。カマドは左袖上部が削平される。煙道部の傾斜は僅かで、比較的まっすぐ立ち上がる。火床部から焚口部にかけて被熱による赤化が著しい。柱穴の覆土上層や壁際を中心に焼土ブロックが堆積していた。

中央部が大きく攪乱されてはいたが出土遺物は多かった。しかし、遺存状態がよいものは少なく、図示できたものは床面直上、または床面付近から出土した6点である。

1～3は土師器杯である。成形、調整技法はほぼ同じで、外面は口縁部上位のみが横方向のナデ、それ以下はすべて手持ちヘラケズリで、その後にヘラミガキを施している。内面は横ナデの後に丁寧なミガキ調整をしている。

4は土師器甕である。胴部中位から口縁部にかけての資料で、外面は口縁部が横ナデ、胴部は縱方向のヘラケズリの後に横方向のミガキで調整している。内面は口縁部が横ナデ、胴部は横方向のヘラナデで調整されている。

5は灰釉陶器の高台付碗である。高台は断面三日月形で、内面は底部が無釉、それ以上の部分にはうつらと灰釉がかかっている。猿投窯の折戸53号窯式期の製品と考えられる。

6はロクロ土師器杯である。底部外面は回転糸切りと考えられるが、残存部分が少ないとめ不明である。器厚はやや薄手である。

なお、5、6はSI009出土のその他の遺物に比べて新しい時期の遺物である。遺構の位置や重複関係などから勘案して、混入品と考えられる。

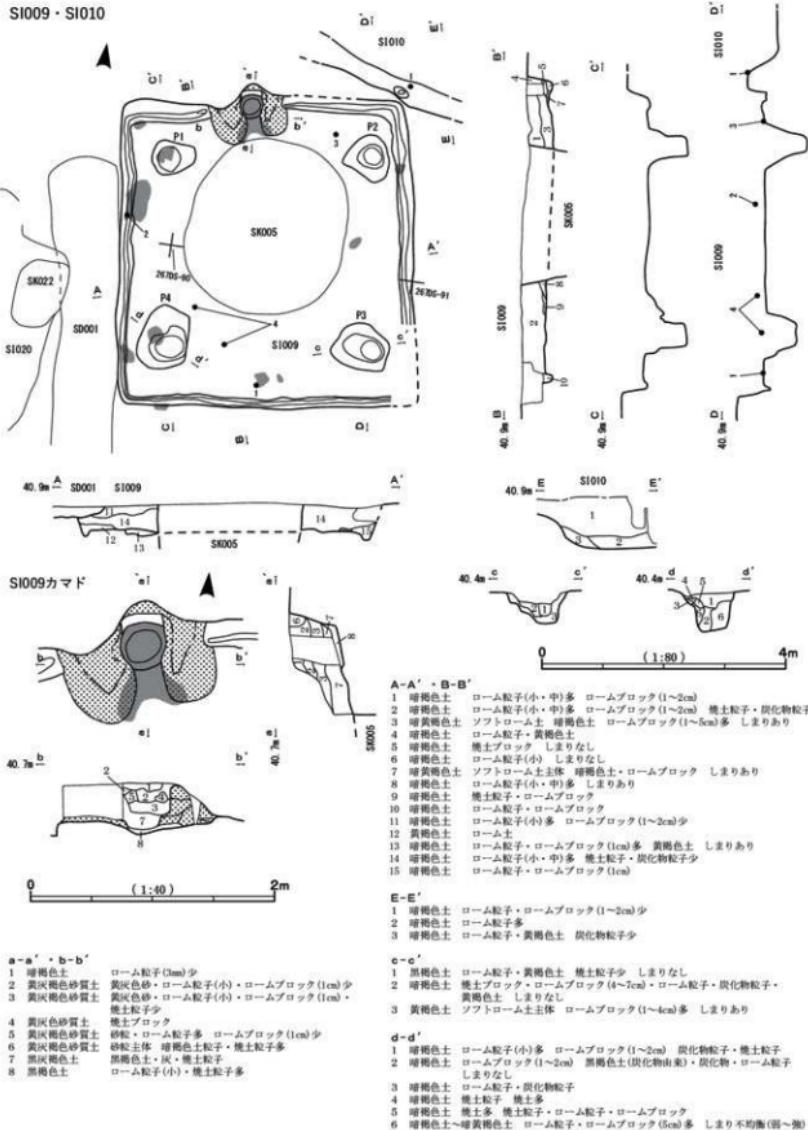
SI010（第15・16図、図版6）

SI009の北東に位置する。調査区の北東隅にあたり、ほとんどが調査区外にあたる。確認できたのは壁の一部で、平面形や規模などは不明である。深さは確認面から0.49mで、壁の立ち上がりは緩やかである。

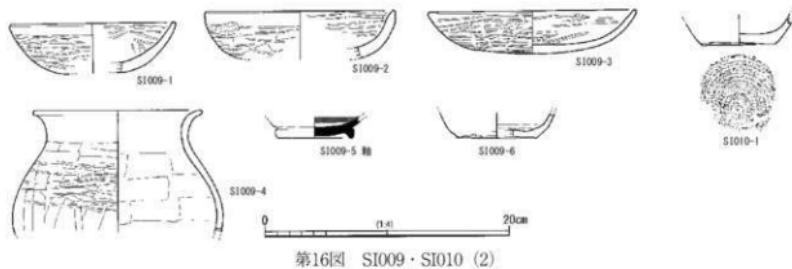
調査範囲が少なく、出土遺物も多くない。図示可能な遺物は壁際から出土した1点である。

1はロクロ土師器杯の底部付近の破片資料である。底部外面は回転糸切り後無調整、それ以外の部分は全面ロクロナデ調整である。壁際上層出土のため混入品の可能性がある。

SI009・SI010



第15図 SI009・SI010 (1)



第16図 SI009・SI010 (2)

SI011 (第17図、図版5・7)

東側のSI007、南のSI012を壊す。また南西隅に重複するSI013のほうが新しいとみられるが、本跡のほうが掘り込みが深く、SI013の南西隅を確認できなかった。北には本跡より新しいSX002とSK004、西にはSK006が重複し、北西隅はSK004に、中央部から南は攪乱により大きく壊されている。

カマドは北壁中央にあり、主軸は南北より僅かに西に傾く。四隅の対角線上に柱穴P1～P3が配置されるが、南東の1か所は攪乱により床面を掘り込まれており確認できなかった。柱穴の土層断面の観察では、遺存する3か所すべてに柱痕が認められた。柱穴の深さは0.35m～0.59mである。壁溝はカマド部分を除いて全周し、柱穴に囲まれた内側に床硬化範囲が認められる。カマドは壁を掘り込んで設置され、煙道部の立ち上がりは緩やかである。カマドの左袖上部はSX002により削平されたとみられるが、両袖の内側と火床面には被熱痕跡が確認できる。

図示できた遺物は3点で、いずれも覆土上層から出土したものである。

1はロクロ土師器杯である。体部下端から底部全面にかけては手持ちヘラケズリが施されている。

2は土師器とよく似た色調の、低火度で焼かれた下総地域産の須恵器である。壺もしくは瓶の口縁部付近の破片資料である。口縁部は折り返し口縁様のつくりである。胴部外面には縦方向の平行タタキが見える。3も同じく下総地域産の須恵器で、五孔式の瓶底部片である。

SI012 (第17図、図版7)

攪乱のほかSI011、SI013、SX001、SK012に囲まれ、これらに大部分を壊されている。確認できたのは西壁の一部とカマドの痕跡である。

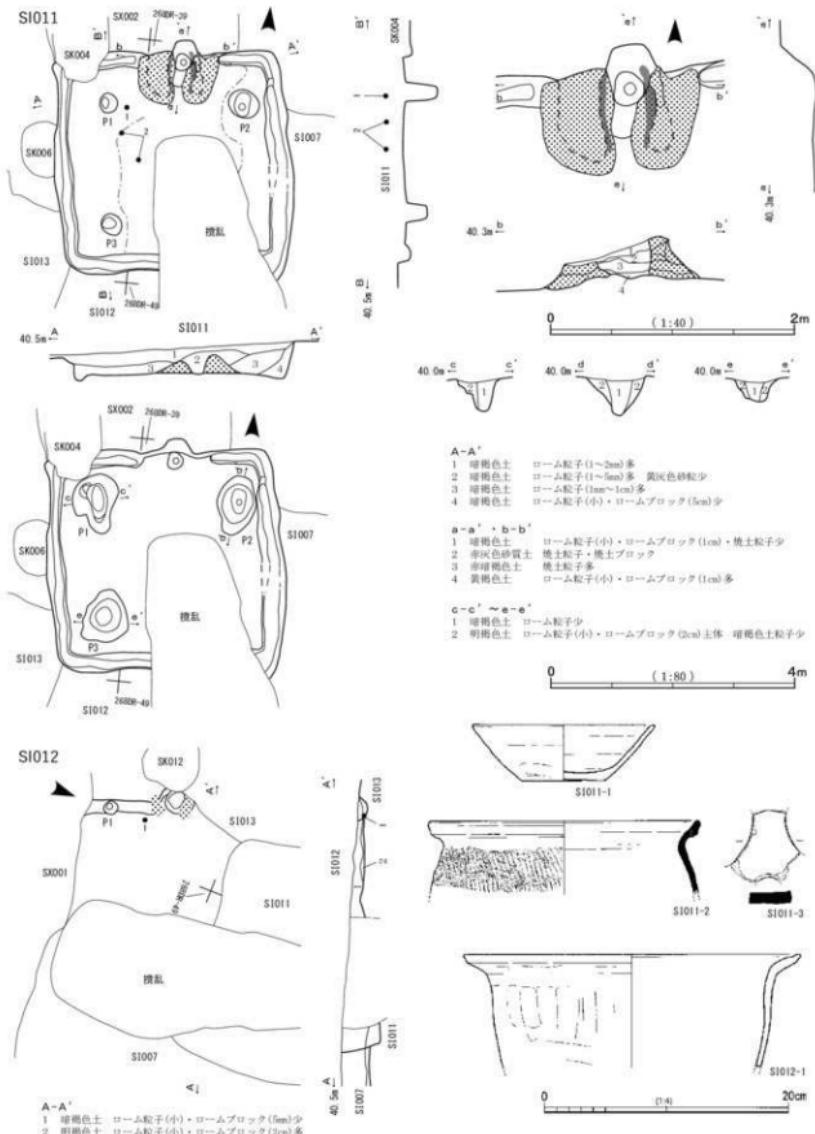
カマドはSK012に壊されていた。西壁際に火床部とみられる掘り込みがあり、その周辺にカマド構築材が堆積していた。

カマド痕跡の付近から出土した土器1点を図化した。土師器壺で、口縁部から胴部中位以上にかけての資料である。外面には大きな黒斑が広がっている。

SI013 (第18・19図、図版7・29・30)

東にSI011、SI012、西にSI014、北にSI017、南にSK012-SK014などの堅穴建物跡、土坑が重複している。SI011とSI012は本跡が壊している。また、土層断面の観察により西半分はSI014の覆土中に構築していることがわかった。このため西壁の立ち上がりは不明瞭であったが、壁溝により確認できた。

北壁中央にカマドがつくられ、主軸は南北より東に傾く。カマド前から堅穴中央部分に床硬化面を確認した。貼床を剥がしたが柱穴やピットは確認できなかった。壁溝はカマド部分を除いて全周し、カマド西



第17図 SI011・SI012

側で、幅広になっている。カマドは右袖部の外側が崩れ、上部も削平されて遺存状態がよくなかったが、左袖部内側に被熱痕跡が認められ、火床面に杯が伏せて置かれていた。

遺物はカマド周辺を中心出土した。

1、2はロクロ土師器杯である。1は底部外面が手持ちヘラケズリ、体部はロクロナデ調整である。2は外面底部が回転糸切り後無調整で、体部はロクロナデ調整である。破片ごとに黒っぽいものとそうでないものがあり、割れた後に被熱したものとそうでないものがあると考えられる。

3はロクロ土師器の高台付杯である。全体に黒っぽい仕上がりで、体部は外面とともに器面が摩耗して荒れている。

4は土師器とよく似た色調の下総地域産の須恵器杯で、焼成はかなり硬質である。体部下端から底部全体を回転ヘラケズリで調整している。底部外面には重ね焼きの痕跡と思われる三日月形の色調の違いが見られる。カマド内に伏せておかれていたものである。

5は灰釉陶器の高台付碗である。断面三日月形の高台をもち、底部内面は円形に無釉で、体部内面には灰釉が施されている。猿投窯の黒雀90号窯期の製品と考えられる。

SI014（第18・19図、図版7・8・30・36・49）

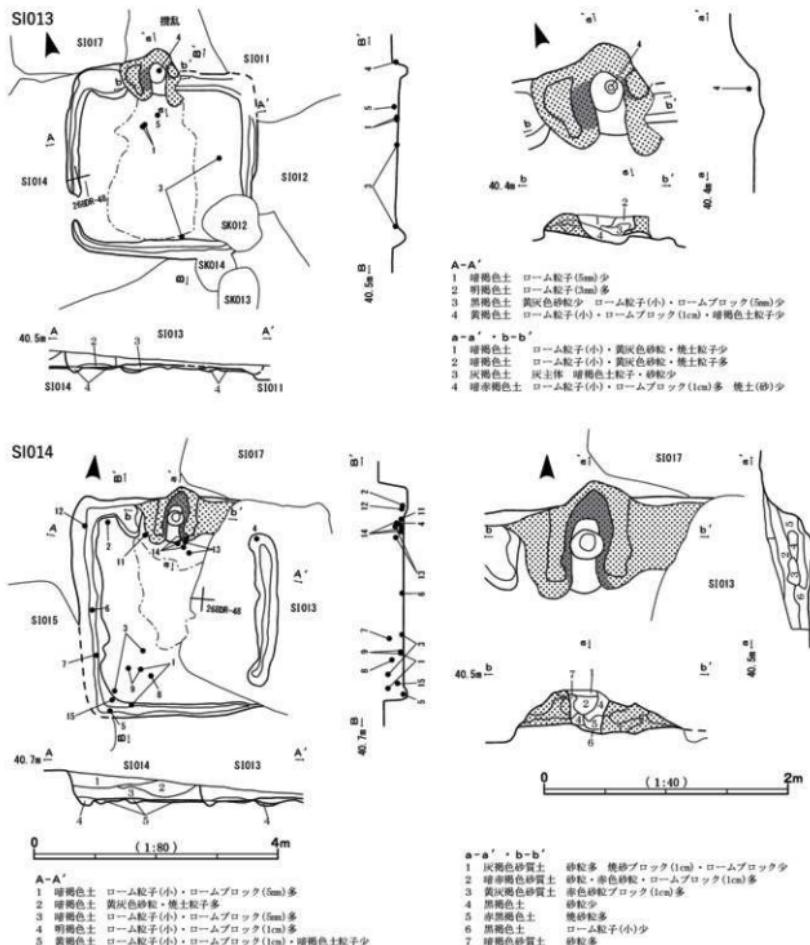
東にSI013、西にSI015が重複し、土層断面からSI013が覆土中に構築していたことがわかった。また西壁の南部はSI015の覆土中に立ち上がるため、一部確認できなかった。

カマドは北壁中央につくられ、主軸は南北に対して僅かに西に傾く。床硬化面はカマド前から竪穴中央に広がっていた。壁溝はカマド部分を除き、全周していたとみられ、東側の壁溝はSI013の貼床下で確認した。SI013と同様に壁溝はカマド左袖脇で広がっている。床を剥がしたが柱穴の痕跡はなかった。カマドの袖部外側、特に東側は構築材が崩れて広がっており、本来の形状ではないとみられるが、内側は被熱範囲が明瞭で使い込まれていることがわかる。

出土遺物の量は多く、図示できたものも多い。カマド周辺と南西隅を中心出土した遺物の遺存が良好で、カマド周辺の遺物は床面直上か床面近くから出土している。

1、2は土師器杯である。1は底部から体部まで外面全体に手持ちヘラケズリを施しており、見込み部に凹線がある。底部外面には墨書があり、「向」と考えられる。2は口縁部上端が内外面横ナデ、体部から底部まで外面は手持ちヘラケズリ、内面はヘラナデが施されており、底部周縁にはかなり明瞭なヘラ状工具の端部の当たり痕が見える。

3～9はロクロ土師器杯である。3は体部下端から底部全体にかけて手持ちヘラケズリを行っている。切り離し技法は不明である。4は底部外面が手持ちヘラケズリ、体部外面はロクロナデ調整である。内面に若干の黒ずみが見えるが成因は不明である。5は体部外面下端から底部にかけて手持ちヘラケズリ、それ以外の部分はすべてロクロナデ調整である。体部内面にはロクロナデによる細かいロクロ目が明瞭に見える。6はほぼ完形で、硬質の焼き上がりである。底部外面のみ手持ちヘラケズリで、体部は内外面ともロクロナデ調整である。体部下位に底部に向かって窄む明瞭な段差がある。7は底部外面のみ手持ちヘラケズリで、体部はロクロナデ調整である。底部外面に墨書を見るが、一字なのか否かも含め読み取不能である。8は底部を回転糸切りで切り離した後に、体部から底部全面にかけて回転ヘラケズリを施しているが、底部の一部に糸切り痕が残っている。9は体部外面下端に正位で墨痕鮮やかに「小野」と書かれている。

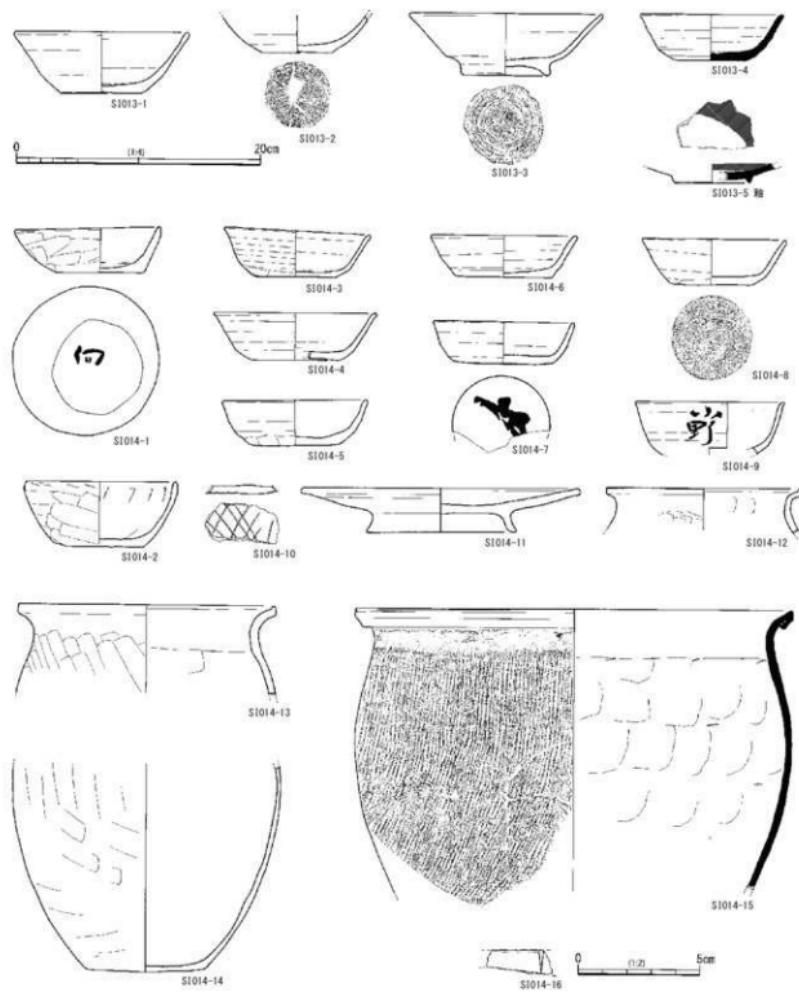


第18回 SJ013・SJ014 (1)

10は土師器杯の底部片で、外面に斜格子状のヘラ書きが見られる。

11はクロコ土師器高台付盤である。カマド左袖脇から出土した。底部外面を除き、内外面全体が黒ずんでいる。外面は、体部中位から底部にかけて回転ヘラケズリを施し、その後に高台が取り付けられている。口縁端部内面には凹線を伴う明瞭な段差がある。

12~14は土師器壺である。12と13は相似形で、12は13を小型にしたような形状である。13は胴部上位以上に破片資料で、口縁部は外反した後に僅かに直立する受け口状の形態である。頭部以上口唇部までは内



第19図 SI013・SI014 (2)

外面ともに横ナデ、胴部は外面が縱方向のヘラケズリ、内面が横方向のヘラナデ調整である。かなり硬質である。14は色調、質感、器厚から13と同一個体と考えられる。どちらもカマド右袖前から出土しているが接合面はない。外面は胴部・底部ともにヘラケズリが施されているが、底部には木葉痕がかすかに残っている。内面は胴部、底部ともにヘラナデ調整で、器厚はかなり薄手である。

15は下総地域産の折り返し口縁をもつ須恵器甕である。通常の下総地域産の須恵器は土師器のような色の仕上がりであることが多いが、この資料の器面は全体に灰色がかっている。口縁部は外表面とともにかなり摩耗しており、特に内面は器面の剥離が著しい。胴部外面は縱方向の平行タタキ、内面は当て具痕を横ナデで消している。

16は鉄製刀子の刃部の破片である。

SI015 (第20・21図、図版7・8・30・36・51)

東側にSI014が接している。床面の標高はほとんど同じであるが、土層断面から、SI014に壊されていることがわかる。

カマドは北壁中央につくられ、主軸は南北から西に傾く。カマドと向かい合う南壁中央下にP1（深さ0.14m）がある。出入口施設であろう。これ以外にピットは確認されなかった。床硬化面は壁際を除き全体に広がっていた。壁溝はカマド部分と南東隅以外で確認できた。カマドは細い溝状の搅乱により壊されている。特に右袖の遺存状態が悪く、崩れた構築材が広がって明確な袖部の範囲を捉えられなかった。壁際の煙道部分とみられるところが被熱により著しく赤化している。

遺物量は多くなく、図示できたのは4点である。

1は土師器杯である。外面は口縁部のみが横ナデで、体部は手持ちヘラケズリの後にミガキ、内面は横ナデの後にミガキ調整である。内外面ともに器面は赤味がかっているが、赤彩は施されていない。

2、3は小型の土師器甕である。2は3よりも一回り大きいが、やはり小振りである。内面は頸部の下3cmほどから下が煤で黒ずんでいる。3はかなり硬質な焼き上がりで、薄手で端正なつくりの口唇部をもち、内外面ともに頸部以下は煤で黒ずんでいる。

4は土師器甕胴部で、外面にヘラ書きが認められる。

SI017 (第20・21図、図版7・8・30・36)

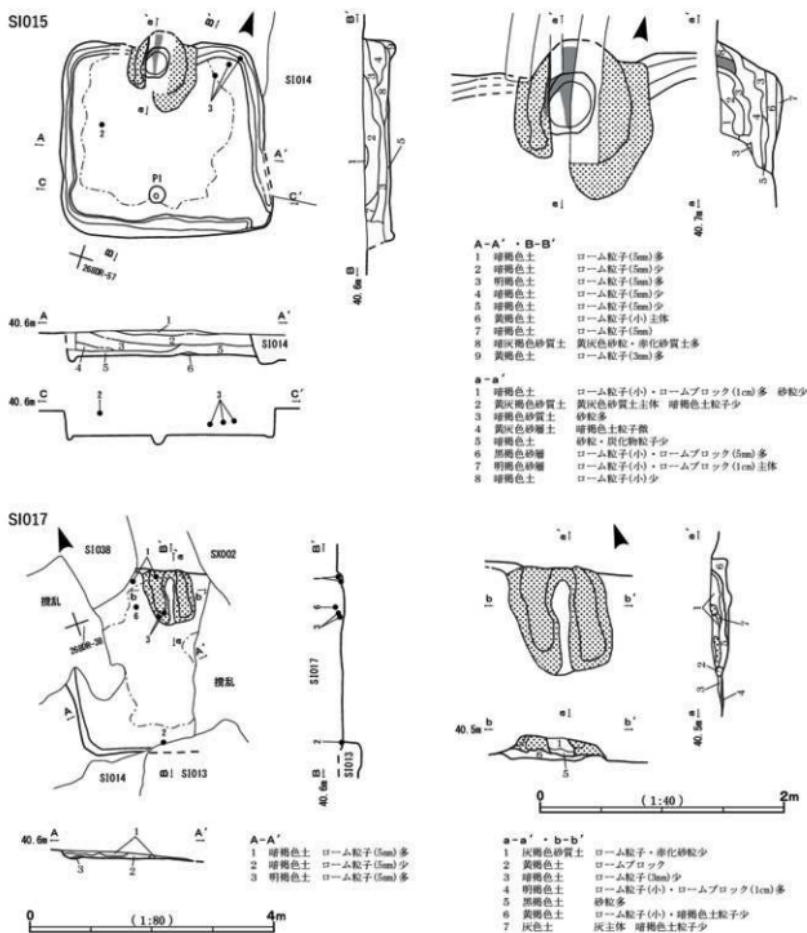
SI013、SI014の北側に位置する。南壁はSI013の覆土中に立ち上がっていたとみられるが、確認できなかつた。また東西は搅乱、北西はSI038、北東はSX002に壊され、遺存状態はよくない。確認面からの掘り込みも浅く、カマドと南西隅を辛うじて確認できた。

カマドは北壁に遺存していた。主軸は南北から僅かに東に傾く。遺存部分ではピットや壁溝などの施設はなく、カマド前から中央部分に床硬化面を捉えられた。カマド袖部は扁平で、上半部は削られたか構築材が流れた可能性が高い。袖部の内側は被熱により赤化していた。

遺物は、遺構の遺存範囲が少なく量は多くないが、カマド周辺に残っていた。

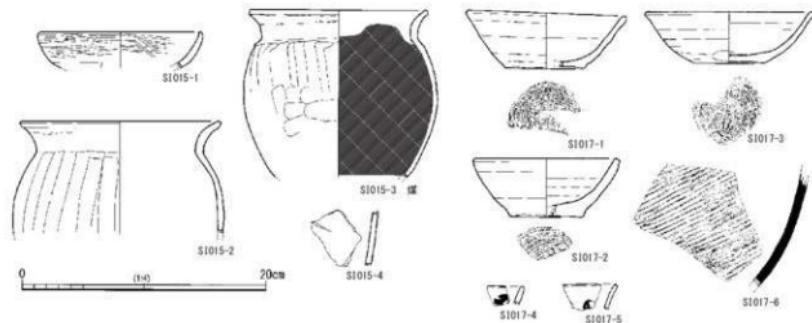
1～3はロクロ土師器杯である。1は底部外面が回転糸切り後無調整で、体部は外表面ロクロナデ調整である。2はかなり硬質な焼き上がりである。底部外面が回転糸切り後無調整、体部はすべてロクロナデ調整である。3はカマド左袖付近から出土した。体部下端に手持ちヘラケズリ、底部外面は回転糸切り後弱いナデ調整が施され、体部内外面はロクロナデ調整である。内面に煤の付着が見られる。

4、5は土師器杯口縁部とみられる破片で、外面に墨書が見られるが、一部であるため解読不能である。



第20図 SI015・SI017 (1)

6は須恵器壺の胴部である。外面には斜め方向の平行タタキが見え、内面の當て具痕はきれいにナデ消されている。色調、胎土から湖西産と考えられる。



第21図 SI015・SI017 (2)

SI019 (第22・23図、図版8・30・31・45・47・49)

東調査区中央よりやや北東に位置する。東側に隣接してSI026、SI027、SI028が並んでいるが本跡と重複する遺構はない。

北壁中央にカマドを設置し、主軸は南北から僅かに西に傾く。壁の立ち上がりは垂直に近く確認面からの深さは0.55mである。四隅の対角線上に柱穴P1～P4を設け、深さは床面から0.34m～0.69mである。カマドと対向する南壁中央下に小ピットP5があるが、規模が小さく掘り込みも0.08mと浅いため、出入り口ピットとは断定できない。壁溝はカマド部分を除き全周していた。貼床しており、床面は壁際以外硬化していた。貼床を除去したところ南壁内側に壁溝と柱穴の痕跡P7・P8（深さ0.53m・0.46m）が確認され、P3・P4を新たに掘り、南側に拡張していることが判明した。床下のP9（深さ0.43m）は拡張前の出入口施設である。カマドは左袖部上部が攪乱により削られている。火床面に焼土が堆積していた。

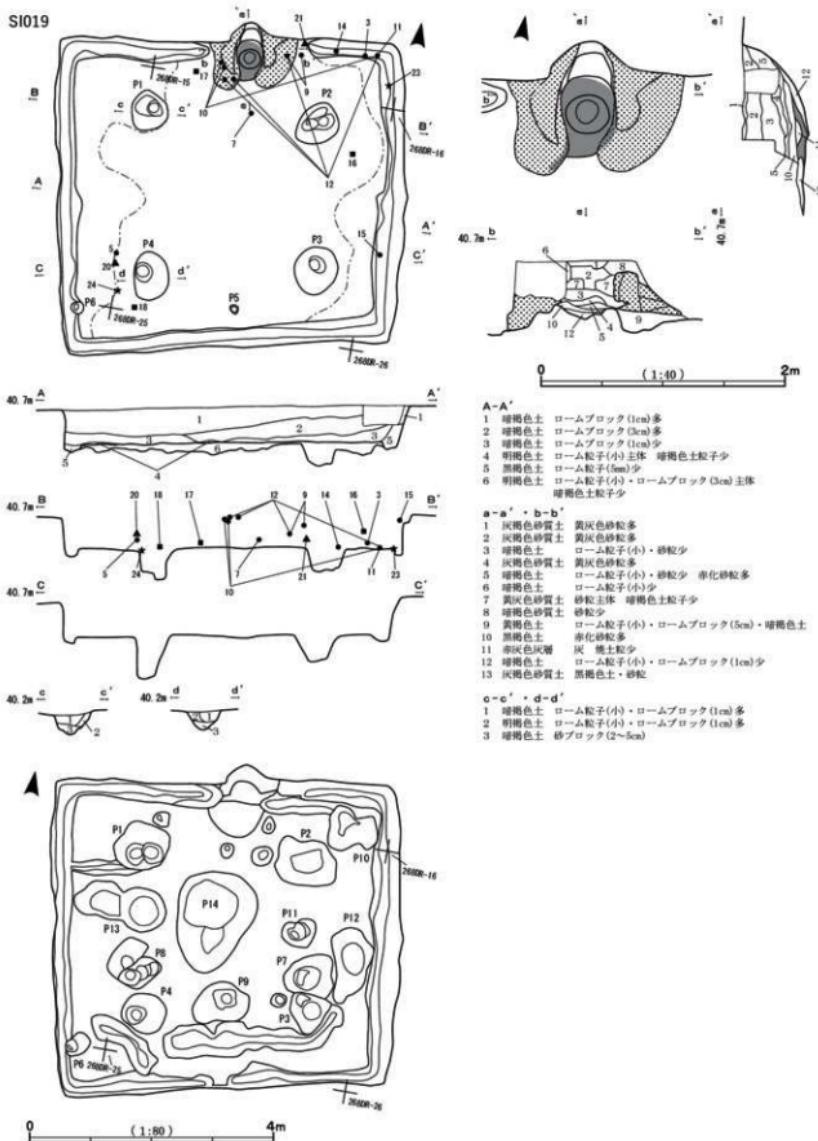
遺物の量は堅穴建物跡中最も多く、縄文土器などの混入品も多数ある。図示できた遺物はカマド周辺と壁際を中心に出土したものである。

1、2は須恵器である。ともに混和物の少ない白っぽい胎土で、湖西産と考えられる。1はかえりのない杯蓋で、つまみは欠失しているが低い宝珠形であったと考えられる。2は杯身と考えられる。口唇部上端と内面に僅かな凹みがある。体部外面中位より上位が灰色がかっているほか、底部から体部外面中位にかけて細い筋状に色が白く抜けた部分が幾本があり、いずれも重ね焼きの痕跡と考えられる。

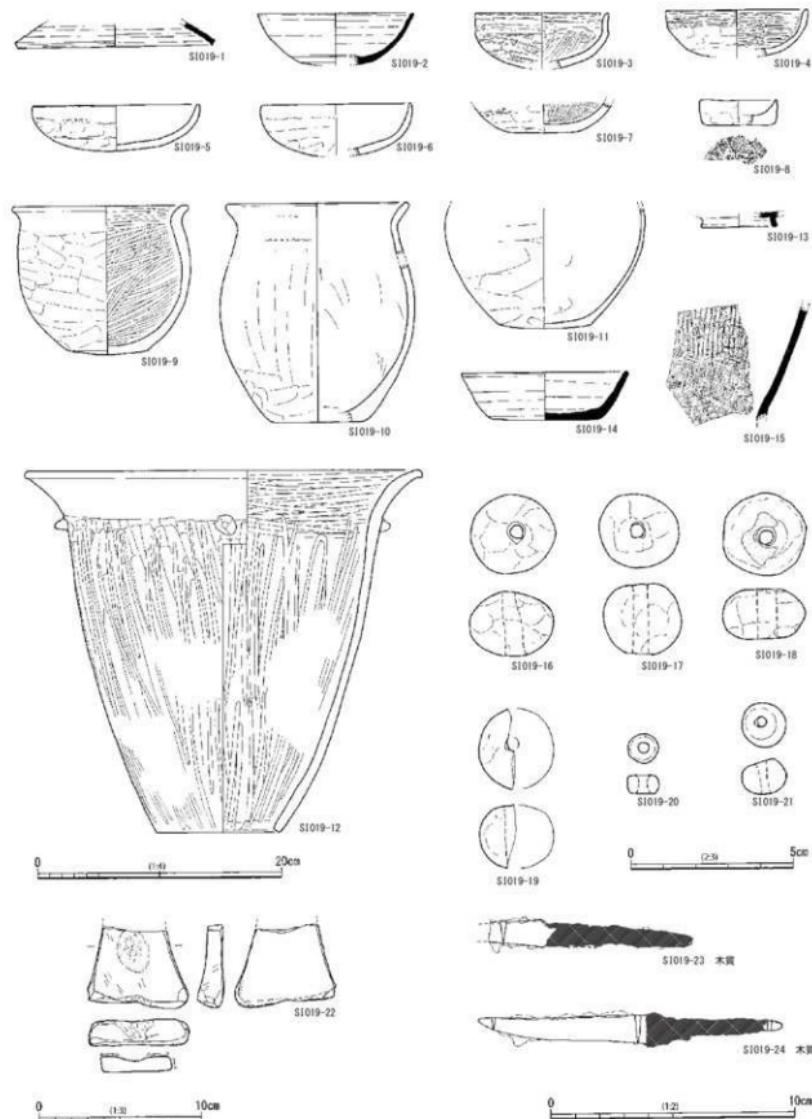
3～7は丸底の土師器杯である。3はほかの土師器杯よりも体部がやや深めで、口縁部は「くの字」状に弱く屈曲しており、内面に弱い稜線が見える。器面全面にミガキが施されている。4は口縁部内外面の一部に煤様の付着が見え、灯明皿への転用の可能性もあるが、油煙煤とは特定できない程度のものである。

5、6は体部内面から口縁部外面にかけて横ナデ、底部外面は全面手持ちヘラケズリ調整を行っている。5の底部内面はかなり平滑になっているが、ミガキの単位が見えないため調整によるものではなく、使用の結果として平滑になった可能性もある。6はかなり白っぽい胎土である。7は口縁部を欠失している資料である。内面には放射状のミガキが施されている。

8は手捏土器である。底部外面には木葉痕がある。



第22図 SI019 (1)



第23図 SI019 (2)

9~11は小型の土師器甕である。9は口縁部外面が横ナデ、胴部外面から底部はヘラケズリ調整で、内面は全体に丁寧なミガキが施されている。やや厚手のつくりで、大きさの割には重く感じる。10は口縁部の破片と胴部上位から底部にかけて残存する2点から図上復元した。口縁部は内外面横ナデ、胴部外面から底部にかけてはヘラケズリ、内面はヘラナデで調整されている。口縁部内面には弱い凹線が見える。11は胴部中位から底部にかけての資料である。9、10に比べるとかなり薄手のつくりである。残存部は、外側はすべてヘラケズリ、内面はすべてヘラナデ調整である。内外面ともに被熱および煤の付着でかなり黒ずんでいる。

12は土師器瓶である。カマド左袖脇から10の小型甕と並んで出土した。砲弾形の形状で、底部に向けて窄み、口縁部は大きく開く。口縁部と胴部の境に小さな粘土を指で摘んだ様な不整形な突起が3か所残っており、ほか1か所に剥離痕があることから、本来4か所に突起があったものと考えられる。口縁部外面は横ナデ、それ以外の部分は丁寧なミガキで調整されている。

13は綠釉陶器碗と考えられる。高台の接地面まで含め、残存部分の内外面全面に薄い綠釉が見られる。胎土などから猿投窯産と考えられる。

14は須恵器杯である。体部外面上位から底部にかけてロクロケズリ調整、それ以外はロクロナデが施されている。底部外面には半月状の重ね焼き痕、体部内面中位に同心円状の重ね焼き痕が残っている。内面の複数か所に細かな擦痕の集中が見えるが、成因は不明である。胎土中に白雲母粒は見えないが、新治産の可能性が高いと考えられる。

15は下総地域産の須恵器甕もしくは甕の底部近くの破片資料である。外面は上部が縱方向の平行タタキ、下部が斜め方向のヘラケズリ、内面は上位2/3に当て具ナデ消し、下位1/3には横ナデが施されている。

13~15は、SI019出土のその他の遺物とは時期が合わず何らかの要因による混入と考えられる。

16~19は土玉である。19以外はほぼ完形品である。

20はガラス製丸玉で、ごく一部に緑色が見られるが、ほとんどの部分が風化により白色化している。21は滑石製丸玉である。

22は砥石である。中央部の幅は狭く厚みが少ない。上部は欠損し、正面・右・下面是摩耗して、正面中央部と下面には深さ約3mmの緩い凹みが見られる。ごく細粒の砂岩が素材である。

23、24は鉄製刀子である。23は切先を欠損するが、24は完形品で、どちらも茎部に柄の木質が遺存している。

SI020（第24・25図、図版9・31・36・49）

東調査区北東のSI009の西側に位置する。南にはSI021が位置しているがどちらとも重複していない。東側はSD001、SK022、SK023により一部を壊されている。

南西隅は確認面では不明瞭であったが、掘り方により捉えることができた。カマドは北壁中央につくられ、主軸は南北から東に傾く。中央に貼床による床硬化範囲が認められる。貼床を除去して掘り方を確認したが柱穴はなかった。カマドは耕作による攪乱が著しい。煙道部の立ち上がりは緩やかで、火床部から煙道部にかけて被熱が著しく、焼土ブロックが堆積していた。

遺物は全体から出土したが、カマド内やカマド周辺に特に多く見られた。

1、2はロクロ土師器杯である。1の底部外面は回転糸切り後無調整で、体部下端にのみ手持ちヘラケズリを施し、それ以外の部分は内面まで含めてロクロナデである。口縁部外面に部分的に煤の付着が見ら

れる。2は底部の破片資料である。内外面ともに器表面の同じ側の半分が黒ずんでいる。特に外面は煤の付着と考えられる。

3はロクロ土師器皿の底部片である。残存状況や調整は2と同じである。

4は高台付杯もしくは皿と考えられる。杯部内面は丁寧なミガキ調整で、それ以外の部分はロクロナデである。

5は土師器杯と考えられる破片資料で、体部外面に釈読不能の墨書が記されている。

6は灰釉陶器長頸瓶の底部から胴部にかけての破片資料である。高台の下端は傾斜しており外側で接地する。胴部外面には残存範囲で暗緑色の釉が5条垂れている。胴部の縦方向の破断面のうち一方は割れた後に砥石として転用されており、きれいに磨耗している。

7、8は土師器の甕もしくは瓶と考えられる。受け口状の形態の口縁部で口縁部は内外面横ナデ、胴部は外面が縦方向のヘラケズリ、内面が横方向のヘラナデ調整である。2個体ともかなりざらざらとした質感である。

9～11は須恵器甕である。いずれも下総地域産と考えらえる。9は長めの頸部に折り返し口縁様の口縁部がつく甕である。頸部外面には縦方向の平行タタキが見え、タタキ痕跡をロクロナデでナデ消している。10は短い頸部に折り返し口縁様の口縁部をもつ甕である。口縁部は内外面ロクロナデ、胴部内面はヘラナデ、胴部外面は縦方向の平行タタキが施されている。10が黒っぽいのに対して、9はかなり赤味がかった色調である。11は新治産の甕の底部破片である。器表は全体に灰色が付いており、胎土中に、白雲母粒は含まないが長石粒を多く含む。底部外面は弱いヘラナデ、胴部下端はヘラケズリ、内面全体はナデ調整である。

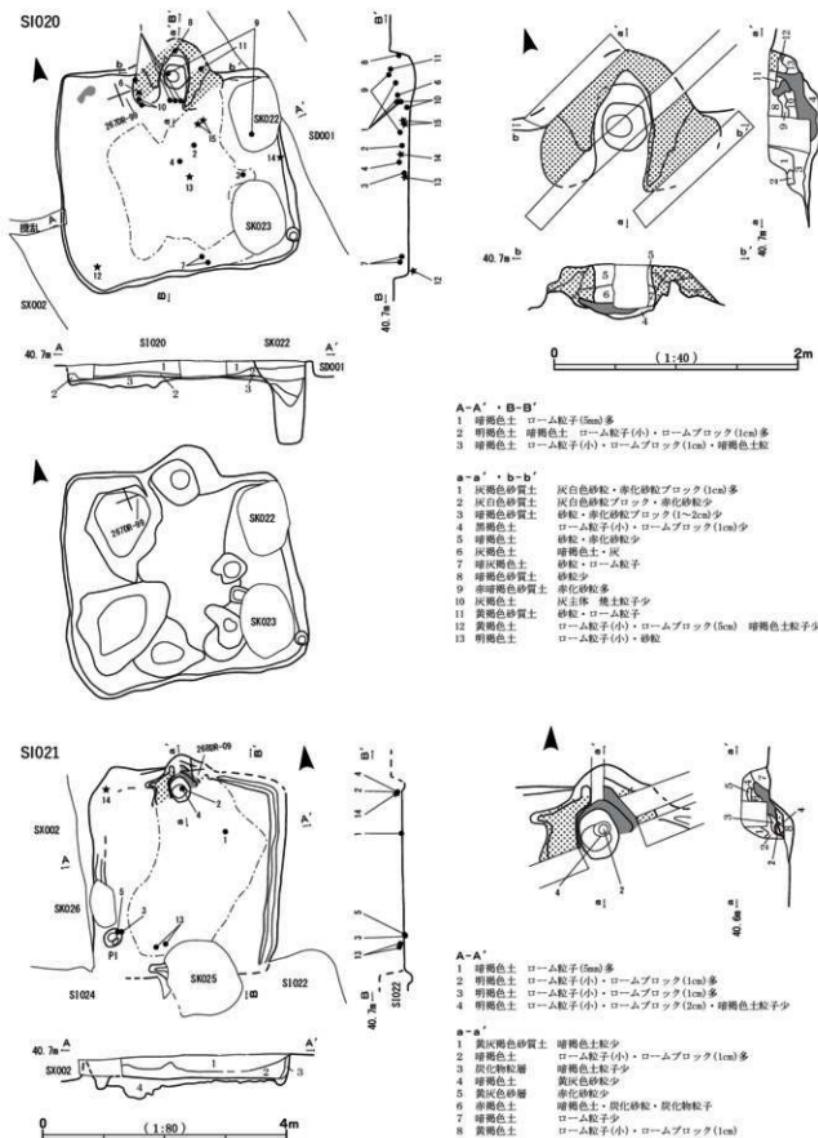
土器類のほかに鉄製品が5点出土した。12～14は刀子である。12、13は茎部で、12には破損した一部が銹着している。14は切先を欠損する。15、16はどちらも完形品に近い遺存状態のよい曲刃鎌である。

SI021（第24・25図、図版9・10・31・36・49）

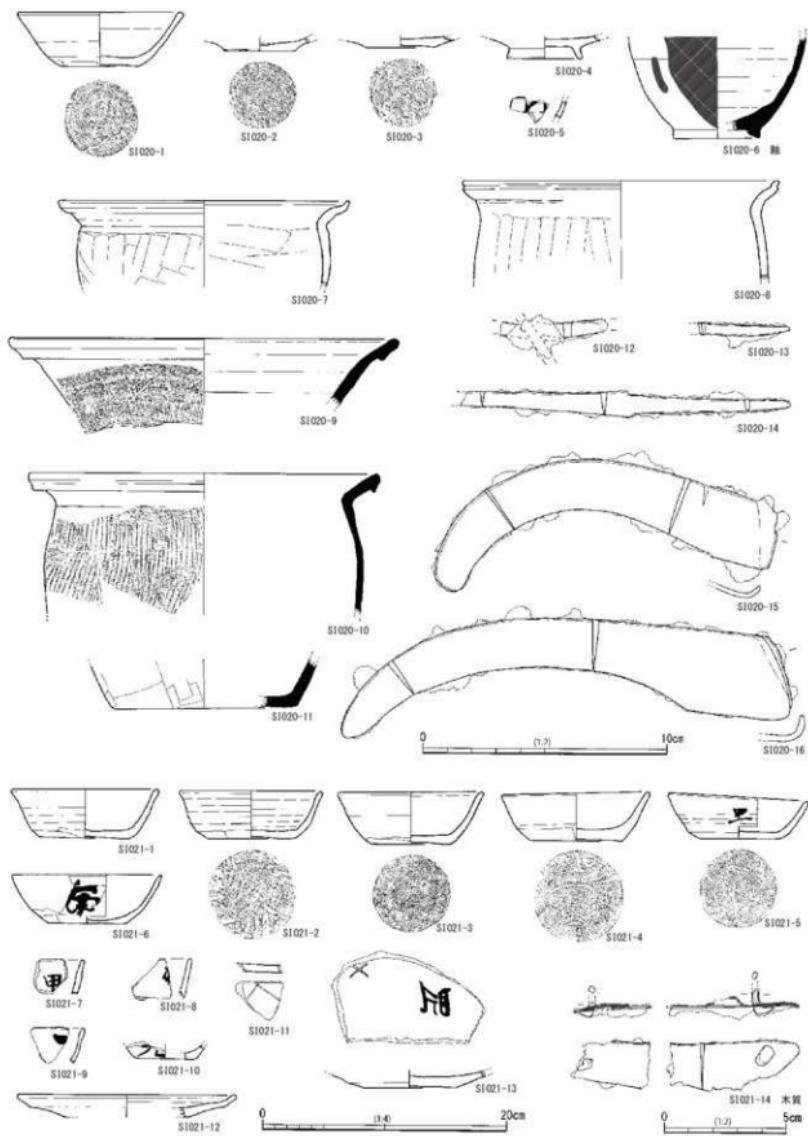
東調査区北東、SI020の南に位置する。南側にはSI022、SI024、SK025が並んで位置し、南壁は確認できなかったが、SK025の西側に僅かな壁溝の痕跡があり、規模の推定が可能である。北西隅は壁溝を確認できず、立ち上がりが不明瞭である。調査時は土坑SK024が重複しているとしていたが、形態が不整形で底面の凹凸が著しいのでSK024は土坑ではなく擾乱と判断した。南西はSK026とSX0021に壊される。

北壁中央にカマドを設置し、主軸は南北から僅かに東に傾く。遺存している東壁に沿って壁溝が巡っており、これ以外でも部分的に壁溝を確認できるため、全周していた可能性が高い。カマド前から中央に床硬化範囲が認められる。ピットは南西隅にある深さ0.04mの窪み状のP1のみで、床を剥いだが、このほかには確認できなかった。カマドは耕作による細い溝状の擾乱により壊され、遺存するのは袖の一部である。煙道部の立ち上がりは被熱により著しく赤化し、焼土が堆積していた。火床面には完形の杯2点が重ねて伏せた状態で置かれていた。

1～6はロクロ土師器杯である。みな硬質な焼き上がりである。1、2、4、5は残存率の高い個体群で、このうち1、2、4はほぼ完形で、2、4がカマド火床面から出土したものである。1は回転糸切りの後に体部外面下端から底部のはば全面にかけて手持ちヘラケズリを施している。2は回転糸切りの後に体部外面下端から底部外周にかけて手持ちヘラケズリを施しており、口縁部から底部内外面にかけて大きく三日月状の色の差が見られ、重ね焼きの痕跡と考えられる。3は回転糸切りの後に、体部外面下端から



第24図 SI020・SI021 (1)



第25図 SI020・SI021 (2)

底部周縁にかけて手持ちヘラケズリを行っている。4は回転糸切りの後に体部外面下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリを施している。5は底部外面の切り離し痕跡を回転ヘラケズリで丁寧に消しているため、切り離し技法は観察不能である。体部中位に正位で「里」の字が墨書きされており、口縁端部3か所に意図的と見られる打ち欠きがある。内外面が全体に黒ずんでいる。6は体部外面にかなりの画数で墨書きが記されているが、釈読不能である。

7～9は土師器杯の口縁部片で、外面に墨書きが見られる。7は「~~匁~~カ」と記されている可能性がある。付近のSD001からも類似する文字の墨書きが出土しており、これもあるいは本跡に帰属するものかもしれない。これ以外は墨書き部分のごく一部であり、判読できない。

11は土師器杯の底部外面にヘラ書きが施されたものである。

12、13はロクロ土師器盤である。12は、底部外面が手持ちヘラケズリ、それ以外はロクロナデで、内外面ともに煤けたように黒ずんでいる。13は底部外面から体部下端にかけては回転ヘラケズリ、それ以外の部分はロクロナデである。かなり硬質な焼成で、内面には「×」の焼成前ヘラ書きがあり、それとは別に墨書きで「罝」(=「岡」)と記されている。

14は鉄製穂穂具である。破損して2片に分かれ、接合しないがおそらく同一個体であろう。目釘が2か所に遺存しており、裏面に木質が付着する。

SI022 (第26・27図、図版9・10・31)

東調査区の北東に位置する。北にSI021、SK025、南にSI023、西にSI024が重複する。土層断面からいざれよりも本跡が古いとみられるが、掘り込みが深く、西壁の一部を除き、確認することができた。

西壁周辺にカマド構築材のブロックが堆積していたが、覆土上層で、重複するSI023やSI024に関連するものである可能性が高い。四隅の対角線上に柱穴が位置し、東壁中央下に出入口施設と考えられるP5(深さ0.16m)が位置することから、西壁中央にカマドが設置されていた可能性を考えた。北側のSK025がカマド掘り方であった可能性も考えたが、被熱痕跡や焼土、カマド構築材などは確認できず、土層断面ではSK025があとから掘り込まれている。柱穴の深さは0.25m～0.47mであるが、P4は不整形で、搅乱が重複している可能性がある。壁溝はほぼ全周し、柱穴に開まれた範囲の床面が硬化していた。

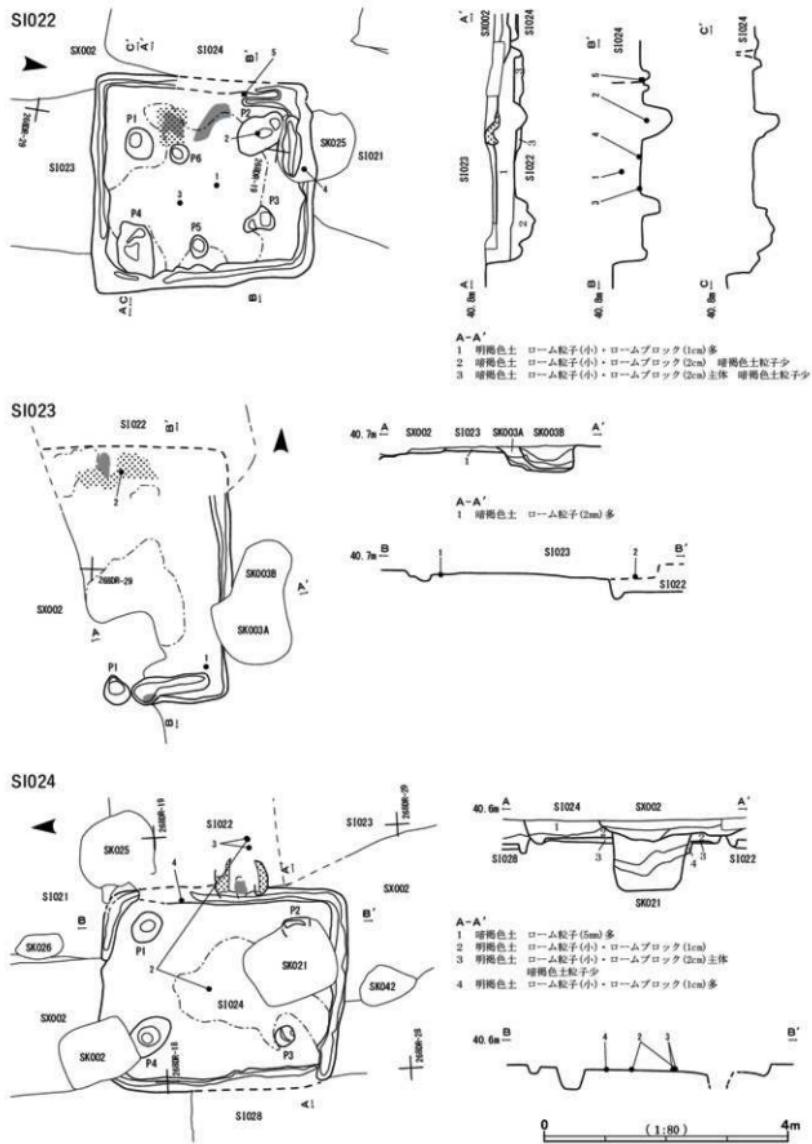
出土遺物は多くない。2の甕はP2覆土上層から出土した。また、SI024と重複する西壁際で出土した土製支脚(5)は、SI024に帰属する可能性も考えられる。

1は土師器の浅めの丸底杯である。外面は底部から口唇部に近い位置まで手持ちヘラケズリ、口唇部は横ナデ、体部内面は横ナデの後に丁寧なミガキが施されている。

2、3は土師器甕である。2の口縁部は「くの字」状に屈曲する。通常、土師器甕は外面の頸部を境に胴部のみにヘラケズリを施すのが普通であるが、この個体は頸部の境目よりも上の口縁部にまでヘラケズリを施している。内面は口縁部が横ナデ、胴部が横方向のヘラナデ調整である。3は口縁部上位外面に段をもち、さらに口唇部付近に一条の凹線がある。残存部の形状から推測して、胴部は大きく膨らむ形状のものであると考えられる。

4はロクロ土師器杯である。体部外面下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリが施されている。内外面に黒変している部位があるが成因不明である。当該資料は混入品で、本跡の南側に重複するSI023に帰属するものと考えられる。

5は土製支脚である。上半部を欠損する。



第26図 SI022・SI023・SI024 (1)

SI023（第26・27図、図版9・10・31）

東調査区の北東に位置する。北に位置するSI022の覆土中に構築し、北壁は確認できなかった。また、西半分はSX002に、東壁の一部はSK003Aにより壊されている。

掘り込みが浅く、確認面からの深さは最大で0.10mである。このためか北壁に設置されていたとみられるカマドは壊されており、構築材と焼土の堆積により確認された。壁が確認できる部分では壁溝が巡っており、カマドと対向する南壁中央下に出入口施設とみられるP1（深さ0.22m）を確認した。またSI022と重複する部分と中央で硬化した床を確認した。

出土遺物の遺存は悪い。カマド構築材が散在する中から甕（2）を出土した。

1はロクロ土師器高台付杯で、いわゆる足高高台と呼ばれるものである。底部外面の中心部には回転糸切り痕が見え、この部分を除き内外面すべてロクロナデ調整である。杯部は腰の部分が僅かに膨らんでいる。

2は土師器甕である。口唇部は平坦に面取りされている。口縁部は外面横ナデ、胴部は内面が横方向のヘラナデである。胴部外面は全体に縱方向のヘラケズリが施されているが、上端部には櫛歯状の痕跡が見えることから、全体を櫛歯に近いようなハケで調整した後にヘラケズリを行っているものと考えられる。

SI022-4、SK025-1のロクロ土師器杯は、本来本跡に帰属する可能性が高い。

SI024（第26・27図、図版9・10・31）

東調査区北東に位置する。南北にのびるSX002が重複し、これと関連するとみられる方形土坑SK002、SK021に一部壊されている。東に位置するSI022の覆土中にカマドを構築し、西壁はSI028の覆土中に立ち上がっていたことが土層断面により確認された。

東壁中央に位置するカマドは、遺存状態が悪く、袖部の基底面の一部と火床部を確認できた。主軸は東西を向く。柱穴P1～P4は四隅の対角線上に位置するが、P2はSK021と重複しており、確認できたのはその一部である。P4も一部をSK022に壊されている。P2以外の柱穴の深さは0.34m～0.49mである。壁溝は北壁の一部で確認できなかったが、周囲していたとみられる。中央部分の床が硬化していた。

出土遺物の量は少なく、遺存状態もよくない。

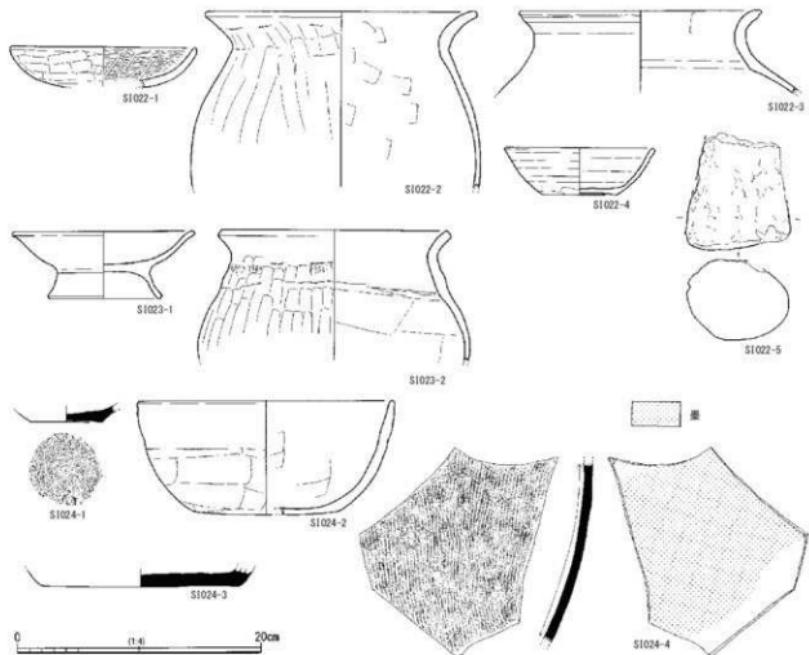
1は下総地域産の須恵器杯の底部破片である。外面は回転糸切り後無調整で、それ以外の部分は内外面ともにロクロナデ調整である。かなり硬質な焼き上がりである。

2は身の深い平底の土師器碗である。形状から鉄鉢形土器を模倣している可能性が考えられる。体部上位は外面横ナデ、体部外面中位から底部にかけては手持ちヘラケズリ、内面はヘラナデで調整されている。口縁部上位にはやや歪みの見える部分があり、粘土紐の接合痕も随所に見え、あまり丁寧なつくりではない。

3、4は須恵器甕である。3は新治窯産の甕の底部の破片資料で、外面は周縁部がヘラケズリ、中央部分は無調整、内面はナデ調整である。4は東海産で、外面は斜め方向の平行タタキ、内面はヘラケズリ調整である。割れた後に内面を覗いて転用していたようで、内面の広い範囲には研磨痕と墨痕が見える。

SI025（第28・29図、図版11・31・32・36・45・49）

東調査区中央に位置する。ほかの遺構との重複関係はないが擾乱により西隅周辺の壁を確認できなかつた。また、中央に床面に達しないものの大きな擾乱が入っているのが土層断面からわかる。



第27図 SI022・SI023・SI024 (2)

カマドは西壁中央から北寄りに設置され、主軸は東西から南に傾く。柱穴P1～P4は四隅の対角線上に配置され、深さは0.37m～0.52mである。土層断面の観察によるといずれも柱は抜き取られていた。壁溝は北壁から東壁にかけて確認でき、壁際を除き床面は硬化していた。カマド煙道部は僅かに傾斜して立ち上がり、右袖部は搅乱により一部削られていた。

1、2は土師器の丸底の杯である。1はほぼ完形品、2は口縁部に部分的に欠失があるが、やはり残存率の高い個体である。1は赤味が強く、2は全体に黒ずんでいるという大きな違いはあるが、成形・調整技法はほぼ同じである。口縁部外面から内面全体に横ナデを施した後に、内面は粗い放射状のミガキ、外面は手持ちヘラケズリした後に部分的に横向方向の粗いミガキが施されている。

3は新治産の須恵器甕の胴部破片資料である。外面には平行タタキが見え、内面は當て具をナデ消している。

4は土師器杯で、体部外面に墨書が見えるが、小片のため訛読不能である。

5は土師器杯で硬質な焼き上がりである。外面は体部上位から底部にかけて手持ちヘラケズリ、口縁部外面から体部内面全体にかけては横ナデ調整である。体部外面に正位で「子」と墨書されている。

6はロクロ土師器杯で、体部外面下端から底部にかけて手持ちヘラケズリ調整、それ以外の部分はロクロナデである。体部外面に墨痕が見えるが、文字の一部分が残っているだけで訛読は不能である。

なお、4～6の3個体は、ほかの資料に比べて帰属時期が新しく、混入資料と考えられる。

7、8は紡錘車の紡輪部で、7は土製品、8は滑石製品である。7は1/4ほどの破片で、復元すると上面径が5cmほどになり、8より一回り大きいと推定できる。8の下面に研磨痕跡が見られる。

9は鉄製刀子で、切先と茎尻を欠損している。

SI026（第28・29図、図版11・32・36・49）

東調査区北東に位置する。北側は調査区境で、全掘できなかった。また、調査区境に沿って確認した土坑2基（SK040・SK041）によりカマドを壊される。

カマドは北側の土坑2基の間にあり、主軸はほぼ南北を向く。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さが0.37mである。四隅の対角線上の4か所に柱穴が存在したとみられるが、北東に位置する1か所は擾乱と重複するため確認できていない。遺存する3か所の柱穴の深さは0.36m～0.37mで均一である。壁溝は壁遺存部分では巡っているため、全周していたと考えられる。貼床しており、壁際を除き床が硬化する。貼床下の東壁付近にピットが2か所（P4深さ0.35m、P5深さ0.18m）あった。カマドは2基の土坑に壊され、左袖部を確認できず、右袖部も遺存していたのは一部である。火床面は被熱し、焼土が堆積していた。

出土遺物の量は多かったが、図示できたのは8点である。

1、2は土師器の丸底杯である。1は口径17.9cmと比較的大型で、口径の割には器高が3.8cmと浅い形態である。口縁部外面は横ナデ、体部外面から底部全体は手持ちヘラケズリ、内面は丁寧なミガキで調整されている。胎土中には酸化鉄粒（2mm～3mm）を多く含む。器形、調整ともに畿内産土師器模倣と考えられる。2は復元口径14.8cm、器高5.0cmである。内面全体から体部外面上位にかけて横ナデ、体部外面上位から底部にかけては手持ちヘラケズリ調整で、その後内面全体および体部外面中位までミガキで調整されている。

3は湖西産須恵器のフラスコ瓶である。胴部全体の20%程度が残存しており、頸部は完全に欠失している。残存部分のうち外面1/2ほどにうっすらと自然釉がかかっている。

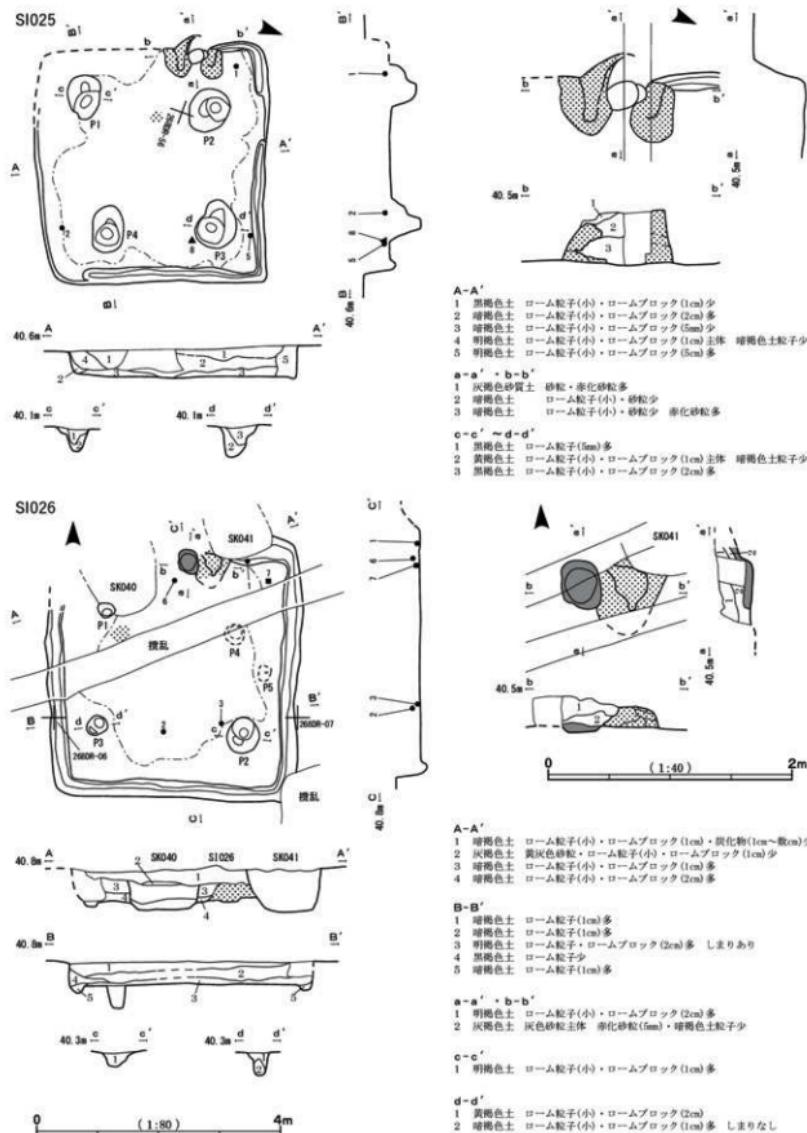
4、5はロクロ土師器杯の破片である。4は僅かに肥厚する口唇部をもち、外面に墨痕が見えるが、墨痕の残存部分があまりにも小さいため、文字であるのか否かさえも不明である。5も同じく外面に墨痕が見えるが訛読不能である。内面には黒色処理を施す。

6は土師器堀の胴部上位から口縁部にかけての破片資料である。内外面ともに器面はかなり黒ずんでいる。口縁部は大きく外反した後に端部を上方に摘み上げている。口縁部は内外面横ナデ、胴部は外面が縦方向のヘラケズリ、内面が横方向のヘラナデ調整である。

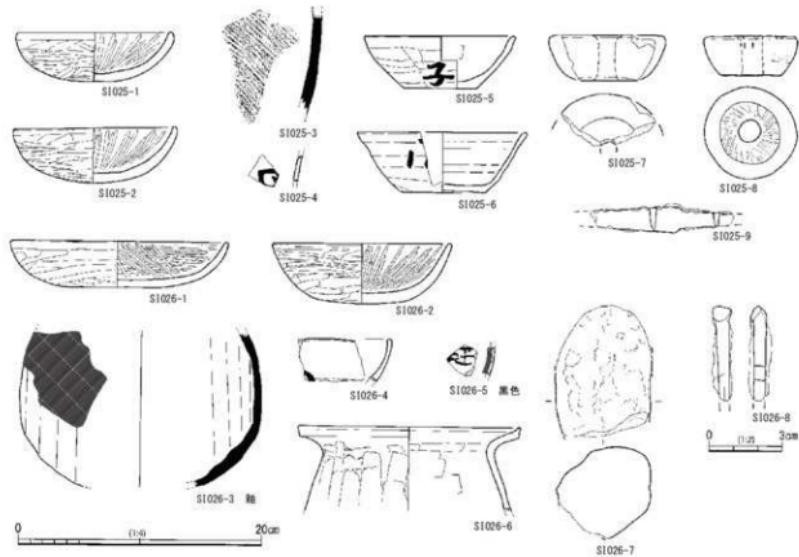
7は土製支脚である。下半部を欠損する。カマド右側にあたる北東隅から出土した。

8は鉄製釘である。頭部を折り曲げており、先端部は欠損する。

なお、4～6はほかの土器とは帰属時期が異なり、混入資料と考えられる。



第28図 SI025・SI026 (1)



第29図 SI025・SI026 (2)

SI027 (第30図、図版11・32・45・47・49)

東調査区北東に位置する。北にSI026、西にSI019、南東にSI028が近接して位置している。これらは主軸がほぼ同じ堅穴建物跡である。このうち南東隅がSI028と僅かに切り合う。土層断面ではSI028の覆土中に構築し、また南のSX005が覆土中に重複して構築していることが確認できる。

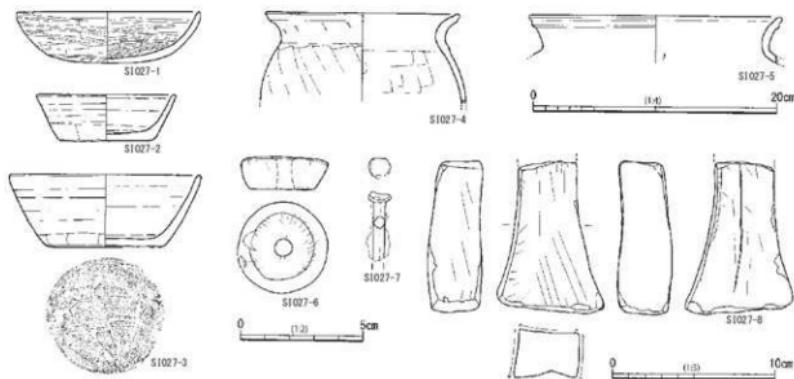
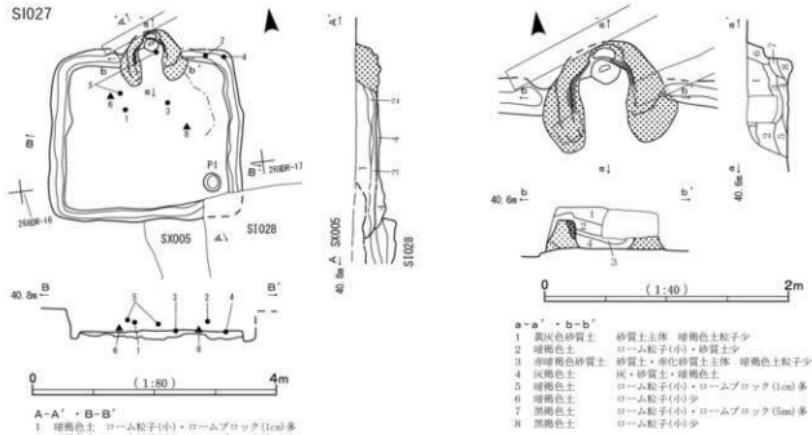
北壁中央にカマドが設置され、主軸は南北から東に傾く。南東隅にP1（深さ0.14m）がある。ピットはこれ1か所である。壁溝はカマド部分を除き、全周する。土層断面では貼床が確認でき、東側に床硬化の範囲がとらえられたが、西側の広がりは明確にできなかった。カマドは北壁を掘り込んで煙道部としており、煙道はほぼ垂直に立ち上がる。袖部は耕作による溝状の搅乱により壊され、特に右袖部の遺存状態がよくない。袖部内側の一部は被熱により赤化している。

出土遺物は比較的多いが、図示できたのは8点である。

1は底部がやや扁平な土師器の丸底杯である。内面は全面を横ナデした後に粗いミガキ、外表面は口縁部上端のみが横ナデ、体部から底部は手持ちヘラケズリで、口縁部には粗いミガキが施されている。

2、3は、いわゆる「箱形杯」と呼ばれる形態のロクロ土師器杯である。2は硬質な焼き上がりで、比較的小型なものである。体部外表面下端から底部にかけて手持ちヘラケズリ、それ以外の部分は内面まですべてロクロナデが施されている。3は口径も器高も2に比べかなり大型である。底部外表面は静止糸切り、体部下端から底部周縁にかけて手持ちヘラケズリ調整、それ以外の部分は内面まで含めすべてロクロナデが施されている。内外面ともに器表面の色調はかなり赤味がかっているが、赤彩ではない。

4、5は土師器壺である。4は口径15.6cmのやや小型の壺である。口縁部は内外面横ナデ、胴部は外面



第30図 SI027

が縱方向のヘラケズリ、内面が横方向のヘラナデで調整されている。比較的薄手のつくりである。5は頭部以上の残存資料である。形態、成形、調整は4と酷似しており、4よりは大型の相似形の壺である。

6は滑石製の紡錘車輪部で、完形品である。

7は鉄製釘である。頭部を折り曲げている。

8は白色流紋岩質凝灰岩製の砥石で、上部を欠損する。正面の形状は末広がりの撥形である。摩耗痕は正・両側面に見られる。裏面には側縁と平行する一条の溝がある。下面是荒れた器面を平らに整えるような擦りの痕跡が見られるが、明確に砥ぎ面とは判断できない。

SI028 (第31図、図版12・32・45・50)

北にSI030、北西にSI027、西にSX005、南東にSI038、北東にSI024が位置するが、本跡が一番古い。幅3mほどの溝状の攪乱が南北に広がり、北壁中央を壊している。西側の覆土上層で床硬化面や焼土、遺物などを確認し、調査時には重複する堅穴建物跡の存在を想定したが、土層断面から、これらはSX005に帰属するものと判断した。また、カマド構築材が北東隅の覆土上層から中層にかけて堆積し、調査時点ではさらにもう1棟の堅穴建物跡が重複すると考えたが、攪乱により壊された本跡のカマドの構築材が再堆積したものであろう。下層は本跡の覆土であった。

カマドは攪乱により壊された北壁中央に存在したと推定され、主軸は南北である。確認できた柱穴は2か所所 (P1深さ0.50m、P2深さ0.74m) で、これ以外は攪乱中に存在したとみられる。南壁中央下には出入口施設P3(深さ0.40m)、北西壁際にP4(深さ0.34m)があった。また貼床下にはP2に接するようにP5があった。壁溝は全周し、P1・P2の間の床が硬化していた。壁は垂直に立ち上がり、確認面からの深さは0.60mで、しっかりと掘り込みである。

掘り込みが深いこともあり出土した遺物は多いが、中央に大きな攪乱があるため混入品も含んでおり、また遺存状態はよくない。このため図示できた遺物は少ない。

1は土師器の丸底杯である。口縁部は内傾しており、須恵器蓋杯の模倣形態である。体部外面は手持ちヘラケズリ、それ以外の部分は横ナデで、その後内外面全体に丁寧なミガキ調整をしており、いわゆる漆仕上げと呼ばれる樹脂処理が施されていると考えられる。

2は土師器の小型甌で、短く直立する口縁部をもつ。器面がかなり荒れており固化できる部分が限られるが、口縁部は内外面横方向のナデ、胴部は外面が縦方向のヘラケズリ、内面が横ナデで、口縁部付近の内面にはミガキの痕跡が見える。

3は形態からみて土師器の甌と判断される。胴部上位から口縁部にかけての破片資料である。頸部外面に明瞭な段差があり、それより下の胴部は横方向のヘラケズリ、口縁部内外面は横ナデ、胴部内面が横方向のヘラナデで調整されている。

4はロクロ土師器杯である。内面は黒色処理が施されており、口唇部の外は玉縁風の形状に作られている。底部外面は回転糸切り後手持ちヘラケズリ、体部外面はロクロナデで、内面はその後全面に丁寧なミガキが施されている。

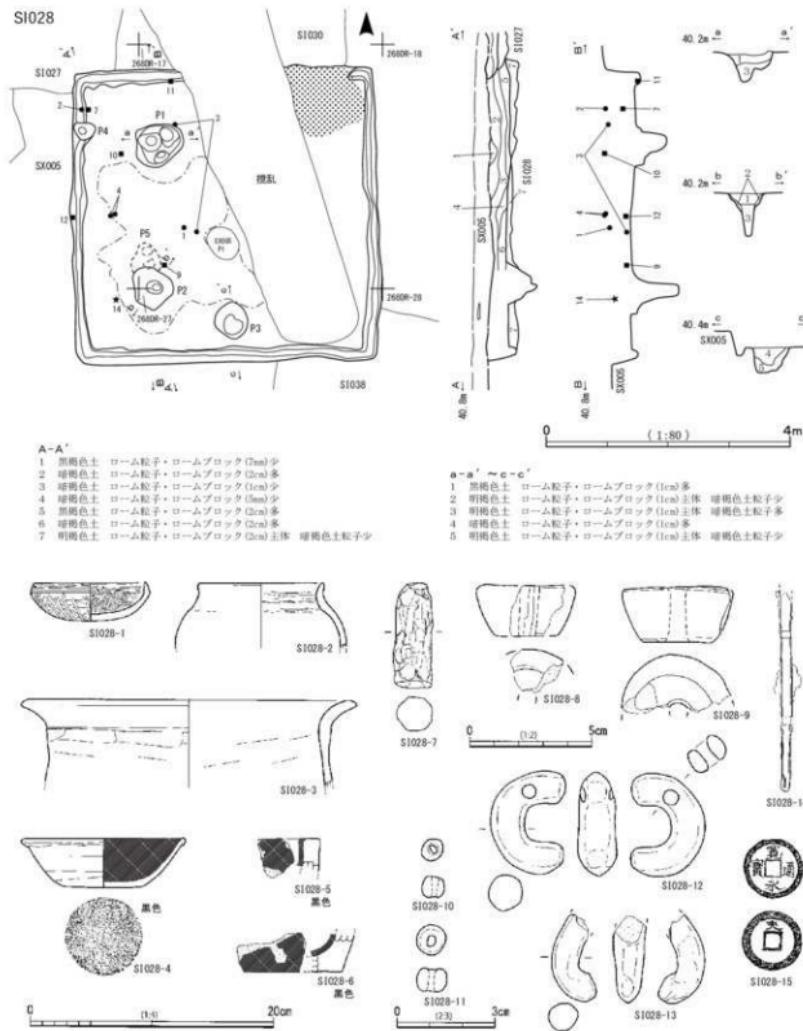
5、6は瓦質の火鉢で、5が口縁部、6が胴部から底部にかけての破片資料である。同一個体と考えられる。

土製品が7点出土した。7は棒状土製品である。粘土を棒状に成形したもので、ほぼ同じ径の円筒形を呈し、先端部が多少窄まって細くなっている。手捏ねの痕跡を残し、焼成は良好である。8、9は土製の紡錘車紡輪部で、どちらも欠損品である。8は1/4、9は1/2が遺存している。10、11は土製丸玉、12、13は土製勾玉である。

14は棒状の鉄製品で、細くなった先端部を折り曲げており、紡錘車の棒軸と考えられる。

15は「寛永通寶」の文銭である。

なお、4～6、15は混入資料と考えられる。



第31回 SI028

SI030 (第32図、図版12)

東調査区北東、SI028の北側に接して位置する。西側は搅乱により壊され、確認できたのは東壁の一部である。掘り込みが0.20mと浅く、東西に入る耕作による搅乱により、北壁の立ち上がりは不明瞭である。南東隅付近がSI028と重複していたとみられるが、僅かであろう。また、幅2mの搅乱を挟んで西側にあるSI027で本跡の痕跡が確認できなかったので、西壁は搅乱内で立ち上がっていたとみられ、小型の堅穴建物であった可能性が考えられる。

遺存部分が少ないこともあり、カマドやピットなどの施設は確認できなかった。床面にカマド構築材や焼土が見られ、これらの分布範囲から考えると、カマドは北壁に設置され、主軸は南北であったと推定される。床の一部が硬化し、遺存する東壁には壁溝があった。

出土遺物は多くない。板片なども含んでいたが、本跡に伴うものではないであろう。図示できたのは土器1点である。

1はロクロ土師器高台付杯で、高台から杯の底部にかけての破片資料である。高台の内外面の半面には黒斑が見える。杯底部内面には丁寧なミガキが施されている。

SI031 (第32図、図版12)

東調査区の南、中央付近に位置する。ほかの遺構とは重複していない。

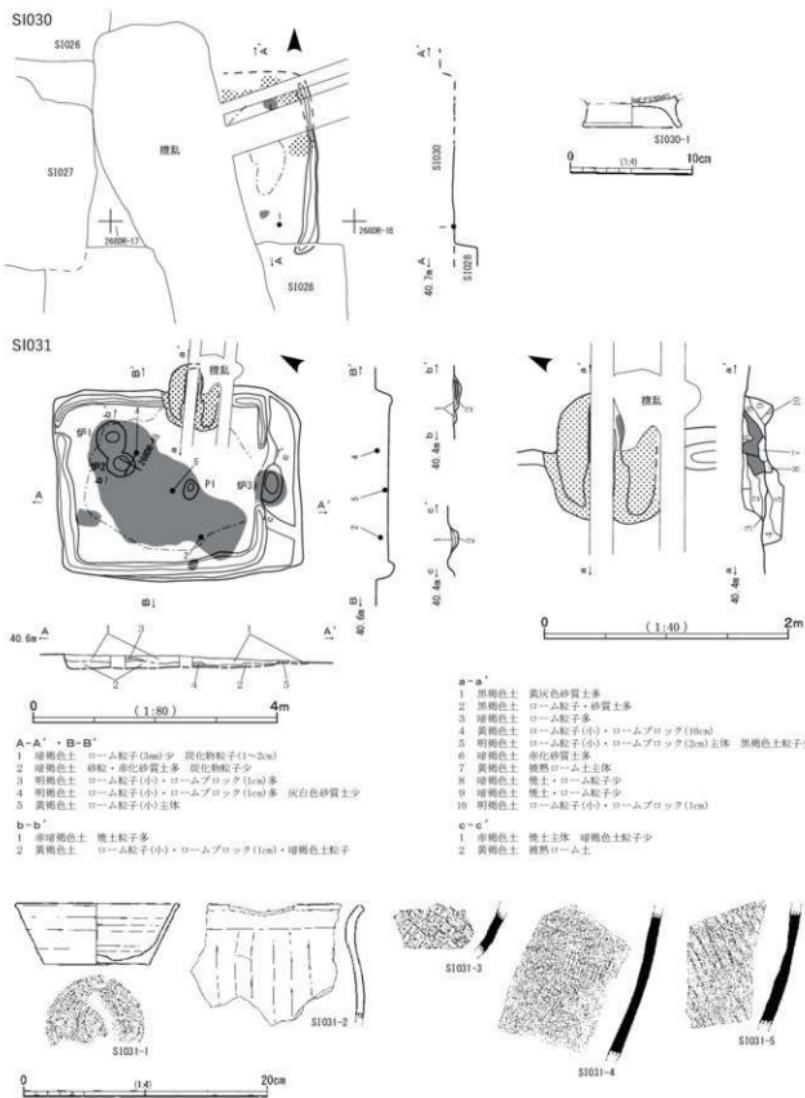
東壁中央にカマドを設置し、主軸は北東を向く。平面形は横長長方形で、南側は一段高くなっている。南壁から0.6m内側に壁溝を確認した。壁溝はほぼ全周する。中央部にP1（深さ0.40m）があるが柱穴とみられるピットはなかった。北隅付近と南壁中央下付近に、底面が焼けて焼土が堆積した窪みがあり、北隅の窪みは調査時に炉1、炉2の重複と判断している。また南壁下中央の窪み（炉3）は拡張前のカマド痕跡の可能性も考えられ、壁溝もその部分で途切れている。炉1は深さ0.21m、炉2は深さ0.25m、炉3は深さ0.07mである。壁溝に開まれた内側は床面が硬化し、広い範囲に焼土が堆積していた。

出土遺物の量は多かったが、図示可能な遺物は限られる。

1はロクロ土師器杯である。底部外面は回転糸切り後無調整、体部外面はロクロナデである。底部内面は、断面図に見られるように中央部分が円形に高まり、その外側が環状に窪み、さらにその外側の周縁部分が環状に高まっている。

2は土師器甕の口縁部から胴部上位にかけての破片資料である。口径は20cm程度と考えられる。口縁部は僅かに外反する直立気味の形状である。口縁部は内外面横ナデ、胴部は外面が縱方向のヘラケズリ、内面が斜め方向のヘラナデ調整である。

3～5は須恵器甕の破片資料である。3は胎土や焼成から下総地域産と考えられる。外面には格子状のタタキが明瞭に残る。本跡以外にSK003B（第67図）、SK044、SX005で格子状タタキをもつ破片が確認された。格子状のタタキをもつ須恵器甕は、主に香取地域の集落遺跡に多く分布している。既知の下総地域の須恵器窯跡出土資料中には格子状のタタキをもつ甕は確認されておらず、香取地域に未知の須恵器窯跡が存在する可能性が高い。4、5は東海産と考えられ、ともに外面は斜め方向の平行タタキ、内面には当て具痕があり、内外面ともにナデ消しが行われている。5は外面が赤褐色で、一見、鉄の吹き出し釉のように見える。



第32図 SI030・SI031

SI032（第33・34図、図版12・32・49・50）

東調査区の中央に位置する。南西隅にSI033が重複しているほか、SK060、SK205～SK207が重複している。いずれも本跡より新しい。

北壁中央にカマドが設置され、主軸は南北から西に傾く。四隅の対角線上に柱穴P1～P4が配置されるほか、カマドと対向する南壁中央下に出入口施設とみられるP6（深さ0.35m）が確認された。柱穴は深さ0.70m～0.80mで、P1、P3では柱痕を確認した。南隅のP4、P5はSK207と重複し、確認できたのは底面付近である。P5は深さ0.58mとほかの4か所の柱穴と比べて浅く内側に位置するため、柱穴かどうか判断できない。壁溝はカマド部分を除き全周している。壁際付近以外の床面は硬化し、西壁から南壁際を中心燒土が堆積していた。カマドは北壁中央を掘り込んで煙道部とし、煙道部の傾斜は緩やかである。袖の一部のほか火床部の痕跡が確認できたのみで全体の遺存状態はあまりよくないが、土層断面では、天井の一部を確認できた。調査時点ではSK207を柱穴と判断していたが、土層断面の観察とSK207が焼土ブロックを切って構築されていることから、堅穴建物より新しい別遺構の重複と判断した。

出土遺物の量は堅穴建物跡の中で最も多い。しかし大半は覆土上層から出土しており、混入品も多い。

1は新治産の須恵器蓋である。天井部外面に扁平な宝珠形のつまみをもち、内面に弱いかえりをもつ。外面は、中央部が灰黄褐色で周縁部が同心円状に黄灰色を発色しており、重ね焼きの痕跡と考えられる。

2、3は土師器の丸底杯である。3の器面の荒れがひどく、調整などの痕跡を観察・図化できない部分が多いが、口縁部外面から内面にかけて横ナデ、体部から底部にかけては手持ちヘラケズリ、その後外面全面にヘラミガキを施すというのがこの2個体共通の調整である。2は内面に黒ずみが見えるが成因は不明である。

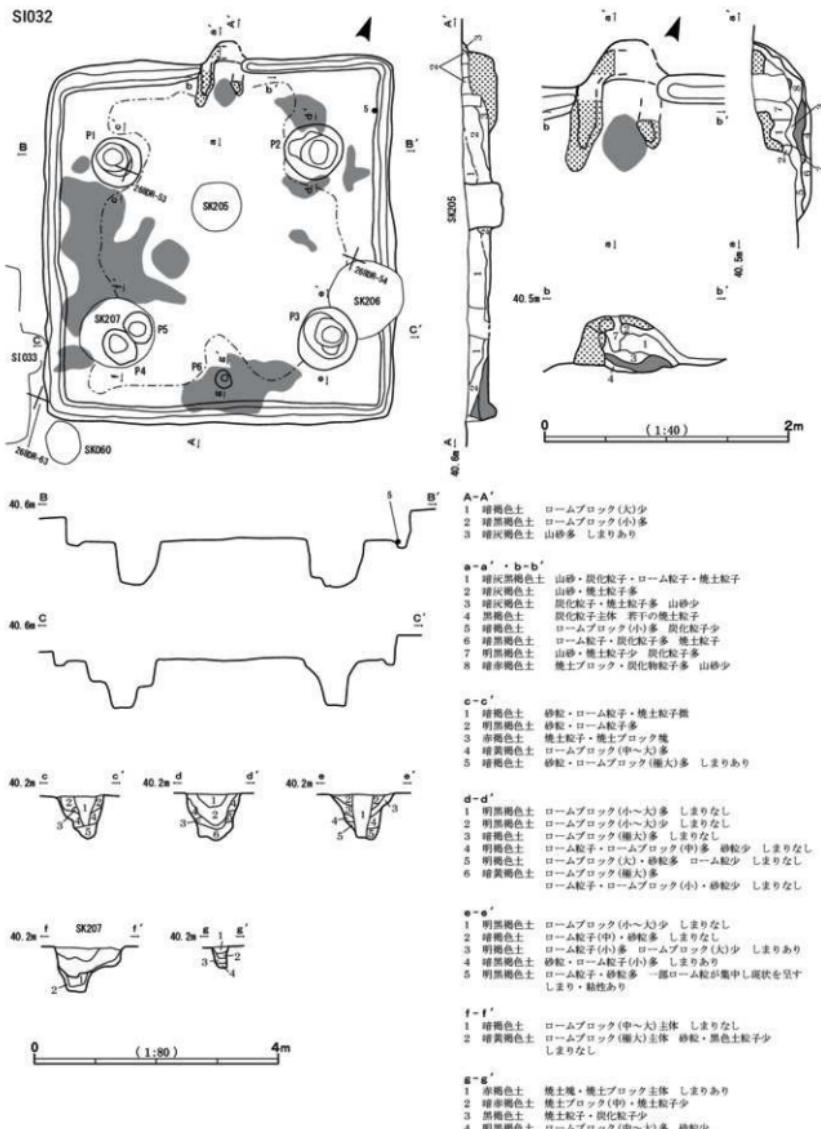
4～7は土師器壺である。4、6はほぼ共通の調整で、頭部以上は外面横ナデ、胴部は外面が縱方向のヘラケズリの後にヘラナデ、内面は横方向のヘラナデである。5は雑なつくりで、頭部以上は外面横ナデ、胴部は外面が縱方向のヘラケズリ、内面が横方向のヘラナデ調整で、内面には製作途中で粘土を盛り足している補修痕跡が見られる。7はやや小振りの壺で、胴部最大径は19.5cmである。外面は全体に黒ずんでいる。外面は胴部が横方向のヘラケズリ、底部は一方向のヘラケズリ、内面は斜め方向のヘラナデ調整である。

8、9は須恵器杯である。8は長石微粒を多く含み、新治産須恵器と考えらるるが、白雲母の混入は見られない。底部外面は手持ちヘラケズリで、体部内外面はすべてロクロナデ調整である。9は混和物がきわめて少なく粒度の細かい胎土と、体部下端には一段屈曲があるのが特徴である。市原市永田不入窯産または石川窯産と考えられる。

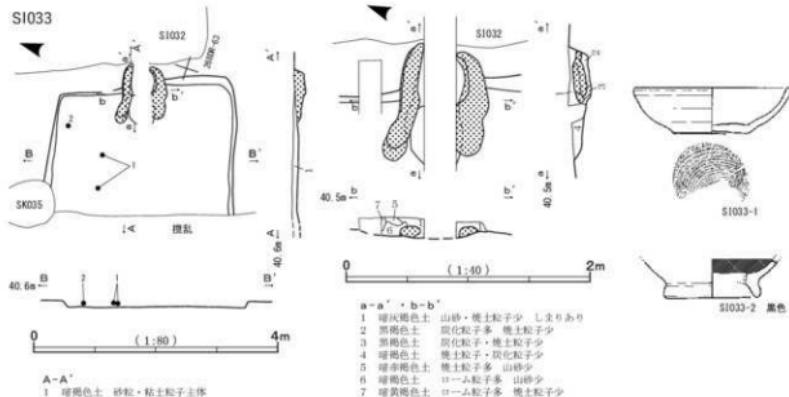
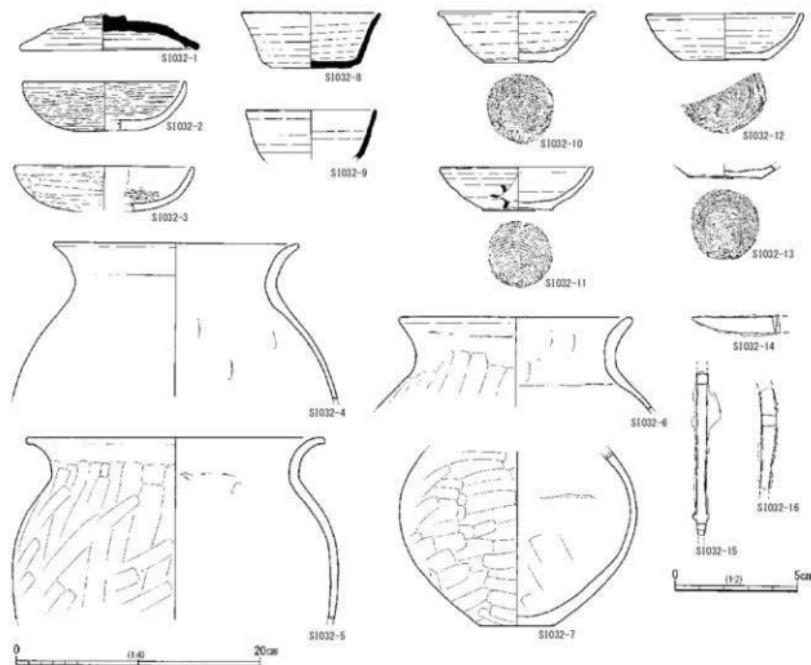
10～13は土師器杯である。4個体とも、底部外面は回転糸切り後無調整、体部内外面はすべてロクロナデという共通の製作・調整技法である。10は口縁部が短く開く。また、底部外面は一段僅かに突き出しつくりの底部で、逆に内面中央は脇状の高まりになっている。11は体部に薄く墨書が記されているが、釋読不能である。また、底部直上が明瞭に屈曲し、10同様に下に一段突き出した底部をもつ。12は内外面に煤様の付着がある。ミガキではなくナデによるものと思われるが、全体に器面が滑らかである。13はかなり硬質な焼き上がりである。

14は鉄製刀子の切先、15、16は鉄鎌頭部である。15は頭部下端に方形棘状突起をもつ。

なお、4～13は本跡に伴う資料ではなく混入品である。



第33図 SI032 (1)



第34図 SI032 (2) · SI033

SI033 (第34図、図版13・32)

東調査区の中央に位置する。東側のSI032の西壁と接し、西半分は攪乱により壊されている。

東壁中央にカマドが設置される以外、遺存部分ではピットなどの施設は確認されなかった。主軸は東西から北に傾く。カマド袖部は上層を削りとられ、遺存しているのは基底部付近である。

確認面から0.12mと浅く、出土遺物は少ない。図示できたのは土師器2点である。

1、2はともにロクロ土師器である。1は無高台の杯で、口縁部が短く直立する。底部外面は下に一段突出しており、内面はそれに呼応するかのように外縁に一段の窪みが一周している。底部外面は回転糸切り後無調整である。2は高台付椀で、内面は黒色処理し、丁寧なミガキが施されている。

SI034 (第35・36図、図版13・45・49・50)

東調査区の西寄りに位置する。SX006に北東隅を壊されている。

カマドは北壁中央に位置するが、右袖部はSX006により壊され遺存しない。主軸は西に傾く。四隅の対角線上に柱穴P1～P4が配置され、カマドと対向する南壁中央下に出入口施設P5（深さ0.15m）がある。柱穴の深さは0.37m～0.65mで、東側の2か所が西側に比べて深い。いずれにも柱痕が確認できた。遺存する部分では壁溝が巡り、柱穴に開まれた範囲の床面が硬化していた。

遺物の量は比較的多いが、混入品も含まれる。

1は土師器の丸底杯の破片資料である。口唇部内側にきれいな稜線をもつ。内面全体に丁寧なミガキが施され、体部外面は手持ちヘラケズリの後に粗いミガキが施されている。

2、3は須恵器壺の破片資料である、2は頸部から肩部の破片で、胴部外面には横向方向の平行タタキが施されている。胎土には白色雲母粒が多く含まれており、新治産と考えられる。3は底部に近い部分の胴部破片である。外面には斜め方向の平行タタキ、内面には横向方向のヘラケズリが見える。東海産と考えられる。

4はロクロ土師器杯で、底部が突出する。底部外面は回転糸切り後無調整で、それ以外の部分はロクロナデである。

5は板状の土製品で、瓦塔の壁にあたる部分とみられる。表面採集資料にも瓦塔基部があり、胎土が類似しているが、同一個体かどうかの判断は難しい。

6は扁平な勾玉形の石製模造品である。滑石製である。

7～10は鉄製品で、7は棒状の製品で紡錘車の棒軸であろうか。8、9は刀子、10は三角形の板状製品である。

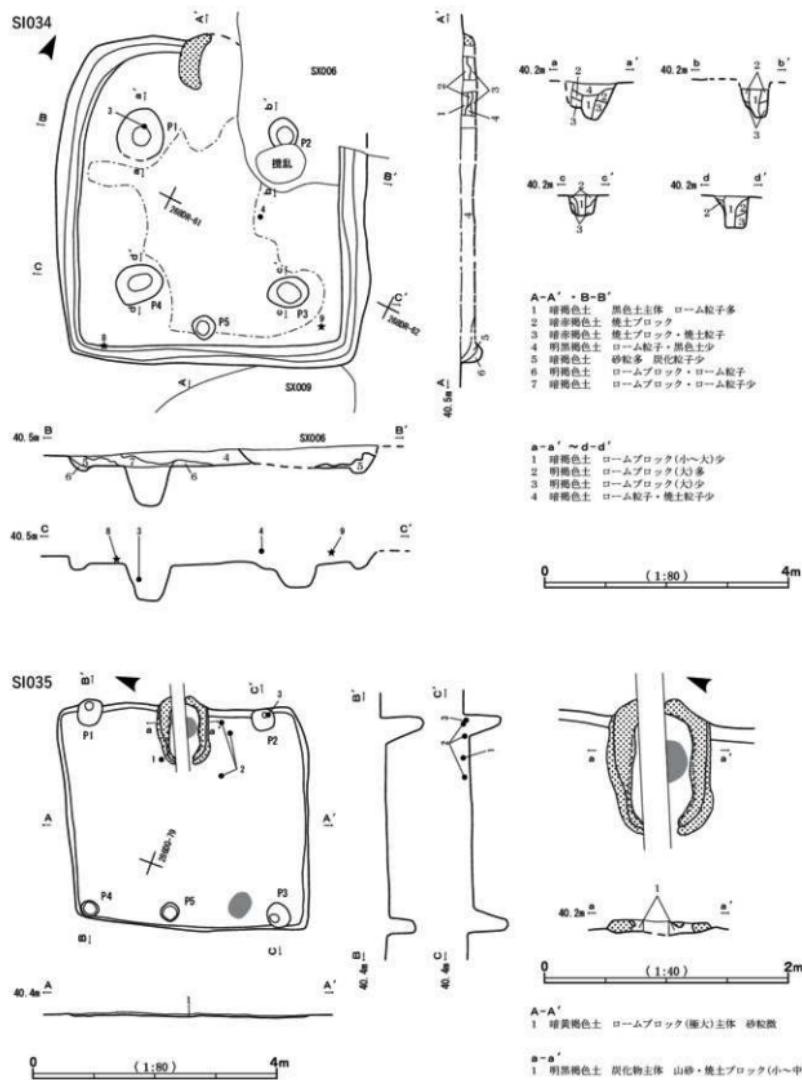
なお、4、5は帰属時期が他資料とは異なり、混入資料と考えられる。

SI035 (第35・36図、図版13・32)

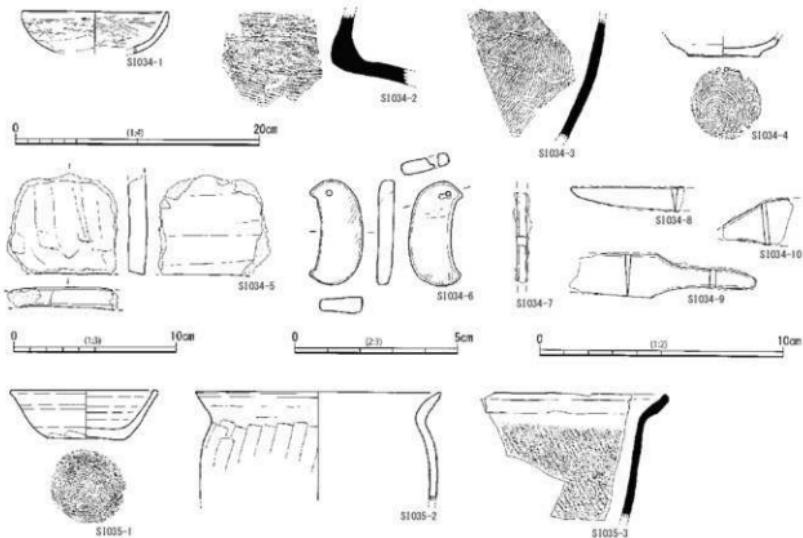
東調査区の西端に位置する。2m北側に主軸と同じに向けるSI001が位置する。ほかの遺構とは重複しない。

カマドは東壁中央に設置され、四隅付近の壁際に掘り込まれたP1～P4が柱穴、カマドと対向する西壁中央下のP5（深さ0.24m）は出入口施設であろう。柱穴は内側から壁外側に向かって斜めに掘り込まれ、柱穴の深さは0.41m～0.69mである。カマド袖部は上層を削られて、遺存するのは基底部付近である。火床部に僅かに焼土の堆積が見られた。

確認面からの深さが0.07mで、出土遺物は少ない。主にカマド周辺から出土している。



第35図 SI034・SI035 (1)



第36図 SI034・SI035 (2)

1はロクロ土師器杯である。口唇部はやや肥厚する。底部を回転糸切りで切り離した後に、体部外面下端から底部周縁にかけて手持ちヘラケズリを行っている。それ以外の部分はロクロナデである。

2は土師器甕の口縁部から胴部上位にかけての資料である。口唇部外面には細く浅い窪みが一条巡り、内面は弱い段差をもつ受け口状になっている。口縁部は内外面横ナデ、胴部は外面が縱方向のヘラケズリ、内面が横方向のナデ調整である。

3は金雲母粒を含む下総地域産の須恵器甕と考えられる。口縁部は、外面に太めの帯が貼り付けられる折り返し口縁で、僅かに外反し、胴部は底部に向かって窄んでいく砲弾形の器形と考えられる。胴部の外面は斜め方向の平行タタキ、内面は當て具痕を横方向のナデで消している。

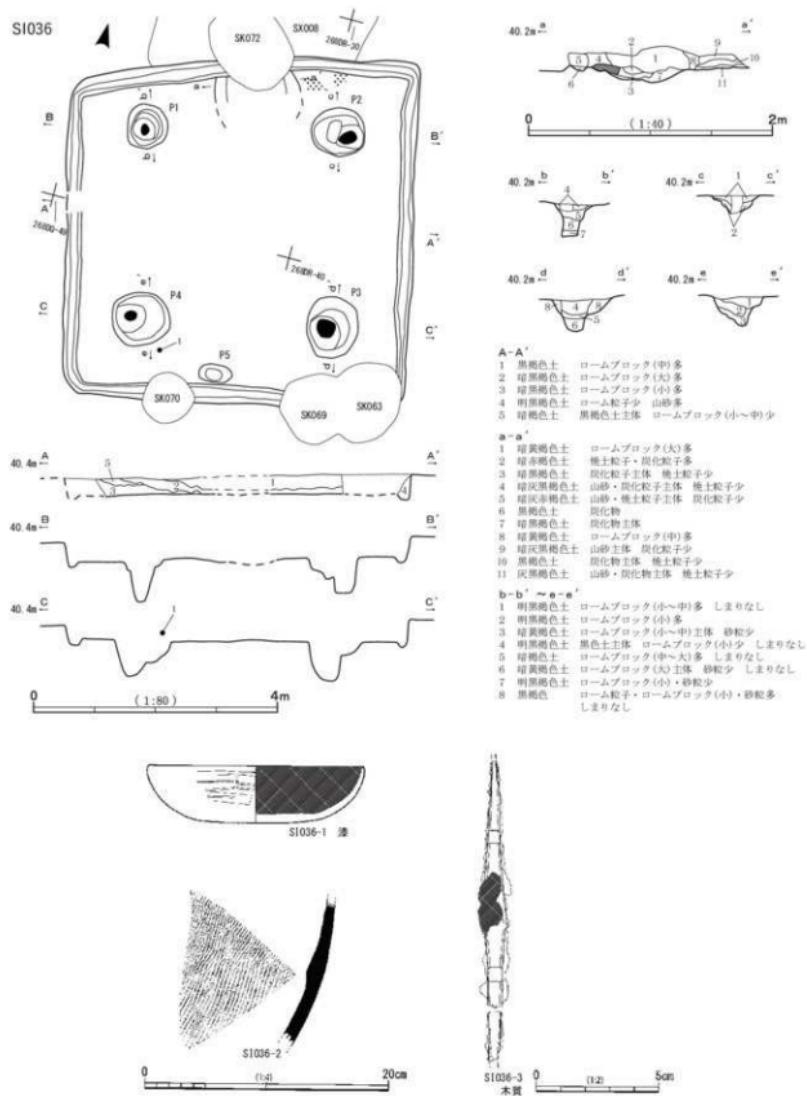
SI036 (第37図、図版13・49)

東調査区北西に位置する。北側は土坑SK072にカマドを壊され、南壁はSK063、SK069、SK070と重複して一部を壊されている。土層断面では確認できなかったが北側にあるSX008が重複していたとみられる。

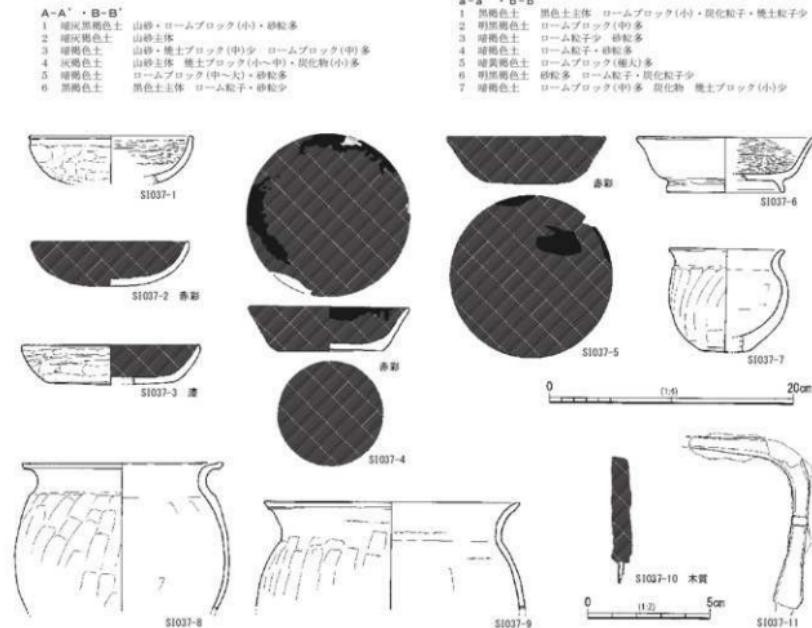
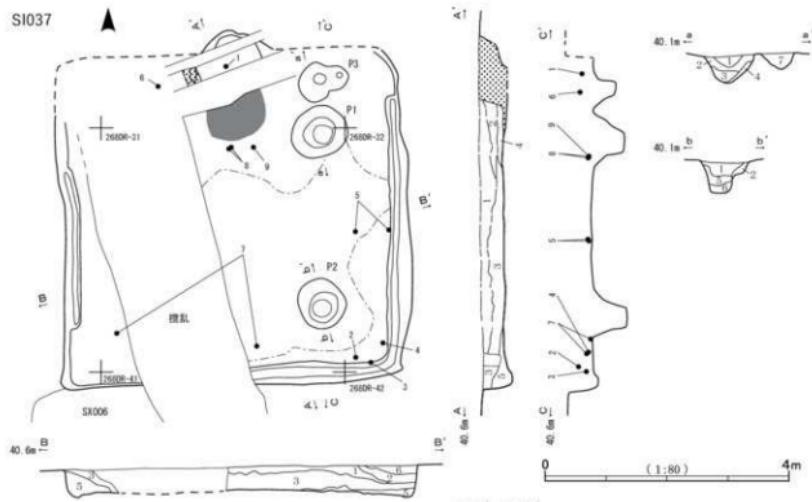
北壁中央に設置されていたカマドは、僅かな掘り込みと構築材などの痕跡のみを確認した。主軸は南北から僅かに西に傾く。壁溝は全周しており、四隅の対角線上にある柱穴P1～P4は、いずれも底面に硬化した柱のアタリ痕が確認できた。床面からの深さは0.57m～0.66mである。土層断面によると柱は抜き取られており、立ち上がりが豊穴内側に向かって傾斜している。カマドと対向する南壁中央下に出入入口施設P5（深さ0.40m）がある。

遺物の量は多くなく、図示可能なものも僅かであった。

1は土師器の丸底甕で、体部と底部の2つの破片資料から図上復元したものである。復元口径は178cm



第37図 SI036



第38図 SI037

で、やや大型のものである。内面は全体を丁寧なミガキで仕上げており、外面はヘラケズリの後に粗いミガキを行っている。内面には、部分的に煤または墨と思われる黒ずみが広がっている。いわゆる漆仕上げと呼ばれる樹脂処理が施されていると考えられる。

2は東海産の須恵器壺の胴部破片である。外面は斜め方向の平行タキが巡り、内面は同心円の当て具痕跡をナデ消している。素地の練り込みが甘いようで気泡による膨らみが随所にあり、実測図に示した断面の膨らみはそれを表している。

3は鉄製品である。先端部が細くなる棒状品で、茎部との境に段がある。工具ではないかとみられる。

SI037（第38図、図版13・32・33・49）

東調査区北西に位置する。西側2mのところにSI036が並ぶように位置している。南北に広がる幅2m弱の溝状の擾乱により西半分は大きく壊され、北西隅は遺存しない。

カマドは、北壁中央に煙道部の掘り込みと左袖部の一部が残っているのみである。周辺に焼土が散って、土製支脚が遺存していたが被熱による劣化のため図示できなかった。主軸は南北を向く。柱穴は四隅の対角線上に4か所あったとみられるが、確認できたのは東側のP1とP2の2か所である。西側の2か所は擾乱中に所在したとみられる。遺存する柱穴の深さはP1が0.49m、P2が0.55mで、どちらも土層断面によると柱が抜き取られており、開口部が大きく開く。P1の北側、カマドの東側にあるP3は貯蔵穴の可能性がある。深さは0.40mである。壁溝は東壁から南壁中央、西壁中央で確認できた。床面は壁際を除き硬化している。覆土には壊されたカマドの構築材を含んでいた。

覆土中の遺物は多かったが、1がカマド内で出土しているのを除き、他資料の出土状況は基本的に床面直上ではなく、遺構廃絶後の廃棄と思われる出土状況を示している。

1、2は土師器の丸底杯である。1の口縁部は短く直立する。体部外面は手持ちヘラケズリ、口縁部外面から内面全体にかけてはナデ調整で、内面は部分的にミガキが施されている。2の口縁部外面は横ナデ、体部は手持ちヘラケズリ、内面は丁寧なミガキ調整である。口縁部の内外面は部分的に赤味がかっており、赤彩痕跡と考えられる。

3は扁平な平底杯である。口縁部外面を横ナデ、体部から底部は手持ちヘラケズリで、体部外面上位から内面はミガキ調整が施されている。内外面全体が黒ずんでいるが、内面は樹脂処理が施されているいわゆる漆仕上げかと考えられる。

4、5はロクロ土師器杯で、内外面全面に赤彩が施されている。4は底部を手持ちヘラケズリ、体部下端を回転ヘラケズリ、体部外面にはロクロナデが施されており、底部外面には「大」と線刻されている。体部内面はかなり摩耗が進んでいる。口縁部は内外面ともに煤が付着しており全体に黒ずんでいるが、そのうち2か所には厚く油煙煤が付着している。5は体部外面下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリが施されている。体部外面には正位で「山」かと墨書きされている。口縁部外面に2か所、体部下端から底部にかけて1か所油煙煤が付着している。4と5は組で灯明皿に使われていたようで、4が油を溜める下皿、5がその上に重ねる上皿として使われており、4の内面の油煙煤の位置と5の外側の油煙煤の位置は2か所できれいに一致しており、灯心を同時に2本出す使い方をしていたと考えられる。

6はロクロ土師器高台付杯である。杯部内面には丁寧なミガキが施され、それ以外の部分はロクロナデ調整である。器形や内面の丁寧なミガキから、畿内産土師器写しの可能性が考えられる。

7は土師器小型壺で、全体に分厚いつくりである。胴部外面中位から底部までは器面がかなり摩耗して

いる。

8はやや小型、9は標準的な大きさの土師器壺である。8の口縁は外反した後に口唇部を直立させ、内面は受け口状となる。口縁部外面から胴部内面にかけては横ナデ、胴部外面は縦方向のヘラケズリで調整されている。9の口縁部内面に受け口状の段はない。

10、11は鉄製品である。10は釘で、木質が付着している。11は棒状品が曲がった状態で、茎部との境に段をもつため、工具の可能性が考えられるが、先端部が欠損するため器種は断定できない。

SI040（第39・40図、図版13・33・36・45・51）

西調査区の北西端に位置する。重複する遺構はなく、東調査区の堅穴建物跡群と離れて立地している。北東壁中央にカマドの痕跡があり、主軸は北東を向く。カマドは袖部が遺存していなかった。焚口にあたるとみられる部分に焼土が堆積する。南隣にP1（深さ0.10m）、北西壁中央にP2（深さ0.19m）がある。南東壁中央下のP3（深さ0.19m）は出入口施設であろう。柱穴は確認できなかった。壁溝はカマド部分以外に巡り、壁際をのぞいて床面は硬化していた。中央付近に焼土と貝の堆積がごく僅か認められた。貝は風化している小破片で、貝種は不明である。

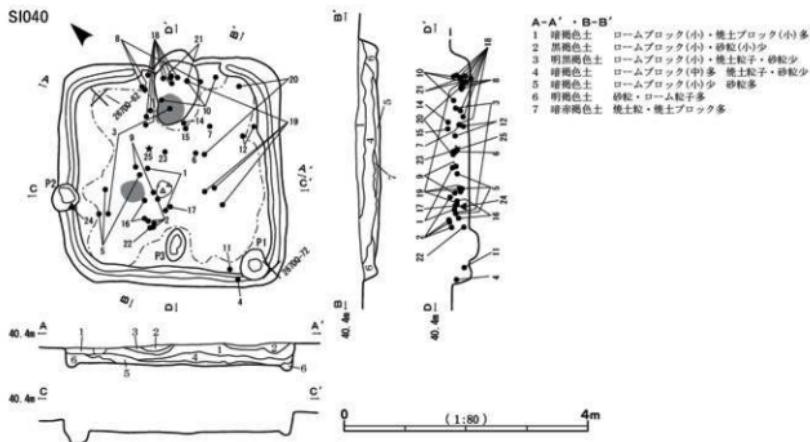
カマドと床面中央付近を中心にして多数の遺物が出土した。中央部分の遺物は床面から浮いており、まとめて投棄したような出土状態である。図示可能な遺物が多く含まれていた。

1は土師器杯である。ロクロ成形の可能性があるが、ロクロ痕跡が残っていない。体部外面から底部は手持ちヘラケズリ、内面は丁寧にミガキ調整している。

2～15はロクロ土師器杯である。2は底部外面に静止糸切り痕が見え、周縁部にのみ手持ちヘラケズリを施し、ほかは内外面ロクロ調整である。内外面ともに汚れのように黒ずんでいる。3～12の切り離し技法は回転糸切りである。3～9は同じ成形・調整技法で、底部回転糸切りの後に体部外面下端から底部周縁まで手持ちヘラケズリで調整を施し、ほかの部分はロクロナデである。4はほぼ完形の個体で、口縁部の一部のみが欠けている。胎土は比較的の肌理が細かく、体部外面に正位で「伸」と墨書きされている。5は口縁部を伏せた状態で底部側から見て右側の体部外面に、横位縦書きで「刀匁」（カ）と墨書きされている。6は外面口縁部から底部にかけて被然と考えられる煤の付着が見える。7は口縁部上端を欠失しており、体部外面に正位で「磨」と墨書きされている。8と9は腰の部分がやや丸味をもって膨らみ、9は口唇部が外に引き出されて丸味をもつという特徴がある。10は底部外面の周縁のみ手持ちヘラケズリで、体部は内外面ともロクロナデである。口縁部外面上位に明瞭な稜線を有する。11は体部外面下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリを施し、それ以外の部分はロクロ調整である。12は体部外面下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリを施し、ほかの部分はロクロナデである。13～15はロクロ土師器杯の破片資料で、いずれも外面に墨書きが記されている。14は底部外面に「匁」（カ）と記されており、15は底部外面に、13は体部外面に小さな墨痕が見える。

16～20は土師器壺である。16は小型の壺で、ほかの3個体に比べて口縁は直立気味である。全体にかなり黒ずんでいる。17～19は外反する口縁部の端部を上方に摘み上げた後に再度口唇部を外反させて、内面が受け口状に整えられている。口縁部は内外面横ナデ、胴部は外面上位が縦方向、下位が斜めまたは横方向のヘラケズリ調整で、胴部内面は横方向のナデである。18は外面に焼土が付着している。20は壺の胴部下位から底部にかけての資料である。

21は土師器瓶、22、23は須恵器瓶である。21は口縁部が大きく外反し、胴部は底部に向かって砲弾形に

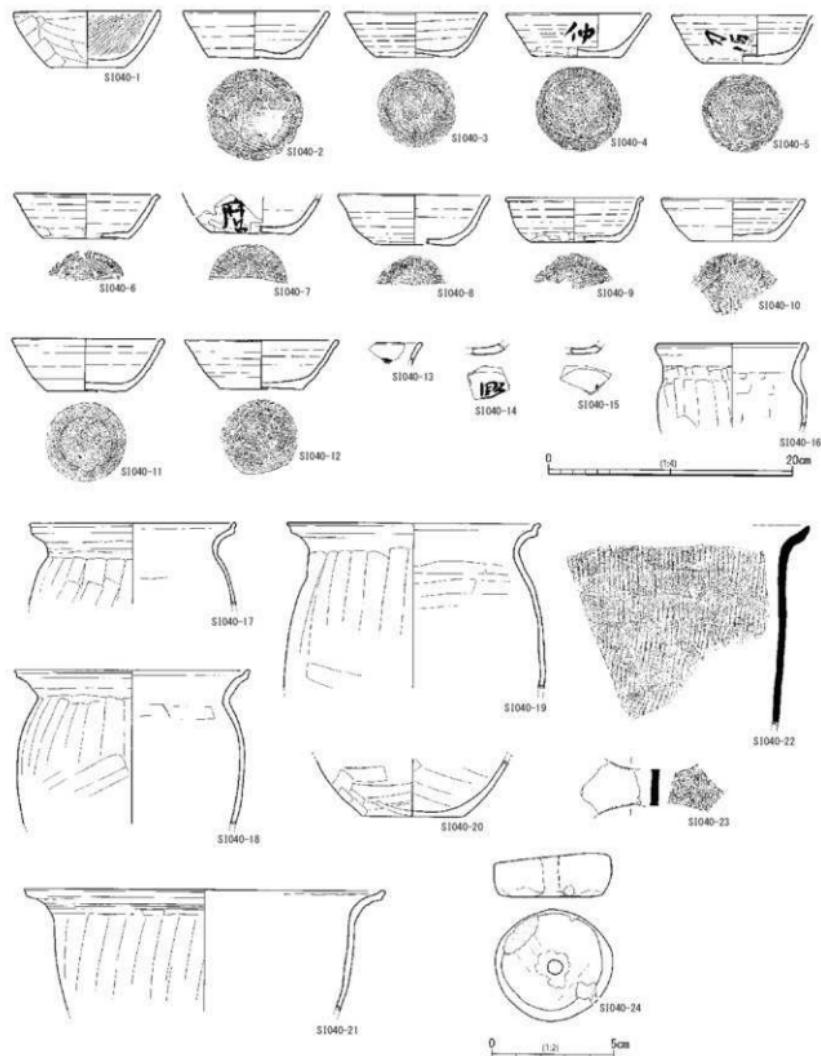


第39図 SI040 (1)

窄む形態と考えられる。口縁部上端から口唇部にかけては甕と同じつくりで、かなり硬質な焼き上がりである。22は下総地域産で、胴部外面は縱方向の平行タタキ、内面は當て具痕をナデ消している。23も同じく下総地域産で、五孔式の底部の破片である。

24は凝灰岩製の紡錘車輪部で、上面径と下面径の差があまりない形態である。

このほかに図示していないが、楕形溝1点（図版51）を出土している。



第40図 SI040 (2)

第2節 その他の遺構と出土遺物（第41図、第2～9表）

本節では、竪穴建物跡以外の遺構である台地整形区画、溝状遺構、道路状遺構、竪穴状遺構、地下式坑、井戸、土坑について報告する。

確実に遺構に伴うと考えられる遺物を出土する例が少なく、遺構の性格や時期を明瞭にすることはできなかったもののが多かったが、ほとんどが中世の所産であるとみられる。

台地平坦面を掘り下げて区画地をつくっているものを台地整形区画とした。東調査区で10か所、西調査区で3か所を確認した。区画とはいってもしっかりした掘り込みや土手、溝などを伴うなど、境界が明瞭なものではなく、浅い幅広の溝状のものと浅く窪んだ面的な広がりをもつもので、いずれも区画内や周辺に地下式坑や井戸、土坑が配置されている。調査区外へ広がる状況をみせるものが大半で、全体の様相を確認できたものは少ない。

このほかに溝状遺構（SD001）と硬化面をもつ道路状遺構（SX011）が各1条、竪穴状遺構（SI038）1基が東調査区に所在する。

土坑は総数280基が確認された。調査時に種別を表す略号をSKとしたものとSHとしたものがあるが、両方を併せて土坑として報告する。この中に地下式坑8基、井戸5基も含まれる。

この節では、まず地下式坑、井戸について説明し、次に東調査区、西調査区の2つの地区に分けて、それぞれ確認した台地整形区画、溝状遺構、道路状遺構、竪穴状遺構、土坑について説明する。

本調査を東調査区から始めており、遺構番号を東調査区から振っているため、東調査区は東から、西調査区は北から、挿図に沿って記載している。図示可能な出土遺物が少なかったため、遺物の実測図は地下式坑、井戸、東調査区、西調査区ごとにまとめ、それぞれの遺構図の後に掲載した。各遺構に関係する挿図番号、図版番号は、「第2表 その他の遺構一覧」に遺構計測値と併せて掲載した。

1 地下式坑

地下式坑は8基確認した。そのうち2基は東調査区南西の台地整形区画SX010周辺に位置し、残りの6基は西調査区の台地整形区画SX013周辺に構築されていた。

地下室の天井部が遺存するものもあったが、危険回避のため周囲を掘り下げ天井部を落として調査を行っている。したがって提示した図は、底面を除き本来の形状ではない。このため遺構平面の計測値は底面の規模を示したものである。

SK054（第42・63図、図版14）

東調査区南西のSX009の西、SX010の北に位置する。竪坑と地下室を通路でつなぐ形態で、底面はどちらも方形を呈し、竪坑と地下室を通した主軸は南北から僅かに西に傾き、竪坑は南側に開口する。底面での主軸の長さは2.66m、地下室底面の横幅は1.74m、竪坑底面の幅は0.80mである。竪坑の開口部の平面形は梢円で、西側に幅0.80mの方形の平坦面をもつ。通路の天井までの高さは0.90m、通路の幅は0.30mであった。地下室の深さは竪坑側の確認面から1.62mで、地下室と通路の底面は同じ標高で統一され、竪坑底面より6cm前後高くなっている。

円筒状に掘り込まれた竪坑の覆土は、通路入口部から下にローム粒子やロームブロックを多く含む明黒褐色土が堆積している。地下室の天井部崩落時に流れ込んだ土砂であろう。その上層は黒褐色土が主体となっている。

出土遺物は少なく、破片のため図示できるものはなかった。

SK057（第42・63図、図版14）

東調査区南西、SX010の北側に地下式坑SK054と並んで位置する。ひとつの堅坑の左右に地下室をつくる形態で、地下室底面の平面形は長楕円である。長軸は南北から東に傾く。地下室底面の全体の長さは2.98m、幅0.78m、確認面からの深さは1.35mである。断面図から推定できる堅坑の幅は1.00mで、堅坑の左右にそれぞれ1.00m～1.20m地下室を掘り広げている。地下室底面の標高は堅坑より僅かに高くなっている。

出土遺物はほとんどなく、図示できるものはなかった。

SK101（第42・45・73図、図版14・15・50）

西調査区北部、SX013の北側に位置する。堅坑と地下室を通路でつなぐ形態で、堅坑と通路の境界は明瞭ではない。堅坑と地下室を通した主軸は南北から僅かに西に傾き、堅坑の開口部は南のSX013側にある。底面の平面形は堅坑、地下室とも方形で、堅坑から地下室までを含む底面の主軸長は2.71m、地下室底面の幅は1.85m、堅坑底面の幅は0.72m、通路の幅は0.35mである。堅坑、通路、地下室の底面は平坦ではほぼ同じ標高で、深さは確認面から2.25mである。堅坑の壁は中位まで垂直に近い角度で立ち上がり、開口部が広がっている。地下室の天井部付近の壁は横に掘り込んでいる。

出土遺物は少なく、カワラケや播鉢など中世土器・陶器片を含んでいたが、破片で図示できるものはなかった。呈示できたのは銭貨1点で、「元豊通寶」である。

SK116（第43・45・73図、図版15・34・37・48・50）

SX013の北西隅に位置する。主軸は北西を向き、堅坑の開口部は南東側にある。底面の平面形は、堅坑が円形、地下室は隅丸方形である。間を通路でつないでいるが、通路と堅坑の境は明瞭ではない。堅坑から地下室までの底面の主軸長は3.22m、地下室底面の幅は2.62m、堅坑底面の幅は0.84m、通路の幅は0.86mである。各部分の底面は平坦で同じ標高でつながり、地下室側の確認面からの深さは2.30mである。地下室、堅坑とも壁は垂直に近い角度で立ち上がっている。地下室中央の底面に炭化物が遺存していた。ムシロ状のものが散かれていた可能性が考えられる。

覆土を記録できたのは堅坑部分のみである。黒色土を主体とし、水平に堆積している。

地下室の壁際を中心に遺物を出土した。中世土器・陶器のほか石塔、板碑、銭貨などである。底面から0.50m～0.60m上で出土しており、埋没過程で混入したものであろう。

1はクロコ土師器の皿で、器面が全体に黒ずんでいる。底部外面は回転糸切り後無調整、それ以外はすべてクロコナデである。全体に分厚いつくりで、内面の広い範囲にはベンガラと思われる赤い付着物が見える。2、3は硬質な焼き上がりの内耳土器の破片資料である。ともに口径31cm程度に復元でき、色調や混和物から同一個体である可能性が高いが、接点がないため確証はない。どちらも胎土に金雲母微粒を含み、外面には煤が付着している。4は播鉢の片口部の破片資料である。やはり硬質な焼き上がりである。内面には浅く細い摺目が見える。5は常滑産の壺の底部近くの破片資料である。常滑の壺の中ではやや小型のもので、胎土中に径1mm前後の長石粒を多く含む。器表面に鉄の吹き出し軸は見られない。

6は手捏土器である。中世のものとは考えられず混入品であろう。

7は砂岩製五輪塔の火輪部分である。屋根形で、上面には風輪を嵌め込む晴穴がある。上面と下面にノミの加工痕跡が残る。8は緑泥片岩製板碑の破片である。梵字の下に受花が彫られている。

9は銭貨で「開元通寶」である。



第41図 土坑群分布図

第2表 その他の遺構一覧

遺構名	種類	位置 グリッド	坪図	図版	規模(m)			備考	
					主軸	横軸	深		
SX001	台地整形区画	SX001	268DR - 58・59	52.66	18.34	7.72	× 4.76	× 0.34	方形区画
SX002	台地整形区画	SX002	267DR - 97・98 268DR - 08・28	53.54,66	18.36,39,50,51	-	× 2.30	× 0.24	溝状区画
SX003	台地整形区画	SX003	268DR - 57・65 - 66・74	55.56,66	18.34,49	17.56	× 1.68	× 0.24	溝状区画
SX004	台地整形区画	SX004	268DR - 66・67	55.66	18.34,36,51	-	× 1.70	× 0.37	方形区画
SX005	台地整形区画	SX005	268DR - 16・26	57.66	18.34,29	-	× -	× 0.30	不整形区画
SX006	台地整形区画	SX006	268DR - 41・51	58.66	19.36	6.30	× -	× 0.47	方形区画
SX007	台地整形区画	SX007	268DR - 10・11	58.66	19.39,47,50	6.76	× -	× 0.30	方形区画
SX008	台地整形区画	SX008	268DQ - 29・39	61.67	19.39,45,48	-	× 3.86	× 0.23	溝状区画
SX009	台地整形区画	SX009	268DR - 61・72 - 82・83	62.66	19.39	-	× 5.02	× 0.19	溝状区画
SX010	台地整形区画	SX010	268DR - 80・91	63.66	19.47	-	× 6.40	× 0.42	溝状区画
SX011	道路状遺構	SX011	56・66・ 268DQ - 76・86 269DQ - 07・17	65.66	19.39,50	-	× 2.30	× -	
SX012	台地整形区画	SX012	267DQ - 77・77	70.78,82	22.35,40,48	-	× -	× -	
SX013	台地整形区画	SX013	82・85・ 267DQ - 92・95 268DQ - 02・05 - 12・15	70.73～75.82	22.23,35,40,45,47, 49～51	17.00	× 14.20	× -	方形区画
SX014	台地整形区画	SX014	268DQ - 25・36	70.80,83	23.35,41,50	-	× 4.26	× -	溝状区画
SD001	溝状遺構	-	267DR - 89・99 268DS - 10・20・ 30・51	50,51,67	36,39,47	-	× 1.14	× 0.27	
SH038	堅穴状遺構	-	268DR - 27・28	57	19	[3.40]	× 3.20	× 0.53	
SK001	土坑	SX002	267DR - 98	53	-	0.96	× 0.68	× 0.28	
SK002	土坑	SX002	268DR - 08	53	-	1.20	× 1.00	× 0.82	
SK003A	土坑	-	268DR - 29	53.54	20	1.16	× 1.16	× 0.24	
SK003B	土坑	-	268DR - 19・29	53.54,67	20,34,39,49	1.50	× 0.82	× 0.40	
SK004	土坑	SX002	268DR - 28・38	53.54	20	1.90	× 0.94	× 0.54	
SK005	土坑	-	267DS - 80・90	50,51,67	6.20,36,39	2.88	× 2.59	× 0.77	
SK006	土坑	-	268DR - 38	53.54	20	0.92	× -	× 0.23	
SK007	土坑	SX003	268DR - 75	55	-	1.46	× -	× 0.76	
SK008	土坑	SX003	268DR - 76	55	-	-	× -	× 0.09	
SK009	土坑	SX003	268DR - 76	55	-	-	× -	× 0.07	
SK010	土坑	SX003	268DR - 67	55	-	0.94	× -	× 0.29	
SK011	土坑	-	268DS - 40	50,51,67	20,34	0.85	× -	× 0.13	
SK012	土坑	-	268DR - 48	52	20	0.90	× 0.92	× 0.24	
SK013	土坑	SX001	268DR - 48	52	20	0.88	× 0.68	× 0.30	
SK014	土坑	-	268DR - 48	52	20	-	× 0.65	× 0.14	
SK015	土坑	SX003	268DR - 57	55.56	-	1.92	× 1.06	× 1.90	
SK016	土坑	SX003	268DR - 76	55	-	-	× -	× 0.24	
SK017	土坑	SX003	268DR - 76	55	-	-	× -	× 0.20	
SK018	土坑	SX003	268DR - 66・76	55	-	-	× 0.58	× 0.20	
SK019	土坑	SX002	267DR - 97	53.54	-	2.26	× 1.56	× 1.50	
SK020	土坑	SX002	267DR - 97	53	-	0.93	× 0.82	× 0.25	

第2表 その他の遺構一覧

遺構名	種類	位置 区画	グリッド	坪図	図版	規模(m) 主軸×横軸×深	備考
SK021	土塙	SX002	268DR - 18	53.54	-	1.46 × 1.20 × 0.79	
SK022	土塙	-	267DR - 99	50.51.67	20.39	1.10 × 0.80 × 1.06	
SK023	土塙	-	267DR - 99	50.51.67	20.34	1.18 × 0.88 × 1.07	
SK024	欠番	-	268DR - 08	-	-	- × - × -	SI021の擬形
SK025	土塙	-	268DR - 08	53.54.67	34	1.32 × 1.20 × 0.09	
SK026	土塙	-	268DR - 08	53.54	-	0.76 × 0.40 × 0.26	
SK027	土塙	-	268DR - 33・34	59	20	1.18 × 1.00 × 0.46	
SK028	土塙	-	267DR - 97	53.54	-	1.00 × 0.76 × 0.11	
SK029	土塙	-	268DR - 37	57.67	35.50	1.28 × 1.23 × 0.38	SI016遺物帰属
SK030	土塙	SX003	268DR - 66・76	55	-	- × 1.74 × 0.22	
SK031	土塙	-	268DR - 64	55.56	20	1.40 × - × 0.45	
SK032	土塙	-	268DR - 73	55.56	20	0.93 × 0.88 × 0.18	
SK033	土塙	-	268DR - 73	55.56	20	0.94 × 0.58 × 0.20	
SK034	土塙	-	268DR - 52	60.67	20.35	1.80 × 1.40 × 0.50	
SK035	土塙	-	268DR - 52	60	20	0.82 × 0.78 × 0.26	
SK036	土塙	-	268DR - 33・43	59.67	20.50	0.82 × 0.86 × 0.25	
SK037	土塙	-	268DR - 37	57	-	0.50 × 0.50 × 0.19	
SK038	土塙	-	268DR - 37	57	-	- × - × -	
SK039	土塙	SX008	268DQ - 29	61.68	39.48	2.36 × 1.80 × 0.99	
SK040	土塙	-	267DR - 96	53.67	50	- × 1.09 × 0.10	
SK041	土塙	-	267DR - 96	53	-	- × 1.02 × 0.11	
SK042	土塙	SX002	268DR - 18	53	20	0.88 × 0.64 × 0.22	
SK043	土塙	SX005	268DR - 27	57.67	21.35	1.00 × 0.86 × 0.24	
SK044	土塙	SX005	268DR - 26	57.68	35	1.18 × 1.02 × 0.41	
SK045	土塙	-	268DR - 23	59	20	1.07 × 0.94 × 0.26	
SK046	土塙	-	268DR - 24	59.68	20.49	0.99 × 0.84 × 0.54	
SK047	土塙	-	268DR - 23・33	59	20	1.12 × 0.82 × 0.21	
SK048	土塙	-	268DR - 23	59	20	0.80 × 0.58 × 0.32	
SK049	土塙	SX009	268DR - 72・73	62.68	21	1.46 × 1.22 × 0.38	
SK050	土塙	SX009	268DR - 61・71	62	21	1.76 × 1.10 × 0.32	
SK051	土塙	SX009	268DR - 71	62	21	1.24 × 0.80 × 0.10	
SK052	土塙	SX010	268DR - 80	63.64	21	1.28 × 0.94 × 0.40	
SK053	土塙	SX010	268DR - 80	63.64	-	1.56 × 1.23 × 0.36	
SK054	地下式坑	SX010	268DR - 60・70	42.63	14	2.66 × 1.74 × 1.62	
SK055	土塙	SX010	268DR - 90	63.64	21	1.00 × 0.94 × 0.75	
SK056	土塙	SX010	268DQ - 89	63.64.68	21.39	2.08 × 0.60 × 0.39	
SK057	地下式坑	SX010	268DQ - 89	42.63	14	2.98 × 0.78 × 1.35	
SK058	土塙	-	269DQ - 08	64.68	21.35	1.07 × 1.07 × 0.17	
SK059	土塙	-	268DQ - 68	64	-	0.88 × 0.72 × 0.05	
SK060	土塙	-	268DR - 63	60	21	0.70 × 0.58 × 0.26	
SK061	土塙	-	269DQ - 08	64	21	1.20 × 0.92 × 0.59	
SK062	土塙	-	269DQ - 08	64.68	21.49	1.00 × 0.64 × 0.44	
SK063	土塙	SX008	268DR - 40	61.68	21	1.28 × 1.18 × 0.80	
SK064	土塙	-	268DR - 12	59	21	0.72 × 1.24 × 0.28	

第2表 その他の遺構一覧

遺構名	種類	位置 グリッド	押図	図版	規模(m)		備考
					主軸	横軸	
SK065	土坑	-	268DR - 12・13	59	21	2.72 × 2.32 × 0.32	
SK066	土坑	-	268DR - 12	59.68	21.36	- × 1.16 × 0.23	
SK067	土坑	-	268DR - 12	59	21	- × 0.86 × 0.28	
SK068	土坑	-	269DQ - 08	64	21	1.38 × 0.82 × 0.63	
SK069	土坑	SX008	268DR - 40	61	21	1.14 × - × 1.07	
SK070	土坑	-	268DQ - 49	61	21	0.84 × 0.86 × 1.00	
SK071	土坑	SX010	268DR - 90	63.64	-	0.84 × 0.70 × 0.48	
SK072	土坑	SX008	268DQ - 39	61	21	1.47 × 1.16 × 0.63	ウシ骨
SK073	土坑	-	268DS - 41・51	50.51.68	21.35.45	1.34 × 1.12 × 1.18	遺物はSH008帰属
SK074	土坑	-	267DQ - 67	77	-	0.76 × 0.70 × 0.10	
SK075	土坑	-	267DQ - 76・77	77	24	1.16 × 1.24 × 0.25	
SK076	土坑	-	267DQ - 76	77	24	1.40 × 1.02 × 0.53	
SK077	土坑	-	267DQ - 76	77.83	24	1.70 × 1.68 × 0.27	
SK078	土坑	-	267DQ - 75・76	77	24	1.50 × 1.47 × 0.15	
SK079	土坑	-	267DQ - 65	71	24	0.56 × 0.90 × 0.28	
SK080	土坑	-	267DQ - 54	71.83	24.41.50	- × 2.02 × 0.27	
SK081	土坑	-	267DQ - 64	71.83	24.50	1.08 × 1.00 × 0.54	
SK082	土坑	-	267DQ - 64	71.72	-	0.80 × 0.80 × 0.48	
SK083	土坑	-	267DQ - 73	71	-	0.84 × 0.82 × 0.44	
SK084	土坑	-	267DQ - 53	71	24	1.26 × 0.98 × 0.40	
SK085	土坑	-	267DQ - 74	71.72	-	1.10 × 0.62 × 0.60	
SK086	土坑	-	267DQ - 74	71.72	-	1.04 × 0.70 × 0.60	
SK087	土坑	-	267DQ - 74	71.72	-	0.98 × 0.74 × 0.54	
SK088	土坑	-	267DQ - 62・63	71.72	24	1.10 × 0.86 × 0.41	
SK089	土坑	-	267DQ - 62・63	71.72	-	0.94 × 0.78 × 0.43	
SK090	土坑	-	267DQ - 85	78.79	24	1.20 × 1.04 × 0.17	
SK091A	土坑	SX012	267DQ - 87	78	24	1.16 × - × 0.66	
SK091B	土坑	SX012	267DQ - 87	78.83	24.48	1.14 × 0.84 × 0.54	
SK092	土坑	-	267DQ - 63	71.7283	47	0.78 × 0.72 × 0.33	
SK093	土坑	-	267DQ - 63	71.72	24	0.86 × - × 0.17	
SK094	土坑	-	267DQ - 63	71.72	-	0.78 × 0.48 × 0.47	
SK095	土坑	-	267DQ - 64	71.72	-	1.00 × 0.88 × 0.60	
SK096	土坑	-	267DQ - 86	78.79	24	2.00 × 0.80 × 0.32	
SK097	土坑	SX013	267DQ - 84	74.75	24	1.26 × 1.10 × 0.47	
SK098	土坑	SX013	267DQ - 84	74.75	24	0.98 × 0.88 × 0.51	
SK099	土坑	-	267DQ - 74	71.72	24	- × 0.92 × 0.71	SH015を統合
SK100	土坑	-	267DQ - 84	71.72	24	1.06 × - × 0.54	SH016を統合
SK101	地下式坑	SX013	267DQ - 73・83	42.45.73	14.15.50	271 × 1.85 × 2.25	
SK102	土坑	-	267DQ - 63	71.72	24	- × 0.66 × 0.36	
SK103	土坑	-	267DQ - 54	71.72	-	0.72 × 0.38 × 0.33	
SK104	土坑	-	267DQ - 64	71.72	-	0.82 × 0.62 × 0.52	
SK105	土坑	-	267DQ - 64	71.72	-	1.04 × 0.80 × 0.38	
SK106	土坑	-	267DQ - 74	71.72	-	0.82 × 0.80 × 0.24	
SK107	土坑	SX013	267DQ - 85・95	74.75	-	- × 0.76 × 0.56	

第2表 その他の遺構一覧

遺構名	種類	位置 グリッド	拝図	図版	規模(m) 主軸×横軸×深	備考
SK108	井戸	-	26TDQ - 96	46,47,78	17.48	2.54 × 2.28 × [2.29]
SK109	土坑	-	26TDQ - 73	71,72	24	1.54 × 0.64 × 0.39
SK110	土坑	-	26TDQ - 73・74	71	25	1.50 × 0.60 × 0.18
SK111	土坑	SX013	26TDQ - 84	74	24	0.70 × 0.50 × 0.37
SK112	土坑	-	26TDQ - 86	78	25	- × 0.76 × 0.11
SK113	土坑	SX013	26TDQ - 84	74,83	24	0.64 × 0.60 × 0.33
SK114	井戸	-	26BDQ - 17	46,47,78	17,38,47-50	2.34 × 1.52 × [3.90]
SK115	土坑	SX013	26TDQ - 94・95	74,75	25	1.58 × 1.20 × 0.94
SK116	地下式坑	SX013	26TDQ - 82	43,45,73	15,34,37,48,50	3.22 × 2.62 × 2.30
SK117	地下式坑	SX013	26TDQ - 92	43,45,73	15,37	1.72 × 2.04 × 1.77
SK118	地下式坑	SX013	26BDQ - 02・03	44,45,73	15,16,37,48,50	3.40 × 2.04 × 1.98
SK119	地下式坑	SX013	26BDQ - 12・13	44,45,73	16,37,45	3.28 × 1.39 × 1.33
SK120	井戸	-	26TDQ - 72	46,48,71,72	17,38,47,49,50	1.16 × 1.15 × 3.90
SK121	土坑	SX013	26TDQ - 95	74,75	25	0.88 × - × 0.50
SK122	土坑	SX013	26TDQ - 95	74,75	25	1.62 × - × 0.41
SK123	土坑	SX013	26TDQ - 95	74,75	25	- × - × 0.35
SK124	土坑	SX013	26TDQ - 93	73,75,83	25,41,47	2.76 × 1.32 × 0.69
SK125	土坑	SX013	26TDQ - 94	74,75	25	- × 1.06 × 0.33
SK126	井戸	-	26BDQ - 06	46,78	17	1.50 × 1.28 × [4.30]
SK127	土坑	-	26BDQ - 06	78,79	25	0.88 × - × 0.66
SK128	土坑	-	26BDQ - 06	78,79	25	- × - × 0.55
SK129	土坑	-	26BDQ - 06	78,79	25	0.80 × - × 0.42
SK130	土坑	-	26TDQ - 96	78,79	25	1.52 × - × 0.53
SK131	土坑	-	26BDQ - 07	78,79	25	1.54 × - × 0.81
SK132	土坑	-	26BDQ - 07	78	25	- × - × 0.54
SK133	土坑	-	26BDQ - 07	78	25	- × - × 0.28
SK134	土坑	-	26BDQ - 07	78	25	- × - × 0.51
SK135	土坑	-	26BDQ - 07	78,79	25	1.00 × 0.82 × 0.47
SK136	土坑	-	26TDQ - 97	78	25	0.69 × 0.29 × 0.26
SK137	土坑	-	26BDQ - 07	78,79	26	0.82 × 0.77 × 0.21
SK138	土坑	-	26BDQ - 16・17	78,79	26	1.04 × 0.94 × 0.58
SK139	土坑	-	26BDQ - 17	78,79	26	1.10 × 0.74 × 0.36
SK140	土坑	-	26BDQ - 15	77	26	0.74 × 0.72 × 0.30
SK141	土坑	-	26BDQ - 24	77	26	1.96 × 1.36 × 0.39
SK142	土坑	SX014	26BDQ - 26・36	80	26	1.26 × 0.98 × 0.38
SK143	土坑	SX014	26BDQ - 36	80,83	26,47	1.84 × 1.00 × 0.40
SK144	土坑	-	26BDQ - 06	78,79,83	26,45	- × 1.12 × 0.68
SK145	土坑	-	26BDQ - 23	77	26	1.52 × 1.26 × 0.89
SK146	土坑	-	26BDQ - 23	76	26	1.40 × 1.26 × 0.60
SK147	土坑	SX013	26BDQ - 13	73,75	26	1.22 × 0.96 × 0.64
SK148	土坑	SX013	26BDQ - 05	74,75	26	0.96 × - × 0.24
SK149	土坑	SX013	26BDQ - 05・15	74,75	26	- × 0.94 × 0.51
SK150	土坑	SX013	26BDQ - 15	74,75	26	1.98 × 1.36 × 0.32
SK151	地下式坑	-	26BDQ - 21・22	44,45,76	16,37	2.68 × 1.63 × 2.09

第2表 その他の遺構一覧

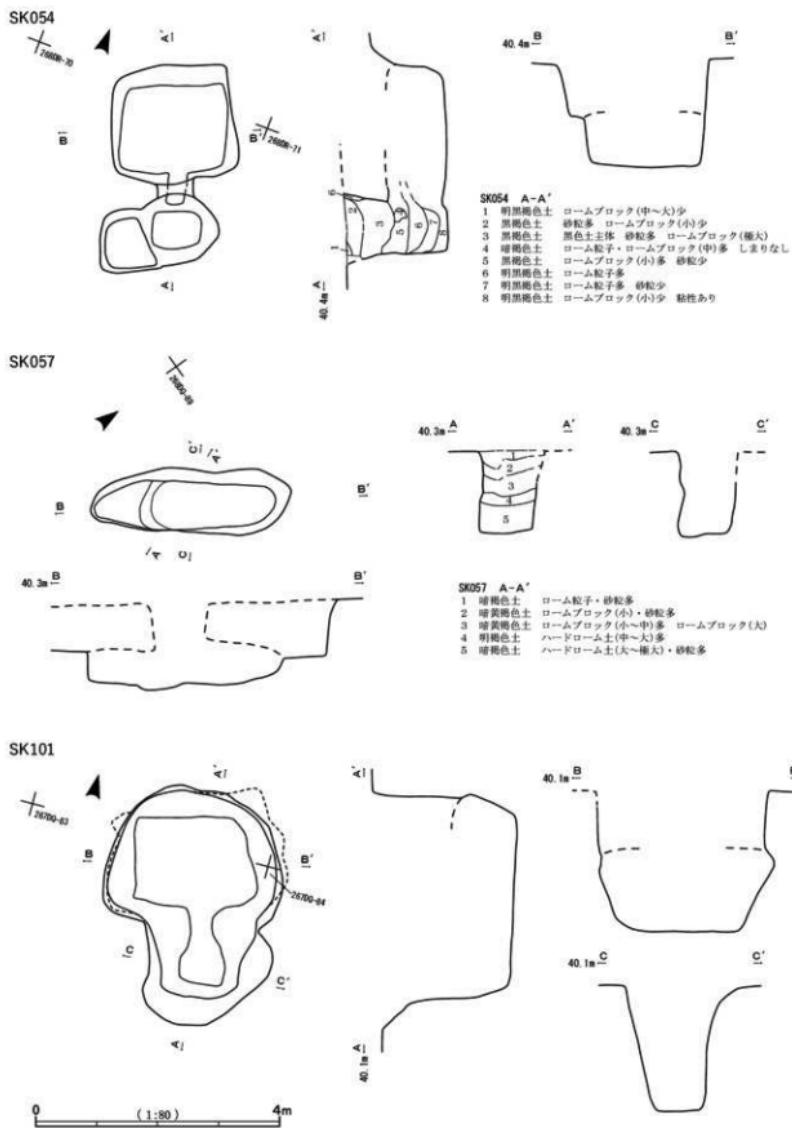
遺構名	種類	位置 グリッド	押図	図版	規模(m)		備考
					主軸	横軸	
SK152	土坑	SX013	267DQ - 94	74.75	-	0.90 × 0.86 × 0.50	
SK153	土坑	SX013	267DQ - 93	73	26	1.70 × 1.34 × 0.29	
SK154	土坑	SX013	267DQ - 92・93	73	26	- × 0.62 × 0.41	
SK155	土坑	SX013	267DQ - 92	73	-	- × - × 0.12	
SK156	土坑	SX013	267DQ - 93	73	26	1.01 × 0.68 × 0.47	
SK157	土坑	SX013	268DQ - 15	74.75.83	27.48	1.28 × 0.96 × 0.69	
SK158	土坑	SX013	268DQ - 15	74.76	27	1.24 × 1.04 × 0.61	
SK159	土坑	SX013	268DQ - 15	74.76.83	27.47	1.26 × 0.76 × 0.66	
SK160	土坑	SX013	268DQ - 15	74.76	27	1.12 × 1.04 × 0.81	
SK161	土坑	-	268DQ - 14・24	77	27	1.08 × 0.76 × 0.43	
SK162	土坑	SX013	268DQ - 04	74.76	27	1.80 × 1.06 × 0.56	
SK163	土坑	SX013	268DQ - 04	74.76	-	1.42 × 0.54 × 0.50	
SK164	土坑	SX013	268DQ - 03	73	-	0.90 × 0.50 × 0.75	
SK165	土坑	SX013	268DQ - 03	73	27	0.94 × 0.32 × 0.54	
SK166	土坑	SX013	268DQ - 03	73	27	1.08 × 0.96 × 0.60	
SK167	土坑	SX013	267DQ - 93	73.76	27	1.08 × 0.98 × 0.53	
SK168	土坑	SX013	267DQ - 03	73.76	-	- × 0.88 × 0.80	
SK169	土坑	SX013	268DQ - 03	73.76	-	1.12 × - × 0.75	
SK170	土坑	SX013	267DQ - 83	73.76	27	0.64 × 0.58 × 0.25	
SK171	土坑	-	268DQ - 22・32	76	27	2.18 × 1.12 × 0.55	
SK172	土坑	SX014	268DQ - 35・36	80	27	1.32 × 1.26 × 0.27	
SK173	土坑	SX014	268DQ - 25	80	27	0.86 × 0.84 × 0.24	
SK174	土坑	-	267DQ - 73	71.72	-	1.32 × 0.88 × 0.51	
SK175	土坑	-	267DQ - 73	71.72	27	- × 0.82 × 0.31	
SK176	土坑	-	267DQ - 73	71.72	-	- × 0.78 × 0.59	
SK177	土坑	-	267DQ - 72	71.72	-	1.30 × 0.80 × 1.08	
SK178	土坑	-	267DQ - 72	71.72	27	- × 1.30 × 1.02	
SK179	土坑	SX013	268DQ - 14・15	74.76.83	27.41	2.02 × 1.08 × 0.33	
SK180	土坑	SX013	268DQ - 02	73	27	1.46 × 0.88 × 0.35	
SK181	土坑	-	268DQ - 16	78.79	27	- × 1.22 × 0.74	
SK182	土坑	SX013	267DQ - 95	74.76	28	1.18 × 0.74 × 0.20	
SK183	土坑	SX013	268DQ - 05	74.76	-	- × 0.50 × 0.50	
SK184	土坑	SX013	268DQ - 05	74.76	-	1.01 × 0.50 × 0.45	
SK185	土坑	SX013	268DQ - 14	74.76	-	1.06 × 1.10 × 0.55	
SK186	土坑	-	268DQ - 35	80.83	41	1.96 × 0.82 × 0.59	
SK187	土坑	-	268DQ - 35・45	80	28	1.42 × 0.94 × 0.33	
SK188	土坑	-	268DQ - 75	81	23.28.41	1.22 × 0.82 × 0.54	
SK189	土坑	-	268DQ - 74	81	23.28	1.52 × 1.24 × 0.32	ウマ骨
SK190	土坑	-	268DQ - 74・84	81	23.28.41	- × 1.02 × 0.75	
SK191	土坑	-	268DQ - 84	81.83	23.28.49	1.16 × 0.98 × 0.96	
SK192	土坑	-	268DQ - 85	81	23.28	1.44 × 1.08 × 0.89	
SK193	土坑	-	268DQ - 85・95	81	23.28	1.20 × 1.04 × 0.65	
SK194	土坑	SX014	268DQ - 36	80	28	1.60 × 0.92 × 0.48	
SK195	土坑	-	268DQ - 84	81	23.28	1.08 × 0.88 × 0.49	

第2表 その他の遺構一覧

遺構名	種類	位置 グリッド	拝図	図版	規模(m) 主軸×横軸×深		備考
SK196	土塙	-	268DQ - 84	81	23.28	1.12 × 1.02 × 1.09	
SK197	井戸	-	268DQ - 06	46,48,78	17.3850	1.82 × 1.82 × 3.60	
SK198	土塙	-	268DQ - 46	80	28	1.72 × - × 0.44	
SK199	土塙	-	268DQ - 45	80	28	1.00 × - × 0.79	
SK200	土塙	-	268DQ - 43	76	28	0.90 × 0.84 × 0.60	
SK201	土塙	-	268DQ - 85	81	23.28	- × 0.82 × 0.35	
SK202	土塙	-	268DQ - 85	81	23.28	0.76 × - × 0.40	
SK203	土塙	-	268DQ - 95	81	23.28	- × 1.10 × 0.97	
SK204	土塙	-	268DQ - 25	77	28	0.89 × 0.84 × 0.32	
SK205	土塙	-	268DR - 43 - 53	60	12	0.81 × 0.80 × 0.16	新規
SK206	土塙	-	268DR - 54	60	12	1.27 × 1.21 × 0.17	新規
SK207	土塙	-	268DR - 53	60	12	1.22 × 1.13 × 0.39	新規
SH001	土塙	SX003	268DR - 76	55	-	- × 0.34 × 0.45	
SH002	土塙	SX003	268DR - 76	55	-	- × 0.50 × 0.41	
SH003	土塙	SX003	268DR - 67	55	-	0.38 × 0.22 × 0.43	
SH004	土塙	-	268DR - 24	59	-	0.86 × 0.75 × 0.52	
SH005	土塙	-	268DR - 23	59	-	0.47 × 0.42 × 0.32	
SH006	土塙	-	268DR - 12	59	21	0.64 × 0.48 × 0.33	
SH007	土塙	-	267DQ - 76	77	-	0.58 × 0.60 × 0.54	
SH008	土塙	-	267DQ - 86	78	-	0.56 × 0.46 × 0.71	
SH009	土塙	-	267DQ - 64	71,72	-	- × - × 0.46	
SH010	土塙	-	267DQ - 64	71,72	-	- × - × 0.70	
SH011	土塙	-	267DQ - 74	71,72	-	- × - × 0.64	
SH012	土塙	-	267DQ - 74	71,72	-	- × - × 0.47	
SH013	土塙	-	267DQ - 76	77	-	0.64 × 0.46 × 0.62	
SH014	土塙	-	267DQ - 63	71,72	-	- × 0.56 × 0.32	
SH015	欠番	-	267DQ - 84	-	-	- × - × -	SK099に統合
SH016	欠番	-	267DQ - 84	-	-	- × - × -	SK100に統合
SH017	土塙	-	267DQ - 74	71,72	-	1.30 × 1.20 × 0.65	
SH018	土塙	-	267DQ - 64	71,72	-	0.40 × 0.44 × 0.43	
SH019	土塙	SX012	267DQ - 87	78	-	0.42 × 0.68 × 0.52	
SH020	土塙	-	267DQ - 86	78	-	- × 0.34 × 0.15	
SH021	土塙	-	267DQ - 86	78	-	- × 0.48 × 0.29	
SH022	土塙	-	267DQ - 96	78	-	0.52 × 0.40 × 0.36	
SH023	土塙	-	267DQ - 95	78	-	0.68 × 0.46 × 0.34	
SH024	土塙	-	267DQ - 85 - 95	78	-	0.62 × 0.54 × 0.29	
SH025	土塙	SX013	267DQ - 94	74,75	-	1.20 × 0.54 × 0.55	
SH026	土塙	SX013	267DQ - 95	74,76	-	- × 0.48 × 0.67	
SH027	土塙	SX013	267DQ - 95	74,76	-	- × 0.52 × 0.52	
SH028	土塙	SX013	267DQ - 95	74,75	-	- × - × 0.49	
SH029	土塙	SX013	267DQ - 95	74,75	-	0.52 × - × 0.20	
SH030	土塙	-	267DQ - 96	78,79	-	1.30 × - × 0.71	
SH031	土塙	-	268DQ - 07	78,79	-	0.78 × - × 0.35	
SH032	土塙	-	268DQ - 07	78,79	-	1.06 × - × 0.60	

第2表 その他の遺構一覧

遺構名	種類	位置 グリッド	押図	図版	規模(m)		備考
					主軸	横軸	
SH033	土坑	-	268DQ - 07	78.79	-	0.52 × 0.80 × 0.44	
SH034	土坑	-	267DQ - 97	78.79	-	- × - × 0.32	
SH035	土坑	-	267DQ - 97	78.79	-	- × - × 0.45	
SH036	土坑	-	268DQ - 07	78.79	-	- × - × 0.42	
SH037	土坑	-	268DQ - 07	78.79	-	- × - × 0.44	
SH038	土坑	-	267DQ - 97	78	-	0.86 × 0.43 × 0.24	
SH039	土坑	-	267DQ - 97	78	-	0.69 × - × 0.26	
SH040	土坑	-	267DQ - 97	78.79	-	- × - × 0.33	
SH041	土坑	-	268DQ - 07	78	-	0.45 × 0.41 × 0.27	
SH042	土坑	-	268DQ - 07	78.79	-	0.36 × 0.34 × 0.19	
SH043	土坑	-	268DQ - 17	78.79	-	- × 0.86 × 0.30	
SH044	土坑	SX013	268DQ - 15	74.75.83	47	0.79 × 0.54 × 0.24	
SH045	土坑	SX013	267DQ - 93	73	-	0.84 × 0.52 × 0.41	
SH046	土坑	SX013	267DQ - 93	73	-	0.72 × 0.36 × 0.42	
SH047	土坑	SX013	267DQ - 92・93	73	-	0.46 × 0.44 × 0.21	
SH048	土坑	SX013	267DQ - 92	73	-	- × - × 0.70	
SH049	土坑	SX013	268DQ - 04・05	74.76	-	1.52 × 0.66 × 0.77	
SH050	土坑	SX013	268DQ - 04・05	74.76.83	41	1.72 × 0.74 × 0.68	
SH051	土坑	SX013	268DQ - 04	74.76	-	0.96 × 0.64 × 0.36	
SH052	土坑	SX013	268DQ - 03	73.76	-	1.30 × 0.64 × 0.36	
SH053	土坑	SX013	268DQ - 13	73.76	-	0.50 × 0.52 × 0.33	
SH054	土坑	SX013	268DQ - 04	73	-	0.48 × 0.30 × 0.16	
SH055	土坑	SX013	268DQ - 12・13	73.76	-	0.98 × 0.56 × 0.27	
SH056	土坑	SX013	268DQ - 12	73.76	-	0.68 × 0.32 × 0.26	
SH057	土坑	-	268DQ - 22	76	-	0.98 × 0.70 × 0.42	
SH058	土坑	SX014	268DQ - 25	80	-	0.80 × 0.62 × 0.24	
SH059	土坑	SX014	268DQ - 35	80	-	- × 0.58 × 0.46	
SH060	土坑	SX014	268DQ - 36	80	-	- × 0.40 × 0.34	
SH061	土坑	-	267DQ - 83	73	-	0.80 × 0.62 × 0.66	
SH062	土坑	-	267DQ - 72	71	-	1.34 × - × 0.71	
SH063	土坑	-	267DQ - 72	71	-	0.66 × 0.38 × 0.39	
SH064	土坑	-	268DQ - 06	78.79	-	0.76 × 0.37 × 0.42	
SH065	土坑	-	268DQ - 06	78.79	-	0.43 × 0.29 × 0.23	
SH066	土坑	-	268DQ - 06	78	-	0.74 × 0.68 × 0.61	
SH067	土坑	SX013	267DQ - 95	74.75	-	0.72 × 0.46 × 0.31	
SH068	土坑	SX013	267DQ - 95	74	-	0.72 × 0.46 × 0.46	
SH069	土坑	-	268DQ - 34	77	-	0.74 × 0.44 × 0.37	
SH070	土坑	-	268DQ - 34	77	-	0.78 × 0.56 × 0.40	
SH071	土坑	-	268DQ - 06	78	-	- × 0.31 × 0.24	
SH072	土坑	-	268DQ - 06	78	-	- × 0.50 × 0.29	
SH073	土坑	-	268DQ - 06	78.79	-	0.39 × 0.34 × 0.26	
SH074	土坑	-	268DQ - 06	78.79	-	0.70 × 0.34 × 0.29	



第42図 地下式坑 (1)

SK117（第43・45・73図、図版15・37）

SK116の南側に位置する。SX013の西縁辺部にあたる。横長方形の地下室のみ確認できた。地下室底面の規模は1.72m×2.04m、確認面からの深さは1.77mである。地下室奥壁の上部を掘り込んでいる。堅坑は東側に存在したとみられ、地下室底面は、堅坑もしくは通路より一段下がっていたと推定される。

地下室は天井部が崩落しており、覆土はロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を主体としていた。

出土した遺物は僅かで、土器1点を図示した。

1は内耳土器底部の破片資料である。底部と体部の境に明瞭な稜線をもつ。底部外面を除く器表面の内外面が煤けた色合いを見せており。胎土中に金雲母微粒を多く含む。

SK118（第44・45・73図、図版15・16・37・48・50）

西調査区西部に構築される。SX013の西縁辺部にあたり、軸は南西を向き、堅坑は北東側に開口している。堅坑と地下室を通路でつながっているが、それぞれの主軸は直線でつながる訳ではなく僅かにずれている。底面の平面形はいずれも方形である。堅坑から地下室までの主軸の長さは3.40m、地下室底面の幅は2.04m、堅坑底面の幅は1.06m、通路幅は0.60mである。通路の天井部が遺存しており、通路の底面から天井までの高さは0.90mで、入口部はドーム形である。地下室底面は通路から一段下がっており、地下室の深さは確認面から1.98mである。地下室、堅坑とも壁は垂直に近い角度で立ち上がる。

地下室の覆土はローム粒子、ロームブロックを含む暗褐色土、黒褐色土が主体で、中層に天井部崩落土かと考えられるロームブロックを含む黄褐色土が落ち込むように堆積する。

出土遺物は少なく、土器と銭貨各1点を呈示した。図示しなかったが石塔片も出土している。

1は低いケズリ出し高台をもつ白磁の小皿である。内外面ともに底部を除き白色の釉薬がかかり、部分的に細かい貫入が見られる。底部内面には重ね焼き痕が見える。

2は銭貨で、「熙寧元寶」である。一部欠損している。

SK119（第44・45・73図、図版16・37・45）

地下式坑SK118の南に位置する。近接するほかの4基は開口部をSX013の中心部に向けていたが、本跡は北西に向け、開口部は南東にある。底面が綾長方形の地下室に、開口部、底面ともに平面形が不整形な堅坑が通路でつながっている。主軸全体の長さは底面で3.28m、地下室底面の幅は1.39m、堅坑底面の幅は0.94m、通路底面幅は0.28mである。地下室天井部は崩落していたが、通路の天井部は遺存しており、地下室入口の形状はドーム形だったことがわかる。高さは0.73mである。通路は堅坑底面より一段低く、地下室は通路からさらに一段下がっている。堅坑の確認面からの深さは1.08m、地下室の深さは1.33mである。

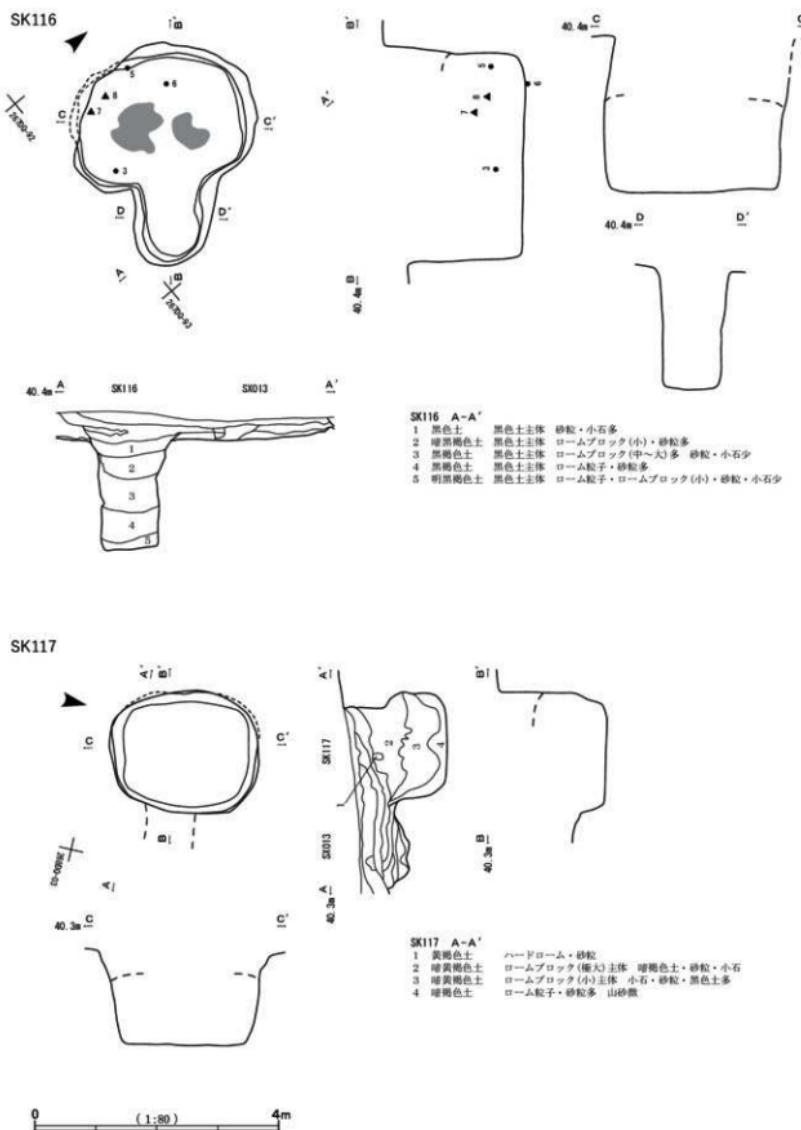
地下室には天井部崩落土であるロームブロックを多量に含む暗黄褐色土、黄褐色土が堆積し、その上層に黒色土、黒褐色土が堆積する。

出土遺物は多くない。3点の遺物を図示した。

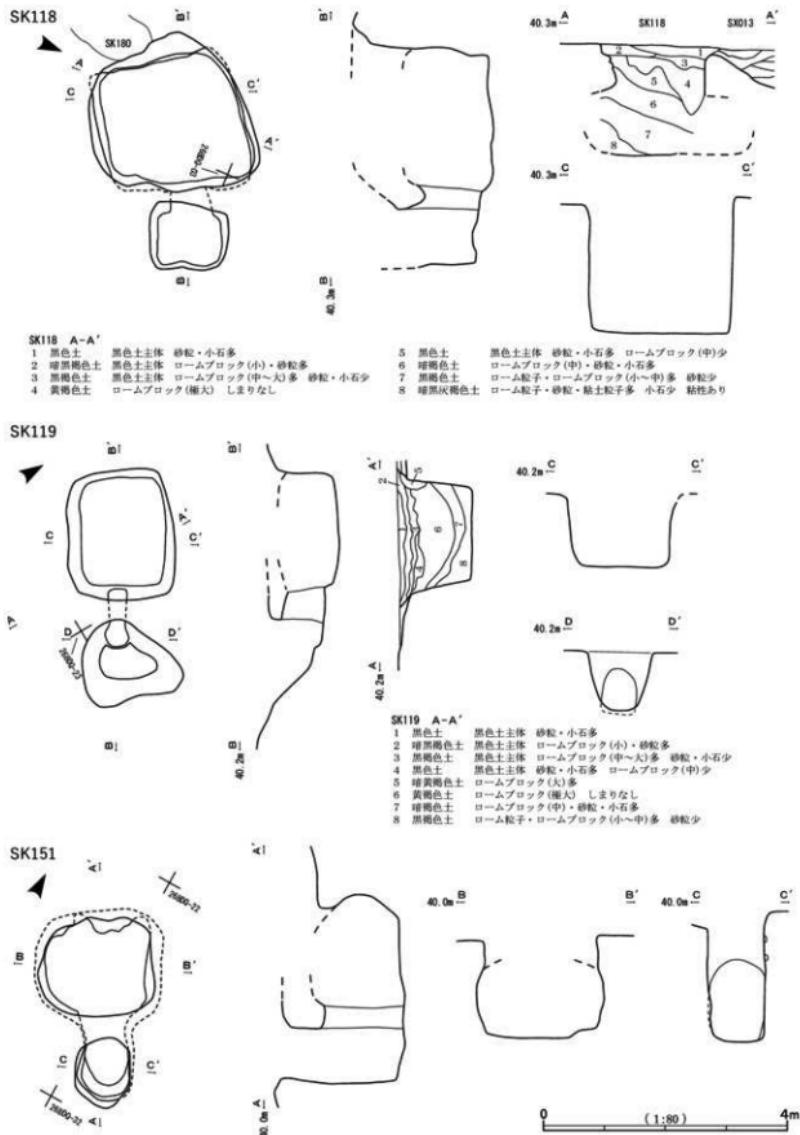
1はロクロ土器器杯である。底部は僅かに残っているだけであるが回転糸切り後無調整、それ以外の部分はすべてロクロナデで調整されている。

2は内耳土器の破片資料で、胎土中に金雲母微粒を多く含む。

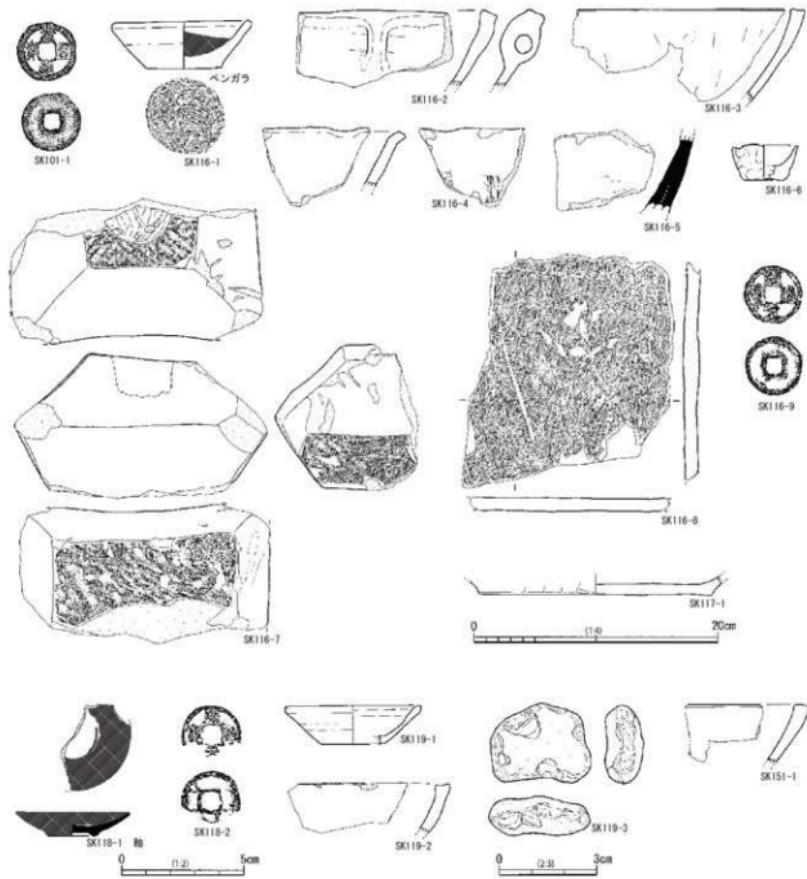
3は燧石で白色半透明の扁平な玉韁繆が素材である。縁辺は全周くまなく敲打され、不透明な潰れ痕が廻る。また、潰れ痕の外縁部に赤褐色の付着物が所々観察される。



第43図 地下式坑 (2)



第44図 地下式坑(3)



第45図 地下式坑出土遺物

SK151 (第44・45・76図、図版16・37)

西調査区の西側中央部に位置する。堅坑と地下室が通路でつながる形状で、堅坑と地下室をつなぐ主軸は南北からやや西に傾き、堅坑は南東に開口する。楕円形の堅坑底面と通路の境は明瞭ではない。堅坑から地下室までの底面はほぼ平坦で、主軸長は2.68m、横長方形の地下室底面の幅は1.63mである。地下室の壁は三方の中位を横に掘り込んでいる。堅坑から通路の入口部の形状はSK119と同じようにドーム形であった。通路底面の幅は0.68m、天井部までの高さは1.28mである。堅坑開口部の平面形は楕円で、底面までは円筒状に掘られ、底面の幅は0.62mである。壁の途中に足掛けの窪みが確認できた。堅坑側の確

認面の標高が高く、ここからの深さは2.09mである。

出土遺物は僅かで、図示できた遺物は1点であった。

1は内耳土器の破片資料である。外面は全体に焼けたような色合いの瓦質の仕上げになっている。胎土中に金雲母微粒を含む。

2 井戸

井戸5基はいずれも西調査区に所在する。1基(SK120)はSX013の北に位置し、残りの4基(SK108、SK126、SK197、SK114)はSX012～SX014の間の土坑が密集しているところに位置する。SK108、SK126、SK197は0.7m～1.0mの間を空けて南北に並び、SK197から東4.8mのところにSK114が位置している。

危険回避のため、底面まで調査できなかったものもあるが、いずれも深さ2m以上で、開口部が僅かに開くものの、円筒状に掘り下げられている。

SK108 (第46・47・78図、図版17・48)

SX012、SX013の間に位置する。開口部の周囲を隅丸方形に一段浅く掘り込み(2.54m×2.28m×0.20m)、開口部以下はほぼ同じ径で、円筒状に掘り下げている(開口部1.10m×1.08m)。5基のうち唯一、井戸枠などの外部施設の存在をうかがわせるものである。壁には足場状の窪みがある。深さは2.29mまで確認した。

土層断面は1.20mまで計測した。黒色土が主体で下層にはローム粒子、ロームブロックを含み、水平に堆積していた。

出土遺物は多くないが、そのうち石塔の破片1点を図示することができた。五輪塔水輪下部の一部である。砂岩製で、内側を削り貫いており、この部分と外面立ち上がりにノミによる加工痕跡がある。被熱し、煤が付着している。

SK114 (第46・47・78図、図版17・38・47～50)

SX012の南、西調査区の東側中央部に位置する。西側は有段となっており(深さ0.46m)、それより下の平面は円形で、ほぼ同じ径で円筒状に掘り下げている。開口部は1.60m×1.52mである。深さ3.90mまで確認したが、底面はさらに下で確認できていない。

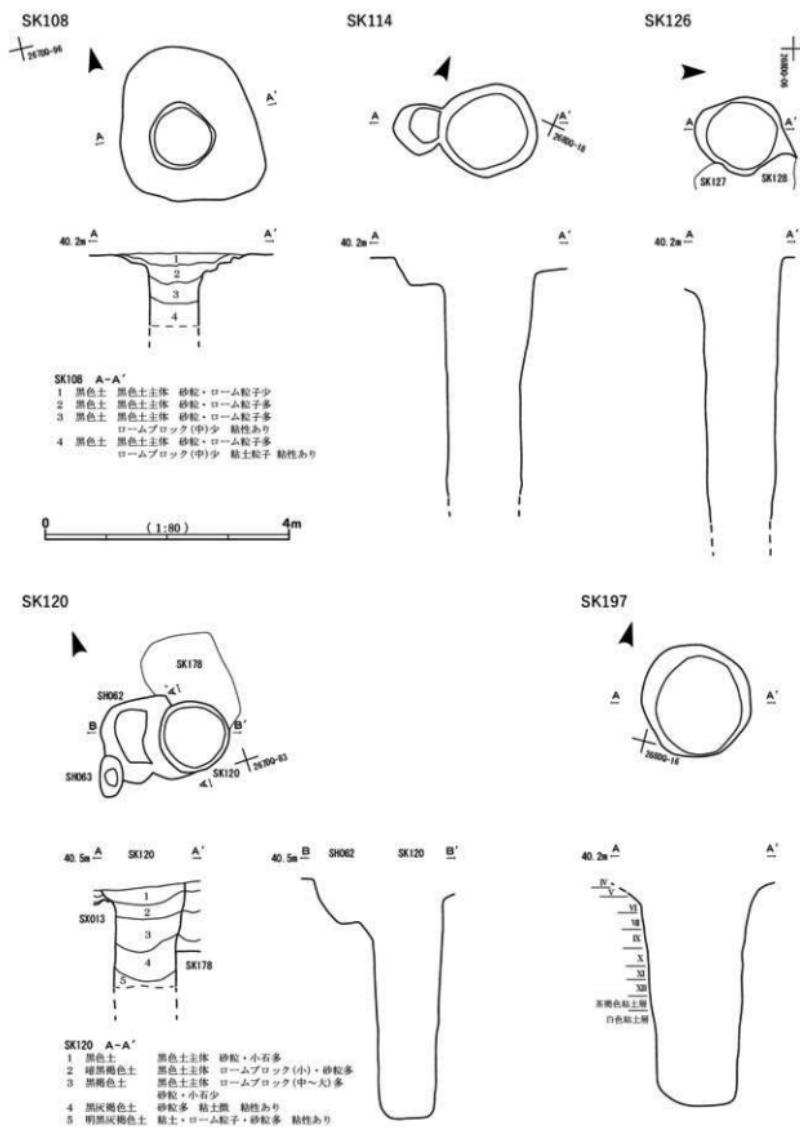
出土遺物は多く、種類も豊富であった。土器以外に石塔、板碑、金属製品を図示した。

このほかに遺存状態が悪く図示できなかったが、覆土中から炭化物とともに赤漆塗製品の微小塗膜片などが採取されている。

1はカワラケである。底部は回転糸切り後無調整で、それ以外はロクロナデである。

2は銅鏡に用いられたと考えられる小型の坩堝である。内外面すべてにガラス状の付着物があり、緑青とみられる緑色の鏡も数か所に見られる。亀裂が入った後も使用されたらしく、破断面の一部にもガラス質の付着物が見える。遺構外出土遺物が接合している。

3、4は東海産の須恵器甕で、それぞれ別個体と考えられる。3は頭部のくびれを挟んだ部分の破片資料である。外面頭部は上部に波状文、それ以下は胴部にかけて斜め方向の平行タタキ、内面は胴部から頭部が指頭痕、頭部がロクロナデで調整されている。4は胴部破片資料で、外面は斜め方向の平行タタキ、内面は外面のタタキに用いたのと同じ道具かと思われるもので横方向にハケ目を入れて、当て具痕を消している。



第46図 井戸

図示していないが、これ以外にも近世陶磁器の破片を出土し、SX013出土遺物と接合したものがある。土器以外に石塔3点、板碑1点を図示した。

5～7は石塔の一部である。5は砂岩製で、四角柱を呈し、側面に溝を巡らせている。6は五輪塔空輪の一部で安山岩製である。7は五輪塔水輪の一部で、側面の一部が残っている。砂岩を素材とする。8は緑泥片岩の板碑の破片で、右側縁の一部が遺存する。

砥石は3点を図示した。いずれも白色流紋岩質凝灰岩製である。9は四角柱状だが正面下半部の面が最終的な機能面であり、なだらかに弱く窪む。下端折面の稜は摩耗している。剥離面を修復しようとしたもののか、あるいはざらつく面の作出が目的とみられる。一部を除き黒く変色している。10は正面上下に方向の異なる切出痕が見られるが、砥石としての機能面は遺存しない。右中央部から加えられた衝撃により器面が剥落したものとみられる。11は角柱状を呈し上下とも欠損する。上下の折面を除いた4面は平坦だが正面は特に滑らかで斜方向の擦痕が観察される。右側面に直線状のごく浅い切出痕が残る。鉄錠と思われる赤味のある茶褐色の斑の範囲を図示した。

金属製品は鉄釘4点と環状の青銅製品1点を図示した。12～15は鉄釘で、14、15には木質が遺存していた。14は板状に伸ばした頭部を3方向に折り曲げて、頭部上面は長方形を呈している。16の青銅製品は薄い板状の製品を環状にして丸めたもので、別素材のものに被せられていたとみられる。

SK120（第46・48・71・72図、図版17・38・47・49・50）

西調査区の北西、SX013の北に位置する。土層の断面観察で、北側の方形土坑SK178、南に広がるSX013より後に掘っていることがわかる。SK178以外に西側にSH062が重複している。周辺造構の調査終了後、周囲を掘り広げて底面まで確認した。平面は円形（1.16m×1.15m）で、ほぼ同じ径で円筒状に掘り下げている。西側の確認面から底面までの深さは3.90mである。

覆土はSK108同様に黒色土を主体とし、下層にはロームブロックやローム粒子、また炭化物なども含んでいた。

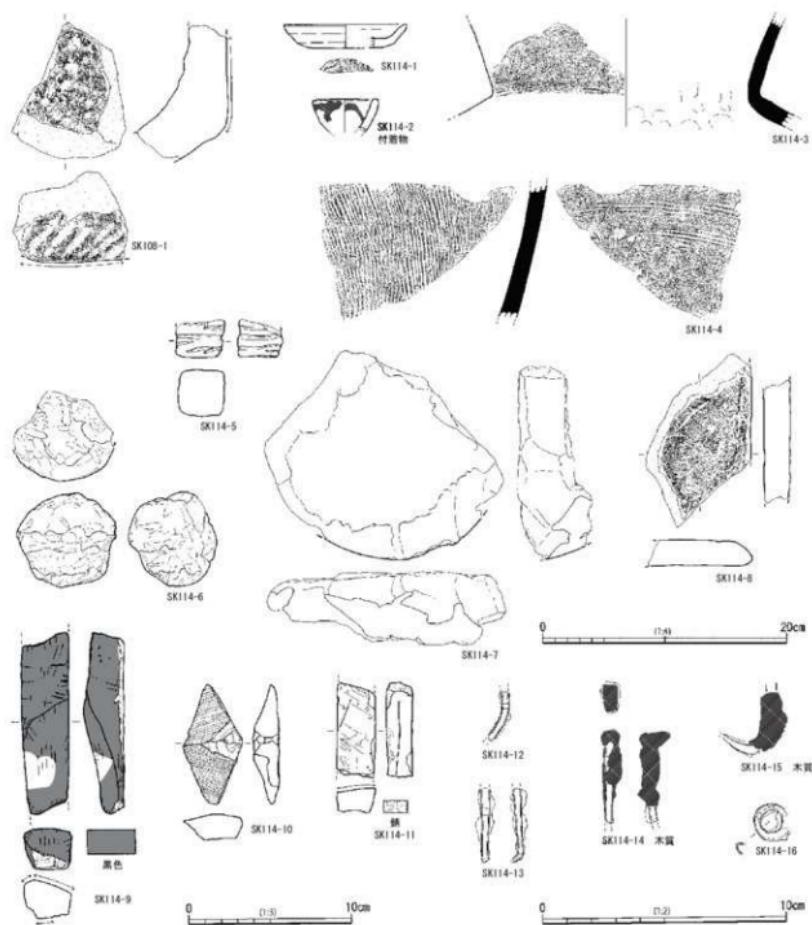
出土遺物は多く、種類も豊富であった。土器類、石臼、砥石などのほか金貨を含む金属製品を出土している。

1～4は土器類である。1はカワラケである。底部外面は回転糸切り後無調整で、それ以外の部分はすべてロクロ調整のみである。2、3は瀬戸・美濃の天目茶碗である。2には厚手の濃い色合いの天目釉がかかっており、口縁端部のみ薄手の茶色い銀錆釉である。3は口縁部の小片で、釉の色合いは2に比べかなり薄い茶色である。4は焰烙の破片資料である。口縁部外面から内面全体はロクロ調整で、底部外面は被熱による器面の荒れの可能性もあるが調整痕跡は見えない。肌理の細かい胎土で金雲母微粒を含む。

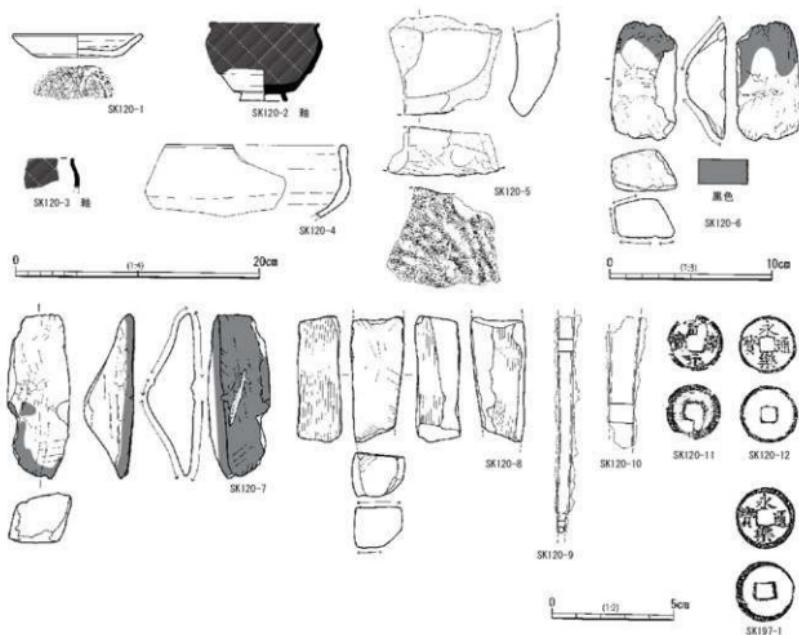
5は砂岩製石臼の破片である。下白の一部であろう。外面にノミ加工痕がある。

砥石は3点を図示した。いずれも白色流紋岩質凝灰岩製である。6の正面觀は長方形で縦断面は山形を呈する。正・裏面は滑らかな光沢と煤状の黒色付着物が見られる。裏面に斜めに付けられた工具痕（刃物傷か）は黒色部分を切っている。7も正面觀は長方形で縦断面は山形を呈する。作業面は正面の上・下部と裏面である。上下の縁辺は特に摩耗が著しく、直線状の刃部の様相である。上部は黒く変色している。8は上下が折れ、正面を除く3面に切出痕が見られる。正面は全面擦られて平坦になっており、裏面も3/5ほどが滑らかな作業面である。

棒状の鉄製品2点を図示した。9は鉄錠または工具、10は大型の釘とみられる。



第471図 井戸出土遺物 (1)



第48図 井戸出土遺物（2）

銭貨は2点出土した。11は遺存状態が悪く一部判読不能であるが「□元通寶」と読める。12は「永楽通寶」である。

SK126（第46・78図、図版17）

SK108、SK197の2基の井戸の中間に位置する。東側はSX012南側の連結した土坑群に接する（SK127、SK128など）。円形の開口部（1.50m×1.28m）からほぼ同じ径で円筒状に掘り下げている。南側の確認面は下がっているが、北側の確認面からは4m以上の深さがある。周辺の造構の調査終了後、周囲を掘り下げて調査したが、底面は確認できていない。壁に足場状の窪みが見られる。

出土遺物は僅かで、呈示できる遺物はなかった。

SK197（第46・48・78図、図版17・38・50）

西調査区のSX012とSX013の間に位置する。SK108、SK126が北側に並び、西側にSK114が位置している。円形の開口部（1.82m×1.82m）から円筒状に掘り下げている。周囲を掘り下げて、井戸を半載し、底面まで確認した。確認面からの深さは3.60mである。

出土遺物はほとんどなく、「永楽通寶」1点を呈示した。

3 東調査区土坑群（第49図）

東調査区で確認した竪穴建物跡以外の遺構は、台地整形区画10か所、溝状遺構1条、道路状遺構1条、竪穴状遺構1基、地下式坑2基、土坑80基である。

台地整形区画は溝状のものが多く、主軸が南北または東西で、これらを組み合わせて区画としていた可能性も考えられる。土坑は区画内または周辺に所在し、分布は西調査区に比べると散漫で、建物跡のような遺構の存在は確認できない。

東調査区は竪穴建物跡が多数確認された地区で、これらから混入した遺物が多く、遺構の時期を確定できる遺物はほとんどない。

SD001、SK005・SK011・SK022・SK023・SK073

（第50・51・67・68図、図版6・20・21・34～36・39・45・47）

東調査区の最も東側に位置する遺構群で、溝状遺構としたSD001の周辺に土坑が散在している。竪穴建物跡も密集していた。

SD001は東調査区の東端を南北に走る溝状遺構である。北端は調査区内で緩やかに立ち上がり、南側は調査区外へ続いている。幅1.14m、深さ0.27mである。竪穴建物跡の覆土中に構築している部分が多いため、立ち上がりを確認できなかったところもあるが、竪穴建物跡それぞれの土層断面で、本跡が覆土中につくられていることが確認できている。

遺物は土師器類の破片を中心に多数出土しているが、その多くは、重複する竪穴建物跡に帰属するものである。

1～3はロクロ土師器杯の口縁部の破片資料で、3点とも体部外面に墨書が記されているが、いずれも小片のため訛読は不能である。1は口縁部付近の小片で、正位で墨書が記されている。2はあまりにも小破片であるために、体部の外面であることがわかる程度で、正位か否かはわからない。3は正位で2文字記されている可能性が高い。

4は湖西産須恵器甕の胴部破片資料である。外面は斜め方向の平行タタキ、内面は横方向のナデ調整である。破片の上辺の破断面は砥石として転用されており、きれいに摩耗している。

5は白色流紋岩質凝灰岩製の砥石で下部は欠損する。上部は細くなっているが全体的には角柱状で、断面はほぼ正方形である。正面以外、全面が煤のような墨色である。正面の作業面はやや窪んでおり、この煤状のものが擦り去られた痕かと思われる。

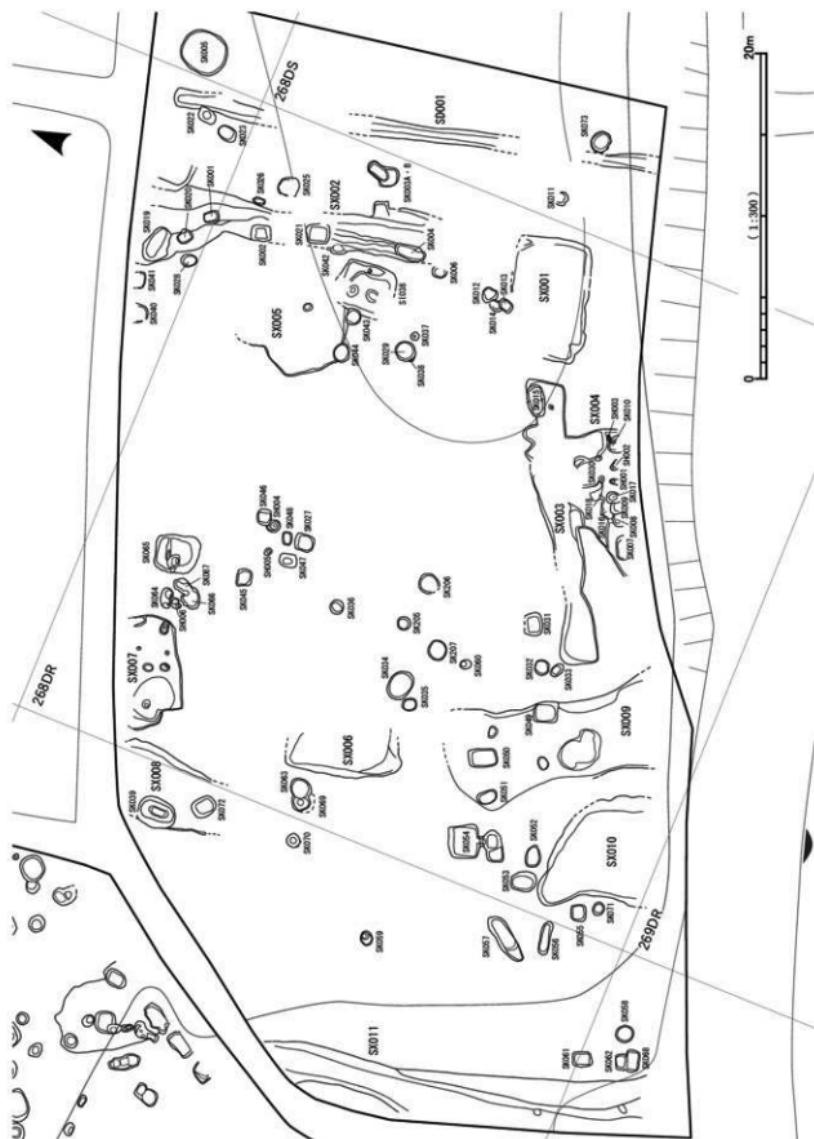
SK005は東調査区の北東隅、SD001の東側に位置する。SI009の中央を壊して構築している大型円形土坑（2.88m×2.59m×0.77m）で、円筒状に掘り込まれている。

大型で深さがあるため多数の遺物が出土しているが、時期の異なる一括資料である。

1は新治産須恵器杯蓋のつまみ部分の剥離資料である。つまみと蓋本体の接合を強めるために蓋本体の上端にあった渦巻き状の刻みが、つまみの剥離面に反転陽刻のかたちで残っている。

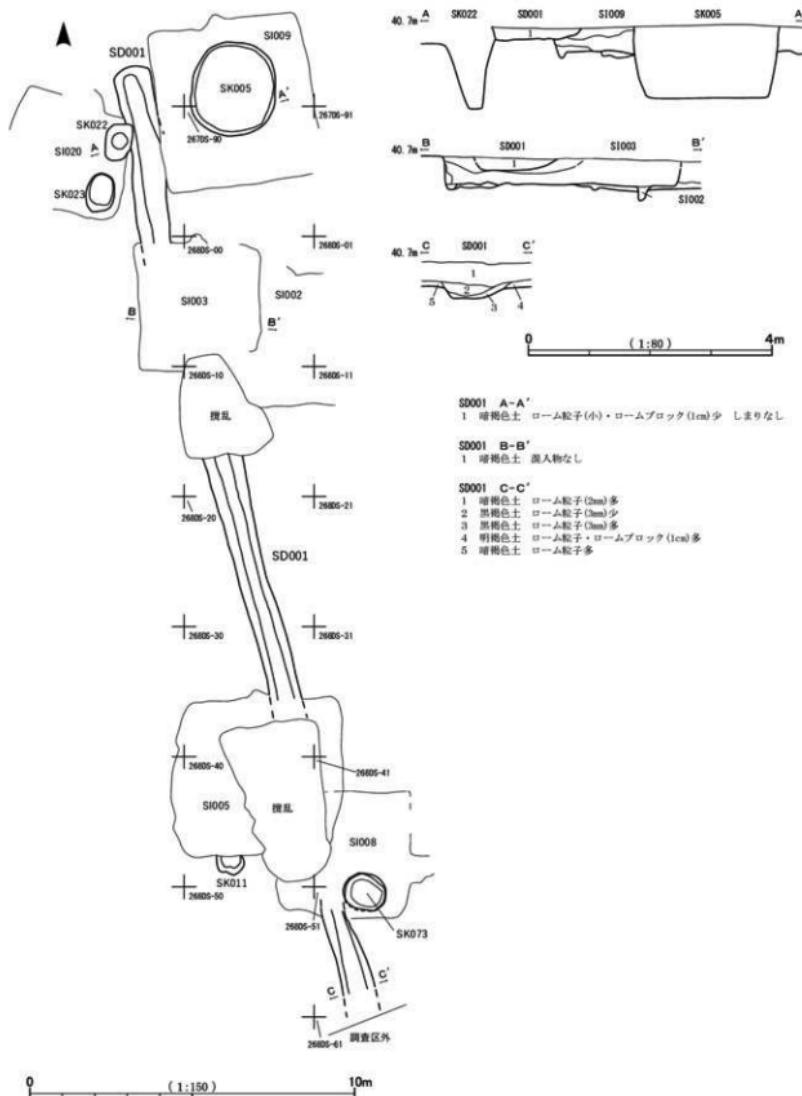
2はロクロ土師器杯の底部片である。体部外面下端から底部を持ちヘラケズリで調整している。3はロクロ土師器高台付杯の底部付近の資料で、高台部はきれいに剥離している。器表面の内外面に白土様のものが薄く一層塗られている。4はロクロ土師器杯で口縁部外面に墨書が見えるが、小破片資料のため訛読不能である。

5は東海産須恵器甕の胴部破片である。外面は斜め方向の平行タタキで、内面は当て具痕をナデ消して



第49図 東調査区土坑群分布図

SD001



第50図 東調査区土坑群 (1)

いる。かなりきれいにナデ消しされているが、辛うじて同心円文であったことが読み取れる。図の左上部分の破断面は砥石として転用されて摩耗している。

SK022はSI020の西壁際につくられた長方形土坑（1.10m×0.80m×1.06m）である。東側はSD001と重複する。底面から0.20m～0.30m上に焼土が堆積していた。出土した僅かな遺物のうち図示できたのは1点で、下総地域産須恵器壺の胴部破片資料である。外面は縦方向の平行タタキで、内面は當て具痕をナデ消している。

SK023はSK022の南に同じ長軸方向でつくられた長方形土坑（1.18m×0.88m×1.07m）である。SK022と同様にSI020を壊し、SI020の床面からの深さはSK022とほぼ同じである。出土遺物は多くはないが、遺存のよいものを含み、本来はSI020に帰属するものと考えられる。

1～3はロクロ土師器杯である。1は口径、器高に比して底径が極端に小さく、杯というよりは椀と呼ぶべき器形である。底部外面は中央に向かってやや窪んでいる。黒色処理で内面全体に丁寧なミガキが施され、外面もかなり黒ずんでおり、硬質な焼き上がりである。2は外面口縁部に正位で「旭カ」と墨書きされている。口唇部は内面向かって弱く膨らんでいる。外面の口縁部の腰のところに大きな屈曲があり、底部は下方に向かって弱く突き出している。3は底部を欠失しており、体部上位は外面ともに器面が摩耗している。

SK011はSI005の南壁外に接して確認された深さ0.13mの浅い円形土坑で、遺存部分の径は0.85mである。遺物は僅かで、覆土中から出土した1点を図示した。ロクロ土師器杯である。底径が小さく、腰の部分に丸味をもつ器形である。外面の腰部から底部外縁には、ヘラの角が当たったような細い刻みが多数残っている。

SK073は調査区南東隅に位置する。SI008を壊してつくられる楕円形土坑（1.34m×1.12m×1.18m）である。壁がほぼ垂直に立ち上がる円筒状の掘り込みで、南壁の中位は僅かに横に掘り込まれている。覆土中に焼土やカマド構築材が含まれ、中層以下はSI008の覆土で埋め戻したものである。

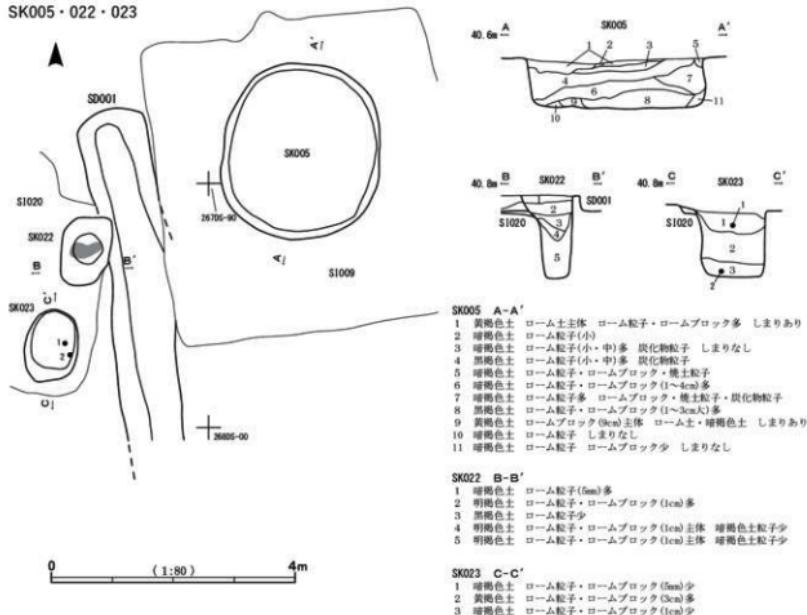
遺物は多数出土した。1、2はロクロ土師器杯である。1は小さな底部に体部が丸味を帯びて立ち上がる浅い器形で、体部外面に正位縦書きで「四万」と墨書が記されている。底部外面は回転糸切り後無調整で、それ以外の部分はロクロナデである。2は底部を欠失している。体部外面に正位で「子」と墨書されているほかに、この文字にかかるように「×」の線刻が浅く刻まれている。

3～5は土師器壺である。3は4を一回り小さくしたような相似形の形態の壺である。4は胴部中位以上の破片資料で、口縁部は外に開いた後に口唇部を上方に摘み上げ、受け口状になっている。器面は内外面ともにかなり劣化が進んでおり、被熱または露出によるものと考えられる。5は残存部分が少ないため反転復元ができないが、口縁部は直立気味に立ち上がった後に口唇部が僅かに内彎する受け口状の形態である。外面に縦長の黒斑がある。口縁部は外面横ナデ、胴部外面は下位が横方向、上位が縦方向のヘラケズリで、内面は小口を用いたヘラナデで細かい筋目が付いている。

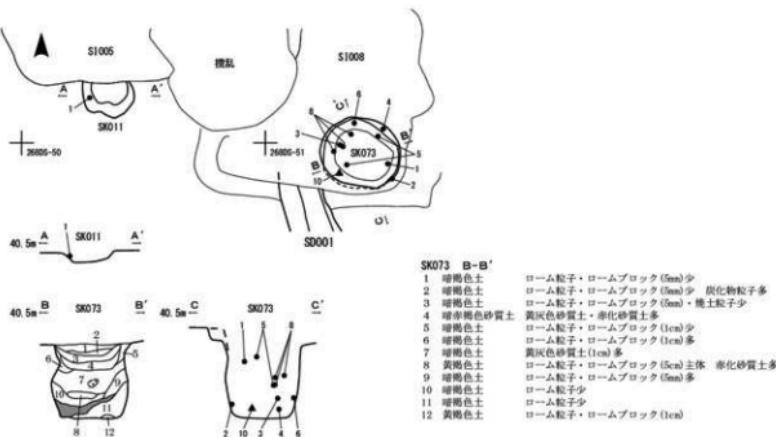
6、7は猿投産の灰釉陶器長頸瓶の肩から胴部にかけての破片資料である。同一個体の可能性が高いが、両破片には接点がない。6の肩部外面には全体に濃い灰釉がかかっており、7の胴部下半は外面に灰釉が流れるように薄く筋状にかかっている。外面の胴部下半は横方向の回転ヘラケズリで、それ以外はすべてロクロナデ調整である。

8は下総地域産の須恵器壺である。口縁部に最大径を有し、底部に向かって大きく窄む鉢と呼んでもよ

SK005・022・023



SK011・073



第51図 東調査区土坑群 (2)

い器形である。口縁部は短く外反した後に上方に摘み上げて受け口状に成形されている。調整は、口縁部は内外面ロクロナデ、胴部は外面の上半部が斜め方向の平行タタキ、下半部が横方向のヘラケズリ、内面は当て具痕を横ナデで消しており、底部は外面がヘラケズリ、内面はナデである。外面は全体に黒ずんでいる。

土器のほかに紡錘車輪2点を出土した。9は1/2を欠損しているが、内面を黒色処理した土師器高台杯の底部を転用したものである。高台と周縁部を磨り、整形している。10は滑石製品で、上面径と下面径の差があまりない形態である。

SK073は、SI008の覆土を用いて人為的に埋め戻しており、両遺構から「四万」の墨書をもつ土器が出土している。SK073出土の遺物は、SI008に帰属する遺物であったとするのが妥当であると考える。

SX001、SK012～SK014（第52・66図、図版18・20・34）

SX001は東調査区南東に位置する東西方向に横長の方形区画（7.72m×4.76m×0.34m）である。西15mのところにSX003がある。北西を擾乱により大きく壊され、北東のSI007とSI012の覆土中に重複して構築しているため北壁の立ち上がりは一部しか確認できない。北西に土坑SK012～SK014の3基が所在するが区画内に重複する土坑はない。壁の立ち上がりは緩やかで、床硬化面などは確認できなかった。覆土は暗褐色土で、下層ほどローム粒子、ロームブロックが多くなる。

SX001からは遺物が多数出土しているが、図示できたのは2点である。いずれも覆土中の出土で遺存状態も悪く、本跡に伴うか確定できない。1はロクロ土師器杯である。回転糸切りの後に、体部外面下端から底部周縁に手持ちヘラケズリを施している。それ以外の部分はロクロナデ調整である。2は土師器壺の胴部上位から口縁部にかけての破片資料である。口縁端部は上方に摘み上げられて、受け口状の形態である。口縁部は内外面ともに横ナデ、胴部は外面が縦方向のヘラケズリ、内面が横方向のヘラナデ調整である。

SK012～SK014はSX001の北側に位置する土坑である。3基とも出土遺物は僅かで図示できるものはなかった。

SK012は不整形な浅い土坑（深さ0.24m）で、SK013、SK014と隣接してつくられており、SI013の南東隅を壊している。暗褐色土が水平に堆積する覆土で、ローム粒子やロームブロックの割合が下層ほど多くなる。

SK013はSK014と隣接してつくられる方形土坑（0.88m×0.68m×0.30m）である。底面は平坦で断面形は逆台形である。SK014の南東隅と重複するが、新旧関係は不明である。

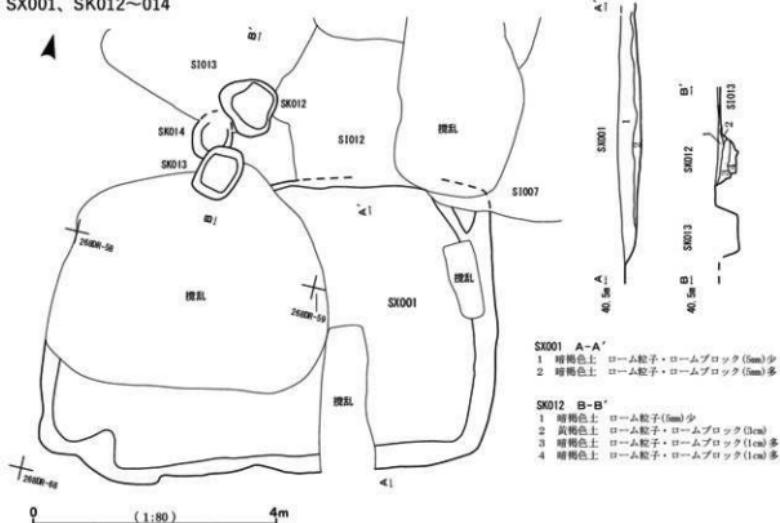
SK014も浅い土坑（深さ0.14m）で、SK012、SK013の間、SI013の南東隅覆土中につくられ、北側の立ち上がりを確認できない。

SX002、SK001～SK004・SK006・SK019～SK021・SK025・SK026・SK028・SK040～SK042

（第53・54・66・67図、図版18・20・34・36・39・49～51）

SX002は東調査区東寄りに所在する南北にのびる溝状の台地整形区画で、東に位置するSD001と平行する。北側は調査区外にのび、南側にはSX001が所在して南北の立ち上がりは確認できない。本跡より深く掘り込まれる竪穴建物跡により部分的に壁を確認できていないが、土層断面によりこれらより後につくられていることは明らかである。壁の立ち上がりは緩やかで、幅は2m～4m、深さは0.13m～0.24mで一定しない。掘り直しによるものか、ところにより2条が切り合っている。区画内にSK001、SK002、

SX001、SK012~014



第52図 東調査区土坑群（3）

SX004、SK019～SK021など方形や長楕円形の土坑が並ぶほか、区画の外側にもSK003、SK006、SK028などの土坑が所在する。土坑の長軸はほとんどSX002に沿って南北を向く。

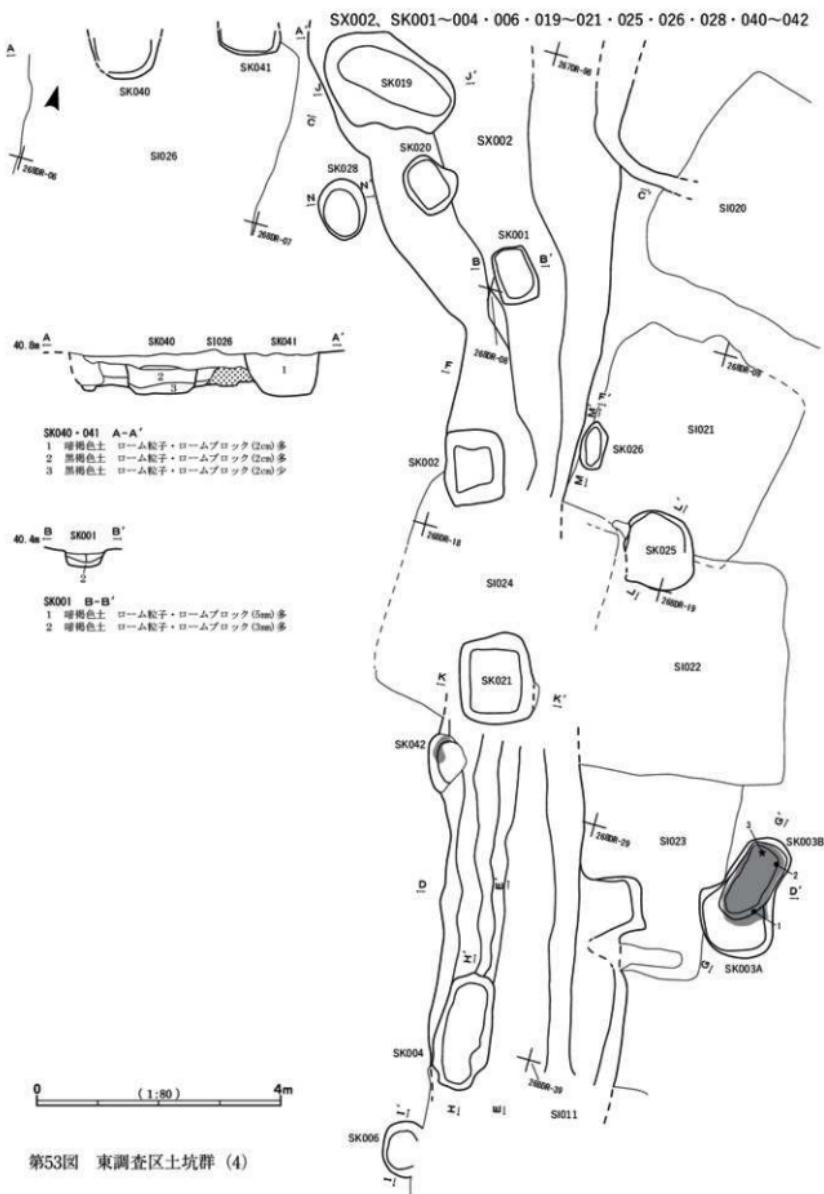
SX002の覆土中からは遺物が多数出土しているが、破片が多く図示できるものは少ない。重複する堅穴建物跡からの混入品がかなり含まれているとみられる。

1は瀬戸・美濃の陶器の小皿である。底部外面は回転糸切り後無調整で、それ以外の部位はクロナデ調整である。口縁部上端の外外面に灰釉がかけられている。

2～4は墨書が記されているクロ土師器杯の破片資料である。墨書は小破片のためにいずれも釈読は不能である。2は口縁部外面に墨書が記されている。3は体部外面に横位で墨書が記されている。小片のため断定はできないが、当該遺跡出土の墨書き器から類推すると「酒」の旁の部分である可能性が考えられる。4は体部外面に墨書が記されているが釈読不能である。これらはSI021～SI024のいずれかに帰属する可能性が高い。

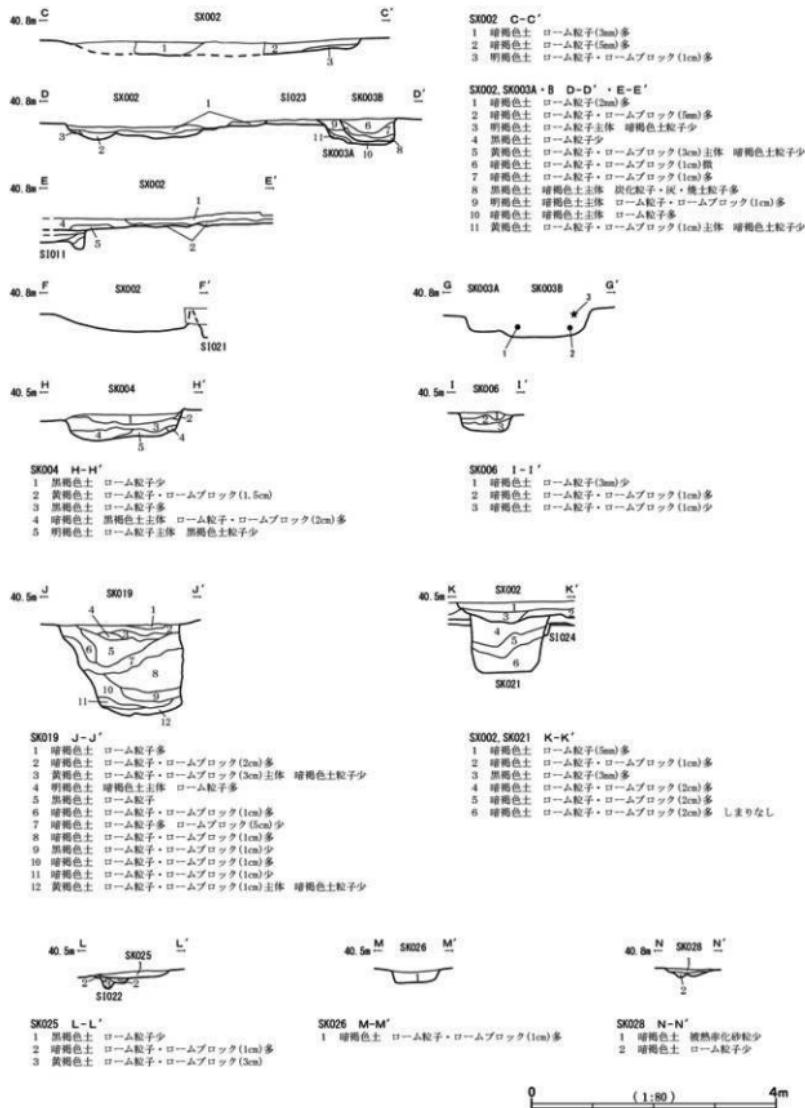
5は鉄釘で、頭部を折り曲げている折頭釘である。

SX001、SK002、SK020、SK021はSX002の底面または壁際につくられる底面が平坦な長方形土坑である。いずれもSX002と同じように長軸は南北よりやや西に傾ける。北から南へSK020(0.93m×0.82m×0.25m)、SK001(0.96m×0.68m×0.28m)、SK002(1.20m×1.00m×0.82m)、SK021(1.46m×1.20m×0.79m)の順で並んでいる。SK002、SK021はSI024を壊している。SK021の覆土はローム粒子、ロームブロックを多く含み、下層はしまりがない土層である。埋め戻し土であろう。4基はいずれも出土遺物がない少なく、遺存が悪いため、図示できるものはなかった。



第53図 東調査区土坑群 (4)

SX002・SK003A・003B・004・006・019・021・025・026・028



第54図 東調査区土坑群 (5)

SK003AはSI023の東壁を壊してつくられた方形土坑（1.16m×1.16m×0.24m）である。北側にSK003Bが重複し、北壁を壊されている。

SK003BはSK003Aの覆土中につくられる楕円形土坑（1.50m×0.82m×0.40m）である。下層に炭化粒子・灰・焼土粒子を多量に含んでいた。覆土中から出土した遺物を図示した。1は土師器高台付杯で、高台部分を欠失している。杯部内面は黒色処理で、丁寧なミガキが施されている。底部外面には高台貼り付けの際の長方形の刺突痕跡が斜めに接しながら輪状に連なっている。2は下総地域産の須恵器甕の口縁部片である。口縁部外面には2条の沈線が巡らされ、口頭部に格子状のタタキが見える。3は鉄製刀子の刃部の一部である。

SK004はSX002の西壁に沿ってつくられた長方形土坑（1.90m×0.94m×0.54m）で、SI011の北西隅を壊している。底面は平坦で、上層はローム粒子やロームブロックが混入する黒褐色土を主体とし、最下層にはローム粒子を主体とする明褐色土が堆積していた。出土遺物は僅かで、図示できるものはなかった。

SK006はSI011の西壁中央に重複してつくられる浅い楕円形土坑（深さ0.23m）で、西側の立ち上がりは確認できなかった。長軸は0.92mである。出土遺物は僅かで図示可能な遺物はなかった。

SK019はSX002内につくられる大型の長方形土坑（2.26m×1.56m×1.50m）である。底面は平坦で、SX002の壁と重複する南壁は中位から傾斜をもって立ち上がるが、下位は北壁と同様に垂直に近い角度で立ち上がる。覆土にはローム粒子、ロームブロックを多く含み、埋め戻しをしているようである。出土遺物は多くはなく、図示できるものはなかった。

SK025はSI021、SI022にまたがっている浅い楕円形土坑（1.32m×1.20m×0.09m）で底面の凹凸が著しい。位置関係からSI022のカマド掘り方の可能性も考えられたが、被熱痕跡や焼土の堆積が認められなかった。また土層断面は、SK025がSI021とSI022を壊している堆積状況を示していたため、土坑とした。図示した土器は1点で、SK025、SI020～SI023出土の複数の破片が接合したロクロ土師器杯である。体部外面下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリが施されている。底部は内外面ともに黒ずんでいるが、成因は不明である。関連する遺構出土資料と比較検討の結果、SI023に帰属する可能性が高い。

SK026はSX002の東側に、SX002に長軸が沿うようにつくられる長楕円形土坑（0.76m×0.40m×0.26m）である。SI021の西壁を壊している。出土遺物はなかった。

SK028はSX002の西側に位置する浅い楕円形土坑（1.00m×0.76m×0.11m）で、SK020が主軸と同じにして東側に位置している。出土遺物はなかった。

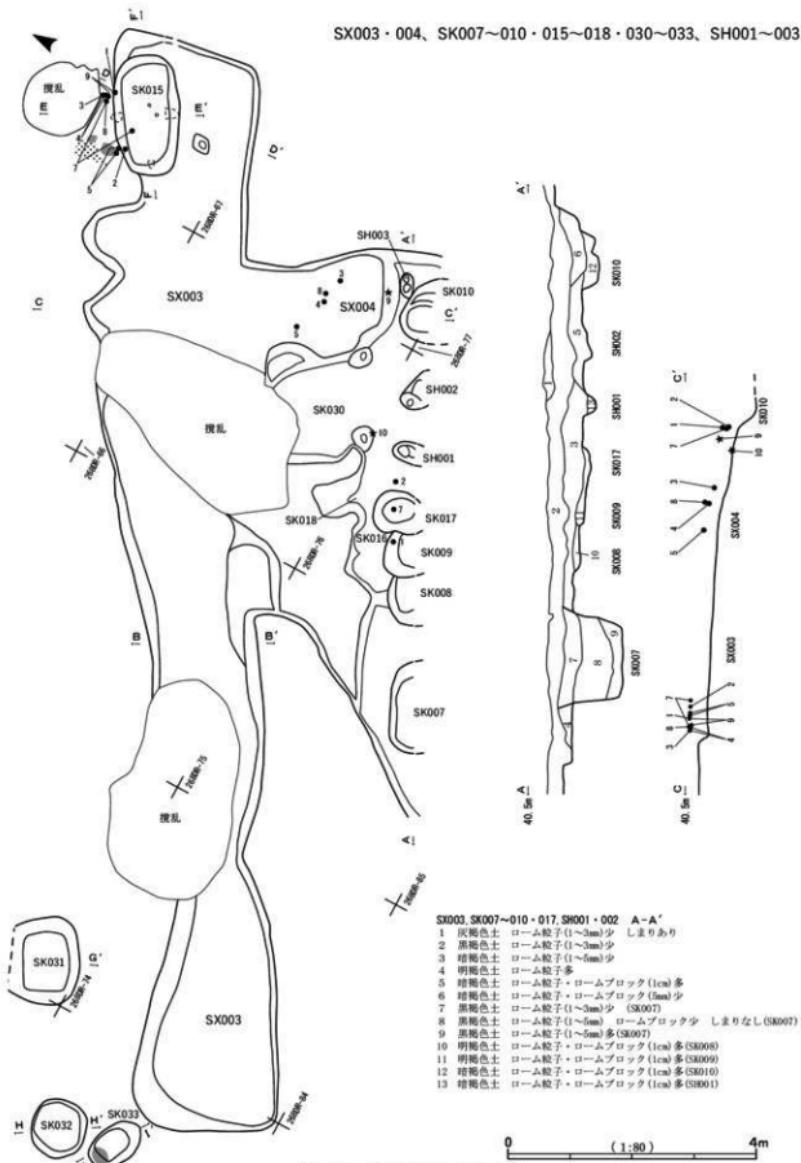
SK040とSK041は東調査区の北境界に位置し、南半分を確認した方形土坑である。どちらもSI026を壊している。SK040の深さはSI026の床面から0.10mであるが、調査区境の土層断面では表土下から掘り込まれていることがわかる。出土遺物は僅かで、釘1点を示した。SI026からの混入品かもしれない。SK041は表土から掘り込まれ、覆土は暗褐色土1層である。出土遺物はない。

SK042はSX002西壁で確認した。遺存するのは西側の一部で、平面形や規模は不明である。遺存部分に焼土が見られる。出土遺物は破片数点で、図示できるものはなかった。

SX003・SX004、SK007～SK010・SK015～018・SK030～SK033、SH001～SH003

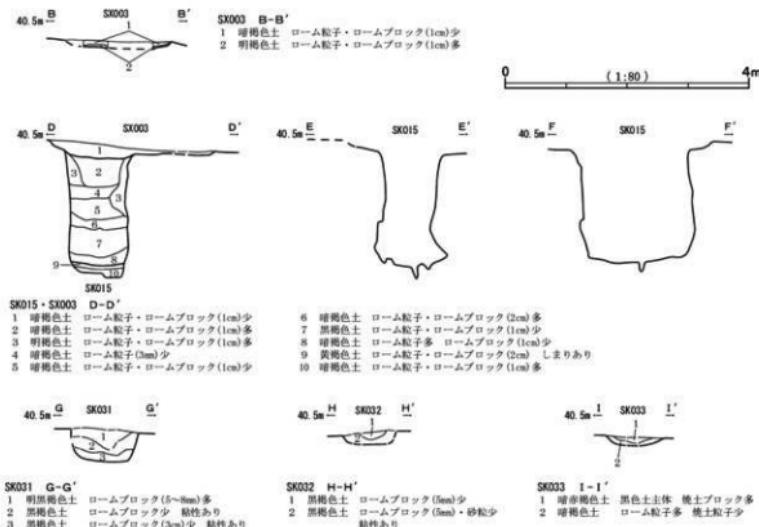
（第55・56・66図、図版18・20・34・36・49・51）

SX003は東調査区の南側調査区境に沿って東西に広がる溝状の台地整形区画である。東西長17.56m、幅1.68mで深さは0.13m～0.24mである。床面は南に向かって緩やかに下がっている。地形的には南の谷に



第55図 東調査区土坑群 (6)

SX003、SK015・031～033



第56図 東調査区土坑群(7)

面した縁辺部にあたる。

SX003の東端にはカマド構築材や焼土が散乱し、その周囲に遺物がまとまって出土したため、堅穴建物跡SI018として調査したが、柱穴などの施設も確認できず、遺物は床面から浮いていたため、SI018は堅穴建物跡とは判断できず欠番とした。遺物は遺構確認面近くから出土しており、SX003内に所在するSK015が埋まっているから流れ込んだか、壊された堅穴建物跡出土遺物がまとめられた状況が想定できる。このためこれらはSX003に混入した遺物として報告することとした。これ以外の遺物を含めSX003からは土器のほか鉄製刀子が出土している。

1～8はロクロ土師器杯である。8は内面黒色処理で、内面には丁寧なミガキが施されている。外面は器面の摩耗が進んでいる。口縁部は全体の3/4ほどが割れて欠失しており、破断面にも油煙が付着していることから、割れた後に灯明皿として転用されたものと考えられる。1～7はどの個体もかなり硬質な焼き上がりである。底部外面が回転糸切り後無調整で、それ以外の部分はすべてロクロナデ調整が施されている。円柱状の底部の上に体部を巻き上げていくという共通の製作技法で作られていると考えられるが、その中でも特に4は外底部が下に向かって一段突出しており、この技法の痕跡が明晰である。1は完形品であるが、6、7は底部のみの破片資料である。

9は土師器の小型壺である。底径・胴径・口径のいずれもそれほど差のないやや寸胴な形態で、かなり硬質な焼き上がりである。底部外面には特に明瞭な調整痕は見えず、無調整である可能性が高く、それ以上の部分は内外面ともにロクロナデ、内面の胴部中位には部分的に横方向の手持ちヘラミガキが施されている。内外面ともに全体にかなり黒ずんでいる。

10は新治産須恵器杯蓋のつまみ部分の破片資料である。一見環状つまみのようであるが、中心部分は微妙に高くなってしまっており、宝珠つまみの退化形態ともいべき形状である。

11は鉄製刀子の切先である。

SX004はSX003の南に方形に張り出した小区画である。SX003より一段低く、幅1.70m、深さ0.37mと狭い範囲ではあるが、土器を多数出土した。覆土上層から出土しているためSX003の遺物同様、本来SX004に伴う遺物ではないと考えられる。

1は土師器の丸底杯である。1の内面は全体に丁寧なミガキ調整、外面は口縁部上端のみ横ナデ、それ以下は手持ちヘラケズリで、部分的にミガキの痕跡が見える。また底部内面にはヘラの当たりとみられる痕跡がいくつも見える。2は丸底杯のつくりであるが、底部外面はヘラケズリにより平坦に仕上げられている。内面は全体にミガキ、外面は口縁部上位が横ナデ、それ以下はすべて手持ちヘラケズリ調整である。体部内面には「王」を横にしたような線刻がある。

3～5はクロロ土師器杯である。成形、調整技法は共通で、底部外面は回転糸切り後無調整、それ以外はすべてクロロナデ調整である。程度の差はあるが、3個体とも底部は下方に向かって一段突き出しており、円柱状の底部の上に口縁部を巻き上げる製作技法である。6もクロロ土師器杯であるが、破片資料である。体部外面に墨書きが記されているが、小片のため釈読は不能である。

7は土師器壺の胴部下位から底部にかけての破片資料である。残存部分の外面はすべてヘラケズリ調整、内面はヘラナデ調整である。ヘラの小口の当たりの痕跡が底部内面に複数見えている。

8は見た目の色調などは限りなく土師器であるが、底部外面の中央部が無調整で、胴部下位から底部周縁部にかけてヘラケズリが施されており、技法的には限りなく須恵器的である。

南側の調査区境界に沿って土坑が東西一列に並んでいたが、これらの土坑の中で最も掘り込みが深く、形態は方形になるとみられる。遺存部分の規模は1.46mで、深さは0.76mである。覆土はローム粒子を含む黒褐色土が主体で、水平に堆積している。出土遺物はなかった。

このほかにSK008～SK010、SK017、SH001～SH003が並んでいる。またSK016、SK018、SK030はこれら土坑の北側にある連続した浅い掘り込みである。これらから出土した遺物はない。

SK015はSX003の東端に位置する長方形土坑（1.92m×1.06m×1.90m）である。長軸はSX003と同じ東西を向く。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、南北壁と西壁中央の底部近くを僅かに横に掘り込んでいる。底面付近の土層が貼床状に硬くしまっている。出土遺物は僅かで図示できるものはなかった。

SK031～SK033はSX003の区画外の北西部にまとまっていた。SK031は長軸1.40m、深さ0.45mの方形土坑で、北側の立ち上がりが攪乱により不明瞭である。SK032は円形土坑（0.93m×0.88m×0.18m）、SK033は楕円形土坑（0.94m×0.58m×0.20m）で覆土上層に焼土ブロックを多量に含んでいた。SK031、SK032とも出土遺物は破片で僅かであったため、図示できるものはなかったが、SK031からは板碑片が出土している。またSK033からの出土遺物はなかった。

SX005・SI038・SK029・SK037・SK038・SK043・SK044

(第57・66～68図、図版18・19・21・34・35・39・50)

SX005はSI028の西側で確認した台地整形区画である。不整形な掘り込みで、深さは0.30mほどである。ローム粒子、ロームブロックを含む暗褐色土が堆積する。調査時点では、SI028覆土上層でカマド構築材や焼土、床硬化面が確認できたため、SI028の覆土中につくられた堅穴建物跡を想定しSI029としたが、土層断面の検討により、床硬化面がSX005の床面とほぼ同じ標高で広がっていることが判明したため、SX005の一部と判断してSI029は欠番とした。床硬化面は、北側のSI027の覆土中にも広がっていた。しかしSI028東に大きな攪乱が入っており、SX005の北から東にかけての平面的な広がりを捉えることはできなかった。また、SI028中央で確認したピットは上から掘り込まれたもので、これもSX005に伴うものと判断した。覆土上層のカマド構築材は壊されたSI028のカマド構築材の一部が再堆積したものである可能性が高い。SX005の南縁には円形のSK043、SK044が重複する。また南東には堅穴状遺構SI038がある。

SX005からの出土遺物は僅かで、欠番としたSI029出土遺物を含めて報告するが、これらはSX005に伴うものではなく混入品であろう。1は丸味の強い器形のロクロ土師器杯である。底部外面は回転系切り後無調整で、それ以外の部分は内外面ロクロナデである。体部外面には正位で「生万」と読める文字が薄い墨書きされている。2は土師器甕の口縁部から胴部上位にかけての破片資料である。頸部で大きく屈曲して口縁部は外反し、肩の部分に明瞭な段差をもつ。口縁部は内外面横ナデ、胴部は外面が継方向のヘラケズリ、内面が横方向のヘラナデ調整である。

SI038はSI028の南東隅に重複する長方形の堅穴状遺構である。長軸が南北を向き、長軸長は推定で3.40m、幅は3.20mである。当初、堅穴建物跡として調査したが、柱穴などのほか、炉やカマドがないことなどから堅穴状遺構とした。壁の立ち上がりは緩やかで、深さは0.53m、北東隅から東壁に沿って床面より一段高い平坦面(幅0.50m、高さ0.07m)がある。また遺構中央に2か所、南北に並んだ窓み状のピット(深さ0.06m)がある。覆土はローム粒子、ロームブロックを含む黒褐色土、暗褐色土、明褐色土で東側から流れ込むように堆積している。出土した遺物は僅かで図示できたものはない。

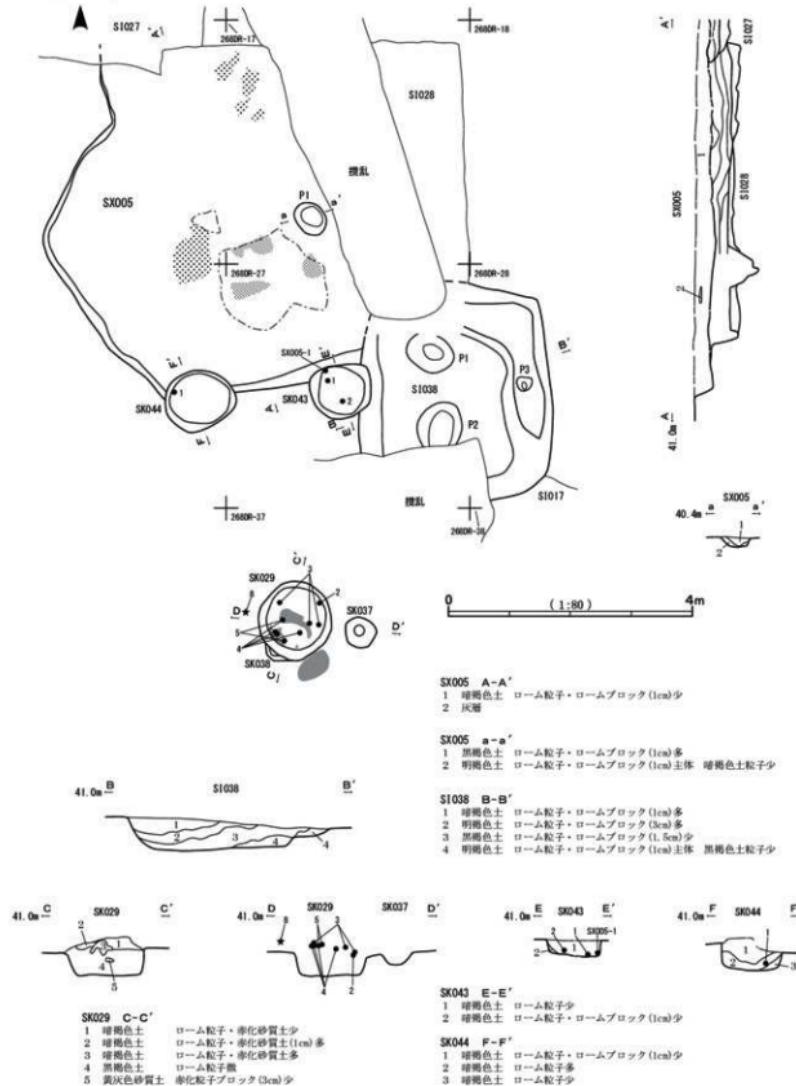
SK029はSX005の南に位置する円形土坑(1.28m×1.23m×0.38m)である。赤化したカマド構築材と遺物が確認面から盛り上るように堆積していたため、堅穴建物跡のカマドと判断し、SI016として調査したが、カマドではなく円形土坑の上層にカマド構築材が再堆積したものであることがわかり、SI016は欠番とした。土坑の覆土は黒褐色土で、上面に被熱により赤化したカマド構築材が遺物とともに堆積していた。SI016出土遺物としたものを含め、SK029出土として報告する。壊されたカマドや堅穴建物跡の遺物が寄せ集められたような出土状況である。

1、2はロクロ土師器杯である。ともに底部外面回転系切り後無調整、体部外面はロクロナデ調整である。1は内外面ともに全体に黒ずんでおり、胎土中に金雲母の微粒を含み、全体にキラキラしている。2は硬質な焼き上がりで、器面は全体ににぶい赤褐色である。外面口唇部直下に浅い凹線が一条巡らされている。

3は底部を欠失しているが、遺存する体部下端の外形線から推定するとロクロ土師器高台付杯と考えられる。器面は全体に灰色がかったり。体部は内外面ともにロクロナデが施されている。

4、5は土師器甕である。4は口縁部から胴部中位以上にかけての資料で、口縁部は内外面横ナデ、胴部は外面が継方向のヘラケズリ、内面が横方向のヘラナデ調整である。5は口縁部から頸部にかけての資

SX005、SI038、SK029・037・038・043・044



第57図 東調査区土坑群 (8)

料で、口縁端部には弱い凹線が一条巡らされている。

6～8は鉄製品である。6は縫金の一部、7は長方形の薄い板状製品を曲げたもので、刀装具であろう。8は棒状品で、釘もしくは鉄錐頭部であろう。

SK037はSK029の東に位置する円形土坑（0.50m×0.50m×0.19m）で、出土遺物は僅かで図示できるものはなかった。

SK038はSK029と重複する土坑である。遺存部分が僅かでSK029より浅く、平面形、規模ともに不明で、出土した遺物もない。

SK043はSX005、SI038と重複する円形土坑（1.00m×0.86m×0.24m）である。出土遺物は多くないが、土器2点が図示できた。1、2はロクロ土器師杯である。いずれも回転糸切り後無調整で、底部は下方に向かって一段突き出ている。底部外面以外、すべてロクロナデである。1は口縁部中位に傾斜変換点があり、口縁部上位に丸味がある。また、内面見込みの周縁部は一段窪んでいる。2は体部外面のロクロ目が明瞭で、底部外面の回転糸切りは平滑には切れておらず、巻き込むように段差ができている。

SK044はSK043と並んでSX005の南縁に重複する円形土坑（1.18m×1.02m×0.41m）である。出土遺物は多くないが、1点が図示できた。台付きの土器師器で、焼き上がりはかなり硬質である。問題は器形である。器台に載る側の底部上面が平坦で、付け根部分の径が11.6cmと器台としては大き過ぎる。台付壺として考えた場合に異様な形態である。一方、足高高台付杯として考えた場合はロクロ成形でないのが致命的である上に、現存の台状部の高さが約6cmあり、杯部の底部内面の周縁部に深い溝状の抉りがあるなどやはり異常である。台状部内面は斜めにナデ調整が行われており、外面は台状部もその上も縱方向のヘラケズリで調整されている。SK044では、小破片のため図示しなかったが、格子状タタキの壺と考えられる破片が数点出土している。

SX006（第58・66図、図版19・36）

SX006は東調査区中央から西寄りに位置する方形の台地整形区画で、南の延長線上にSX009が位置している。東側は擾乱により壊され確認できなかった。遺存部分の南北の長さは6.30m、深さ0.47mである。壁は緩やかに立ち上がり、床面には凹凸がある。覆土はローム粒子、ロームブロックを含む暗褐色土を主体とし、水平に堆積している。

出土遺物は少なく、図示したのは覆土中から出土した1点である。内外面全面に赤彩が施されているロクロ土器師杯である。底部外面は静止糸切りの後に周縁部をヘラケズリしている。底部外面には「四ヶ」の線刻が見える。

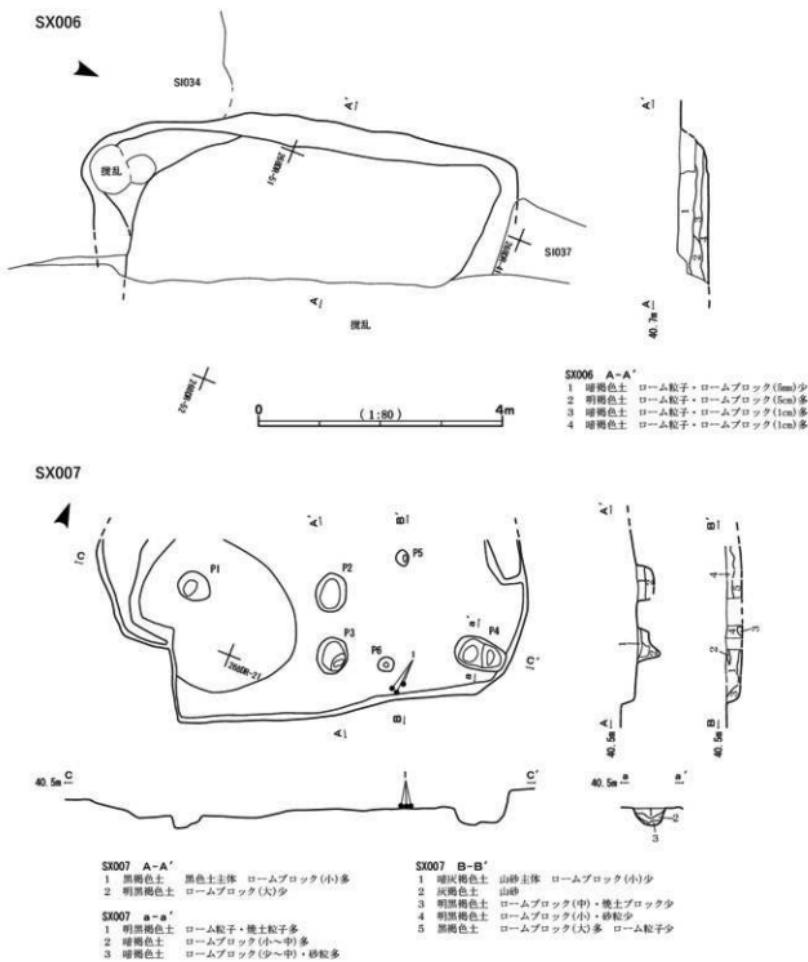
SX007（第58・66図、図版19・39・47・50）

SX007は、東調査区北側の調査区境で確認した方形の台地整形区画である。北側の立ち上がりは調査区外のため確認できなかった。東西の長さは6.76mで、東側と西側に段が付き、中央部分が0.30mほどの深さで緩やかに窪んでいる。西側にはさらに緩やかな窪みがある。ピット6か所が不規則な配置で確認された。深さは0.20m～0.30mである。

出土遺物の量はさほど多くないが、このうち土器と砥石、鉄製品を図示した。

1は新治産の須恵器杯蓋の破片資料である。内面の端部近くには弱いかえりが見える。2は青磁の小型高台付碗である。外面底部下端を除く全面に厚く施釉されている。

3、4は白色流紋岩質凝灰岩製の砥石である。3は有孔の提砥で、薄い墨汁に浸けたような黒色の変色



第58図 東調査区土坑群 (9)

が全体に見られる。孔の内側も茶褐色である。孔の直径は正面側10mm、裏面は5mmで、孔内部の直径は平均すると4.5mmである。器面の最大厚は30.2mmだが、中央の薄い部位では10mmを測り、斜めに折れる。4は上部を欠損するが、稜線の摩耗具合から欠損後も砥石として機能していたものと推定される。正面と右側面は滑らかな作業面で、範囲を図示はしていないが黒褐色や赤褐色の変色痕がうっすらと斑状に確認できる。

5は鉄製櫂金である。上部が緩やかな山形で、右端上部を上へ屈曲させている。

このほか図示していないが、近世陶器類が数点出土している。

SK027・SK036・SK045～SK048・SK064～SK067、SH004～SH006

(第59・67・68図、図版20・21・36・49・50)

東調査区中央に南北に並ぶ土坑群のうち、SX007の南東に位置する土坑群をまとめた。いずれも出土遺物は僅かで、土坑の性格や時期を決定づけられるものはなかった。

SK027、SK045～SK048は近接して位置する方形土坑である。長軸は東西または南北を向き、SK047以外は断面形が逆台形のしっかりした掘り込みである。規模はSK027が1.18m×1.00m×0.46m、SK045～SK048は長軸0.80m～1.12m、短軸0.58m～0.94m、深さ0.21m～0.54mで、間に円形のSH004（0.86m×0.75m×0.52m）やSH005（0.47m×0.42m×0.32m）があり、SH004はSK046と一部重複している。SK047は出土遺物がないが、ほかはあっても少量で、SK046から出土した鉄製刀子の茎部を図示した。

これらの南にSK036が位置している。円形土坑（0.82m×0.86m×0.25m）で、覆土中から「洪武通寶」を出土した。

SX007に最も近いところにSK064～SK067とSH006が近接して位置する。SK064はSH006とつながる不整形な土坑（深さ0.28m）である。SK066（深さ0.23m）はSK067（深さ0.28m）とつながる同じく不整形な土坑で、いずれも掘り込みは浅い。SK065は方形（2.72m×2.32m×0.32m）で二段に掘り込み、南壁は緩やかな傾斜で立ち上がる。このうちSK066から出土した土器1点が図示できた。ロクロ土師器杯の体部破片である。外面に正面で墨書きが記されており、辛うじて「里」の部分であるとわかる。当該遺跡出土の墨書き土器から類推して「野」である可能性が考えられる。

SK034・SK035・SK060・SK205～SK207（第60・67図、図版12・20・21・35）

SX006の南東に所在する円形または梢円形の土坑群である。

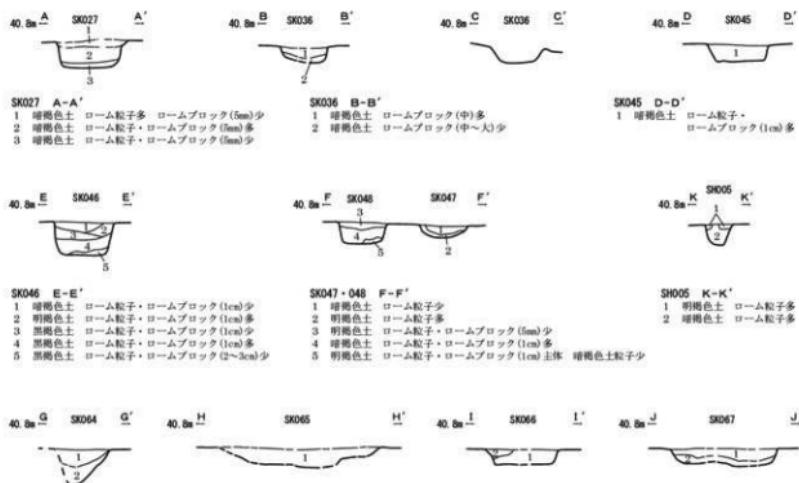
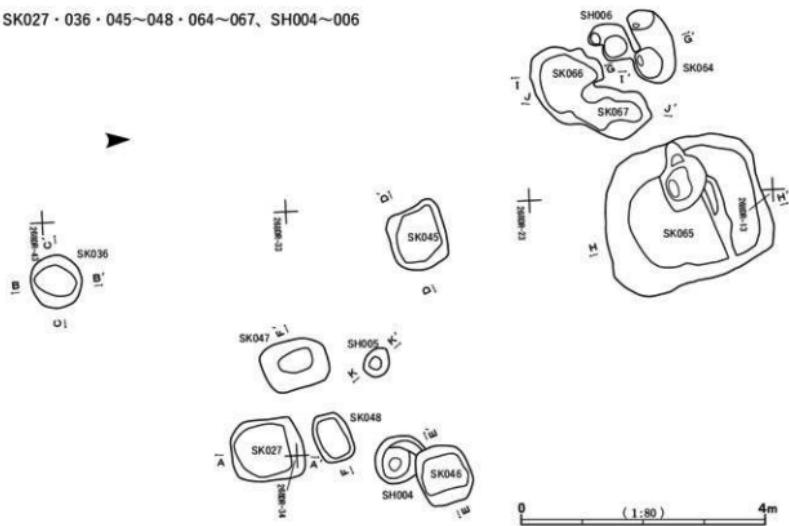
SK034はSI032の西、SI033の北に位置する梢円形土坑（1.80m×1.40m×0.50m）である。比較的多くの遺物を出土したがいずれも遺存状態が悪く、図示できたのは覆土中層から出土したロクロ土師器杯1点である。底部から口縁部端に向かい丸味を帯びた器形であり、口縁部は短く直立する。体部外面に薄く細い線で「団々」と墨書きが見える。このほか図示していないが擂鉢の破片が出土している。

SK035はSK034の南西に隣接して位置する梢円形土坑（0.82m×0.78m×0.26m）である。南はSI033と一部重複しているが、どちらも掘り込みが浅く、新旧関係は不明である。出土遺物は僅かで図示できるものはなかった。

SK060はSI032の南西隅に接するように位置する円形土坑（0.70m×0.58m×0.26m）である。出土したのは少量の土器の破片で、図示できる遺物はなかった。

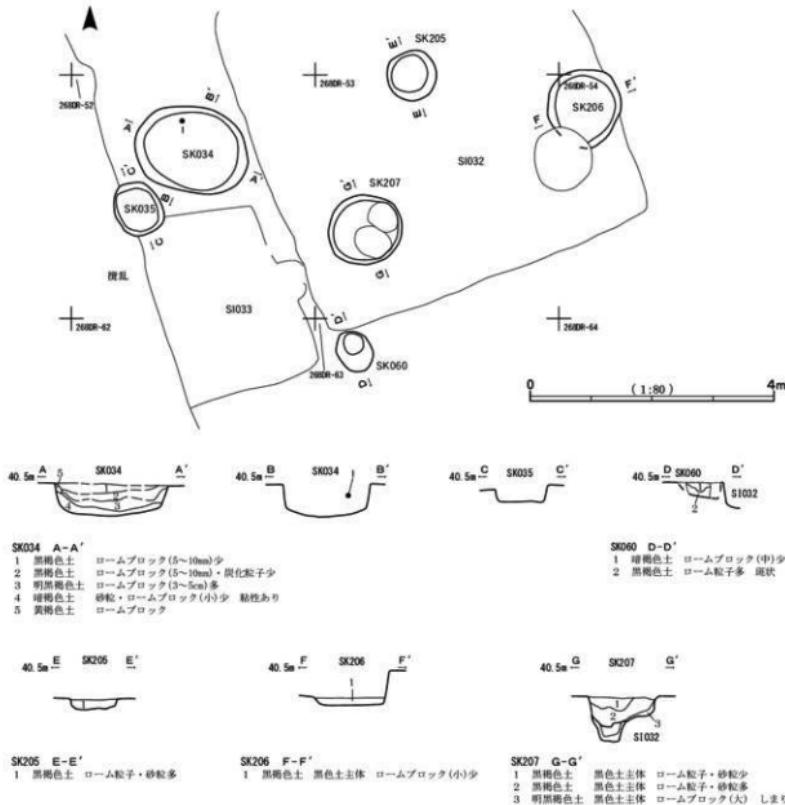
SK205～SK207の3基はSI032と重複した円形土坑である。SI032の床硬化面や堆積する焼土を切って掘り込まれ、土層断面からも3基がSI032より後からつくられたことは明らかであったため、整理の段階で別遺構と判断し、遺構番号を追加した。SK205（0.81m×0.80m×0.16m）はSI032中央にある。SK206（1.27m×1.21m×0.17m）はSI032の柱穴P3の北東を壊し、SK207（1.22m×1.13m×0.39m）はSI032の柱穴P4が埋まってから掘り込まれている。深さはいずれもSI032の床面からの計測値である。

SK027 · 036 · 045~048 · 064~067、SH004~006



第59図 東調査区土坑群 (10)

SK034・035・060・205～207



第60図 東調査区土坑群(11)

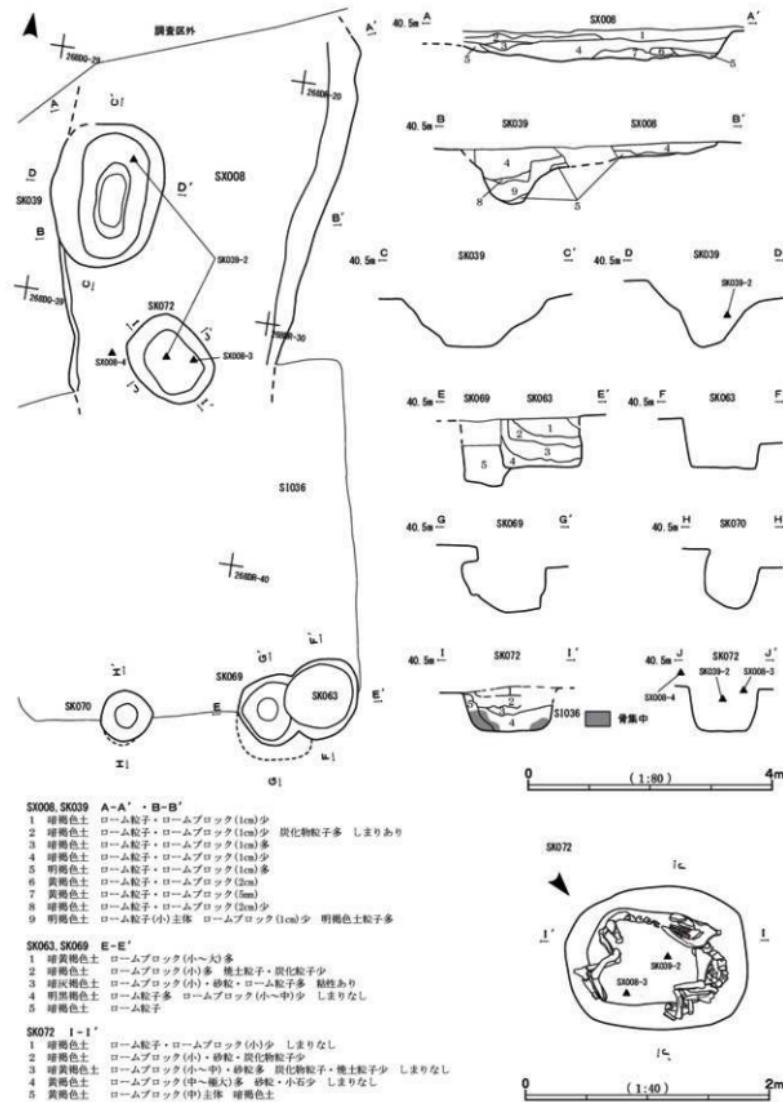
SX008・SK039・SK063・SK069・SK070・SK072 (第61・67・68図、図版19・21・39・45・48)

SX008は東調査区の北西に位置する南北に広がる溝状の台地整形区画である。北側は調査区外、南側はSI036の覆土中に構築され、南北とも立ち上がりは捉えられなかった。幅3.86m、深さは確認面から0.23mである。西壁に沿うようにSK039、SI036と重複するところにSK072、さらに南にはSK063、SK069、SK070の円形土坑3基が位置している。

SX008から出土した遺物は少ないが、土器2点と石塔2点を図示した。

1、2は東海産の須恵器である。1は壺の口頭部の破片資料である。口縁端部は上方、下方にそれぞれ摘み出されており、T字形の断面形になっている。口縁部外面の上位には断面三角形の低い突帯が一条巡らされている。外面肩部には自然釉が厚くかかっている。また、口縁部内面にも薄く自然釉がかかってい

SX008、SK039・063・069・070・072



第61図 東調査区土坑群 (12)

る。2は長頸瓶の底部の破片資料である。底部内面の一部と高台外面の一部に自然軸が厚くかかっている。

3、4は石塔の破片である。3は宝鏡印塔の一部である。上下面にノミの加工痕跡が残る。砂岩製で被熱により変色している。4は安山岩製で、平坦面があるため、五輪塔水輪の下部かとみられる。やはり被熱しており、煤が付着する。このほかSK039、SK072出土の五輪塔水輪もSX008が埋まる過程で混入したとみられる。SI036の覆土中にも石塔片が混入しており、本跡に関わる遺物であろう。

SK039はSX008の西壁に沿ってつくられた梢円形土坑（2.36m×1.80m×0.99m）である。壁は底面から傾斜をもって広がるように立ち上がり、断面形は擂鉢状を呈する。

上層から石塔が出土したほか土器1点を図示した。1は内耳土器の口縁部付近の破片資料である。内面に内耳の剥離痕跡が見える。口縁部上端は、平坦というよりも弱く窪むようにナデ調整がされている。胎土中に金雲母微粒が多く含む。2は五輪塔の水輪部分で、SK072上層出土の石塔と接合したものである。砂岩製で、上面にノミの痕跡が残っている。最大部分は復元径18.1cmである。SX008に伴うものであろう。

SK063はSI036の南東隅につくられた円形土坑（1.28m×1.18m×0.80m）である。さらに深いSK069と一部重複し、土層断面からSI036とSK069を壊していることがわかる。出土遺物は少なく、1点を図示した。1はロクロ土師器杯の底部付近の破片資料である。底部外面は回転糸切り後無調整で、底部外面は下に向かって一段突き出している。硬質な焼き上がりである。

SK069はSK063と重複する円形土坑で、東側をSK063に壊される。遺存する南北長は1.14m、深さは1.07mで、SK063より深い。南壁を横に掘り込んでいる。

SK070はSI036の南壁と重複する円形土坑（0.84m×0.86m×1.00m）で、SK069と同様に南壁を横に掘り込む。

SK072はSI036の北壁のカマドを壊してつくられた方形土坑（1.47m×1.16m×0.63m）である。ウシ1頭分の骨を出土した（第2章第4節）。覆土中層以下はロームブロックを多量に含むしまりのない土層で、埋め戻し土である。上層から出土した石塔はSK039出土破片と接合したため、SK039出土（SK039-2）として提示した。また覆土上面の石塔は、SX008（3・4）に帰属するものとした。

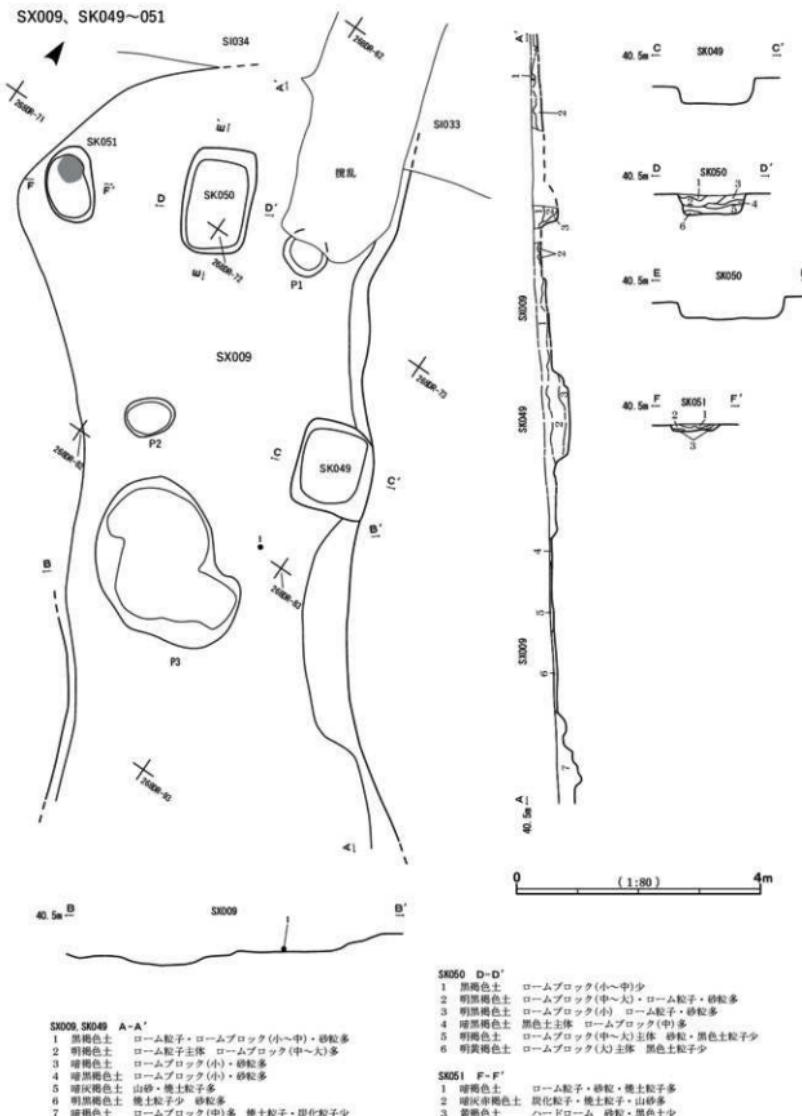
SX009、SK049～SK051（第62・66・68図、図版19・21・39）

SX009は東調査区南西に南北に広がる溝状の台地整形区画で、幅5.02m、深さは0.19mである。東西の壁の立ち上がりは緩やかで、捉えられない部分もある。北側もやはり緩やかに立ち上がり不明瞭である。南側は調査区外で、立ち上がりを確認できない。ピット3か所が不規則に配置され、このうちP3は大きな窓み状である。このほかに区画内には方形土坑SK049、SK050と長梢円形のSK051が所在し、いずれも長軸はSX009とほぼ同じ方向を向く。

SX009内からは多数遺物が出土したが、遺存状態が悪く図示できたのは1点である。1は瀬戸・美濃の陶器で、無高台の小皿である。口縁端部内外面に白っぽい灰釉が漬け掛けされている。内面の腰の部分には明瞭な屈曲がある。

SK049は南北に長いSX009の東壁に沿うようにつくられた方形土坑（1.46m×1.22m×0.38m）である。平坦な底面で、断面形は逆台形のしっかりとした掘り込みである。遺物1点を図示した。瀬戸・美濃陶器皿の破片資料である。白っぽい胎土で混和物はほとんどない。内面にうっすらと釉がかかっているよう見える部分があるが不確定である。

SK050はSX009内につくられた方形土坑（1.76m×1.10m×0.32m）で、長軸はSX009とほぼ同じ方向で



第62図 東調査区土坑群 (13)

ある。底面は平坦である。

SK051は長軸がSX009の西壁に沿うようにつくられた長楕円形土坑（1.24m×0.80m×0.10m）である。北端に焼土が堆積していた。

SK050、SK051は出土遺物が少なく、図示できるものはなかった。

SX010、SK052・SK053・SK054・SK055・SK056・SK057・SK071

（第63・64・66・68図、図版19・21・39・47）

SX010は東調査区南西に位置する不整形な台地整形区画である。南側は調査区境で立ち上がりを確認できなかった。幅は広いところで6.40m、深さは0.42mで、壁の立ち上がりは緩やかである。調査区境の土層断面では西から流れ込むように埋まっていた様子が観察される。出土遺物は僅かで、図示したのは砥石の端部片1点である。白色流紋岩質凝灰岩製で、厚さ9.1mmである。

SX010の区画内に重複する遺構はないが、区画外の北側に地下式坑2基（SK054、SK057）をはじめ、土坑5基を確認した。いずれも出土遺物は少ない。

SK052、SK053はSX010の北側に位置する方形土坑である。SK052（1.28m×0.94m×0.40m）の長軸は東西を向く。SK053（1.56m×1.23m×0.36m）はSK052の西に隣接し、長軸を南北に向ける。覆土にはロームブロックを含む。

SK055、SK056、SK071はSX010の西側に位置する土坑である。SK055は方形土坑（1.00m×0.94m×0.75m）で、底面が平坦で壁は垂直に近い角度で立ち上がる。SK056は長楕円形土坑（2.08m×0.60m×0.39m）で、凹凸がある底面である。SK055、SK056とも覆土にはロームブロックを多量に含み、埋め戻し土であろう。SK071は円形土坑（0.84m×0.70m×0.48m）である。これらのうちSK056から出土した遺物1点が図示できた。内耳土器の破片資料である。口縁部は平坦というよりもやや窪み気味に整形されている。内面と外面で色が全く異なり、外面は暗褐色、内面は橙色である。

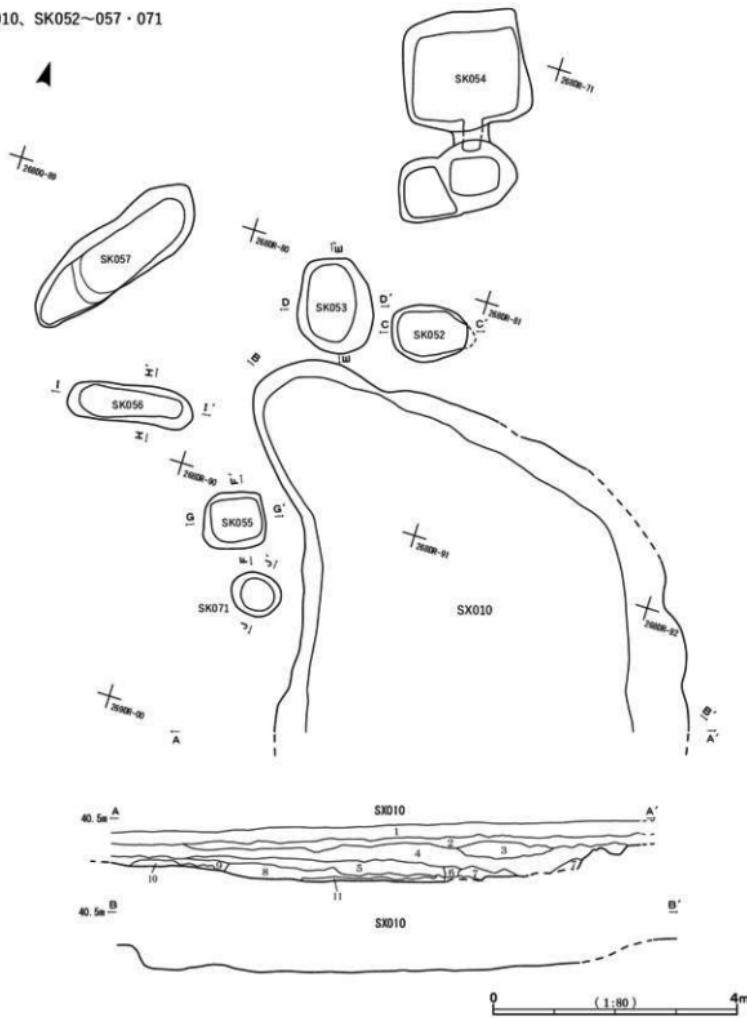
SX011、SK058・SK059・SK061・SK062・SK068（第64～66・68図、図版19・21・35・39・49・50）

SX011は東調査区西端を南北にのびる幅2.03mの道路状遺構である。部分的に硬化面をもつ。北の延長線上にある西調査区ではつながる遺構は確認できなかった。また南の延長線上は、道路により確認面をすでに削平されている。南端部の東側にSK058、SK061、SK062、SK068の土坑4基がまとまっていた。道路を挟んだ西側の西調査区にSX014はじめ、方形土坑群が所在している。SX011の出土遺物は多くない。瀬戸・美濃の灰釉碗、擂鉢、火鉢などは破片で、図示したのは三角形の板状鉄製品である。厚さ4.5mmである。

SK058はSX011の東側に位置する円形土坑（1.07m×1.07m×0.17m）である。掘り込みは浅く、覆土は黒色土1層で、土器がまとめて出土した。しかし遺物には時期差があり、混入品である可能性が高い。

1はロクロ土師器の足高台付杯である。内外面ともに全体に黒ずんでいる。胎土中には大きな酸化鉄が混入している。杯部内面の見込みの部分は、周縁部が僅かに窪み、中央部分が僅かに盛り上がるよう整形されている。2はロクロ土師器の器台部分の資料である。器台部分はほぼ完全に残っている。花瓶の高台部分と考えるのが最も妥当であろう。胎土中には大粒の酸化鉄が含まれている。3は東海産（湖西産）の須恵器長頸壺の破片資料である。頸部外径は約10cmでかなり太い。口縁端部は欠失しているが、このままほぼ直線的に開くと考えられる。胴部は肩が大きく張り、底部に向けて直線的に窄む形態と考えられる。頸部と胴部の外面および口縁部内面の一部に自然釉が薄くかかっている。

SX10、SK052~057・071

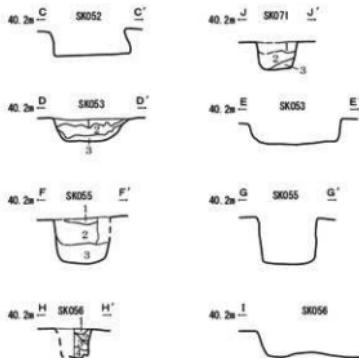


- SX10 A-A'**
- 1 喀褐色土 ローム粒子・砂粒多 しまりあり
 - 2 喀黒褐色土 ロームブロック(中)多 小石・砂粒少
 - 3 黑褐色土 黒色土主体 砂粒・小石多
 - 4 黑褐色土 ローム土主体 ローム粒子・ロームブロック(小~中)少
 - 5 明黒褐色土 ロームブロック(中)・ローム粒子・砂粒多
 - 6 喀褐色土 ローム粒子主体 ロームブロック(小)・砂粒多 しまりなし

- 7 喀黑褐色土 ロームブロック(中~大)多 しまりなし
- 8 喀褐色土 ローム粒子多 ロームブロック(小)少
- 9 明褐色土 ロームブロック(中)主体 砂粒・小石多
- 10 喀黃褐色土 ハードロームブロック主体 砂粒少
- 11 明褐色土 ローム粒子多

第63図 東調査区土坑群 (14)

SK052・053・055・056・071

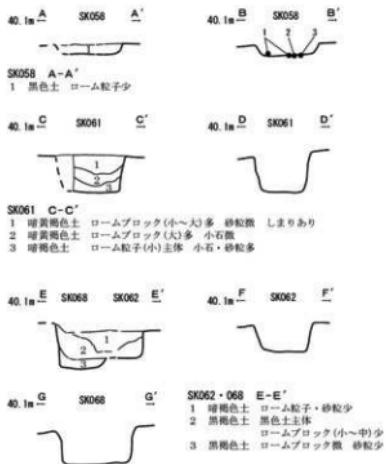
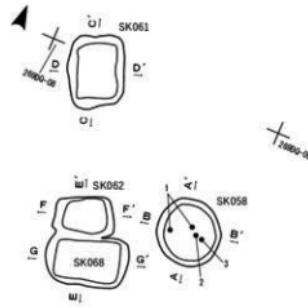


- SK053 D-D'
- 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(小)・砂粒少
 - 明褐色土 ロームブロック(大～極大)多
 - 明黒褐色土 ロームブロック(中)・ローム粒子・砂粒少

- SK055・056 F-F'・H-H'
- 暗褐色土 ロームブロック(中)・ローム粒子多
 - 暗褐色土 ロームブロック(極大)主体 黒色土
 - 明黒褐色土 ロームブロック(小～中)多
 - 黄褐色土 ロームブロック(極大)多

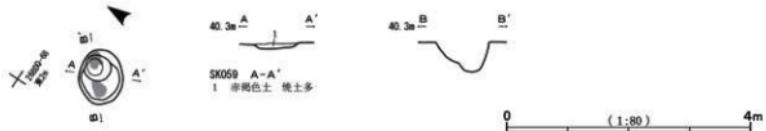
- SK071 J-J'
- 明黒褐色土 黒色土主體 ローム粒子・砂粒少
 - 暗褐色土 ローム粒子少 砂粒多
 - 暗褐色土 ローム粒子少 砂粒多

SK058・061・062・068

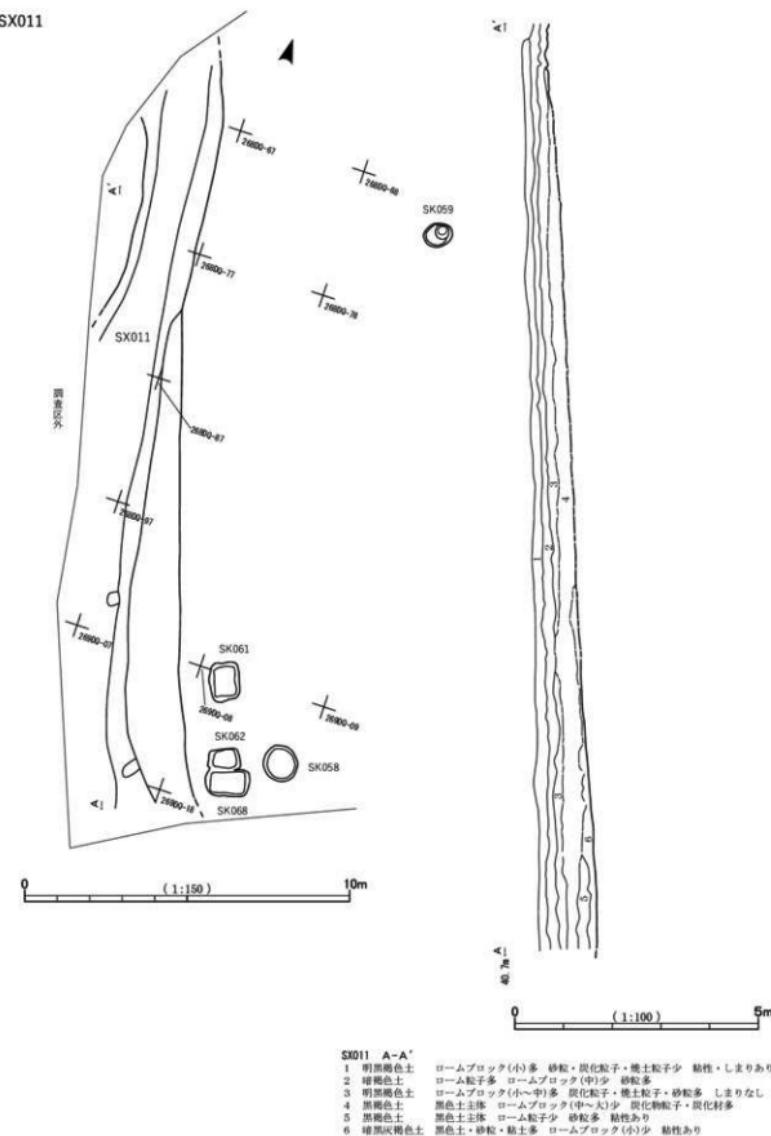


- SK062 E-E'
- 暗褐色土 ローム粒子・砂粒少
 - 黒褐色土 ロームブロック(小～中)少
 - 黒褐色土 ロームブロック(中)少 砂粒少

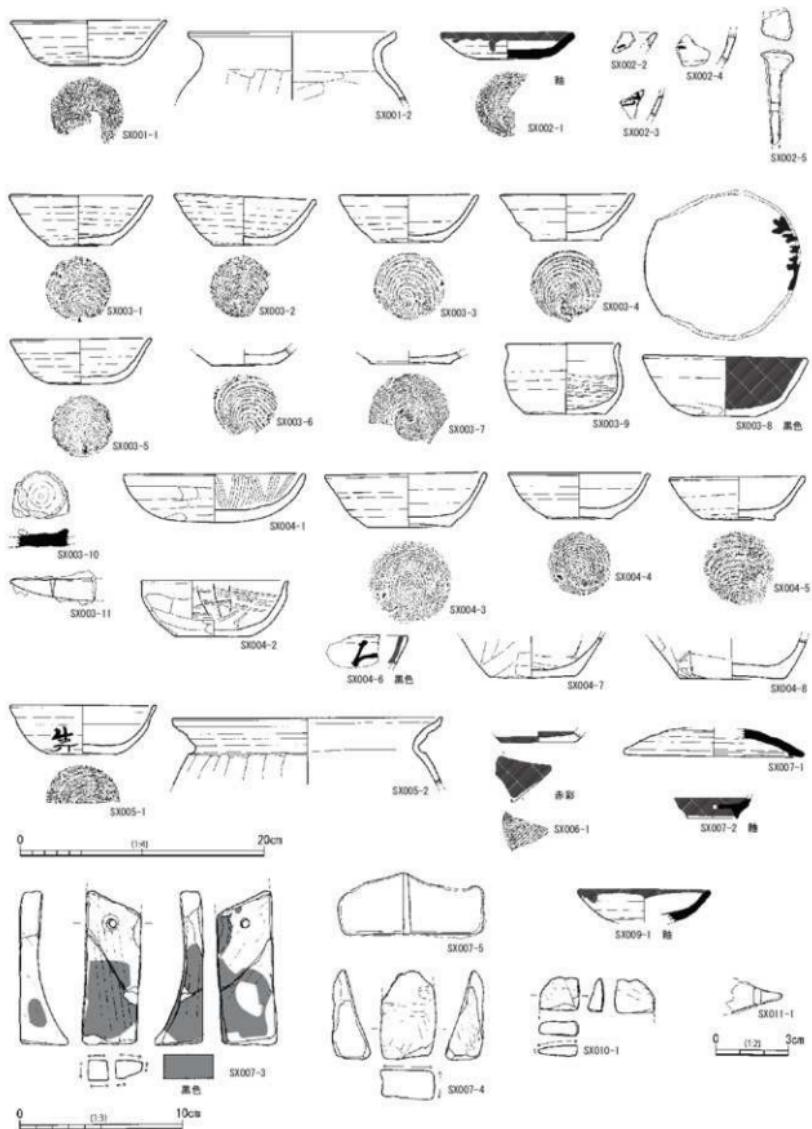
SK059



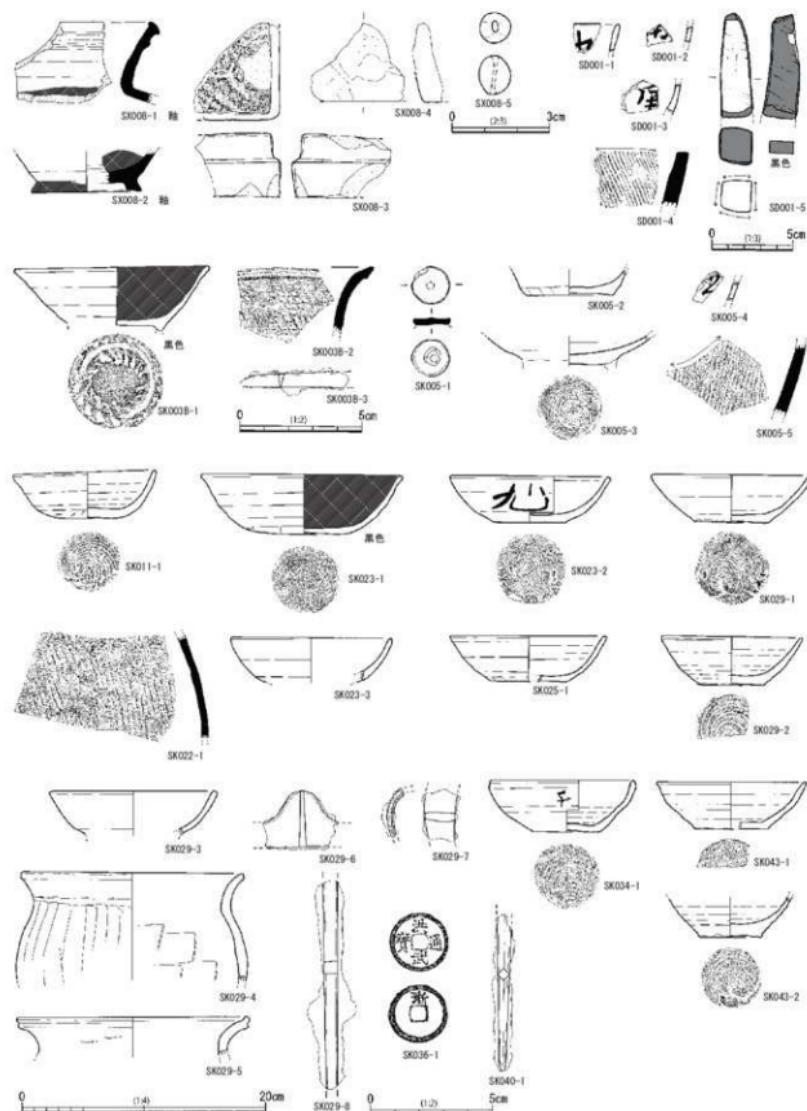
第64図 東調査区土坑群 (15)



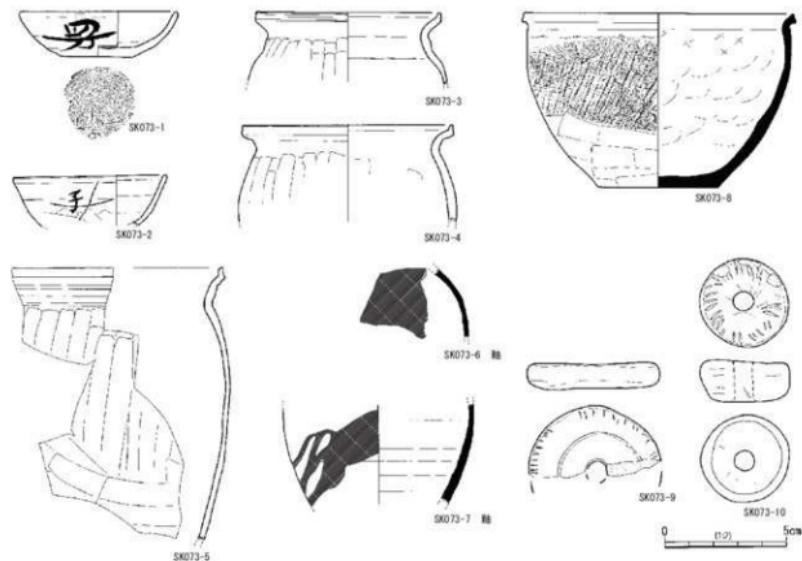
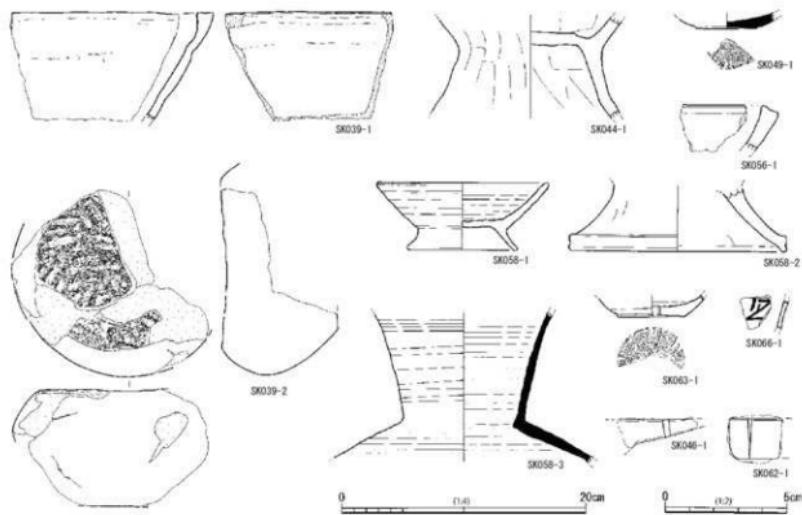
第65図 東調査区土坑群 (16)



第66図 東調査区土坑群出土遺物（1）



第67図 東調査区土坑群出土遺物 (2)



第68図 東調査区土坑群出土遺物（3）

SK059は4基の土坑群とは離れて単独で位置する楕円形土坑（0.88m×0.72m×0.05m）である。覆土には焼土を多量に含む。しかし壁や底面に被熱痕跡はなく、近くの焼失建物であったSI001の覆土が後世に混入した可能性が高い。出土遺物は僅かで、図示できた遺物はない。

SK061は南北に長軸を向ける長方形土坑（1.20m×0.92m×0.59m）である。断面形が逆台形のしっかりとした掘り込みである。覆土にはロームブロックを多量に含み、埋め戻し土であろう。出土遺物は少量で、図示できる遺物はなかった。

SK062、SK068は長方形土坑で、一部重複し、平行して並んでいる。土層断面ではSK068（1.38m×0.82m×0.63m）が埋まった後にSK062（1.00m×0.64m×0.44m）を掘り込んでいる。どちらも壁の立ち上がりは垂直に近い。出土遺物は少量で、SK062出土の鉄製穂摘具片を図示した。かなり薄いつくりである。

4 西調査区土坑群（第69・70図）

西調査区は南北に長い調査区で、北側と東側は道路で区切られている。確認調査の結果、西側から南端にかけてはすでに削平されて、上層の遺構が遺存していないと判断したため、これを除く部分が本調査対象範囲となった。

西調査区で確認した遺構は、調査区北西に1棟の堅穴建物跡があった以外、台地整形区画と土坑群であった。台地整形区画は3か所で、区画内や周辺に、地下式坑6基、井戸5基、土坑187基を確認した。北側で確認した土坑群から挿図に沿って報告する。

SK079～SK089・SK092～SK095・SK099・SK100・SK102～SK106・SK109・SK110

SK120・SK174～SK178・SH009～SH012・SH014・SH017・SH018・SH062・SH063

（第71・72・83図、図版24・25・27・41・47・50）

西調査区北、SX013の北側に位置する、井戸SK120を含む39基の土坑群である。長軸を南北または南北よりやや西に傾けた長方形または長楕円形土坑が一部重複しながら並んでいる。遺構の確認面の標高は40.2mで、南に広がるSX013より僅かに高い。

SK084は調査区の北端に位置する長方形土坑（1.26m×0.98m×0.40m）で、東から西にかけて段をつくる。長軸は南北を向く。土器片を少量出土したが、図示できるものはなかった。

SK178は井戸SK120に隣接し、南側をSK120に壊されている。長軸を南北に向け、底面が平坦でしっかりとした方形土坑で、幅1.30m、深さ1.02mである。ローム粒子やロームブロックを含む黒褐色土が水平に堆積している。出土した遺物はない。

SK104、SK095、SK085、SK086、SK099（V-V'）はいずれも長方形に近い平面形で、長軸の向きを同じくして南北に並ぶ。深さ0.52m～0.71mである。またこれと平行するようにSK105、SK082、SK106、SK087、SK100（U-U'）が並んでいる。深さは0.24m～0.54mである。南端のSK099とSK100は直交するように重複し、SK099（深さ0.71m）、SK100（深さ0.54m）の底面に柱のアタリを確認した。建物の柱穴列の一部の可能性が考えられるが、これらと組み合うほかの土坑列を確定できない。これらの土坑は出土遺物がないか、あっても僅かな土器片を出土しているのみである。

SK081は不整形な平面形（1.08m×1.00m×0.54m）で、覆土はロームブロックを混入する暗褐色土を主体とする。覆土中から鍍金を出土した。厚さ4mm、幅10mmの板状で、幅を減じた両端を折り曲げ、全体としては幅27mmのC字形を呈する。

SK092（0.78m×0.72m×0.33m）、SK102（深さ0.36m）、SK089（0.94m×0.78m×0.43m）と3基が重複して並ぶ。いずれの土坑からも土器が少量ずつ出土しているが、図示できるものはなかった。このうちSK092からは砥石と図示できなかったが石塔片を出土した。砥石は、正面に縱方向の研磨痕があり、両側面・裏面に茶褐色の切出痕、上面には素材時の面が残る。下部を欠損し、裏面に1か所の工具痕が横位に入る。石材は青灰色を基調とした凝灰岩で、直径0.2mm～0.3mmほどの淡褐色のごく小さな粒が見られる。

SX013・SK101・SK116～SK119・SK124・SK147・SK153～156

SK164～170・SK180・SH045～SH048・SH052～SH056・SH061

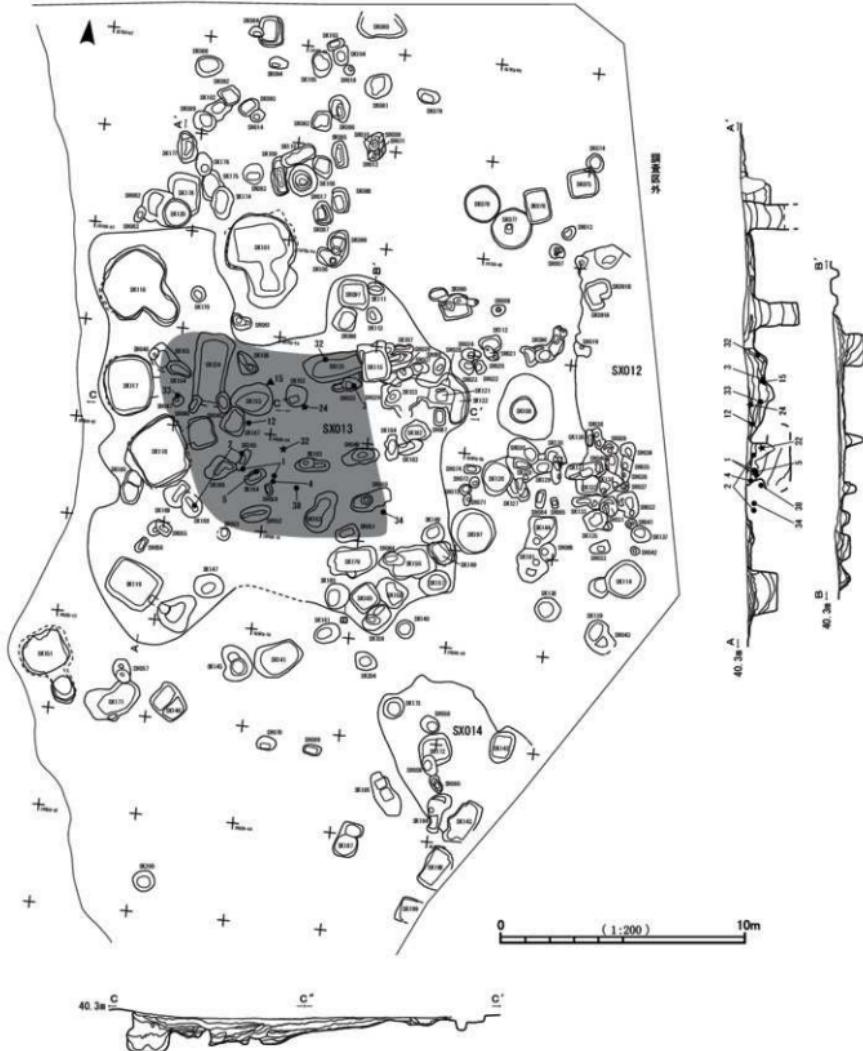
（第70・73・75・76・82・83図、図版22・23・25～27・35・40・41・45・47・49～51）

台地整形区画SX013と区画内の西側にまとまる土坑群である。土坑24基のほか地下式坑5基（SK101、SK116～SK119）が含まれる。



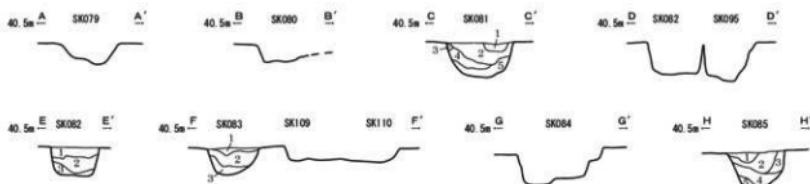
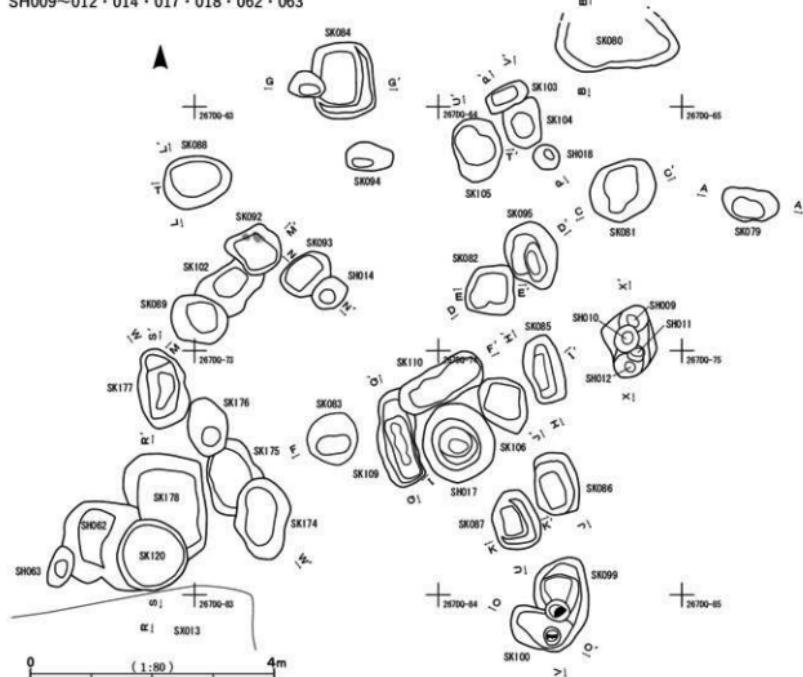
第69図 西調査区土坑群分布図

SX012~014、SK074~187・194・197~200・204、SH007~014・017~074



第70図 西調査区土坑群 (1)

SK079・089・092・095・099・100・102～106・109・110・120・174～178
SH009・012・014・017・018・062・063



SK081 C-C'

- 1 黒褐色土 黒色土主体 ロームブロック(大)少
- 2 硫黄褐色土 ロームブロック(小～大)多 砂粒少
- 3 黄褐色土 ハードロームブロック
- 4 硫黄褐色土 ロームブロック(小)、砂粒多 しまりなし
- 5 黑褐色土 ロームブロック(極大)多 砂粒・小石少 しまりなし

SK082 E-E'

- 1 喜黄色土 ロームブロック(大)多、砂粒・黑色土少
- 2 明黒褐色土 ロームブロック(中～極大)多 しまりなし
- 3 黑褐色土 黑色土主体 砂粒多 ローム粒子少 しまりなし

SK083 F-F'

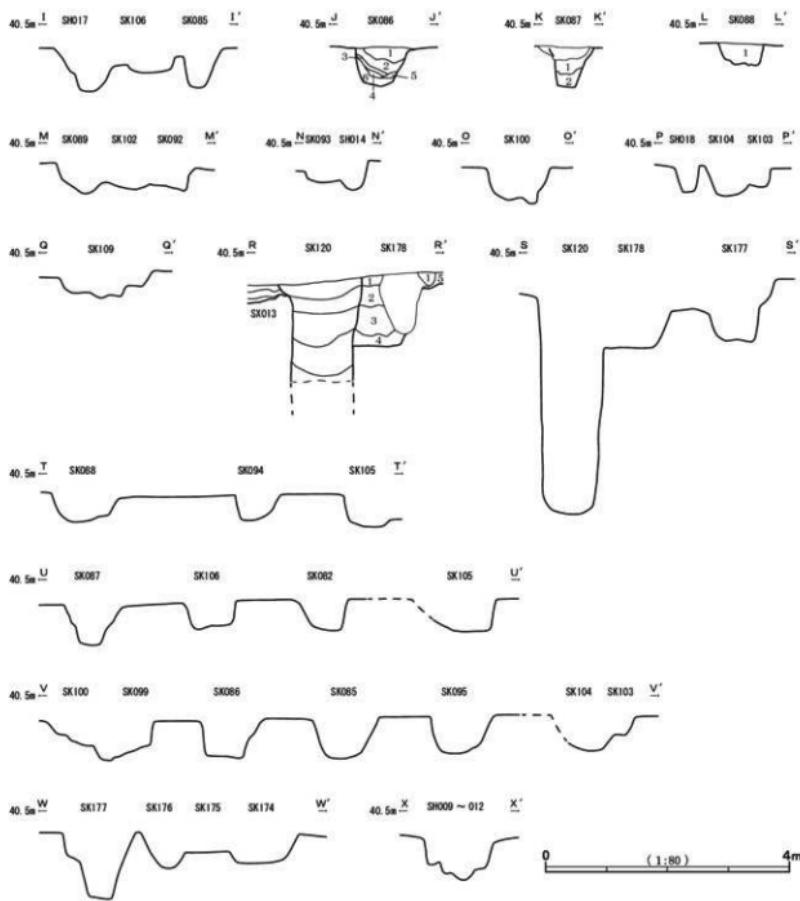
- 1 黒褐色土 黒色土主体 砂粒・ロームブロック(小)多
- 2 硫黄褐色土 ロームブロック(中～極大)多 しまりなし
- 3 明黒褐色土 黑色土・砂粒・ローム粒子多 しまりなし

SK085 H-H'

- 1 黒色土 黑色土主体 ローム粒子少
- 2 明黒褐色土 ロームブロック(中)多
- 3 黑褐色土 黑色土主体 ローム粒子多
- 4 黑色土 ローム粒子少 砂粒少 しまりなし
- 5 明黒褐色土 黑色土主体 砂粒・堆土粒子・ローム粒子少

第71図 西調査区土坑群 (2)

SK082 · 085~089 · 092~095 · 099 · 100 · 102~106 · 109 · 120 · 174~178
SH009~012 · 014 · 017 · 018



SK086	J-J'	ロームブロック(小~大)多
1	暗褐色土	黒色土主体 ロームブロック(小)散
2	褐褐色土	ローム粒子、砂粒多
3	明黒褐色土	ローム粒子、ロームブロック(小)多
4	黑褐色土	砂粒多 ローム粒子少
5	黑褐色土	砂粒、ローム粒子多

SK087 K-K⁺
1 明黒褐色土 ロームブロック(中~大) 多

SK088	L-L'
1	明黒褐色土 黒色土主体 ロームブロック(小~中)多
SK178	R-R'
1 明黒色土	黒色土主体 ロームブロック(小)・砂粒・ ローム粒子・ロームブロック(小~中)少
2 黒褐色土	ローム土・ロームブロック(極大)少
3 黄褐色土	ロームブロック(極大)主体 ローム粒・砂 粒少
4 黑褐色土	ローム粒子 砂粒多 腐殖化少
5 暗褐褐色土	ローム土・土塊少
6 黑褐色土	ローム土・土塊多(カクタ)少 砂粒多

第72図 西湖査区土坑群 (3)

SX013は西調査区北半に広がる台地整形区画である。大きいところで南北17.0m、東西14.2mの不整形な方形の区画である。地下式坑5基(SK101・SK116～SK119)がSX013の周縁北側から西側にかけて並ぶ。SK119以外の出入口の堅坑がいずれもSX013側(南または東側)にある。

土坑のうちSK124が長方形のしっかりとした掘り込みである以外、いずれも不整形で不規則に配置される。SX013を東西に横断する土層断面(C-C')で見るとSK116～SK118の堅坑を南北につなぐ内側の標高が低い。SK118の南に位置するSK168、SK169、SH052などは、それより南西のSH055やSK147と比べて確認面の標高が低いことがわかる。地下式坑に開まれた内側は周囲より一段下がり、堅坑部はその一段下がったところから掘り込まれていたようである。調査時点では地下式坑の天井部はほとんどが崩落していたため、SX013の範囲は図に示したようになったが、もう一回り内側(第70回網掛け範囲)が窪んでいたと考えられる。土層断面図でもこの範囲が緩やかに窪み、遺物もこの範囲から出土している。この中に位置する土坑群が建物跡を構成していた可能性があるが、組み合わせの確定ができなかった。

SX013は区画が広いこともあり、多数の遺物を出土した。土器のほかに石塔類や板碑、銭貨なども含まれていた。

1、2は内耳土器である。1の外面は褐色で煤けた色に仕上がっており、内面は灰褐色である。胎土中には金雲母微粒が多く含まれている。2は内耳の部分が残る資料で、器表面は黒褐色で瓦質の焼き上がりになっている。胎土中に金雲母微粒は少ない。ともに口径31cm程度に復元できる。

3～6は瀬戸・美濃の擂鉢である。3は口縁部の小破片で、内外面全面に濃い色の鉄軸がかけられている。残存部分には摺目は見られない。口縁端部は上方向に摘み出され、外側面下端には細い粘土紐を貼り付けて断面三角形の稜線が作り出されている。4は体部の小破片である。内外面に濃い色の鉄軸がかかり、内面には小片のため単位はわからないが13本/2.0cmという目の細かい摺目が刻まれている。5は、底部外面を含む内外面の器表面すべてに濃い色の鉄軸が施されていたようであるが、現状ではかなりの部分で釉が剥離している。内面には、13本/2.8cmの摺目が、6に比べてかなり疎らな間隔で刻まれている。6はこれらの中では最も残存部分の多い大型の破片資料である。底部外面を除き、全面に薄い茶色の鉄軸が施されている。底部外面は回転糸切り後無調整、体部はかなり上位の部分まで回転ヘラケズリが施されている。内面は、体部に14本/4cm、底部に10本/2.6cmの、体部と底部で異なる摺目が刻まれている。

7～9も瀬戸・美濃製品である。7は縁軸の小皿の底部から口縁部下位にかけての小破片である。内外面に僅かに灰釉が点状に付着している。8は高台付皿である。外面の腰の部分に稜線をもつ。内外面全面にぶい黄橙色の灰釉がかかっている。9は天目茶碗である。残存部分の外面下端を除き、内外面に濃い色の鉄軸がかかっている。

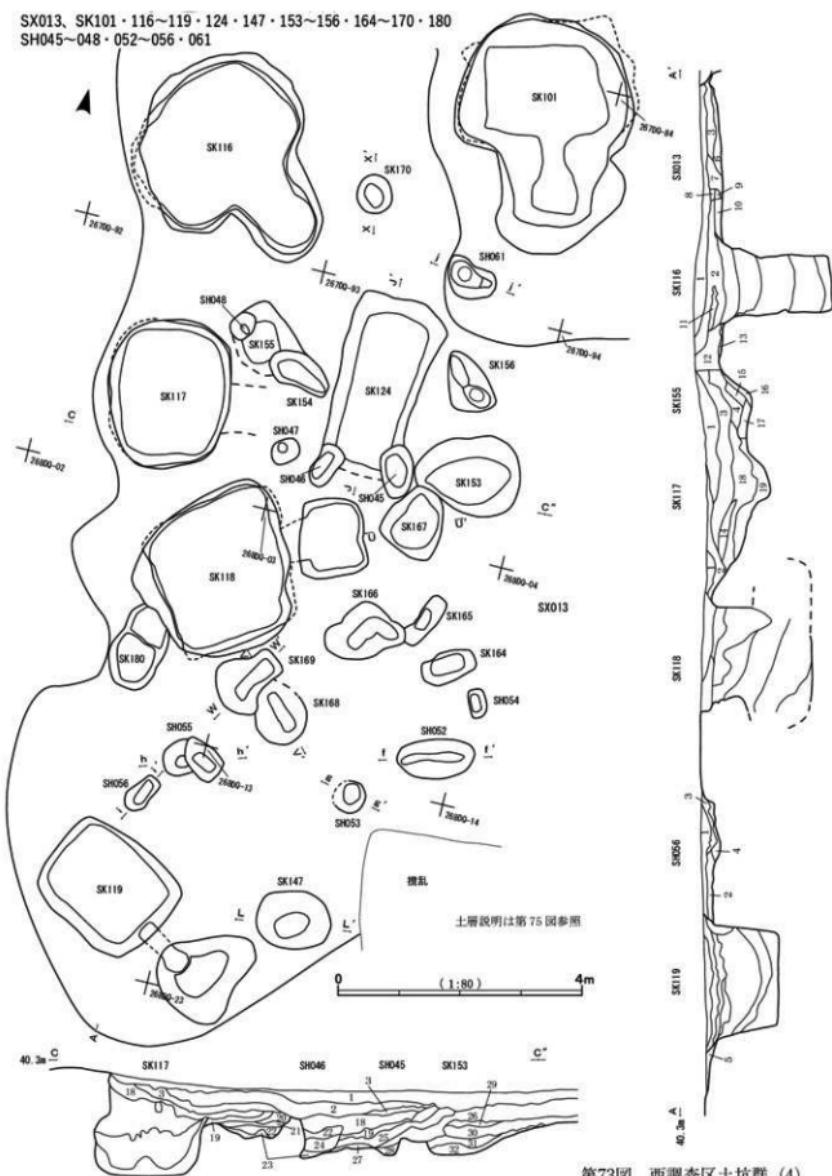
10、11は白磁である。10は小型の碗で、おそらく高台付きのものであったと考えられる。11は小皿で、底部外面は無釉である。釉には全体に細かい貫入が入っている。

12は土製の火舎、または小型の火鉢である。小破片のため脚の本数は不明であるが、3脚で復元実測した。体部外面には薄い木目の付くヘラによるナデ調整が施され、それ以外の部分はナデ調整である。このほかに陶磁器類7点の写真(図版40-32～38)を掲載した。

13は滑石製紡錘車輪で、1/2を欠損する。

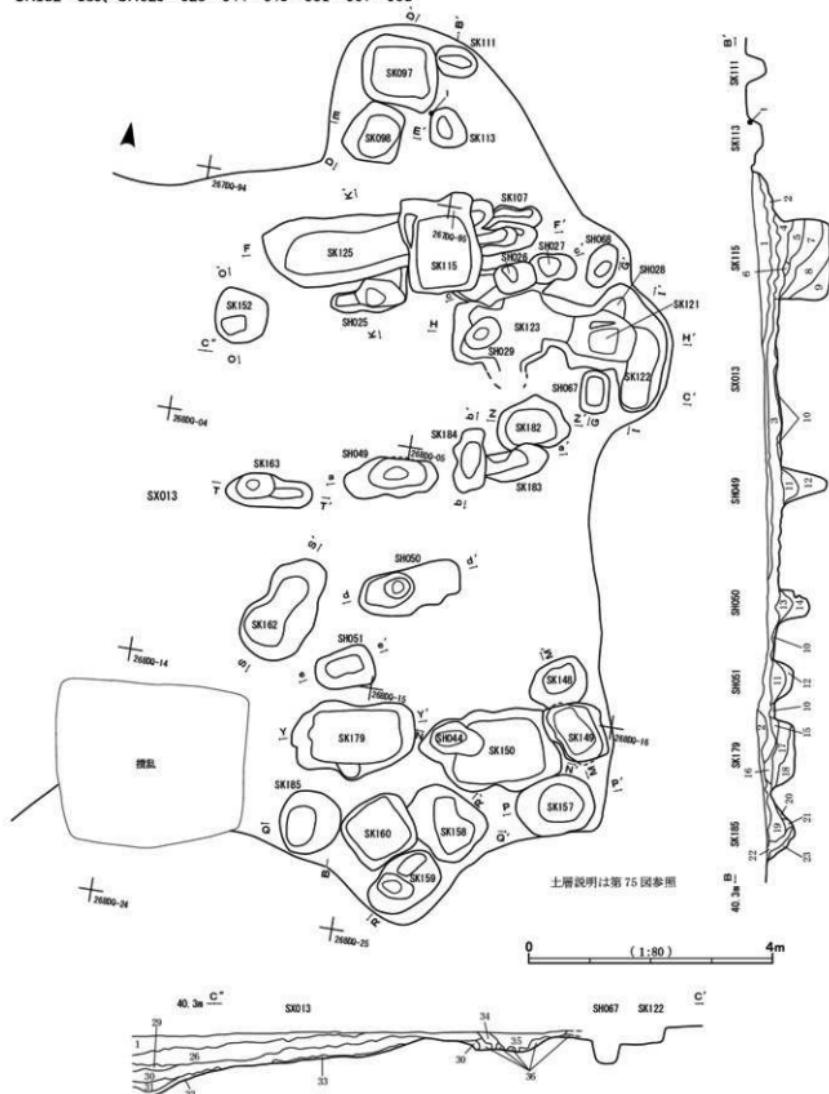
14～20は砾石である。14～19は白色流紋岩質凝灰岩製、20は砂岩製である。14は板状で、下部は欠損する。上・両側面に素材時の平らな面が残る。裏面中央部は緩く窪む。剥落した器面はその後擦られ、稜に丸み

SX013, SK101・116～119・124・147・153～156・164～170・180
SH045～048・052～056・061



第73図 西調査区土坑群 (4)

SX013 · SK097 · 098 · 107 · 111 · 113 · 115 · 121~123 · 125 · 148~150 · 152 · 157~160 · 162 · 163 · 179
SK182~185 · SH025~029 · 044 · 049~051 · 067 · 068



第74図 西調査区土坑群 (5)

をもつ。15は薄い板状で上下欠損する。右側面と裏面に細く狭い間隔の切出痕が残る。正面の機能面には黒～黒褐色の変色痕が見られる。黒色の水溶液に浸したような風合いで鈍い光沢がある。16は正面觀が四角形、縦断面は両端のとがる楕円形状である。作業面は全面に及び、剥落した部分では器面の修復が行われ、穂に丸みが感じられる。平滑な面にのみ黒色の塗布物が残り、ざらついた面には斑状に黒色部分が見られる。正面上面平坦面に、横方向のごく浅い工具痕が3条見られる。上下の縁辺は直線状で、端部は擦れて本来の器面が現れている。17は厚みのある上部片で、裏面が大きく欠損しているため、本来の形状は不明である。作業面は正面と両側面で、右側面に刃物などの工具痕のような縦方向の細い筋が3条見られる。18は角柱状を呈し、上下欠損する器表面は一部剥落する。細い筋状痕が正面と右側面に見られ、刃物痕かと考えられる。折面以外の4面が作業面である。19は上下を欠損する。全体的に黒褐色に変色しているが、作業面（正面）は特に光沢がある（何らかの液体に浸したような変色痕であり、煤や錆とは異なる）。右面に切出痕が見られる。20は角柱状を呈していたと推定されるが、砥石としての作業面は風化あるいは摩耗により確認が難しく、3枚の平坦面が辛うじて認識できる程度である。赤味を帯びた褐色の砂岩を素材とする。

21、22は鉄製品である。21は厚さ3mmの板状製品で、22は曲がっているが刀子茎部であろう。

23、24は青銅製品である。23は煙管で火皿を欠損する。24は刀装具で、鞘尻金具であろう。

25～31は銭貨である。唐銭、北宋銭、明銭がある。25は「開元通寶」、26は「皇宋通寶」、27は「嘉祐通寶」、28～30は「永樂通寶」、31は「洪武通寶」である。

SK124は南北に長軸を向ける長方形土坑(2.76m×1.32m×0.69m)である。南隅にSH045、SH046が重複し、攪乱などもあって南壁の立ち上がりは捉えられなかった。底面は平坦である。中・近世土器や板碑片を含む遺物を出土しているが、片口鉢の口縁部破片は写真（図版41）のみを掲載し、図示できたのは白色流紋岩質凝灰岩製砥石2点である。1は角柱状を呈し、上下とも欠損する。正面の滑らかな面のみ黒色である。両側面と裏面も平坦ではあるが、正面ほどの光沢はもない。2も角柱状を呈し上部は欠損する。正面は滑らかな平坦面で、僅かな窪みがある。右・裏面に縦方向の切出痕が見られる。下面は平坦だが、正面のような滑らかさはない。置き砥石としての機能面は正面に、持ち砥石としては下面が利用されたものと推定される。

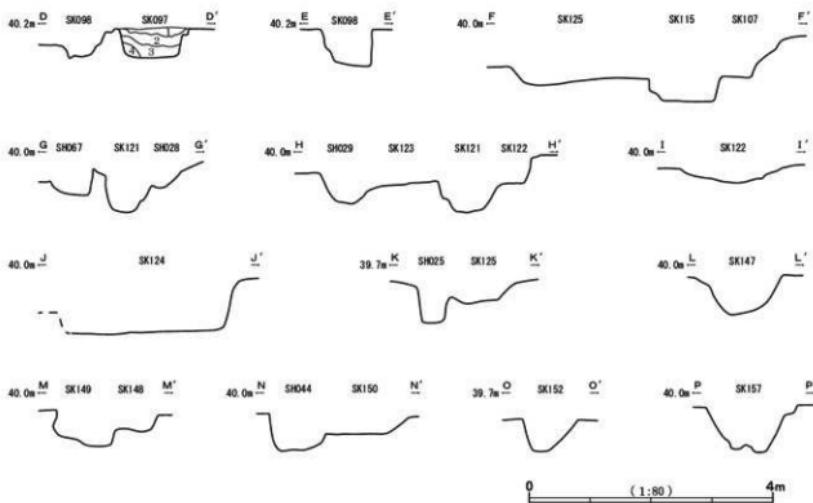
これ以外の土坑はいずれも不整形で、底面に凹凸がある。遺物は出土していないか、あっても少量で、図示できるものはなかった。

SX013、SK097・SK098・SK107・SK111・SK113・SK115・SK121～SK123・SK125・SK148～SK150・SK152・SK157～SK160・SK162・SK163・SK179・SK182～SK185、SH025～SH029・SH044・SH049～SH051・SH067・SH068

（第74～76・83図、図版24～28・41・47・48）

SX013の東側半分をまとめた。地下式坑はなかった。南東のSK149と隣接して井戸SK197が所在する。SK097、SK098、SK111、SK113の4基は、SX013の北東隅にまとまっている土坑群である。確認面は、その南側の土坑群より一段高い位置にある（B-B'・D-D'）。SK097は方形土坑（1.26m×1.10m×0.47m）で、断面形が逆台形である。ほかの3基は不整形で深さ0.33m～0.51m、4基とも出土遺物がないか僅かである。このうちSK113から出土した遺物を図示した。陶器の火鉢と考えられる。外面に断面三角形の帶が一条巡らされている。装飾ではなく補強帶として機能しているものと考えられる。胎土中には金雲母微粒を含む。

SK097・098・107・115・121～125・147～150・152・157、SH025・028・029・044・067



SK013ほか A-A'・C-C'

- | | | | |
|----------|---------------------------|-----------|------------------------------|
| 1 明黒褐色土 | 黒色土主体 ロームブロック(小)・砂粒・小石少 | 20 増黄褐色土 | ロームブロック(極大)多 ローム粒子少 |
| 2 黒褐色土 | ローム粒子・ロームブロック(小～中)・砂粒少 | 21 増黄褐色土 | ロームブロック(大)少 |
| 3 増黄褐色土 | ロームブロック(中～大)多 砂粒、炭化粒子少 | 22 明黒褐色土 | ロームブロック(小～中)・砂粒多 |
| 4 黄褐色土 | ロームブロック(極大)主体 ローム粒子・砂粒少 | 23 増黄褐色土 | 白色粘土多 ロームブロック(小)・砂粒少 |
| 5 黑褐色土 | 黒色土主体 ロームブロック(中～大)・砂粒・小石多 | 24 黒褐色土 | ローム粒子・ロームブロック(小)多 砂粒・山砂少 |
| 6 増黄褐色土 | ロームブロック(小)・砂粒少 | 25 増黑灰褐色土 | 黑色土主体 粘土多 ロームブロック(小～中)少 黏性あり |
| 7 黃褐色土 | 黒色土主体 ロームブロック(大)多 砂粒・小石少 | 26 増黑灰褐色土 | 黑色土主体 粘土多 ロームブロック(中～大)少 黏性あり |
| 8 黑褐色土 | 黒色土主体 ローム粒子多 | 27 増黑灰褐色土 | 黑色土主体 粘土多 ロームブロック(中～大)少 黏性あり |
| 9 黑褐色土 | 黒色土主体 ローム粒子多 砂粒多 | 28 増黑灰褐色土 | 白色粘土多 砂粒・ロームブロック(中～大)多 |
| 10 增黄褐色土 | ローム粒子多 ロームブロック(中～小) | 29 増黄褐色土 | ローム粒子・ロームブロック(中)・砂粒少 しまりあり |
| 11 増灰褐色土 | 黒色土・白土・粘土・砂粒多 | 30 増黄褐色土 | ローム粒子多 ロームブロック(中)・砂粒少 |
| 12 黑灰色土 | 黒色土主体 粘土ブロック(極大) | 31 黒褐色土 | 黒色土主体 砂粒多 |
| 13 明黒褐色土 | ローム粒子・砂粒多 粘土粒子少 | 32 黒褐色土 | 黒色土主体 砂粒少 ロームブロック(大)少 |
| 14 黑褐色土 | 炭化物 ロームブロック(中～大)多 | 33 増黄褐色土 | 白色粘土多 ロームブロック(中)少 |
| 15 增黄褐色土 | ローム粒子多 | 34 黑褐色土 | 黒色土主体 砂粒・ローム粒子少 |
| 16 黄褐色土 | ハードロースト 黒色土微 | 35 増黑褐色土 | 黒色土主体 砂粒・ローム粒子・ロームブロック(大)少 |
| 17 增黄褐色土 | ローム粒子・ロームブロック(小) | 36 増黑褐色土 | ロームブロック(小～大)主体 砂粒少 |
| 18 增褐色土 | ロームブロック(小～中)多 砂粒、炭化粒子少 | 37 増黑褐色土 | 黒色土主体 ロームブロック(小～中)少 |
| 19 増灰褐色土 | ローム粒子・砂粒多 山砂少 | | |

SK013ほか B-B'

- | | | | |
|---------|-------------------------------|-----------|------------------------------|
| 1 明黒褐色土 | ローム粒子・ロームブロック(小) | 13 増黄褐色土 | ロームブロック(小～中)多 しまりあり |
| 2 明黒褐色土 | ローム粒子子・粘土粒子多 粘性あり | 14 黒褐色土 | 黒色土主体 粘土粒子・炭化粒子・砂粒少 |
| 3 増黄褐色土 | ローム粒子・ロームブロック(小～中)多 砂粒少 | 15 黒褐色土 | ロームブロック(小)少 |
| 4 増褐色土 | ロームブロック(中～極大)多 | 16 増黑灰褐色土 | 黒色土主体 ロームブロック(小～中)少 |
| 5 明褐色土 | ロームブロック(大～極大) しまりなし | 17 黑褐色土 | 黒色土主体 ロームブロック(小～中)・砂粒少 |
| 6 増灰褐色土 | 粘土ブロック | 18 黑褐色土 | 黒色土主体 粘土ブロック(中)多 ローム粒子・粘土粒子少 |
| 7 增黄褐色土 | ロームブロック(中)少 しまりなし | 19 増黑褐色土 | ロームブロック(小～中)少 ローム粒子多 |
| 8 增黄褐色土 | ロームブロック(中)少 粘土粒子多 ローム粒子少 | 20 増黑褐色土 | ロームブロック少 砂粒少 |
| 9 黄褐色土 | ロームブロック(中～大)多 黏性あり | 21 増黑褐色土 | ロームブロック少 粘性あり |
| 10 增褐色土 | ローム粒子・ロームブロック(小～中)主体 砂粒少 黏性あり | 22 増黄褐色土 | ロームブロック(小～大)少 |
| 11 黑褐色土 | 黒色土主体 ロームブロック(中)少 | 23 増黑褐色土 | ロームブロック(小～中)・砂粒多 ローム粒子少 |
| 12 増褐色土 | ローム粒子・砂粒多 黏性あり | | |

SK097 D-D'

- | | |
|---------|----------------------|
| 1 増褐色土 | 砂粒・ローム粒子多 しまりあり |
| 2 黑褐色土 | 砂粒・ローム粒子多 しまりあり |
| 3 明黒褐色土 | ロームブロック(小)・ローム粒子・砂粒 |
| 4 增黄褐色土 | ロームブロック(小～大)主体 しまりなし |

第75図 西調査区土坑群 (6)

SK115は平坦な底面から壁が垂直に近い角度で立ち上がる方形土坑（1.58m×1.20m×0.94m）である。深さもあり、南側から流れ込むように覆土が堆積している。いずれの層にもロームブロックを多く含んでいる。この土坑の東西に横長のSK107（深さ0.56m）とSK125（深さ0.33m）が重複している。土層断面ではSK115が新しい（B-B'）。

また、東西にはほぼ一直線に並ぶSK152（深さ0.50m）、SH025（深さ0.55m）、SH026（深さ0.67m）、SH027（深さ0.52m）、これらと平行するように並ぶSK163（深さ0.50m）、SH049（深さ0.77m）、SK183（深さ0.50m）が建物の痕跡とも考えられる。SH025とSH049を南北に結ぶあたりから西側が緩やかに窪んで、西にある地下式坑SK117の堅坑の辺りで立ち上がる（C-C'）。

区画内を南北に縦断する土層断面（B-B'）を見ると、SH051を境に北側が緩やかに窪んでいることがわかり、この南側にSK150、SK179といった比較的大型の方形土坑を中心に13基の土坑が所在する。

SK150（1.98m×1.36m×0.32m）、SK179（2.02m×1.08m×0.33m）は東西に長軸がある浅い長方形土坑で、SK150にはSH044（0.79m×0.54m×0.24m）が重複している。SK150の東にはSK148（深さ0.24m）、SK149（深さ0.51m）、SK157（1.28m×0.96m×0.69m）が並んでいる。SK160は、平坦な底面で壁が垂直に近い角度で立ち上がる方形土坑（1.12m×1.04m×0.81m）である。これと隣接して不整形な平面形のSK158（1.24m×1.04m×0.61m）、SK159（1.26m×0.76m×0.66m）がある。これらのの中には遺物を伴う土坑があった。いずれも覆土から出土している。

SK157から出土したのは五輪塔水輪の破片である。内面にノミの加工痕跡があり、内側に空間をもつ形態であったとみられる。外面のノミ加工痕は磨り減っている。破断面も含めて砥石として利用した可能性がある。図示していないが板碑片も出土している。

SK159からは白色流紋岩質凝灰岩製の砥石が出土した。正面観は五角形で、縦断面は山形を呈する。正面の上下面と裏面が機能面であり、両縁辺は表裏両面が擦られて刃部のような鋭さをもつ。作業面は黒褐色に変色しており、この付着物状のものには光沢が感じられる。

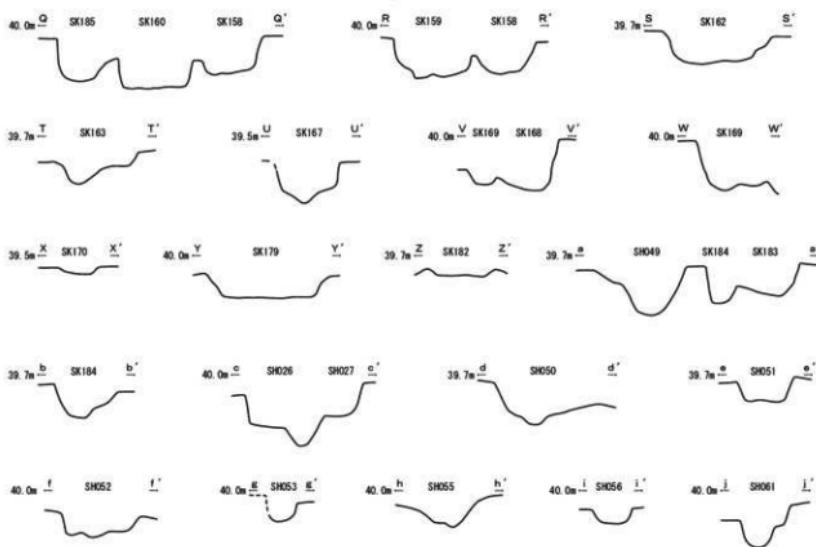
SK179から出土したのは擂鉢の口縁部の破片資料である。砥石として転用されたようで、口縁部の半分ほどに研磨痕がある。内面下半も器表面が剥離摩耗しているが、これは砥石転用の結果か断定できない。

SH044からは4点の砥石が出土した。いずれも白色流紋岩質凝灰岩を素材とする。1は正面と裏面にそれぞれ2面のほか右側面の全5面の作業面を確認できる。下部は正・裏面両面からの擦りにより、直線状の刃部が作出され、刃こぼれが連続する。またこの部分の墨色は剥がれ、本来の灰白色がのぞく。2は1、3と同様山形の形状を呈し、下縁部が刃器状である。砥石としての作業面は、正面2面、右側面2面、裏面に見られる。正面中ほどに平坦面に細い溝状の筋が横方向に入る。裏面下部の溝状痕は継位で4条確認でき、最長の筋は16mmほどである。3は1、2と同様、山形の形状を呈し縁辺が刃器状である。この部分の墨色は剥がれて薄い。砥石としての作業面は正面2面、裏面に見られる。正面中位と右側面に細い筋状痕が横方向に入る。4は撥型を呈する。作業面は正面、右側面、裏面に各2面ずつあり、計6面を数える。下部は正・裏面両面からの擦りにより直線状の刃部が作出され、一部潰れて面状となる。上端と下縁辺は本来の石材の色がのぞく。右側面に赤褐色の錆痕が斑状に残る。SH044にはこれら以外に土器、縄文石器が出土しており、いずれも混入品であろう。

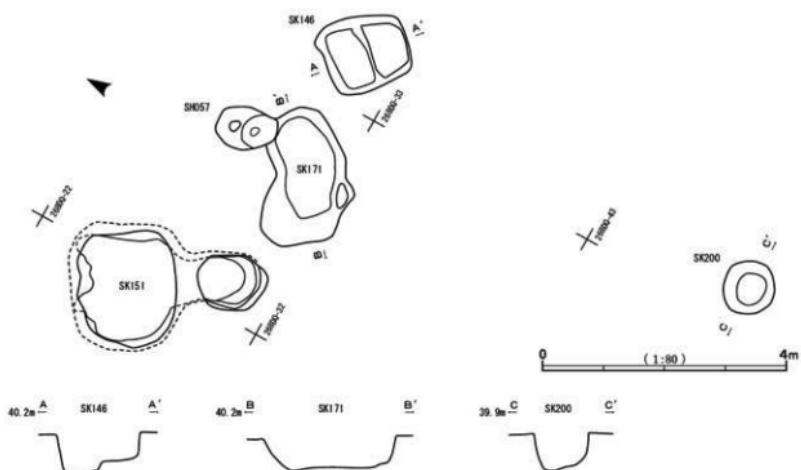
SK146・SK151・SK171・SK200・SH057（第76図、図版26～28）

SX013の南西、地下式坑SK151の東に東西に並ぶ土坑群である。

SK158・160・162・163・167・170・179・182～185、SH026・027・049～053・055・056・061



SK146・151・171・200、SH057



第76図 西調査区土坑群（7）

SK146は長方形で、2段に落ち込む土坑（1.40m×1.26m×0.60m）である。SK171も長方形土坑（2.18m×1.12m×0.55m）で北側にSH057（深さ0.42m）が重複する。SK200はやや離れて位置する円形土坑（0.90m×0.84m×0.60m）である。SK151からSK200に向かい確認面の標高が0.40mほど下がっている。いずれも出土遺物がないかあっても破片で図示できるものはなかった。

SK140・SK141・SK145・SK161・SK204、SH069・SH070（第77図、図版26～28）

SX013の南東に位置する土坑群である。SK145、SK141、SK161、SK204、SK140が西から東に並んでいる。2m南にSH069、SH070がやはり東西に並ぶ。これらの確認面は北から南に向かって低くなっている。SK141は方形土坑（1.96m×1.36m×0.39m）で、壁は緩やかに立ち上がる。ロームブロックを含む暗褐色土、黒褐色土が堆積していた。

SK145は底面が平坦な円形の土坑（1.52m×1.26m×0.89m）で、北西壁は段をつくって立ち上がる。ほかの土坑は深さ0.30m～0.43mである。

いずれも出土遺物はほとんどなく図示できるものはなかった。SK204から磨製石斧が出土しているが、土師器片も出土しており、混入品であろう。

SK074～SK078、SH007・SH013（第77・83図、図版24）

SX012の北側にまとまる円形と方形の土坑群である。

円形土坑SK074（深さ0.10m）、SK077（深さ0.27m）、SK078（深さ0.15m）は浅い。

SH007（深さ0.54m）とSH013（深さ0.62m）は底面に柱のアタリ痕跡があるが、これらと組み合う柱穴らしき遺構は確認できなかった。

SK075（1.16m×1.24m×0.25m）とSK076（1.40m×1.02m×0.53m）は方形の土坑で、SK076は底面が平坦で壁は垂直に立ち上がるしっかりした掘り込みである。

出土遺物は少なく、図示できたのはSK077出土の土師器1点である。須恵器杯蓋模倣の土師器杯である。底部外面は手持ちヘラケズリ、それ以外の部分には丁寧なミガキ調整が施されている。混入品である可能性が高い。

SX012、SK090・SK091A・B・SK096・SK108・SK112・SK114・SK126・SK127～SK139・SK144・SK181・SK197、SH008・SH019～SH024・SH030～SH043・SH064～SH1066・SH071～SH074

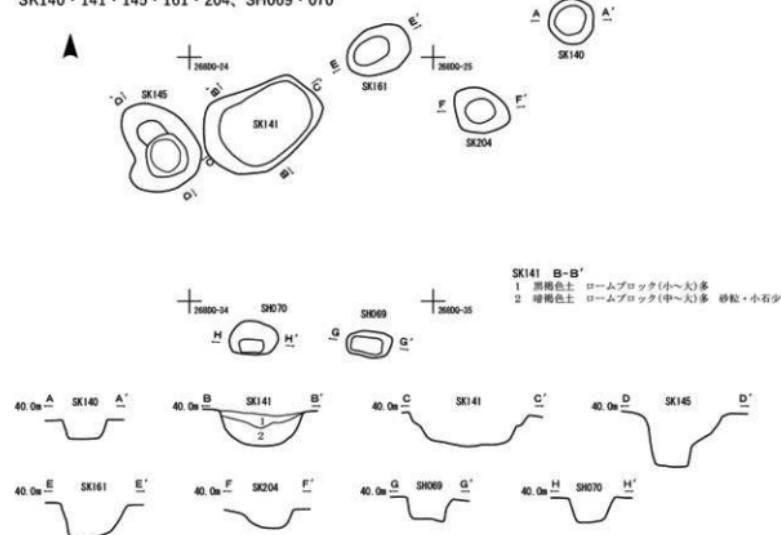
（第70・78・79・82・83図、図版22・24～27・35・40・45・48）

SX012は西調査区東側の調査区間に沿って南北に確認された台地整形区画である。東側は調査区境の道路で立ち上がりを確認できておらず、また南側の立ち上がりも土坑群と重複しており、やはり確認できない。このため全体の形状や規模は不明である。西から東に向かい僅かに窪んでいる。区画内と周辺に土坑がまとまっており、特に南側には4基の井戸を含む土坑が密集している。

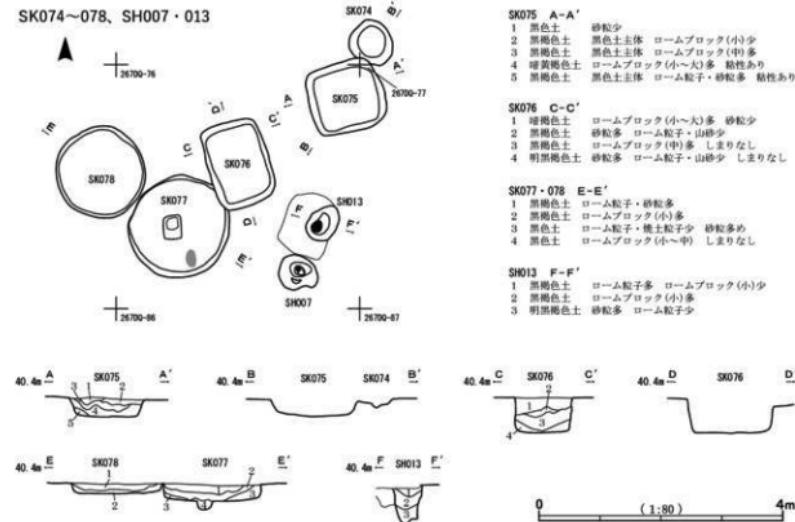
SX012からは多数遺物が出土しているが、図示可能な遺物は僅かであった。土器類のほか、石塔や板碑の破片も含まれる。1は皿型のカワラケである。底部外面は回転糸切り後無調整、それ以外はすべてロクロナデ成形である。口縁部外面には「一」の墨痕があるが、文字として記されたものなのか否かは不明である。内外面の器表の隨所にヌタが見える。2は漸戸・美濃の無高台と考えられる陶器小皿の破片資料である。口縁部端部内外面に灰釉が漬け掛けされている。

SK090、SK096、SK112はSX012の北西に位置している土坑で、周辺にSH008、SH020～SH024などの小型の土坑が所在する。SK090は浅い方形の土坑（1.20m×1.04m×0.17m）で、ピット状の掘り込みが重

SK140・141・145・161・204、SH069・070



SK074～078、SH007・013



第77図 西調査区土坑群 (8)

複している。SK112もSK090と同様の深さ0.11mの方形の浅い掘り込みで、SH020～SH024が隣接する。SK096は梢円形土坑が連結したような形態で、底面には凹凸があり、深いところで0.32mである。いずれも出土遺物は僅かで、図示できるものはなかった。

SK091A・BはSX012の北端に位置する重複する2基の方形土坑である。土層断面から、SK091Bが後から掘り込まれていることがわかる。SK091Aが深さ0.66m、SK091Bが深さ0.54mである。出土したのは五輪塔地輪の隅の一部で、砂岩下面にノミ加工痕跡が残る。被熱により変色する。

SX012とSX013の間には、SK108、SK126、SK197の3基の井戸が1mほどの間を空けて南北に並び、SK114がSK197の東5mのところに位置している。この4基の井戸に囲まれた4m～5m四方に大小の土坑が密集してつくられている。

SK131～SK136はSX012の南にあたるところに位置しており、このうちSK132、SK135などは比較的底面が平坦で、壁の立ち上がりの傾斜が少ない土坑である。これらと重複して、ピット状の土坑が複数連結するようにつくられている。出土遺物はないかあっても僅かで、図示できるような遺物はなかった。

井戸SK114と井戸SK197の中間に位置するSK144、SK181、SH066は重複している。SK144とSK181は平坦面を伴う土坑で、3基のピットが並んだような状態である。SK144は深さ0.68m、SK181は深さ0.74m、SH066は深さ0.61mである。SK144から出土した硯一面を図示した。粘板岩製で、墨池部分は欠失している。墨丘が使用により窪んでいる。側縁部を砥石として使用している。

SK138は円形土坑（1.04m×0.94m×0.58m）で、下層には白色粘土を多量に含む黒灰褐色土が堆積し、上層の覆土は黒色土を主体としている。遺物は僅かで、図示できるものはなかった。

SX014、SK142・SK143・SK172・SK173・SK186・SK187・SK194・SK198・SK199、SH058～SH060

（第80・83図、図版23・26～28・35・41・47・50）

SX014は西調査区南東の台地整形区画である。長軸が北西に向く長方形の区画で、幅は4.26mである。北西部の短辺は立ち上がるが、南東部は調査区外で、立ち上がりは確認できなかった。幅4.0mの道路を挟んで東調査区には硬化面をもつSX011が南北に広がるが、SX014では硬化面は確認できなかった。区画周辺の標高は39.8m～39.9m、区画内は区画中央の標高が39.4m前後で、周囲より0.4m～0.5m低くなっている。区画内と周辺に土坑が確認されている。

SX014内から出土した遺物はあまり多くない。中・近世土器、石塔や板碑を含んでいた。土器類の一部を図示した。

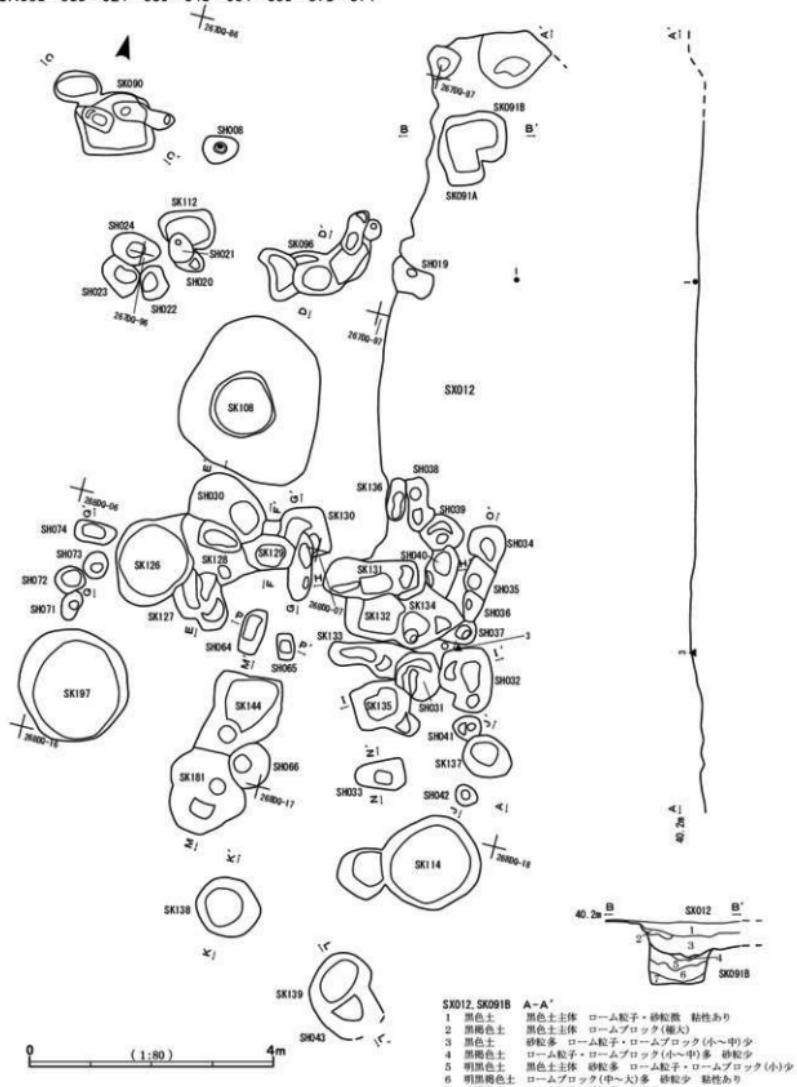
1はカワラケである。底部外面は回転糸切り後無調整、それ以外はロクロナデ成形である。内外面ともに褐灰色で、全体に黒ずんでいる。2は小片のため断定は難しいが、底径や傾斜が1に近いことから、同じくカワラケと判断する。底部外面は回転糸切り後無調整、それ以外はロクロナデ成形である。

3は内耳土器の口縁部付近の破片資料である。内外面ともににぶい赤褐色で、瓦質の仕上がりではない。胎土中に金雲母微粒を多く含む。

区画北西端には、区画の立ち上がり際に円形のSK173（0.86m×0.84m×0.24m）がある。また区画内には方形のSK172（1.32m×1.26m×0.27m）と梢円形のSH058、SH059、SH060、SK194がSK172を挟んで南北に並んでいる。SK194はSX014の立ち上がりと重複する不整形な土坑で、底面は凹凸があり、区画と重複する部分が深く掘り込まれている。

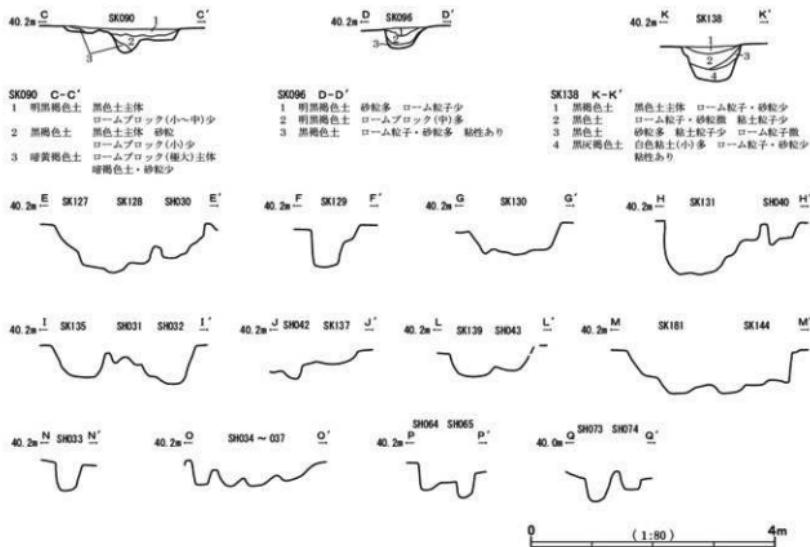
また、区画東側の調査区境に沿ってSK142、SK143、SK198、SK199の長方形土坑が南北に4基並んで

SX012, SK090 · 091A·B · 096 · 108 · 112 · 114 · 126~139 · 144 · 181 · 197
SH008 · 019~024 · 030~043 · 064~066 · 071~074



第78図 西調査区十坑群 (9)

SK090・096・127~131・135・137~139・144・181、SH030~037・040・042・043・064・065・073・074



第79図 西調査区土坑群（10）

いる。いずれも底面が平坦で、断面形が逆台形のしっかりした掘り込みである。深さはSK199が0.79mと深く、ほかは確認面から0.38m~0.44mであるが、標高で比べると3基の差は僅かである。

区画外の西側には長楕円形のSK186、長方形のSK187が位置する。SK186はSK194と同様に底面に凹凸がある。SK187は南側の円形土坑と北側の方形土坑が重複したものかもしれない。円形土坑の底面は平坦であるが、方形土坑の底面は擂鉢状である。

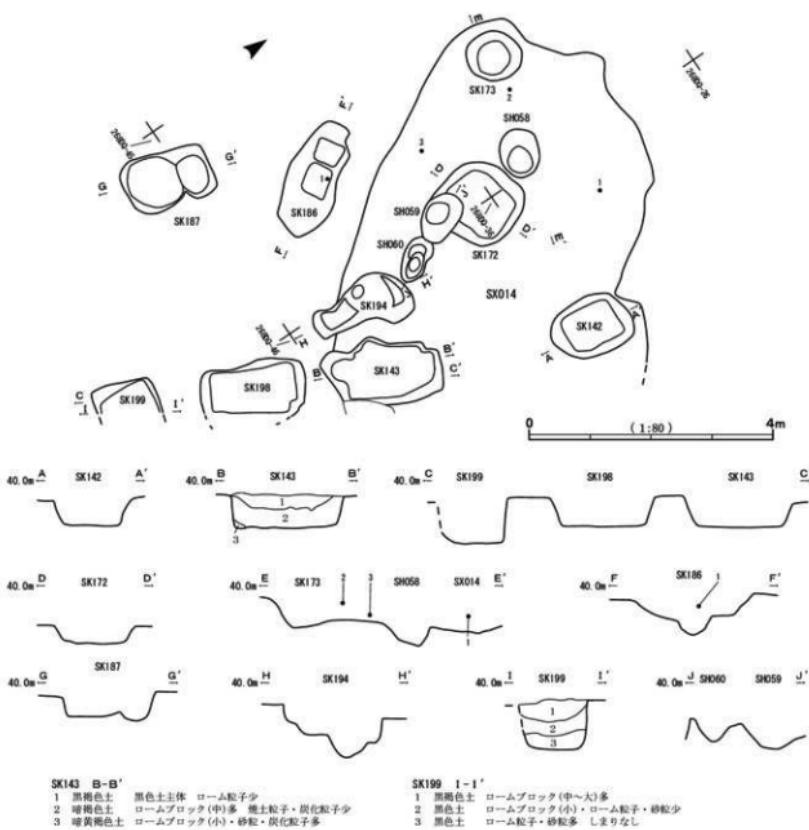
土坑のうち遺物を出土しなかったのは区画内のSK172、SK173とSH058~SH060で、これ以外にはいずれも僅かずつではあるが中・近世土器を含む遺物を伴う。また、SK194とSK186出土土器が接合した。このうち図示できたのは2点である。

SK143-1は板状の砥石である。流紋岩質凝灰岩製で、表面全体が赤味のある明るい茶褐色であり、何らかの溶液に浸けたか、塗布したものであろう。新しい欠損部分は灰褐色である。使用面は正面と両側面であり、裏面は大きく剥落したとの変色である。この茶褐色部分には磁性はない。またSK186-1は内耳土器の底部付近の破片資料である。前述したように、すぐ東側にあるSK194の出土破片が接合している。胴部と底部の境には明瞭な稜線を持ち、辛うじて器表は内外面ともに瓦質に仕上がっている。

SK188~SK193・SK195・SK196・SK201~SK203 (第81・83図、図版23・28・41・49)

西調査区南東の調査区境に沿って南北に並ぶ土坑群である。SX014の南15mのところにまとまっている。確認面の標高はSX014より0.50m~0.60m低い。調査区境の道路を挟んで東側の東調査区側にSX011と土坑群が位置する。またこの土坑群より西側は擾乱により、確認面が大きく削られており、遺構を確認できな

SX014、SK142・143・172・173・186・187・194・198・199、SH058～060



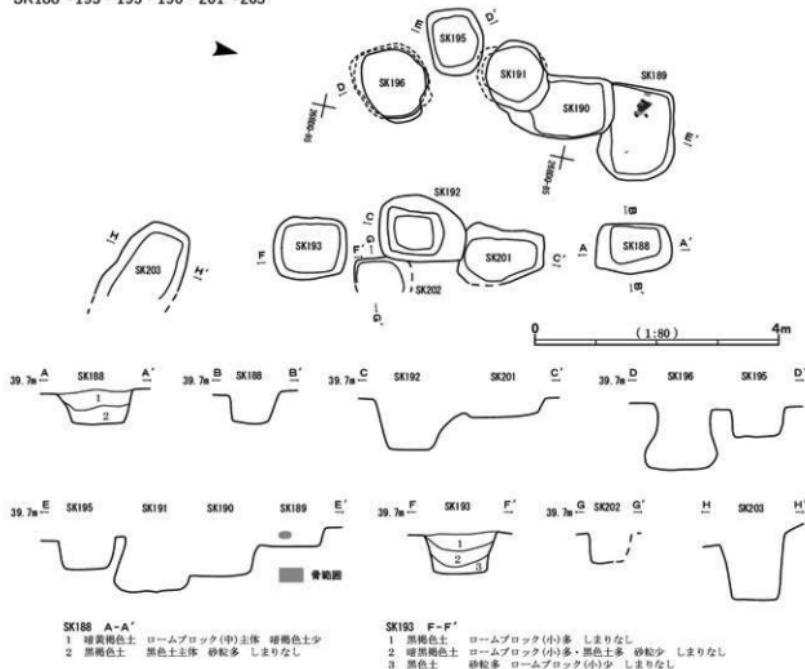
第80図 西調査区土坑群 (11)

かった。

SK191（深さ0.96m）とSK196（深さ1.09m）は円形で、直径1.12m～1.16m、深さが1m前後あり、壁の一部を袋状に掘る形態である。このほかは方形の土坑群で、少しづつ重複しながら南北に2列平行に並んでいる。いずれも底面が平坦で壁の立ち上がりもしっかりしている。SK203の東半分は調査区外のため未調査であるが、確認できるところでは最も深く0.97mある。

SK189は、西列の北端に位置する東西に長軸をもつ長方形土坑（1.52m×1.24m×0.32m）で、ウマの骨を出土した（第2章第4節）。歯は底面からやや浮いて西端から出土している。それ以外の部分は崩壊して範囲を捉えられなかった。

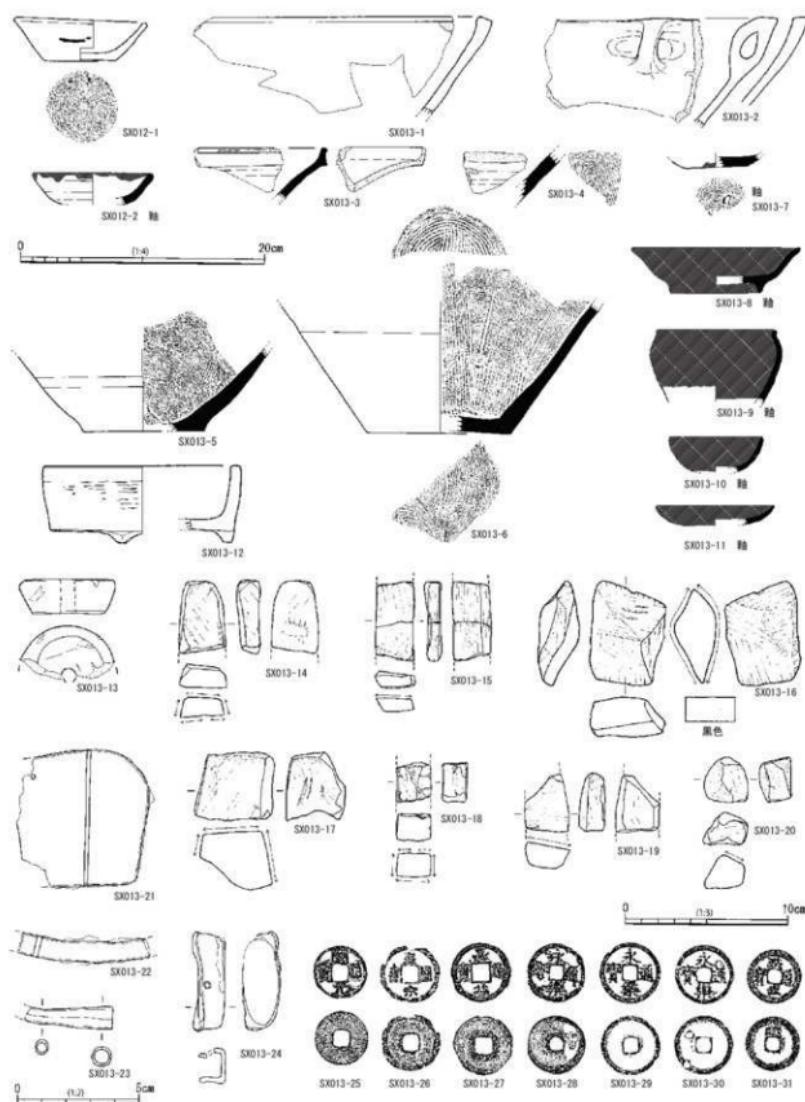
SK188~193・195・196・201~203



第81図 西調査区土坑群 (12)

SK191では焼土と炭化物が底面よりやや上から出土し、遺物は穂摘具の可能性が考えられる薄い板状の鉄製品1点出土した。

このほかSK201以外では僅かずつ遺物が出土しているが図示できるものはなかった。



第82図 西調査区土坑群出土遺物（1）



第83図 西調査区土坑群出土遺物（2）

第3節 遺構出土の遺物

グリッドや表面採集遺物など、遺構に伴わない遺物について、旧石器時代～弥生時代と古墳時代以降の2つの時期に分けて説明する。

1 旧石器時代～弥生時代

第1章で記載したように、今回の調査では旧石器時代は確認調査で終了したが、上層の確認調査や上層遺構の覆土に旧石器時代石器が混入していた。また、縄文時代～弥生時代の遺構も確認できなかったが、土器・石器が出土している。

縄文～弥生時代の土器と旧石器時代石器・縄文時代石器の2種類に分けて、遺構出土遺物として報告する。

土器（第84～86図、図版42・43）

1～12は早期前葉前半の撚糸文土器で、1～7は口縁部、8～12は胴部である。1～4は口縁端部が肥厚するもので、縄文(R L)が施される。5は口縁部が強く外反するもので、撚糸文縱走を模して縄文(R L)を斜位に施す。6は口縁端部がほぼ直立するもので、撚糸文(R)が施される。7は短い口縁端部が無文で、やや肥厚する。撚糸文(R)が施される。8～10は胴部に縄文(R L)、11、12は撚糸文(R)が施される。1～4は井草式、5、6は夏島式に比定しうる。

13～20は早期前葉後半の撚糸文土器である。13は口縁部で、端部にナゾリによる凹線で無文帯を作出し、以下にR L-L Rによる異方向施文で羽状縄文を施す。14～20は胴部である。14は太目で巻きの粗い原体によって撚糸文(R)を施す。15～20は胴部で、やはりR L-L Rによる異方向施文で羽状縄文を施す。以上は撚糸文土器終末の花輪台式系に比定される。

21は早期後半条痕文土器で、外面に条痕文が施される。

22は前期中葉黒浜式で、縄文(R L)が施される。

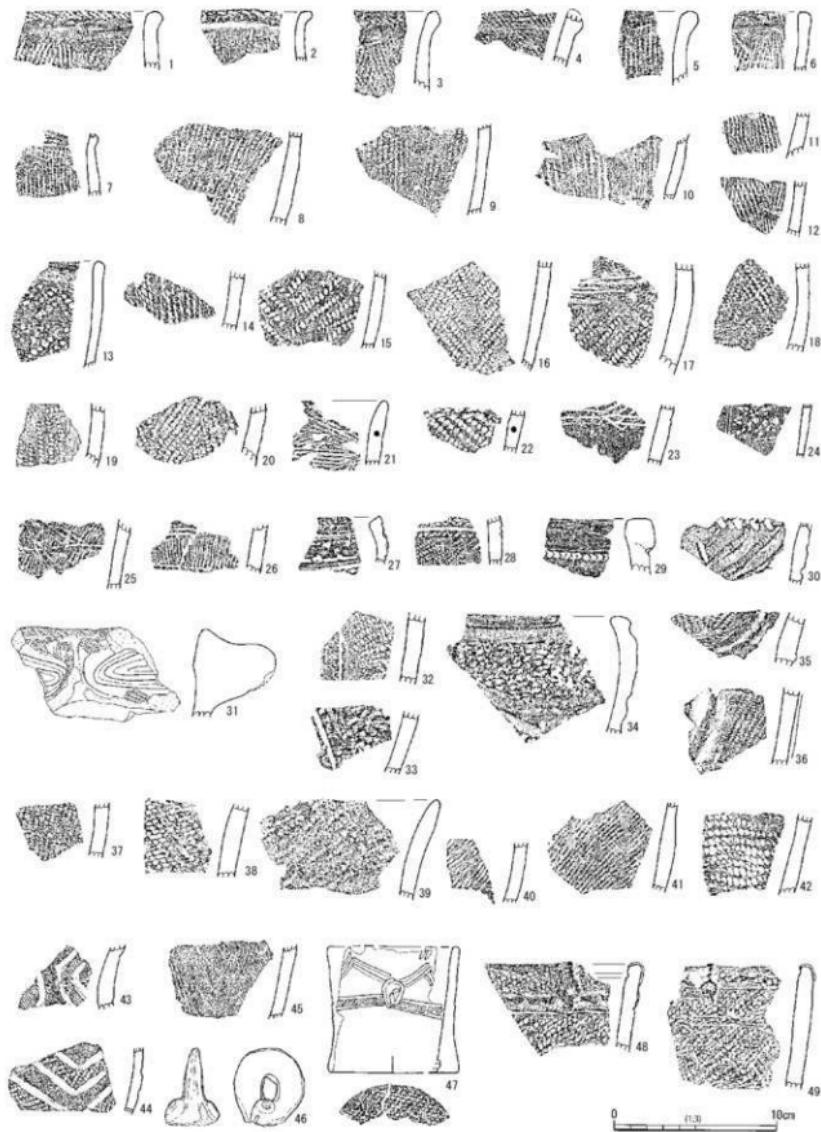
23は前期後葉浮島式で、半截竹管による平行沈線が施される。

24～26は前期末葉興津式である。24は半截竹管を用いた平行沈線文による区画内に、肋脈のある貝殻腹縁による刺突文が充填される。25、26は同一個体で半截竹管を用いた平行沈線文による区画内に幅広の爪形文が密に充填される。

27、28は中期初頭五領ヶ台式である。27は口縁端部に交互刺突による鋸歯状モチーフを作出し、以下に沈線文と付随する刺突文が施される。28は横位沈線文に付隨して刺突文が施され、地文に縄文(R L)が縱位に施される。

29～31は中期前葉阿玉台式である。29は肥厚する口縁端部に付隨して角押文が施される。胎土中に粗い長石粒などが含まれる。30は刺突文と縄文の側面圧痕文が施される。大木7b式系の可能性がある。31は口縁部に分厚い枠状区画が形成され、複列の沈線が区画に付隨する。口縁端部上と枠状区画には縄文(R L)が施される。胎土中に雲母粒、長石粒などが多く含まれる、阿玉台IV式である。

32～42は中期後葉加曾利E式である。32、33は地文上に垂下する沈線が施される。地文は縄文(R L)で、加曾利E I式である。34はキャリバー形の口縁部で、湾曲が緩やかである。区画内には縄文(R L)が施される。加曾利E III式である。35、36は充填系の胴部で、隆起線の側縁にナゾリを加えている。地文は縄文(R L)である。37～42は縄文のみの胴部破片で、地文は38が縄文(L R)であるほかはすべて縄文(R L)である。



第84図 遺構外出土遺物（1）縄文土器

43、44は称名寺式の精製深鉢形土器の胴部片である。J字文や渦巻文などを変化させた複雑な文様構成をとり、称名寺I式後半と考えられる。いずれも沈線文に合わせて縄文（LR）を充填した後で、無文部分を磨いている。

45は粗製深鉢形土器の胴部片である。不規則な条線文が施される。細かい時期比定は困難で、称名寺式から堀之内式までのいずれかの段階の所産であろう。

46は堀之内1式の深鉢形土器の波状口縁部頂部に付く環状把手であろう。

47～49は堀之内2式である。47はコップ形の小型土器で、中位に水平な縄文（LR）帯をもち、おそらく4か所にO字状の沈線文を加え、そこを交点として口縁直下まで2条の沈線で三角形文を形成する。底面には網代圧痕が認められる。48、49は粗い縄文を地文とする紐線文系の深鉢形土器口縁部片で、48は口縁部下約2cmの位置に紐線を巡らせ、49は口縁直下に紐線を巡らせる。数か所（4単位か）に口唇部と紐線文にかける継位の浮文を施す。

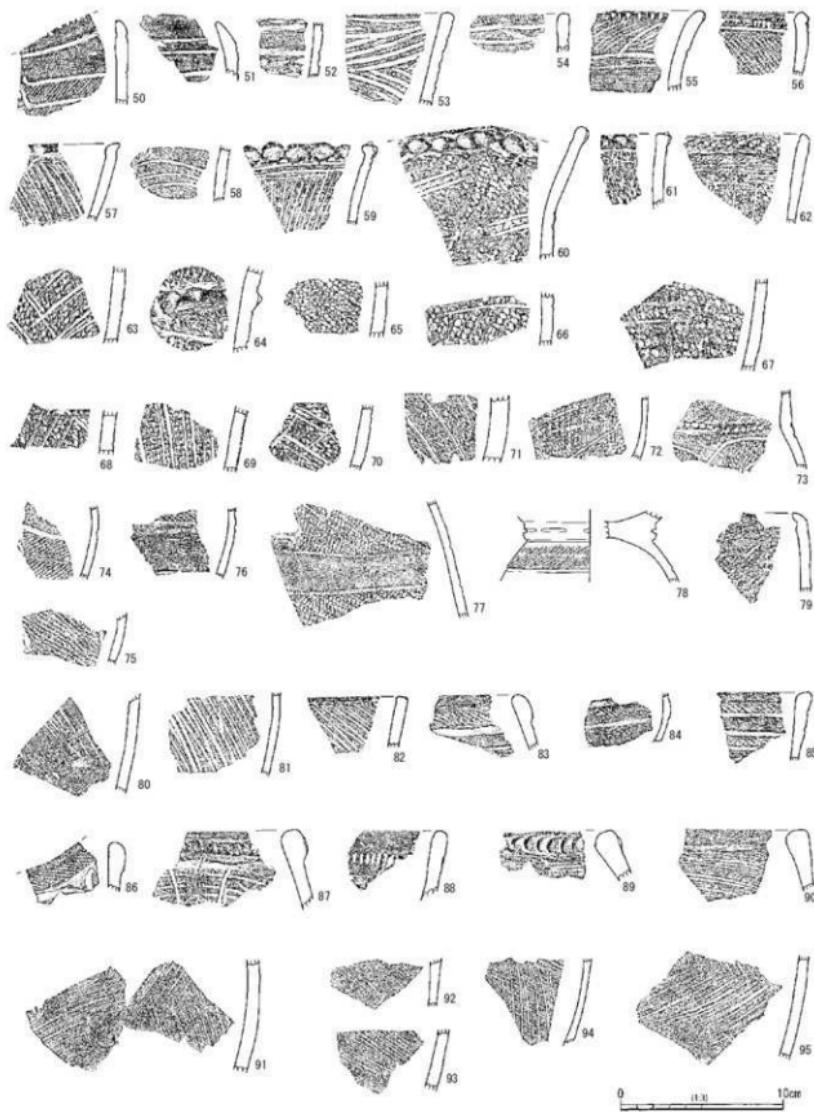
50は加曾利B1式の精製深鉢形土器の口縁部片である。波状口縁を呈し、口唇部にはヘラ状工具による細かい刻目を連続させる。胴部上位には縄文帯（LR横位施文）をもち、縄文帯の上下と中位には平行沈線が施される。平行沈線は規則的に途切れ、その箇所では沈線の端部を折り曲げて対向させている。

51～58は加曾利B2式である。51、52は精製浅鉢形土器または鉢形土器で、51は口縁部片である。内外面とも丁寧に研磨され、口縁直下の屈曲部以下に平行沈線を巡らせる。52は胴部片で、2条を単位とする平行沈線を巡らせ、沈線間に列点を附加している。やはり内外面ともに丁寧に研磨されている。53、54は大型壺形土器の口縁部片である。いずれも口縁直下から頸部に沈線による文様帯をもつ。53はおそらく上下を水平な沈線で区画し、その間に綾杉状の沈線を巡らせている。54は平行沈線による文様帯を形成すると考えられる。両個体ともに、内面には比較的丁寧な横位の研磨が施されている。55～57は鉢形土器の口縁部である。55は胴部中位から口縁部に向かって開く器形で、口唇部外面にヘラ状工具による刻目を巡らせる。沈線で区画された口縁部文様帶には斜行沈線を充填し、文様体間は丁寧に研磨される。56は口縁直下に2条の沈線を狭い間隔で巡らせて沈線間に刻目を連続させる。胴部には縄文（RL）が施される。57は口縁直下に浅い沈線を巡らせ、それより下には斜行する沈線を充填して文様帯を形成する。58は鉢形土器または浅鉢形土器の胴部片である。3条を単位とする鋭い沈線を弧状に連続させているようである。

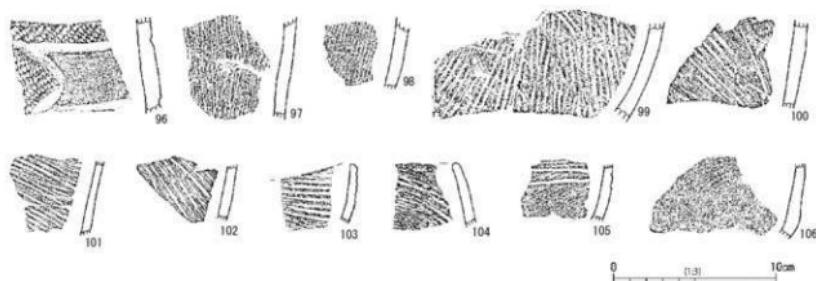
59～72は加曾利B1式～B2式の紐線文系を主体とする粗製深鉢形土器である。59は口唇外縁に高い紐線が貼り付けられて指頭による押捺を連続させ、内縁の凹線も深く明瞭である。頸部の紐線直下に水平沈線を巡らし、それより下には斜行沈線が先端の鋭い工具によって施されている。60～72は荒い縄文を地文とするもので、60、62、66、67、70、72の外面には半截竹管状工具による斜行条線が隨所に見られる。62は口唇外縁の紐線が剥離した状態である。口唇部まで地文の縄文を施した上に紐線を貼り付けていることが明瞭に観察される。

73～78は加曾利B3式の精製土器である。73は胴部上半に二重の波状縄文帯を8字状に連続して重ねるもので頸部の屈曲部に刺突を巡らせている。74～77は同種の磨消縄文文様か帶縄文を巡らせる深鉢形土器胴部片である。78は台付鉢形土器の底部から脚部上半の破片で、脚部には沈線で区画された帶縄文が、屈曲部には断続的な沈線を施した隆帯が巡る。

79～82は加曾利B3式の粗製深鉢形土器である。79は縄文が施される口縁部片で、縄文の細かさや器形から本期であると判断した。80～82は密な条線が施される破片で、地文に縄文をもたず、削りか粗いナデ



第85図 遺構外出土遺物（2）縄文土器



第86図 遺構外出土遺物（3）縄文土器・弥生土器

の後に条線が施されている。このうち82は口縁部片で、79とともに端部内面に凹線が巡る。

83~95は安行1式から2式の土器群である。83~86は帯縄文系深鉢形土器で、86は波状口縁波頂部近くの破片である。口縁部縄文帯直下に沈線文様が施されているが、内容は不詳である。87~89は紐縄文系粗製深鉢形土器で、いずれも紐線上には爪形の刻目が連続して施されて、頭部にはほぼ横位の条線が施されている。このうち87の頭部には、横位条線の上に「」状の沈線文様が描かれる。90~95は粗製深鉢形土器である。90は口縁部片で口唇部が著しく肥厚する。胴部の器厚は薄く、93にはヘラ削り調整の痕跡が顕著に残っている。

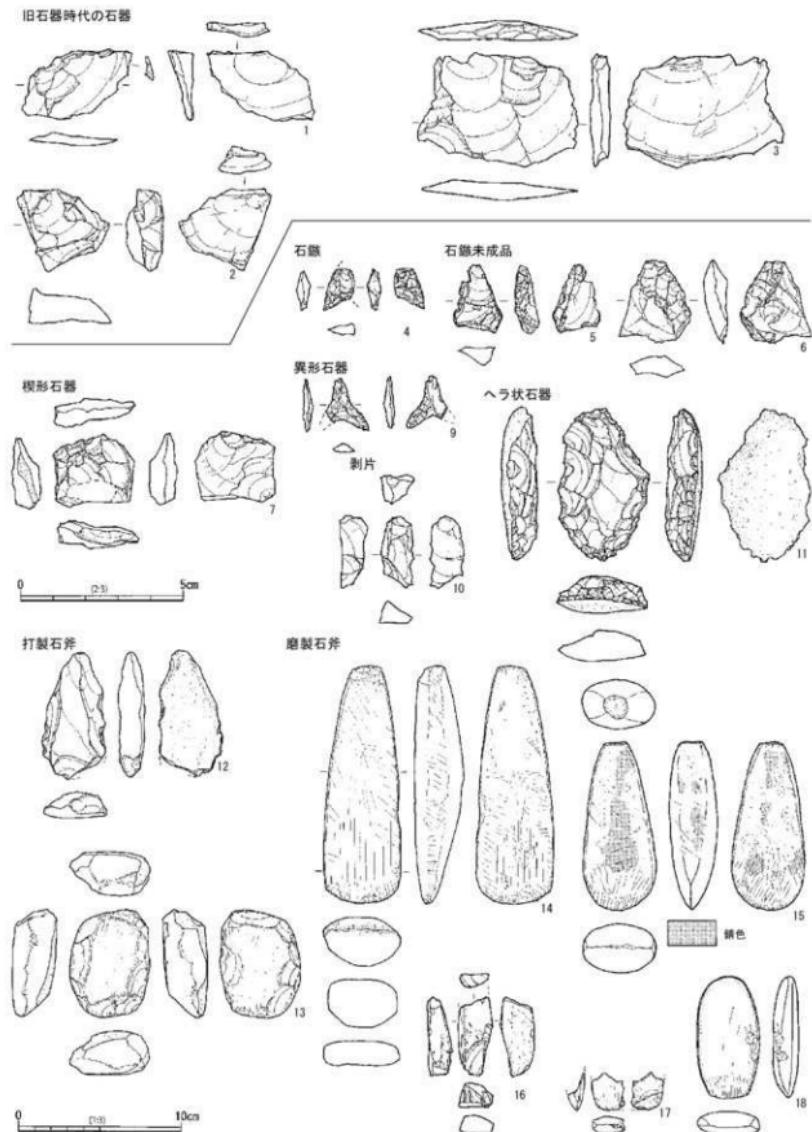
96~106は縄文晩期~弥生時代の土器である。96は前浦式の大型鉢形土器の胴部上半（頭部）の破片で、縄文帯間の「」字文が見え、その内側に縄文が施されている。97・98は晩期後葉と推定される粗製深鉢形土器の胴部片で、縦位の繊細な撫糸文が施されている。99~104は弥生前期後半、荒海3式古段階~4式古段階のいずれかの段階と推定される粗製深鉢・鉢形土器で、99~103は器面に貝殻状痕が施される。104はササラ状原体による条痕が施される口縁部片である。105は細かい縄文を地文とし、平行沈線が巡る深鉢形土器で、沈線はやや雑な変形工字文を構成する可能性があり、弥生中期初頭の荒海4式新段階に該当する可能性が高い。106は器面に付加条縄文が施される破片である。全体の器形などは不詳であるが、弥生時代後期の土器である可能性が高い。

石器（第87~89図、図版46・47、第9表）

1~3は旧石器時代の石器、4~40は縄文時代の石器である。

1は268DR-84から出土した。規則的に剥離された横長の目的的剥片である。同じ打面から打点を振り分けながら剥離作業が行われたことがうかがえる。弧を描く末端部は厚みがなく、ところどころ欠損する。石材は黒色頁岩である。2は268DR-35から出土した。器面を調整するための板状の剥片である。左側面は打点から4mmほど離れてはいるが、打点直下の折れと思われる。石材はガラス質黒色安山岩である。3はSX008覆土出土の剥片で厚みのない横長の四角形状を呈し、末端は階段状に収束する。打点は残っていないが、幅広いリングが打点直下で折り重なる。同様の剥片を同一方向から3片以上剥離した痕跡が残っており、規則的な工程を踏まえた上での目的的剥片作出がうかがえる。石材はガラス質黒色安山岩である。

4は石鎚の左半部である。縁辺に鋸歯状の凹凸が見られるが、全体的には僅かな膨らみをもつ直線状を呈し、脚先部は尖銳となる。刺突時の衝撃剥離痕が正面を深く削ぐ。右半部はこの衝撃で欠損したものと



第87図 遺構外出土遺物 (4) 旧石器時代の石器・縄文時代の石器

推定される。夾雜物の少ない漆黒の黒曜石だが、端部のごく薄い部分では青みを帯びた半透明である。

5・6は石鎚未成品で、5は平面形が二等辺三角形、横断面は三角形状である。右側面には背面側からの急角度の小剥離が連続する。石材は僅かに赤味を帯びた透明度の高い黒曜石である。6は右側縁に加工痕が連続するが、厚みが不均一なことから製作途中に生じた折れにより遺棄されたものと推測される。緑灰色で網目状構造は持たず、節理が少ない良質なチャートの剥片が素材である。

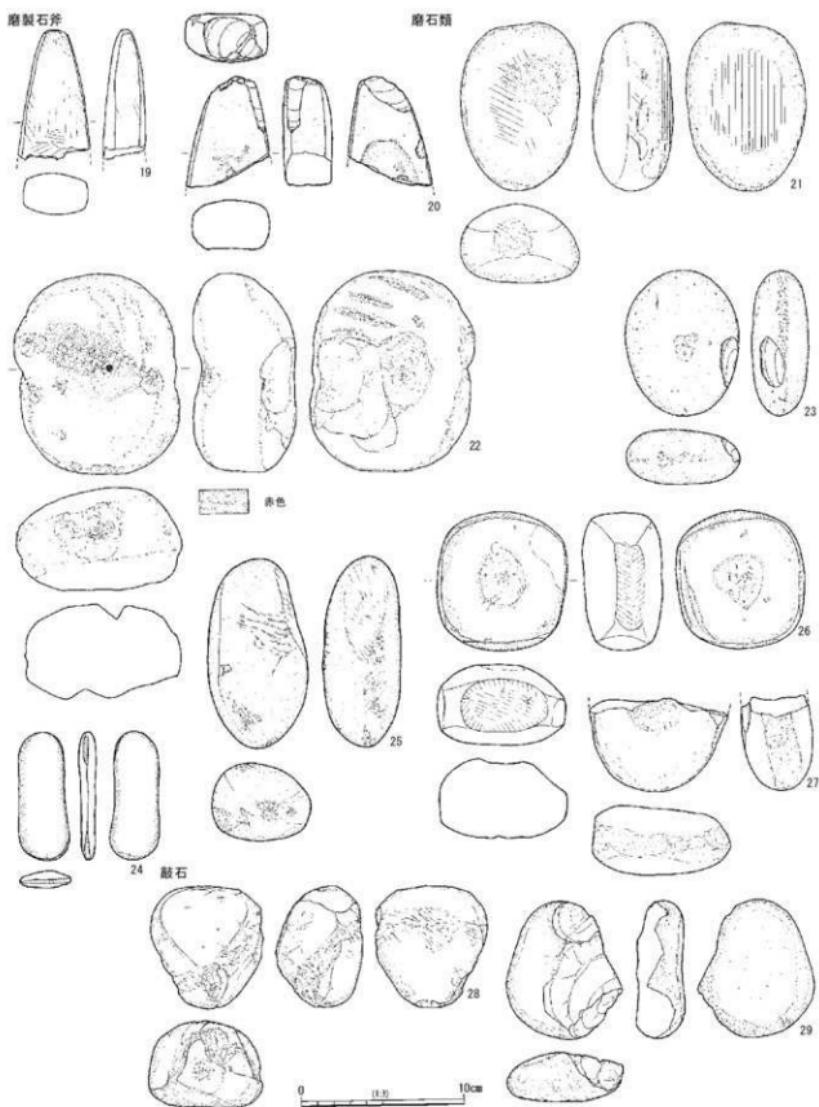
7は楔形石器で石材は硬質頁岩である。挟み割りにより上下両極からのリングが裏面中央部でせめぎ合ひ、上部縁辺に小剥離痕が連なる。左側面には帶状に自然面が残る。正面下側はガジリである。自然面・剥離面とも灰褐色で滑らかな質感だが、ガジリ部分は青みを帯びた灰色である。

9は正三角形の各辺が大きく内湾した、三叉状の形態を呈する。加工は主に正面側に施され、裏面には主要剥離面が残される。この形状から石鎚ではなく、異形石器と捉えた。石材は頁岩起源のホルンフェルスである。

10は剥片で、石材は玉髓である。断面三角形状の縦長剥片で、燧石に用いられることが多い石材だが、縁辺に潰れや擦痕はなく、剥離面は比較的新鮮である。時期・用途は不明である。11は筈状石器で石材は玉髓である。両側縁から末端にかけての下半部の加工は75°～85°と急角度で、縁辺ほど細かな剥離によつて丁寧に加工される。裏面はすべて自然面で、上部の僅かに括れた部分に薄朱色の変色痕が見られる。自然面は不透明な象牙色、剥離面は褐橙～黄橙色の半透明な玉髓を素材とする。

12、13は打製石斧である。12は砂岩製で、厚みのない棒状礫が縦に分割されたものを素材とし、周縁からの加工でざっくりとした二等辺三角形に整えられる。刃部右側は破損している。13は厚みのある流紋岩礫素材。周縁からの加撃により、平坦面の中ほどに自然面が残っている。稜線上は潰れて丸みがあり、剥離のリングの一部も平らに擦られている。自然面は緑色を帯びた暗褐色、剥離面は淡い赤褐色で、赤色玻璃質の脈が挟まる。

14～20は磨製石斧である。14は緑色凝灰岩素材で、基部の断面形は厚みのある楕円形、刃部付近は扁平な長方形である。正面は平坦に整えられており、横方向の擦痕は最終的には横方向で調整される。長幅比3：1である。裏面中央部の凹凸は着柄痕か。潰れた刃部は主に裏面からの擦りによって再生される。これらの形状から、乳棒状石斧（繩文時代前期に多出）が再加工されたものと思われる。基端部に敲打痕、潰れ痕がある。15は透閃石岩製で、すっしりと持ち重りがする。基部は幅と厚みが同程度の円柱状である。刃部は丁寧に研磨されて黒光りし、半円弧を描く。基端部は弱い敲打により僅かに凹む。基端部と刃部に本来の石材の色目が残っており、濃緑～黒色を呈する。16は緑色凝灰岩製で、小型角柱状を呈する。磨製石斧の基部とみられる。縦方向の衝撃により大きく破損しているが、正面・両側面は平坦な面で構成されており、横断面は角の立った四角形状となる。裏面は節理面である。17は使用時に破損したと推測される定角式磨製石斧の刃部である。刃部角は56°を計る。深緑色を帯びた濃灰色を呈する緑色凝灰岩で、破損面には黒色で光沢のある小粒の結晶が観察される。磁性は弱い。18は扁平な長楕円形状で、長軸方向の一端に直線状の刃部が作り出されている。正面側の膨らみは裏面側よりも大きく、片刃の刃器として使用されたものと推測される。暗灰色を呈し、全体に針状文が見られる。石材はホルンフェルスである。19は定角式磨製石斧の基部である。平坦面にやや鈍い光沢が見られるが、折れにより、範囲は不明である。石材は堆積岩起源のホルンフェルスである。20は砂岩の定角式磨製石斧の基部である。正面側に弱い凹みと敲打痕がある。基端部の欠損面から正面側に向けて角を落とすような小剥離が行われ、正面・側面の成す



第88図 遺構外出土遺物（5）縄文時代の石器

右角部は稜線を消すように継ぎに剥離される。これらは、剥離面の新旧関係から、刃部が遺存していた状態で加工されたものと推定される。

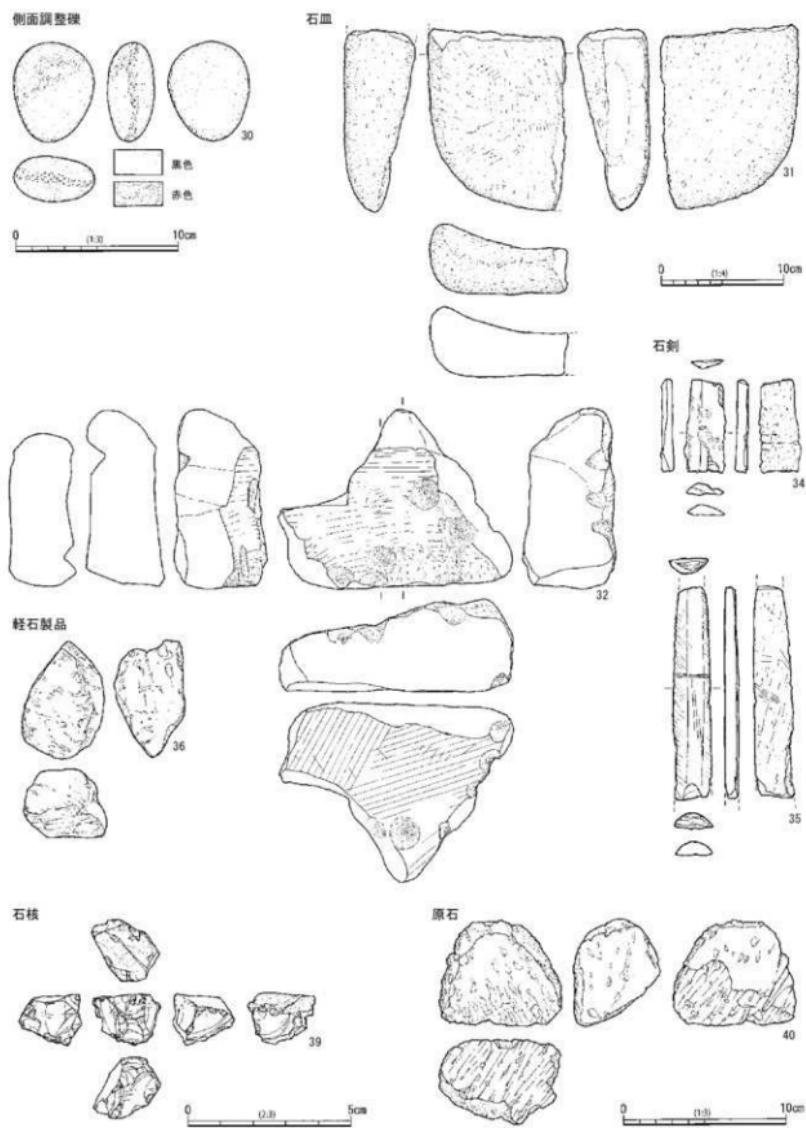
21~27は磨石類である。21は正面と下端部に敲打痕、裏面中央部に広く磨耗痕があり、光沢をもつ。全体的に褐色を呈するが、使用部位は鈍い灰色である。黒色の斑晶が満遍なく散る安山岩で、ずっしりとした質感である。斑晶には強い磁性がある。22も安山岩で裏面の大きな剥離は設置面を安定させるための角部除去を目的とするものと考えられる。凹み痕は正面と裏面の平坦面中央部にあり、正面の孔痕は約9mmの深さがある。赤味を帯びた部分に網掛けしたが、何らかの工具痕の可能性がある。23は花崗岩製で、厚みの均一な梢円形を呈し、両平坦面中央部分に弱い凹痕があり、その周辺は微光沢をもつ。側縁は表面がざらつく程度の弱い擦痕が廻る。右側縁に敲打による剥離痕が見られる。全体的に赤味や黒味を帯びているが範囲が曖昧なため網掛けはしていない。24は扁平な長梢円形を呈し、両端部は半円弧を描く。厚みは8.5mm~10mmとほぼ均一で、端部及び端部に近い側縁部に弱い擦痕が見られる。石材の表面に針穴状の細かな凹みが満遍なく散るホルンフェルス製である。25~27は砂岩製である。25は正面・側面ともに長梢円形で、全体的には円柱のような形状で、ずっしりと持ち重りがする。正面やや上方に線状の敲打痕が見られるが、小さな梢円形の点の集まりが連なっているようにも感じられる。上部右側は緩く凹み、握部を作出している。側面下半部に弱い擦痕が見られる。26は上・下・両側縁は丸みを残しながら擦られ、全体的に厚みのある四角形状となっている。磁性はない。両平坦面中央部の凹みの深さは正面で約4mm、裏面は約2mmである。27は正面中央部に深さ4.5mmの緩やかな凹みがあり、ここから生じた折れのため、上部が欠損する。側面には弱い擦痕が廻り、表面を薄く削ぐが、器形を損なうものではない。厚みのある砂岩の円盤を素材とする。

28、29は敲石でどちらも砂岩を素材とする。28は下方1/3に最大厚があり、全体の形状は丸みをもった三角錐状を呈する。幅1.0cm~1.8cm程度の弱い凹みが帯状に廻っているが、裏面で途絶え、周回はしない。紐のようなもので括られていた跡ともみえる。粗粒の砂岩礫を素材とする。29は右方向からの打撃により正面の1/2が剥がれる。この敲打痕からは先端が凸状のもので加撃されたことが推測される。両端部にはごく弱い敲打痕が見られる。砂岩礫を素材とする。

30は砂岩の側面調整礫で、側縁に形状を変えるほどではないが弱い擦痕が廻る。部分的に火熱による赤、黒変色が認められる。

31~33は石皿である。31は1/4に分割された石皿の左下部分。縁辺の高まりは弱く、使用時の緩やかな凹みと手前側の落とし込み部の境界は曖昧である。折面の稜線は丸みがあり、分割後も利用されたものと推定できる。濃灰、淡褐灰色の斑晶がある多孔質安山岩素材。32は遺存部位が少ないため、全体の形状は把握できない。擦面、凹み痕は正面、裏面の平坦な面のみに認められる。凹み痕は12か所残存しており、平坦面からの深さは9.3mm~15.9mmである。磨面と縁辺に段差はなく、厚みはおおむね均一である。黄褐色の砂岩製である。33は小片のため図示しなかった。安山岩製で、正・裏面に石皿としての作業面が残るが、側縁はすべて折面である。黒色や白色の斑晶が全面に散るが、正面は斑晶が抜け落ちており、小さな孔状となっている。

34、35は粘板岩製の石剣である。節理に沿って長軸方向に削がれた石剣片であり、上・下部の折れは剥がれた後に生じたものである。34の折跡は不自然な直線状で、裏面には横方向の薄い溝が刻まれている。これらはきれいに折り取るための刻目ではないだろうか。35は側面全体に斜め方向の細かな筋状痕が入っ



第89図 遺構外出土遺物（6）縄文時代の石器

ており、右上部の条線は特に密である。また、中央部に深さ0.2mmほどの細い溝が刻まれている。裏面に及んでいないことから、上下の折れ同様、剥がれた後につけられたものとみられる。めくるように剥離する濃灰色の粘板岩製である。

36～38は軽石製品である。36は不定形だがごく浅い帯状の凹みが側面に残る。下部は平坦だが、擦痕は見受けられない。37は軽石製品の上部片で穿孔痕が残る。脆弱な上、遺存している部位が少なく、元の形状を推定できない。38は比較的平坦な正面側に緩やかな丸みをもった凹み痕が見られる。全体的に滑らかで気泡が小さく、裏面は自然面かと思われるが、作業面が磨耗したものかもしれない。

39は台石などの固い設置面に据えた状態で、上方から加熱された石核である。楔形石器とも捉えられようが、大きさや発達した節理面など、生産性が認められないことから残核として分類した。石材は多重のバティナで構成され、剥離面は赤褐色が混在する黒色不透明を呈する。夾雜物はごく少量で、この凹みには褐色のローム粒子が入り込んでいる。

40は軽石原石である。全体の形状は山形だが、裏面下半部が斜めに擦られて平坦面が作出されたため、下端部ほど薄く直線的である。

2 収墳時代以降（第90図、図版35・36・44・45・47・49～51、第3・5～7表）

上層の確認調査で出土した遺物、遺構外から出土した遺物には、土器、土製品、石製品、銭貨を含む金属製品などがある。遺物の種類ごとに報告する。

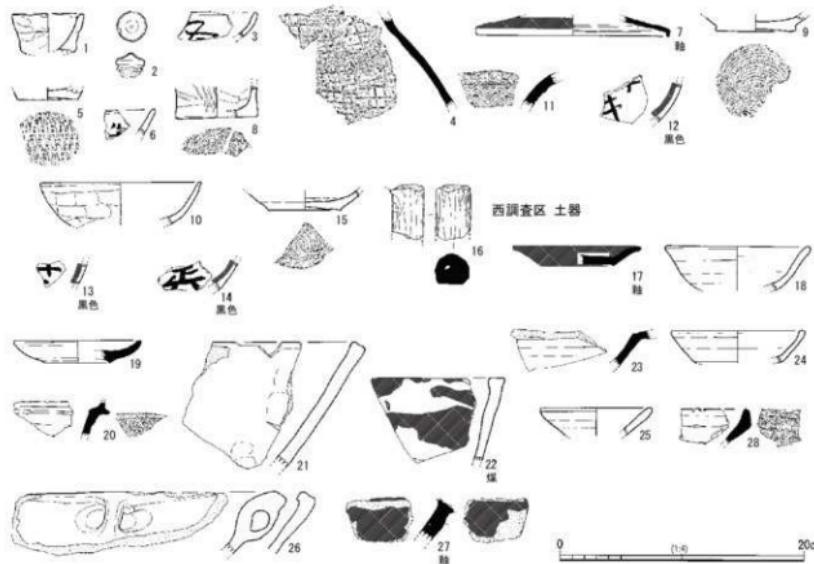
土器

土器は28点を掲載した。東調査区、西調査区に分け、グリッド順に報告する。

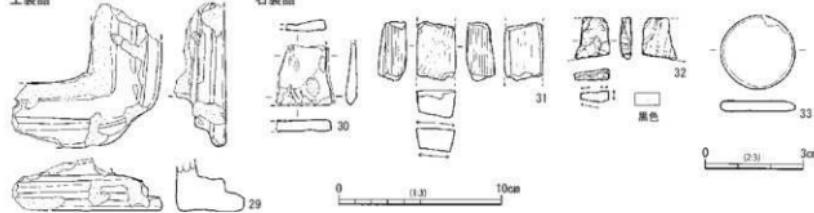
1～16は東調査区で出土した土器である。

1はSX008付近の268DR-29出土の手捏土器である。底部を欠失している。2は東調査区北辺の268DR-04出土のロクロ土師器の宝珠つまみである。完全な酸化炎焼成で、焼成の不良な須恵器とは異なる。宝珠の形態も崩れていないことから、酸化炎焼成の仏器の蓋につけられた宝珠と考えられる。3はSX008の東側268DR-20出土の浅い皿状の土器の口縁部破片である。復元径は11cm程度と小振りで、古代のロクロ土師器なのか中世のカワラケなのか不明である。口縁部外面に正位の墨書きが記されているが、文字の全容がわからず釈読は不能である。4はSX005付近の268DR-26出土の下総地域産須恵器壺の胴部上位の破片資料である。外面には格子状のタタキが見える。同グリッドに位置するSK044からも格子タタキの壺片が出土している。5は東調査区中央のT15トレンチ（268DR-25・35）出土の土師器の小型壺の底部の破片資料と考えられる。底径は5cm程度の小さなもので、底部外面に網代状の敷物の痕跡が見えることから、製作時に網代を敷いていたものと考えられる。内面はミガキで調整されている。6、7は東調査区中央のやや東寄りにあたるところから出土した。6は268DR-36出土のロクロ土師器杯の口縁部破片資料である。外面に正位で墨書きが記されているが、小片のため釈読不能である。胎土中に金雲母微粒を含む。7は268DR-35出土の湖西産の須恵器蓋である。外面上部全面に自然釉が厚くかかっている。8は268DR-37出土の手捏土器と考えられる破片資料である。底部外面には木葉痕が見える。体部外面にミガキ調整の痕跡が見えるため、手捏土器と判断してよいのか悩む資料である。9はSI011付近の268DR-39出土のロクロ土師器杯の底部片である。底部は下方に一段突出しており、底部外面は回転糸切り後無調整である。10はSI013付近の268DR-48出土の土師器杯の体部の破片資料である。口唇部は部分的に玉縁状に成形されている。11はSI032、SI033が周辺に所在する268DR-52出土の下総地域産と考えられる須恵器壺の頭部破片資

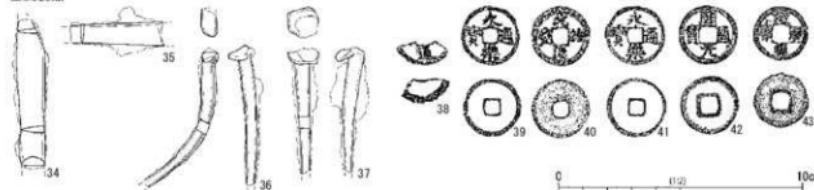
東調査区 土器



土製品



石製品



第90図 遺構外出土遺物 (7) その他

料である。頸部外面に波状文が描かれている。既知の下総地域の須恵器窯出土資料の中には、波状文が描かれている壺の資料は知られていないことから、未確認の窯の製品である可能性が高い。12・13はともにSX009とSX010の間の268DR-81出土のロクロ土師器杯の破片資料である。内面は黒色処理で丁寧なミガキが施されている。同一個体と考えられるが2片に接点はない。どちらも外面に複数画の墨痕があるが、訳読不能である。14は268DR-99出土のロクロ土師器杯で、内面は黒色処理で丁寧なミガキが施されている。外面には正面で墨書が記されており、残っている範囲では「正」に相当する文字が見える。複数の文字が記載されているものと考えられる。15はSI002～SI004付近の268DS-00出土のロクロ土師器杯の底部付近破片資料である。底部外面は回転糸切り後無調整で、ほかはロクロナデ成形である。16は東調査区南東の268DS-50出土の火舎の脚部と考えられる破片資料である。細い芯状のものを中心に巻き込んでいるようで中空である。火舎の内側を向くと考えられる部分の外面は広く削って平らにし、外側を向くと考えられる部分は細かく面取り状にケズリが入れられている。焼成はかなり硬質で、須恵器か土師器かは不明である。

17～28は西調査区で出土した土器である。

17は西調査区の北辺の267DQ-55出土の磁器の小皿である。内面の底部を除く内外面の器表面に灰釉がかけられている。底部外面には残存部位で2か所ほど釉が剥げている部分があり、重ね焼きの痕跡と考えられる。18は西調査区の北東辺の267DQ-77出土のロクロ土師器杯で、底部を欠失している。内外面に被熱と考えられる変色の箇所がある。19はSX013南東の268DQ-05出土の瀬戸・美濃の高台付小皿である。白味の強い灰釉を内外面にかけている。内面底部には重ね焼き痕跡の輪状の無釉部分がある。20はSX013南東のT6トレンチ（268DQ-05・15）出土の瀬戸・美濃の擂鉢の口縁部破片資料である。口縁部端部で外側に強くT字形に張り出す。内外面全面に濃い目の鉄釉がかかっている。体部内面には僅かに摺目が見える。21はSX014周辺の268DQ-25出土の内耳土器の破片資料である。外面の器表面は瓦質で、煤も付着している。胎土中には金雲母微粒を含む。22はSX014周辺にあたるT9トレンチ（268DQ-25・35）出土の内耳土器の破片資料である。外面は瓦質、内面にはぶい赤褐色に仕上がっている。胎土中には金雲母微粒を多く含む。23はSX014付近の268DQ-36出土の瀬戸・美濃で、折縁の深皿である。口唇部を欠失している。残存部分は内外面全面に灰釉がかけられている。24は268DQ-43出土のカワラケの小片である。23・24は西調査区南寄りから出土した。25はT24トレンチ（268DQ-54）出土のカワラケである。26は268DQ-63出土の内耳土器の内耳部分周辺破片である。外面は瓦質に仕上がっている。胎土中には金雲母微粒を含む。27は西調査区南端の土坑群付近に位置する268DQ-84出土の常滑産の鉢の口縁部破片である。内外面全面に薄く鉄釉がかかっている。28は西調査区南東端の268DQ-85出土の瀬戸・美濃の擂鉢の口縁部破片である。内外面全面に鉄釉がかかっており、内面には摺目が見える。

土製品

29は瓦塔基部である。土師質で、SI034出土品と胎土が酷似するが、同一個体と断定はできない。表面採集品である。

石製品

石製品には硯、砥石、碁石がある。

30は西調査区南寄りの268DQ-54出土の硯である。硯面の墨丘部分が使用により緩やかに窪んでいる。側縁を砥石に転用している。石材はホルンフェルスである。

31、32は砥石である。31は白色流紋岩質凝灰岩製で西調査区北西の267DQ-72から出土した。角柱状で、上下を欠損する。正面は微妙な凹凸があるが裏面は平坦でともに滑らかである。両側面には縦位の切出痕がある。32はSX013南東のT6（268DQ-05・15）出土で凝灰岩製である。薄い板状で、左側面を除く全面に平滑な面が残るが表面の剥落が目立つ。右下面に切出痕があり、下面是黒褐色に着色される。色調は赤味を帯びた薄茶色で、熱による変色と考えられる。T6内で確認されたSH044で4点の砥石を出土しており、その一部であった可能性がある。

33はSX003付近の268DR-66出土の粘板岩製碁石である。黒灰色を呈する。

金属製品

34～37は鉄製品である。34は刃部のある製品だが、刃部と茎部の間に僅かな括れが見られ、茎部の断面は蒲鉾状である。工具の一種であろう。SK016、SK018の周辺にあたる268DR-76から出土した。35は刀子の刃部である。SX013の南東にあたる268DQ-15で出土している。36、37は折頭釘で頭部が方形を呈する。36は267DQ-95、SX013北東、37は東調査区の268DS-00で出土した。

38～43は銭貨である。38が東調査区、43が表面採集品であるほかは西調査区北西側から出土している。38は破損品で、遺存するのは1/3ほどであるため銭種不明である。42が開元通寶、43が元豐通寶、40が元符通寶、39、41が永樂通寶である。

第3表 土器観察表

() : 植生域 [] : 道存値

調査	調査番号	出土地点	遺物番号	種類	器形	重量(g)	寸法(cm)	断面	内面	外側	底盤	測量		鉢土	成形	内面	外側	備考		
												内側	外側							
7	26	1	S0001 5.18	土器群	高台形器	80	(14.2) 6.8	177	177	177	177	石高脚少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
7	2	S0001 54	土器群	杯	-	20	-	12.0	7.4	177	177	石高脚少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
7	36	3	S0001 5	土器群	甕	-	-	-	-	-	-	石高脚少	磨化跡少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色			
7	4	S0001 6	陶器群	甕	5	(20.0) 15.9	-	177	177	177	177	長石微少	磨化跡少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色			
7	5	S0001 48.13	陶器群	甕	10	-	15.9	-	177	177	177	177	長石微少	直財	褐色	褐色	下端部			
7	6	S0001 35	陶器群	甕	-	-	-	-	-	-	-	長石微少	直財	褐色	褐色	前部				
9	29	1	S0002 14.40	陶器群	杯	100	14.6	2.9	-	177	177	石高脚少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
9	29	2	S0002 15	陶器群	杯	80	15.8	3.2	-	177	177	石高脚少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
9	3	S0002 1	土器群	杯	15	(13.0) 13.8	-	177	177	177	177	石高脚少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色	内側溶け上昇			
9	29	4	S0002 13.36	土器群	高杯	95	12.6	6.8	8.8	177	177	石高脚少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
9	29	5	S0002 13.25.30.33	土器群	瓶	25	(19.0) 15.6	-	177	177	177	177	石高脚少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色			
9	28	6	S0002 14.6.11	土器群	杯	30	11.0	3.8	5.2	177	177	四輪車少	直輪車多	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色			
9	7	S0002 32	土器群	杯	20	-	11.0	5.3	177	177	四輪車少	直輪車少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
9	28	8	S0002 1	土器群	杯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	外側溶け			
10	1	S0003 1.21.23	土器群	杯	30	(15.0) 3.1	6.9	177	177	177	177	石高脚少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
10	2	S0003 13.20.02.29	土器群	小切妻	30	(17.2) 12.6	6.0	177	177	177	177	石高脚少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
10	29	3	S0003 13	土器群	甕	10	(10.0) 10.0	10.0	177	177	177	177	石高脚少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色			
10	4	S0003 30	土器群	瓶	5	(17.1) 14.0	10.0	177	177	177	177	石高脚少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
9	28	1	S0004 1	土器群	高台形容器	10	14.5	9.8	-	177	177	長石微少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
11	29	1	S0005 1.2.22.27	土器群	杯	10	(15.2) 3.4	6.8	177	177	177	177	長石微少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色			
11	29	2	S0005 12.24.5	土器群	杯	30	(15.2) 3.2	11.2	177	177	177	177	長石微少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色			
11	29	3	S0005 12.24.12.25.23	土器群	甕	10	15.2	17.6	8.0	177	177	長石微少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
11	29	4	S0005 1.2.23	土器群	甕	10	15.2	17.6	8.0	177	177	長石微少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
11	29	5	S0005 1.2.23	土器群	甕	10	15.2	17.6	8.0	177	177	長石微少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
11	29	6	S0005 1.2.23	土器群	甕	10	15.2	17.6	8.0	177	177	長石微少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
11	5	S0005 29	土器群	甕	5	(25.2)	15.2	-	-	-	-	石高脚少	直石脚多	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色			
11	6	S0005 19.27	土器群	甕	10	-	12.0	11.0	177	177	177	177	石高脚少	直石脚多	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色		
11	7	S0005 1.2.2.16	土器群	甕	10	(15.2)	15.8	-	-	-	-	石高脚少	直石脚多	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色			
11	8	S0005 2.3	土器群	甕	10	-	10.0	12.0	177	177	177	177	石高脚少	直石脚多	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色		
11	25	9	S0005 2.9	土器群	手すり甕	10	8.0	6.3	3.8	177	177	177	177	石高脚少	直石脚多	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色	
12	29	1	S0006 11.18	土器群	高台形容器	10	(13.0)	6.9	8.7	177	177	177	177	石高脚少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色		
12	2	S0006 17	土器群	高台形容器	10	(12.0)	5.5	-	-	-	-	石高脚少	直石脚多	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色			
12	3	S0006 15	土器群	高台形器	30	-	(12.2)	6.0	177	177	177	177	石高脚少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色			
12	4	S0006 12	土器群	杯	10	-	11.7	6.0	177	177	177	177	四輪車少	直輪車多	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色		
12	1	S0007 1	土器群	杯	30	10.0	13.0	13.0	177	177	177	177	手すり少	-	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色		
12	2	S0007 1	土器群	杯	10	(13.0)	13.0	-	177	177	177	177	手すり少	-	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色		
12	5	S0007 1	手すり	甕文陶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ホワイト色	灰ホリーバル		
14	26	1	S0008 1.7	土器群	杯	80	12.0	3.7	5.8	177	177	四輪車少	直輪車少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色			
14	29	2	S0008 18.28	土器群	杯	70	13.1	3.5	5.9	177	177	石高脚少	直石脚多	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色			
14	3	S0008 1.3.6.5.50514	土器群	杯	40	(13.7)	13.5	16.0	177	177	四輪車少	直輪車少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
14	4	S0008 28	土器群	杯	10	(10.0)	10.0	10.0	177	177	177	177	四輪車少	直輪車少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色		
14	5	S0008 1	土器群	杯	5	(11.1)	6.0	177	177	177	177	四輪車少	直輪車少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色			
14	6	S0008 20	土器群	杯	-	-	-	-	177	177	177	177	四輪車少	直輪車少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色		
14	36	7	S0008 1	土器群	杯	-	-	-	-	177	177	177	177	四輪車少	直輪車少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色	
14	8	S0008 28	土器群	甕	-	-	-	-	177	177	177	177	四輪車少	直輪車少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色		
14	25	9	S0008 11.13	土器群	甕	30	(16.2)	10.0	177	177	177	177	四輪車少	直輪車少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色		
14	29	10	S0008 14.15.21.23.28	土器群	甕	20	(22.2)	15.5	177	177	177	177	四輪車少	直輪車少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色		
14	11	S0008 19.20.26.28	土器群	甕	10	(22.0)	12.0	177	177	177	177	四輪車少	直輪車少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色			
14	12	S0008 21	陶器群	甕	5	(20.0)	18.0	177	177	177	177	四輪車少	直輪車少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色			
14	13	S0008 22	陶器群	甕	5	(25.2)	10.0	177	177	177	177	四輪車少	直輪車少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色			
14	14	S0008 2	陶器群	瓶	-	-	-	-	-	-	-	石高脚少	直石脚多	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色			
16	1	S0009 29	土器群	杯	10	(15.0)	14.1	-	177	177	177	177	石高脚少	直石脚少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色		
16	2	S0009 1.8	土器群	杯	10	(15.0)	14.0	-	177	177	177	177	石高脚少	直石脚少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色		
16	29	3	S0009 1.3.6.5.50514	土器群	杯	10	(17.0)	17.0	-	177	177	177	177	石高脚少	直石脚少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色	
16	29	4	S0009 1.5.22.24	土器群	甕	45	(13.8)	10.0	177	177	177	177	石高脚少	直石脚多	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色		
16	3	S0009 2	陶器群	甕	10	(12.2)	6.0	177	177	177	177	石高脚少	直石脚少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色			
16	6	S0009 2	陶器群	甕	15	-	(12.1)	6.0	177	177	177	177	石高脚少	直石脚少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色		
16	1	S0010 2	土器群	杯	15	-	(12.5)	6.2	177	177	177	177	四輪車少	直輪車多	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色		
17	1	S0011 1.5	土器群	杯	45	(14.0)	6.6	177	177	177	177	手すり少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
17	2	S0011 6.9	陶器群	甕	5	(19.0)	16.1	-	177	177	177	177	手すり少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色			
17	3	S0011 1	陶器群	甕	-	-	-	-	-	-	-	内側17.7	外側17.7	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色			
17	4	S0012 1.5.5	土器群	杯	10	(22.0)	19.0	-	177	177	177	177	手すり少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色			
17	5	S0012 1.5	土器群	杯	10	(14.2)	5.1	177	177	177	177	手すり少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
17	6	S0013 1.3.4	土器群	杯	10	(14.2)	5.1	177	177	177	177	手すり少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
17	7	S0013 2	陶器群	甕	-	-	-	-	-	-	-	内側17.7	外側17.7	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色			
17	8	S0014 1.5	土器群	甕	-	-	-	-	-	-	-	手すり少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
17	9	S0014 1.5.5	土器群	甕	-	-	-	-	-	-	-	手すり少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
17	10	S0014 1.5.5	土器群	甕	-	-	-	-	-	-	-	手すり少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
17	11	S0014 1.5.5	土器群	甕	-	-	-	-	-	-	-	手すり少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
17	12	S0014 21	陶器群	甕	-	-	-	-	-	-	-	手すり少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
17	13	S0014 1.5.5	土器群	甕	-	-	-	-	-	-	-	手すり少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
17	14	S0014 1.5.5	土器群	甕	-	-	-	-	-	-	-	手すり少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
17	15	S0014 1.5.5	土器群	甕	-	-	-	-	-	-	-	手すり少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
17	16	S0014 1.5.5	土器群	甕	-	-	-	-	-	-	-	手すり少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
17	17	S0014 1.5.5	土器群	甕	-	-	-	-	-	-	-	手すり少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
17	18	S0014 1.5.5	土器群	甕	-	-	-	-	-	-	-	手すり少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				
17	19	S0014 1.5.5	土器群	甕	-	-	-	-	-	-	-	手すり少	直財	褐色	赤褐色	0%の褐色				

第3表 土器觀察表

() : 備考 [] : 有存値

測定箇所	番号	出土位置	測定番号	形態	底面形	底面積 (cm ²)	底面積 (cm ²)	底盤		胎土	焼成	色調	備考		
								内面	外面						
19	-	2 S303 1		土器部	杯	85	-	31.58	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
19	30	2 S303 30		土器部	高台付碗	85 (15.5)	53.2	2.3	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成	底盤に丸い窓跡	
19	30	4 S303 14		底盤部	杯	116.8	38.60	6.0	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成	底盤に丸い窓跡	
19	-	5 S303 6		底盤部	高台付碗	80	116.0	6.0	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成	底盤に丸い窓跡	
19	30	1 S303 116.18		土器部	杯	20	120.0	38.2	2.2	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成	[向]
19	-	2 S303 24		土器部	杯	80 (12.0)	34.3	2.3	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
19	30	3 S303 14.29		土器部	杯	80 (11.9)	40.0	6.6	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
19	4	4 S303 5		土器部	杯	30 (13.8)	38.0	2.0	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
19	5	5 S303 27		土器部	杯	30 (11.8)	37.0	2.0	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
19	30	6 S303 22		土器部	杯	90	120.0	4.0	30.0	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
19	30	7 S303 121		土器部	杯	30 (11.6)	35.0	0.5	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
19	30	8 S303 117		土器部	杯	70 (11.9)	39.0	6.7	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
19	30	9 S303 115.26		土器部	杯	20 (12.0)	14.0	-	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
19	30	10 S303 1		土器部	杯	-	-	-	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
19	30	11 S303 28		土器部	高台付碗	80 (22.0)	36.0	12.3	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
19	12	12 S303 25		土器部	瓶	20 (6.0)	13.7	-	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
19	30	13 S303 32.50.65		土器部	瓶	20 (12.0)	35.0	0.5	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
19	30	14 S303 33.8.63		土器部	瓶	30	160.0	0.0	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
19	30	15 S303 1.20		底盤部	瓶	30 (6.0)	12.0	-	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
21	1	1 S303 13		土器部	杯	20 (13.0)	10.0	-	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
21	30	21 S303 8		土器部	杯	30 (16.4)	12.0	-	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
21	30	3 S303 19.30.31		土器部	瓶	60 (14.6)	13.7	-	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
21	36	4 S303 4		土器部	瓶	-	-	-	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
21	30	5 S303 12.13		土器部	瓶	30 (13.1)	4.0	0.0	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
21	2	6 S303 5		土器部	杯	20 (12.0)	14.0	0.0	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
21	3	7 S303 11.01		土器部	杯	30 (13.0)	4.0	0.0	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
21	36	8 S303 1		土器部	杯	-	-	-	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
21	36	9 S303 2		土器部	杯	-	-	-	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
21	6	10 S303 4		底盤部	瓶	-	-	-	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
23	-	11 S303 19		底盤部	瓶	5 (16.2)	11.9	-	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
23	2	12 S303 2		底盤部	瓶	15 (12.7)	14.2	-	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
23	3	13 S303 25		土器部	瓶	30 (10.0)	16.0	-	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
23	4	14 S303 14		土器部	瓶	30 (11.6)	12.0	-	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
23	30	5 S303 410		土器部	瓶	30 (13.0)	3.7	-	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
23	30	6 S303 1260.905.2		土器部	瓶	35 (12.0)	14.2	-	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
23	7	7 S303 30		土器部	瓶	30 (12.0)	12.0	-	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
23	30	8 S303 1		土器部	土手拂子	30 (6.0)	2.1	0.0	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
23	30	9 S303 22.30		土器部	瓶	20 (14.5)	12.3	4.5	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
23	10	10 S303 13.24.42		土器部	瓶	20 (13.0)	16.0	0.0	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
23	31	11 S303 12.24		土器部	瓶	40 (-)	19.0	7.6	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
23	31	12 S303 15.21.32.28		土器部	瓶	80 (32.8)	29.8	10.2	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
23	36	13 S303 3		底盤部	瓶	5 (-)	17.0	0.0	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
23	31	14 S303 27		底盤部	瓶	30 (13.4)	4.0	0.0	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
23	15	15 S303 19		底盤部	瓶	-	-	-	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
23	31	16 S303 12.0.44		土器部	杯	30 (13.7)	4.8	6.4	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
25	-	7 S303 27.28		土器部	杯	30	12.0	5.8	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
25	-	8 S303 48		土器部	杯	30 (12.0)	4.0	0.0	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
25	-	9 S303 25		土器部	杯	30 (10.0)	5.6	-	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
25	-	10 S303 7		土器部	内台付碗	30 (11.0)	6.2	0.0	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
25	36	5 S303 31		土器部	杯	-	-	-	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
25	36	6 S303 2		底盤部	瓶	15 (8.0)	6.0	0.0	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
25	-	7 S303 27.28		土器部	杯	30 (12.0)	5.0	0.0	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
25	-	8 S303 48		土器部	杯	30 (12.0)	4.0	0.0	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
25	-	9 S303 19.22		底盤部	杯	-	-	-	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
25	-	10 S303 35		底盤部	瓶	25 (22.8)	11.0	0.0	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
25	-	11 S303 36		底盤部	瓶	5 (-)	10.0	11.0	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
25	31	12 S303 3		土器部	杯	100 (12.1)	4.0	7.5	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		
25	31	13 S303 9		土器部	杯	100 (11.7)	3.9	7.2	37"	陶器底盤付	良好	灰褐色	0%焼成		

第3表 土器觀察表

()：復元値 ()：遺存値

件名	品目	番号	出土点	遺物番号	種類	器形	重量(g)	寸法(cm)	測定部位	内面	外面	底盤	測量		鉢土	灰成	色調	備考	
													内面	外面					
25	3	S0021 12.16	土器部	杯	40	131.0	4.2	6.4	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
25	34	S0021 11	土器部	杯	100	122	3.9	7.6	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
25	34	S0021 7	土器部	杯	95	11.6	4.6	6.4	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形	土器部消費器(?)		
25	34	S0021 6	SD001-0034.6 SD001-0034.6	土器部	杯	25	123	4.0	6.3	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形	土器部消費器(?)	
25	36	7	S0021	SD001-0034.6	土器部	杯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
25	36	8	S0021	SD001-0034.6	土器部	杯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
25	36	9	S0021	SD001-0034.6	土器部	杯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
25	36	10	S0021	SD001-0034.6	土器部	杯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
25	36	11	S0021	SD001-0034.6	土器部	杯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
25	12	S0021 14	土器部	盤	15	(15.0)	11.8	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
25	38	13	S0021 1.6	土器部	盤	30	-	[14]	7.7	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形	土器部消費器(?)	
27	1	S0022 7	土器部	杯	20	(10.0)	13.5	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形	土器部消費器(?)		
27	2	S0022 10	土器部	盤	30	22.4	11.6	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形	土器部消費器(?)		
27	3	S0022 9	土器部	盤	20	20.0	16.8	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形	土器部消費器(?)		
27	4	S0022 2	土器部	杯	25	(12.0)	12.0	6.0	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
27	31	S0023 4.10.14	土器部	皿	30	(15.1)	15.3	8.1	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
27	2	S0023 3	土器部	皿	10	152.9	131.7	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
27	1	S0024 19	窓透部	杯	20	-	[11.5]	6.0	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
27	24	2	S0024 1.3.0	土器部	杯	30	(23.2)	19.4	12.6	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形		
27	5	S0024 0.1.3.3	窓透部	皿	20	[11.3]	15.0	6.0	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
27	4	S0024 5	窓透部	皿	-	-	-	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
29	31	S0025 11	土器部	杯	99	13.0	4.1	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形	土器部消費器(?)		
29	32	2	S0025 6	土器部	杯	90	13.4	4.7	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形		
29	3	S0025 1	窓透部	皿	-	-	-	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
29	36	4	S0025 2	土器部	杯	-	-	-	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形		
29	31	S0025 1.1.0	土器部	杯	95	12.4	4.4	6.0	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形	土器部消費器(?)		
29	32	6	S0025 1.5	土器部	杯	40	(14.0)	15.0	7.0	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形		
29	32	1	S0026 16.23.24	土器部	杯	70	17.9	3.8	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形	土器部消費器(?)	
29	32	2	S0026 9	土器部	杯	30	15.0	5.0	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形		
29	32	3	S0026 10	窓透部	皿	20	-	[12.7]	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
29	36	4	S0026 1	土器部	杯	-	-	-	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形		
29	36	5	S0026 4	土器部	杯	-	-	-	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形		
29	36	6	S0026 17	土器部	皿	5	(18.0)	16.7	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形		
30	31	S0027 4.3.0	土器部	杯	60	(15.0)	4.2	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
30	32	2	S0027 4	土器部	杯	96	11.3	2.9	6.0	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形		
30	32	3	S0027 1.5.21	土器部	杯	80	15.6	6.0	9.0	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形		
30	34	2	S0027 1.3.20	土器部	皿	30	15.6	17.0	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形		
30	5	S0028 4	土器部	杯	-	-	-	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
31	1	S0028 7	土器部	皿	20	[10.0]	8.4	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
31	2	S0028 1.5.6	土器部	皿	15	(15.0)	15.3	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
31	3	S0028 15.21	土器部	皿	5	(2.0)	17.3	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
31	32	4	S0028 1.11.12.25.30.0.1	土器部	杯	80	13.2	4.1	6.6	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形		
31	5	S0028 1	土器	大鉢	-	-	-	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
31	6	S0029 1	土器	火鉢	-	-	-	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
32	1	S0029 4	土器部	皿	10	(2.0)	6.0	2.0	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
32	1	S0029 1.4	土器部	杯	25	(15.0)	5.0	8.6	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
32	2	S0029 10	土器部	皿	-	-	-	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
32	3	S0029 1.4	窓透部	皿	-	-	-	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
32	4	S0029 1	窓透部	皿	-	-	-	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
32	5	S0029 15	窓透部	皿	-	-	-	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
34	32	1	S0029 19	窓透部	杯	50	(14.0)	2.9	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形		
34	2	S0029 1	土器部	杯	50	(15.0)	14.0	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
34	32	3	S0029 1.3.30	土器部	杯	60	(14.0)	13.7	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
34	4	S0029 22	土器部	皿	20	(20.0)	12.0	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
34	5	S0029 45	土器部	皿	20	(25.0)	15.0	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
34	6	S0029 16	土器部	皿	5	(19.2)	17.6	-	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形			
34	32	7	S0029 43.47.48	土器部	皿	40	-	[14.4]	6.1	PP'	斜面無底盤	直面無底盤	直面	灰白	明褐色	明褐色	PP成形		

第3表 土器觀察表

() : 備考値 [] : 遺存値

測定箇所	番号	出土位置	複数	形	底面厚	容積 (cm ³)	内面	外側	測量		地土	地質	地質	備考
									上部	下部				
34 32 8	S3032	3323.32.27	復原器	杯	40	11.4	4.6	6.5	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	新石器
34 32 9	S3032	421	復原器	杯	22	10.0	4.0	-	77'	77'	-	粘土	黄褐色	粘土・人骨はまたは石柱埋蔵
34 32 10	S3032	23	土器部	杯	95	13.0	4.3	5.6	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	石柱倒壊
34 32 11	S3032	53.23	土器部	杯	30	12.0	3.6	5.7	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
34 32 12	S3032	30	土器部	杯	45	13.0	3.0	6.0	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
34 32 12	S3032	3	土器部	杯	35	11.1	4.1	-	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
34 32 1	S3032	43.7	土器部	杯	40	12.0	3.8	6.2	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
34 2	S3032	6	土器部	高台形罐	30	12.0	6.0	-	77'	77'	-	粘土	黄褐色	手付のH形
26 1	S3032	5	土器部	杯	3	12.0	15.0	-	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
36 2	S3032	7	復原器	束	-	-	-	-	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
36 3	S3032	19	復原器	束	-	-	-	-	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
36 4	S3032	10	土器部	杯	30	11.7	6.0	-	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
36 32 1	S3032	28.18	土器部	杯	40	12.0	4.0	6.0	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
36 32 2	S3032	13.47	土器部	束	10	20.0	10.0	-	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
36 32 3	S3032	11.9	復原器	束	-	-	-	-	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
36 32 4	S3032	11.9	復原器	束	-	-	-	-	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
37 1	S3032	23.4.10	土器部	杯	45	17.0	10.0	-	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
37 2	S3032	3	復原器	束	-	-	-	-	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
38 23 1	S3032	34	土器部	杯	30	12.0	12.0	-	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
38 23 2	S3032	30	土器部	杯	30	12.0	3.6	-	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
38 23 3	S3032	19	土器部	杯	30	14.0	3.1	10.0	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
38 33 4	S3032	16	土器部	杯	90	13.1	3.7	8.6	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
38 33 5	S3032	16.7	土器部	杯	95	12.8	3.9	2.2	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
38 34 6	S3032	23	土器部	束	25	14.0	4.6	8.0	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
38 32 7	S3032	21.22	土器部	小型束	60	9.3	8.1	3.8	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
38 33 8	S3032	42.4.27	土器部	束	30	18.0	12.0	-	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
38 39	S3032	12.5	土器部	束	30	12.0	10.0	-	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
40 33 1	S3040	36.12.8	土器部	杯	30	12.0	4.5	4.2	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
40 33 2	S3040	41.2.20.21.21.7	土器部	杯	80	12.1	3.9	2.5	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
40 33 3	S3040	42.6.1	土器部	杯	70	11.0	3.6	6.4	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
40 33 4	S3040	26	土器部	杯	30	11.0	3.6	2.4	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
40 33 5	S3040	44.3.37.300	土器部	杯	30	11.0	3.9	6.8	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
40 33 6	S3040	47.0	土器部	杯	30	12.0	3.7	7.0	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
40 33 7	S3040	11.3	土器部	束	15	13.0	6.0	6.0	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
40 34 8	S3040	17.4.35.1.07	土器部	杯	30	12.0	4.2	6.0	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
40 33 9	S3040	36.3.17	土器部	杯	30	11.5	3.7	7.0	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
40 33 10	S3040	61.0.2.20	土器部	杯	25	11.0	3.5	2.0	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
40 33 11	S3040	32.5	土器部	束	30	12.0	4.3	6.7	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
40 34 12	S3040	41.6.17	土器部	杯	30	12.0	4.0	6.7	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
40 36 13	S3040	3	土器部	杯	-	-	-	-	77'	77'	-	粘土	黄褐色	手付のH形
40 36 14	S3040	11.7	土器部	杯	-	-	-	-	77'	77'	-	粘土	黄褐色	手付のH形
40 36 15	S3040	11.6	土器部	杯	-	-	-	-	77'	77'	-	粘土	黄褐色	手付のH形
40 36 16	S3040	4.2.17.5	土器部	小型束	15	12.0	10.0	-	77'	77'	-	粘土	黄褐色	手付のH形
40 17	S3040	14.8	土器部	束	20	14.0	6.0	6.7	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
40 33 18	S3040	30.3.36.30.38.1	土器部	束	40	19.3	12.7	-	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
40 33 19	S3040	9.0.4.18.20.220	土器部	束	30	26.7	13.0	-	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
40 36 20	S3040	21.0.16	土器部	束	20	-	10.0	8.4	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
40 36 21	S3040	30.3.230	土器部	小型束	15	12.0	10.0	-	77'	77'	-	粘土	黄褐色	手付のH形
40 36 22	S3040	17.8	土器部	杯	-	-	-	-	77'	77'	-	粘土	黄褐色	手付のH形
40 33 23	S3040	9.0	土器部	杯	-	-	-	-	77'	77'	-	粘土	黄褐色	手付のH形
40 34 1	SK116	1	土器部	束	60	11.0	3.9	6.3	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形
40 34 2	SK116	1	土器部	杯	-	-	-	-	77'	77'	-	粘土	黄褐色	手付のH形
40 37 3	SK116	16	土器部	束	15	12.0	17.0	-	77'	77'	-	粘土	黄褐色	手付のH形
40 37 4	SK116	1	土器部	簇	-	-	-	-	77'	77'	-	粘土	黄褐色	手付のH形
40 37 5	SK116	4	土器部	束	-	-	-	-	77'	77'	-	粘土	黄褐色	手付のH形
40 37 6	SK116	26	土器部	手付	30	12.0	2.9	12.0	77'	77'	手付のH形	粘土	黄褐色	手付のH形

第3表 土器観察表

()：復元値 ()：遺存値

調査	測定番号	出土地點	遺物番号	種類	形	量(件)	割合(%)	寸法(高さ)	寸法(幅)	内側	外側	底	測定			鉢土	焼成	色調	参考	
													内側	外側	底					
-	37 10	S3016	1	陶器	壺	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	-	-	-	-	-	-	-	
45 27 1	S3017	1	土器	内耳土器	10	[11.7] 19.2	7.7 cm ²	7.7 cm ²	7.7 cm ²	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	普通
45 27 1	S3018	1	白磁	皿	30	4.3	1.9	1.9	1.9	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 27 1	S3019	1	土器	内耳土器	10	[15.2] 3.1	6.0	6.0	6.0	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 27 1	S3019	1	土器	内耳土器	10	[26.0] 14.1	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
-	37 4	S3019	1	陶器	皿	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
45 27 1	S3020	1	土器	内耳土器	-	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
47 26 1	S3014	1	カワラ	皿	5	8.8	1.9	6.0	6.0	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
47 38 2	S3014	1,2,6707Q01	1	土器	埋鍋	30	5.2	12.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
47 38 3	S3014	1	埋窓	壺	10	[8.9]	-	7.7 cm ²	7.7 cm ²	7.7 cm ²	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰
47 38 4	S3014	1	埋窓	壺	-	[10.8]	6.0	6.0	6.0	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
-	37 17	S3018	1	陶器	皿	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
-	38 18	S3018	1	陶器	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
45 28 1	S3020	1	カワラ	皿	20	[10.2] 11.9	6.0	6.0	6.0	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 28 2	S3020	1	陶器	埋鍋	10	8.9	15.5	6.0	6.0	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 28 3	S3020	1	陶器	天日系網	-	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 28 4	S3020	1	土器	幼童	-	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
-	38 13	S3020	1	陶器	皿	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
45 28 2	S3020	1	土器	内耳土器	-	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 28 1	S3020	1	土器	内耳土器	25	[12.6] 5.6	6.0	6.0	6.0	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 28 2	S3020	1	土器	壺	15	[17.2] 15.6	7.7 cm ²	7.7 cm ²	7.7 cm ²	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 28 3	S3020	2	陶器	埋鍋	25	[11.9]	2.2	6.0	6.0	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 28 4	S3020	2	土器	杯	-	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 28 5	S3020	3	土器	杯	-	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 28 6	S3020	2	土器	杯	-	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 1	S3003	5004-7	土器	杯	100	11.7	4.2	5.4	5.4	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 2	S3003	5004-10	土器	杯	70	11.2	4.2	5.2	5.2	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 3	S3003	5004-10	土器	杯	60	[11.2]	3.9	5.8	5.8	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 4	S3003	5004-10-5	土器	杯	30	[10.0]	2.8	5.8	5.8	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 5	S3003	5004-11-4	土器	杯	60	[11.6]	2.6	5.6	5.6	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 6	S3003	5004-12	土器	杯	15	[11.4]	5.4	5.4	5.4	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 7	S3003	5004-13B	土器	杯	15	-	11.0	6.8	6.8	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 8	S3003	5004-13	土器	杯	60	[12.0]	4.9	5.2	5.2	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 9	S3003	5004-14-7	土器	小筒	30	[9.2]	5.8	4.8	4.8	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 10	S3003	1	埋窓	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 1	S3004	28	土器	杯	20	15.0	4.0	4.7	4.7	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 2	S3004	28	土器	杯	50	[12.1]	4.6	4.3	4.3	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 3	S3004	1,9	土器	杯	70	13.3	4.4	4.6	4.6	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 4	S3004	1,32	土器	杯	70	11.6	3.6	4.7	4.7	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 5	S3004	1,33	土器	杯	30	[11.2]	6.0	3.5	3.5	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 6	S3004	1	土器	杯	-	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 7	S3004	23	土器	杯	20	-	13.4	7.3	7.3	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 8	S3004	23	土器	杯	20	-	13.0	6.8	6.8	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 9	S3005	5005-1-6	土器	杯	60	[12.0]	4.0	5.5	5.5	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 10	S3005	5005-10	土器	壺	10	[12.1]	15.5	4.7	4.7	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 11	S3005	5005-11	土器	皿	-	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 12	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 13	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 14	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 15	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 16	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 17	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 18	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 19	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 20	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 21	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 22	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 23	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 24	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 25	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 26	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 27	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 28	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 29	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 30	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 31	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 32	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 33	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 34	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 35	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 36	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 37	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 38	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 39	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	-	内面灰	外面灰	内面灰	外面灰	
45 36 40	S3005	1	土器	杯	10	-	-	-	-	内面灰	外面灰	-	内面灰							

第3表 十四觀察表

第3表 十器觀察表

(二)：陶云清 [1]：潜在地

第4表 中・近世陶磁器等集計表

地区	出土地名	中世										中世-近世		近世						近代									
		上部					中部					中国		上部			中部			下部			総出						
		内耳	口縁	腹	大底	直・横	内耳	口縁	腹	大底	コネ	内耳	口縁	腹	大底	直・横	内耳	口縁	腹	大底	直・横	内耳	口縁						
東	SX002	1					2																						
東	SX004																												
東	SX007																1												
東	SX009																												
東	SX010						1																						
東	SX011																												
西	SK012	14	2				1			1										1	1	6	1	2	1				
西	SK013	42					4	7		7	3						1	1		4	22	3	19	1					
西	SK014	4	7																										
北	SK039	1																											
東	SK049																												
東	SK056	1																											
東	SK068																												
西	SK077																												
西	SK080																												
西	SK092																												
西	SK101	1	1	1														1		1	1								
西	SK103																								1				
西	SK104																												
西	SK106																		2	1									
西	SK108																		3										
西	SK114	16					1				1	2							2	1	12	1	3	23	1				
西	SK116	1	5	1			1			3								1											
西	SK117	3																											
西	SK118																	1											
西	SK119	1																											
西	SK120	4																	1		3		2	4					
西	SK121	1																							1				
西	SK122																			1									
西	SK124	12																	3			3	1						
西	SK141	1	1	1																1		1							
西	SK142																			1									
西	SK143																								1				
西	SK146																								1				
西	SK151	2																											
西	SK157																								1				
西	SK159	2																											
西	SK179	2																											
西	SK186	2																											
西	SK188																	1											
西	SK190																		1			1							
西	SK196																			2									
西	SK197	1																			1								
西	SK198																				1		3						
西	SK199																		1		2		1						
西	SK202																				1								
西	SH044	3																											
西	SH050																								1				
西	SH061																								1				
西	SH069																								1				
西	SH070																								1				
中・近世 遺構内集計		45	70	4	1	1	7	13	1	1	11	11	0	0	1	2	2	4	0	1	3	17	59	1	1	16	64	2	
遺構外集計		14	11	3	1	0	2	0	4	1	9	6	1	0	1	17	8	0	0	4	9	51	2	3	20	36	1	5	
総計		59	84	7	2	1	3	7	17	5	2	20	17	1	1	1	3	19	12	0	1	7	26	110	3	4	36	99	7

第5表 土製品・石製品計測表

編號	國別	番号	出土地點	遺物番号	種類	材質	色調	計測値 (mm・g)					備考
								長・径	幅・徑	厚・高	孔徑	邊厚	
9	45	9	S3002	3	丸玉	土質	黒褐色	13.0	12.2	8.0	4.0	1.1	黑色處理
-	51	10	S3002	1	網口	土質	黒褐色	-	-	-	-	-	先端部 ガラス質 小径
11	-	10	S3005	31	支脚	土質	暗赤褐色	169.0	58.0	-	-	153.8	上・下部欠損
14	47	15	S3008	SK008-30	砾石	白色流紋岩質礫岩	灰白色	[101.1]	47.9	24.0	-	89.4	下部欠損
14	47	16	S3008	2	砾石	白色流紋岩質礫岩	灰白色	148.0	144.9	26.7	-	38.3	
23	45	16	S3019	21	丸玉	土質	赤褐色	26.0	24.0	26.0	7.0	12.2	
23	45	17	S3019	35	丸玉	土質	赤褐色	24.5	22.5	22.0	5.0	12.8	
23	45	18	S3019	15	丸玉	土質	赤褐色	25.5	25.0	15.0	6.0	11.2	
23	45	19	S3019	4	丸玉	土質	赤褐色	25.0	-	19.0	3.0	4.3	1/2欠損
23	45	20	S3019	11	丸玉	ガラス	緑色	9.5	9.0	5.5	3.5	1.5	風化による白色化
23	45	21	S3019	40	丸玉	滑石	褐色	14.0	14.0	11.0	4.0	2.6	
23	47	22	S3019	1	砾石	砂岩	灰白色	151.1	41.2	16.7	-	55.5	上部欠損
-	5	S3022	5	支脚	土質	暗赤褐色	196.0	84.0	65.0	-	329.6	上部欠損	
29	45	7	S3025	3	網跡草	土質	赤褐色	上45.0	-	19.0	6.0	13.1	3/4欠損
29	45	8	S3025	9	網跡草	滑石	黒色	上 38.0	上 37.5	16.0	9.5	39.6	
-	7	S3026	13	支脚	土質	暗赤褐色	[107.0]	77.0	74.0	-	424.7	下部欠損	
30	45	6	S3027	15	網跡草	滑石	褐綠色	上 36.0	上 37.0	13.0	7.0	16.2	
30	47	8	S3027	13	砾石	白色流紋岩質礫岩	灰白色	[94.1]	66.0	34.2	-	250.7	上部欠損
31	45	7	S3028	19	神呪品	土質	赤褐色	87.0	32.5	26.0	-	94.0	上部欠損
31	45	8	S3028	1	網跡草	土質	赤褐色	上 81.0	-	21.5	6.0	5.9	4/5欠損
31	45	9	S3028	6	網跡草	土質	赤褐色	上 45.0	-	23.0	6.0	24.2	1/2欠損
31	45	10	S3028	14	丸玉	土質	赤褐色	6.5	6.5	7.0	1.5	1.0	
31	45	11	S3028	16	丸玉	土質	赤褐色	9.0	9.0	7.5	1.5	0.8	
31	45	12	S3028	13	丸玉	土質	赤褐色	32.0	10.0	11.5	4.5	6.9	
31	45	13	S3028	5	丸玉	土質	赤褐色	27.0	9.0	8.5	-	3.2	上部欠損
36	45	5	S3034	2	瓦等	土質	赤褐色	161.0	97.0	16.0	-	69.0	
36	45	6	S3034	4	石質櫛品	滑石	黒灰色	32.0	13.0	5.0	1.5	4.6	年玉形
40	45	24	S3040	102	網跡草	砾灰岩	暗褐色	上 48.0	上 45.5	18.0	6.5	46.4	
45	48	7	SK116	7	五輪塔水輪	砂岩	灰白色	[116.5]	307.0	126.8	54.0	3105.3	銅曾穴、砾石利用
45	48	8	SK116	17	板碑	結泥片岩	暗褐色	[179.0]	167.0	130	-	736.7	銅曾穴、受花
-	48	3	SK118	1	石塔	砂岩	灰白色	-	-	-	-	158.6	
45	45	3	SK119	1b	砾石	玉髓	白色	24.4	31.2	12.1	-	113.0	
47	48	1	SK108	1	五輪塔水輪	砂岩	に A/H 暗褐色	[112.0]	99.0	74.0	-	572.8	銅曾穴、砾石利用
47	48	5	SK114	1	石塔	砂岩	灰白色	38.0	41.0	[31.0]	-	61.3	
47	48	6	SK114	1	五輪塔水輪	安山岩	に A/H 暗褐色	[73.5]	80.5	72.0	-	413.5	
47	48	7	SK114	1	五輪塔水輪	砂岩	灰白色	[175.0]	[195.0]	61.0	-	1509.3	
47	48	8	SK114	1	板碑	結泥片岩	暗褐色	[143.0]	97.5	22.0	-	385.3	
47	47	9	SK114	1a	砾石	白色流紋岩質礫岩	灰白色	[111.7]	30.6	25.1	-	97.5	上・下部欠損
47	47	10	SK114	1b	砾石	白色流紋岩質礫岩	灰白色	72.5	35.8	16.0	-	38.3	
47	47	11	SK114	1c	砾石	白色流紋岩質礫岩	灰白色	[58.8]	24.6	16.7	-	33.1	上・下部欠損
48	-	5	SK120	1	石斧	砂岩	灰白色	[81.0]	[91.0]	40.0	-	297.8	Y日、ノイ加工痕
48	47	6	SK120	1c	砾石	白色流紋岩質礫岩	灰白色	72.0	49.3	24.9	-	78.3	
48	47	7	SK120	1a	砾石	白色流紋岩質礫岩	灰白色	161.0	38.2	31.5	-	102.8	
48	47	8	SK120	1b	砾石	白色流紋岩質礫岩	灰白色	[76.9]	33.6	27.0	-	95.9	上・下部欠損
66	47	3	S3007	1a	砾石	白色流紋岩質礫岩	灰白色	[94.4]	37.6	30.2	4.8	87.0	提供 上部欠損
66	47	4	S3007	1b	砾石	白色流紋岩質礫岩	灰白色	[54.8]	34.5	23.6	-	43.8	上・下部欠損
67	48	3	S3008	SK072-7	宝鏡形	砂岩	に A/H 暗褐色	[86.0]	[70.9]	52.0	-	281.0	ノイ加工痕 被熱
67	48	4	S3008	SK072-3	五輪塔水輪	安山岩	灰白色	-	[77.0]	[65.0]	-	106.6	筆付 傷 烈
67	45	5	S3008	1	丸玉	土質	赤褐色	9.0	9.5	11.5	1.0	1.1	
66	47	1	S3009	1	砾石	白色流紋岩質礫岩	灰白色	[20.5]	[24.0]	9.1	-	5.0	下部欠損
67	47	5	S3009	5	砾石	白色流紋岩質礫岩	灰白色	[64.0]	20.1	22.1	-	36.2	下部欠損
68	48	2	SK009	3SK072-2	五輪塔水輪	砂岩	に A/H 暗褐色	[181.0]	-	97.0	-	1395.0	ノイ加工痕

第5表 土製品・石製品計測表

編號	國別	番号	出土地点	遺物番号	種類	材質	色調	計測値 (mm・g)					備考
								長・径	幅・径	厚・高	孔径	遺存重量	
68	45	9	SK073	1	粘土器	土質	赤褐色	[54.0]	-	11.0	(0.0)	172	土器使用 1/2欠損
68	45	10	SK073	21	粘土器	滑石	青黑色	上: 36.5 下: 30.0	上: 25.5 下: 30.0	17.5	9.0	382	
-	48	3	SK012	5	板磚	ホルシュヌス	暗緑色	-	-	-	-	506.0	
82	45	13	SK013	3bC4	粘土器	滑石	淡緑色	上: [39.0] 下: [27.5]	上: [27.5]	14.0	6.0	18.0	1/2欠損
82	47	14	SK013	4bC1b	瓦石	白色泥質岩質陶灰岩	灰白色	[44.0]	29.5	15.5	-	24.0	下部欠損
82	47	15	SK013	3bC1	瓦石	白色泥質岩質陶灰岩	灰白色	[48.0]	24.4	10.5	-	16.4	上下部欠損
82	47	16	SK013	4bC1a	瓦石	白色泥質岩質陶灰岩	灰白色	64.0	46.1	25.0	-	67.3	
82	47	17	SK013	4bC1a	瓦石	白色泥質岩質陶灰岩	灰白色	[42.0]	50.0	36.0	-	85.0	下部欠損
82	47	18	SK013	4bC3c	瓦石	白色泥質岩質陶灰岩	灰白色	[25.2]	21.5	15.0	-	13.4	上下部欠損
82	47	19	SK013	5bC1	瓦石	白色泥質岩質陶灰岩	灰白色	[36.0]	27.2	16.1	-	16.7	上下部欠損
82	47	20	SK013	4bC1b	瓦石	砂岩	灰白色	27.5	27.1	20.0	-	17.2	
83	48	1	SK091B	SK091-I	瓦輪形地輪	砂岩	灰褐色	[87.0]	[96.0]	[104.0]	-	166.0	被熱變色
83	47	1	SK092	4	瓦石	白色泥質岩質陶灰岩	灰白色	[94.1]	28.4	19.8	-	45.1	下部欠損
83	47	1	SK124	1a	瓦石	白色泥質岩質陶灰岩	灰白色	[84.1]	29.3	21.0	-	66.3	上下部欠損
83	47	2	SK124	1b	瓦石	白色泥質岩質陶灰岩	灰白色	[87.7]	25.0	28.1	-	57.3	上部欠損
83	47	1	SK143	1	瓦石	白色泥質岩質陶灰岩	灰白色	29.8	21.7	7.5	-	5.8	
83	45	1	SK144	2	瓦	粘板岩	黑灰色	[16.0]	48.0	14.0	-	39.4	瓦石利用 上部欠損
83	48	1	SK157	1	瓦輪形水輪	砂岩	灰白色	[82.0]	[82.0]	[166.0]	-	314.4	納骨穴、瓦石利用
83	47	1	SK159	1	瓦石	白色泥質岩質陶灰岩	灰白色	80.5	55.0	26.1	-	117.0	
83	47	1	SB044	1a	瓦石	白色泥質岩質陶灰岩	灰白色	83.7	46.5	33.5	-	101.4	
83	47	2	SB044	1b	瓦石	白色泥質岩質陶灰岩	灰白色	37.6	71.1	25.0	-	78.6	
83	47	3	SB044	1c	瓦石	白色泥質岩質陶灰岩	灰白色	[77.3]	37.5	27.2	-	56.9	上下部欠損
83	47	4	SB044	1d	瓦石	白色泥質岩質陶灰岩	灰白色	[73.2]	42.9	21.0	-	49.8	下部欠損
90	45	29	表面搜集	2	瓦塊	土質	赤褐色	[88.0]	[91.5]	[120.0]	-	135.2	
90	45	30	20DDQ-54	1	瓦	ホルシュヌス	黑灰色	[46.0]	[46.0]	9.0	-	36.2	瓦石利用 上部左部欠損
90	47	31	20DDQ-72	1	瓦石	白色泥質岩質陶灰岩	灰白色	[35.9]	24.0	17.1	-	21.0	上下部欠損
90	47	32	T-6	1	瓦石	砾灰岩	灰白色	26.2	[22.2]	7.4	-	3.9	左部欠損
90	45	33	20DDR-66	1	巖石	粘板岩	黑灰色	23.0	23.0	3.0	-	2.5	
-	-	50	20DDR-13	1	瓦石	メノウ	白色	14.2	12.2	10.0	-	19.6	

第6表 金属製品等計測表

辨別	國版	番号	出土地点	遺物番号	種類	材質	計測値 (mm・g)				備考
							長・徑	幅	厚	遺存重量	
7	49	7	SH001	4	鍔	鉄	1187.0	26.5	3.0	62.8	刃部先端・裏面本質遺存
10	49	5	SH003	19	鍔抜具	鉄	140.0	17.0	1.5	2.6	目釘穴
10	49	6	SH003	20	鍔抜具	鉄	137.5	18.5	1.0	2.0	目釘穴
10	49	7	SH003	32	鍔	鉄	182.0	22.0	2.0	14.9	
-	51	8	SH003	14	鉢津	鉄	-	-	-	54.8	
11	49	11	SH005	14	刀子	鉄	刃部33.0 茎部22.0	9.0 5.0	3.0 1.0	9.8	片闊
11	49	12	SH005	16	刀子	鉄	刃部23.0 茎部32.0	10.0 5.0	2.0 2.0	5.8	片闊 先端曲がる
11	49	13	SH005	2	釘	鉄	21.0	4.0	4.5	1.0	曲がる
12	50	5	SH006	2	鉢底	鉄	新郎38.0 茎部4.0	6.0 4.5	4.5 2.5	3.4	
12	49	3	SH007	1	釘	鉄	11.0	3.0	1.5	0.6	曲がる
12	49	4	SH007	1	刀子	鉄	刃部77.0 茎部31.0	11.5 7.5	3.0 3.0	8.4	片闊
14	49	17	SH008	4	釘	鉄	38.0	3.5	4.0	16.0	頭部径27.0mm
-	51	18	SH008	5	鉢形津	鉄	-	-	-	97.7	
-	51	19	SH008	6	鉢形津	鉄	-	-	-	46.4	
-	51	20	SH008	12	鉢形津	鉄	-	-	-	113.3	
19	49	16	SH014	1	刀子	鉄	28.0	9.5	2.0	2.3	刃部
-	51	5	SH015	6	鉢形津	鉄	-	-	-	73.9	
23	49	23	SH019	23	刀子	鉄	刃部24.0 茎部6.0	8.5 5.0	2.0 3.0	8.7	茎部に本質遺存 両闊
23	49	24	SH019	13	刀子	鉄	刃部69.0 茎部36.0	11.0 6.0	2.5 2.0	11.2	全長125.0mm 茎部本質遺存
25	49	12	SH020	SI020-023.8	刀子	鉄	茎部44.0	6.0	3.0	4.4	破片接着 鋸びによるズレ
25	49	13	SH020	34	刀子	鉄	茎部13.8	5.0	1.5	3.2	
25	49	14	SH020	26	刀子	鉄	刃部70.0 茎部6.0	9.0 4.0	3.0 2.0	11.2	両闊
25	49	15	SH020	23	鍔	鉄	135.0	19.0	1.7	37.9	
25	49	16	SH020	11.12	鍔	鉄	186.0	21.0	3.0	60.5	
25	49	14	SH021	1	鍔抜具	鉄	83.0	20.0	1.0	8.3	目釘径6.0mm~11.0mm 裏面本質遺存
29	49	9	SH025	1	刀子	鉄	刃部37.0 茎部2.0	10.0 7.0	3.0 3.0	5.6	
29	49	8	SH026	1	釘	鉄	39.0	6.0	6.0	4.3	頭部径8.5mm
30	49	7	SH027	2	釘	鉄	28.0	6.5	6.5	2.8	頭部径9.5mm
31	50	14	SH028	27	劫鉤車輪軸	鉄	棒軸65.0	4.0	3.0	4.3	
34	49	14	SH032	38	刀子	鉄	36.0	6.5	1.5	2.0	
34	50	15	SH032	31	鉢底	鉄	頭輪61.0 茎部6.0	5.0 3.5	4.0 2.5	5.0	方形輪軸突起
34	50	16	SH032	77	鉢底	鉄	頭輪62.0	6.0	5.0	3.6	
36	50	7	SH034	2	劫鉤車輪軸	鉄	棒軸37.0	4.0	4.5	2.6	
36	49	8	SH034	12	刀子	鉄	47.0	9.0	3.5	4.2	
36	49	9	SH034	9	刀子	鉄	刃部35.0 茎部41.0	17.0 8.0	2.0 2.5	10.1	
36	49	10	SH034	3	不明	鉄	36.0	17.0	2.0	3.5	
37	49	3	SH036	9	工具	鉄	頭輪67.5 茎部32.0	5.0 6.0	5.0 6.0	23.6	鍔? 頭部本質付着
38	49	10	SH037	1	釘	鉄	52.0	5.0	6.0	9.1	本質遺存
38	49	11	SH037	1	工具	鉄	69.0	6.0	4.0	22.5	曲がる

第6表 金属製品等計測表

辨號	固版	番号	出土地點	遺物番号	種類	材質	計測値 (mm・g)				備考
							長・径	幅	厚	遺存重量	
-	51	25	SH040	79	楕形漆	鉄	-	-	-	358.5	
47	49	12	SK114	1	釘	鉄	[200]	3.0	2.0	0.6	曲がる
47	50	13	SK114	1	釘	鉄	[30.5]	3.5	2.7	1.1	
47	50	14	SK114	1	釘	鉄	[38.0]	3.0	4.0	2.7	頭部径11.3mm 木質材着
47	50	15	SK114	1	釘	鉄	[26.0]	4.0	4.0	4.0	曲がる 木質材着
47	50	16	SK114	1	環状製品	鋼	[150]	3.0	4.5	0.7	
48	49	9	SK120	1	工具	鉄	[96.0]	5.5	5.0	13.3	
48	50	10	SK120	1	釘	鉄	[54.0]	9.0	8.0	13.9	
83	49	1	SK191	1	槍筒具	鉄	[27.5]	33.0	1.2	2.1	
66	50	5	SX002	2	釘	鉄	[37.5]	4.5	3.0	4.6	頭部径13.0mm
-	51	6	SX002	1	鍔漆	鉄	-	-	-	72.4	
66	49	11	SX003	SH018-1	刀子	鉄	刃部[35.0]	7.0	2.0	2.7	
-	51	9	SX004	14	楕形漆	鉄	-	-	-	129.2	
-	51	10	SX004	17	楕形漆	鉄	-	-	-	159.0	
66	50	5	SX007	1	鎌金	鉄	60.5	27.0	3.0	22.3	
67	49	3	SK003B	3	刀子	鉄	刃部[42.5]	6.5	2.0	2.2	
67	50	6	SK029	SH016-6	鎌金	鉄	[31.0]	24.5	3.0	7.0	
67	50	7	SK029	SH016-6	刀装具	鉄	[21.0]	15.0	3.5	2.8	はげき
67	50	8	SK029	SH016-7	釘	鉄	[85.0]	5.0	5.0	23.0	
67	50	1	SK040	2	釘	鉄	[65.0]	6.0	7.0	8.4	
68	49	1	SK046	1	刀子	鉄	茎部[32.5]	7.0	3.0	3.1	
68	49	1	SK062	1	槍筒具	鉄	[23.0]	16.5	1.5	3.3	
66	50	1	SX011	2	板状製品	鉄	[23.0]	14.0	4.5	25.0	
82	50	21	SX013	11x1	板状製品	鉄	52.0	5.6	3.0	22.3	
82	49	22	SX013	31x11	刀子	鉄	[55.0]	8.5	2.0	6.2	曲がる
82	50	23	SX013	11x1	鎌管	鋼	[36.0]	往 [9.0]	1.0	3.0	
82	50	24	SX013	1	刀装具	鋼	13.0	41.0	15.5	7.2	鞘尻金具
-	51	39	SX013	41x33	楕形漆	鉄	-	-	-	476.7	
-	51	40	SX013	11x1	楕形漆	鉄	-	-	-	219.4	
83	50	1	SK081	1	鎌金	鉄	75.0	27.0	4.0	18.3	
90	49	34	268DR-76	2	工具	鉄	刃部[45.0] 茎部[16.5]	7.0 9.5	2.0 2.5	10.5	
90	49	35	268DQ-15	1	刀子	鉄	刃部[38.0]	10.0	1.5	3.7	
90	50	36	267DQ-95	1	釘	鉄	[54.0]	3.5	4.5	8.3	頭部径10.0mm 曲がる
90	50	37	268DS-00	2	釘	鉄	[51.0]	5.0	6.0	8.7	頭部径11.0mm
-	51	51	268DR-44	1	楕形漆	鉄	-	-	-	73.0	
-	51	52	268DS-50	2	楕形漆	鉄	-	-	-	62.0	

第7表 錢貨計測表

序号	国別	番号	地主・地點	通書番号	戻額	材質	鑑定鑑定地	開鑄年		外縁内縁		外縁内縁		内縁内縁		外縁内縁		内縁内縁		外縁内縁		内縁内縁		備考	
								元	支	元	支	元	支	元	支	元	支	元	支	元	支	元	支	元	支
31	50	15	SK028	1	寛永通寶	吉備	日本、D.J.10(昭和4)	元	支	1668	25.1	25.1	19.3	19.2	7.0	7.1	5.9	5.9	1.2	0.7	3.4	文面			
45	50	1	SKC103	1	元通寶(貞)	吉備	中国、北京	元	支	1678	24.7	24.8	18.6	18.1	7.9	7.5	6.6	6.7	1.2	0.6	2.9				
45	50	9	SKC116	1	寛永通寶(貞)	吉備	中国、南京?	(武德4)	(武德4)	1621	23.9	24.2	19.3	19.1	7.6	7.9	6.1	6.1	1.1	0.7	2.1	鑑識の可能性			
45	50	2	SK118	1	寛永通寶(貞)	吉備	中国、北京	元	支	1668	24.5	-	21.1	-	8.3	8.2	8.3	8.2	1.0	0.7	3.3				
48	50	11	SKC120	1	□元通寶(貞)	吉備	中国、不明	-	-	22.8	23.8	17.9	19.3	7.5	-	6.8	-	1.3	1.0	1.8	一部欠損				
48	50	12	SKC120	1	永樂通寶(貞)	吉備	中国、明	永樂6	1408	24.0	24.1	21.3	20.7	6.7	6.6	6.0	5.9	1.2	0.7	2.0					
48	50	1	SKC197	1	永樂通寶(貞)	吉備	中国、明	永樂6	1408	23.5	24.7	21.0	20.1	6.1	7.3	6.0	6.7	1.5	1.0	3.0					
67	50	1	SK028	2	洪武通寶(貞)	吉備	中国、明	洪武元	1368	24.4	24.6	19.0	20.1	6.2	6.4	6.2	6.1	1.3	0.5	2.4	裏面□(波)				
82	50	25	SX003	40C3	寛永通寶(貞)	吉備	中国、南京?	(武德4)	(武德4)	1621	22.5	22.4	19.7	18.3	-	6.7	6.4	6.1	1.1	0.8	2.3	鑑識録			
82	50	26	SX003	20C12	寛永通寶(貞)	吉備	中国、北京	宝K2	1629	-	24.8	20.4	20.0	8.6	8.1	6.8	6.7	1.3	0.7	1.8	一部欠損				
82	50	27	SX003	40C24	嘉慶通寶(貞)	吉備	中国、北京	嘉慶元	1806	-	24.9	20.2	19.9	8.0	8.0	7.1	6.9	1.1	0.9	2.8	2枚重ねを分離				
82	50	28	SX003	40C24	永樂通寶(貞)	吉備	中国、明	永樂6	1408	24.3	24.3	20.5	20.0	7.2	6.5	5.7	5.5	1.2	0.8	2.9	2小穴有				
82	50	29	SX003	40C4	永樂通寶(貞)	吉備	中国、明	永樂6	1408	25.0	24.9	21.0	20.4	7.1	7.1	5.7	5.7	1.2	0.7	2.6	2枚重ねを分離				
82	50	30	SX003	40C8	永樂通寶(貞)	吉備	中国、明	永樂6	1408	25.0	24.9	20.1	20.8	6.9	6.7	5.8	5.7	1.2	0.6	2.3	一部欠損				
82	50	31	SX003	40C13	洪武通寶(貞)	吉備	日本	天正～元禄 -1725	22.6	22.9	16.2	16.1	6.8	6.5	5.4	5.4	1.4	0.8	3.2	鑑識録					
83	50	4	SX003	3	熙元通寶(貞)	吉備	中国、北京	熙元年	1084	24.3	24.3	20.0	19.9	-	-	7.3	7.1	1.3	0.9	2.1					
83	50	1	SK020	2	元通寶(貞)	吉備	中国、北京	元	支	1678	24.1	24.0	18.2	18.1	8.3	8.1	7.2	6.6	1.1	0.8	2.0				
90	50	38	267DQ-63	1	□元通寶(貞)	吉備	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.0	0.5	0.6	1/3			
90	50	39	267DQ-64	1	永樂通寶(貞)	吉備	中国、明	永樂6	1408	24.9	25.0	20.0	20.3	6.9	6.5	5.8	5.7	1.4	0.8	3.1					
90	50	40	267DQ-73	1	元通寶(貞)	吉備	中国、北京	元	支	1668	24.9	24.6	18.6	18.3	8.3	8.4	6.2	6.1	1.3	0.8	2.0				
90	50	41	267DQ-85	1	永樂通寶(貞)	吉備	中国、明	永樂6	1408	24.9	24.8	20.3	20.3	7.1	7.0	5.7	5.5	1.3	0.6	2.4					
90	50	42	267DQ-85	1	開元通寶(貞)	吉備	中国、南京?	(武德4)	(武德4)	1621	24.2	24.4	19.3	19.1	8.0	7.8	6.9	6.8	1.2	0.7	2.4	鑑識の可能性			
90	50	43	267DQ-86	2	元通寶(貞)	吉備	中国、北京	元	支	1678	22.6	22.9	17.8	18.0	8.0	8.2	7.0	7.0	1.0	0.7	2.0	1枚所六			

第8表 錢貨組成表

王朝名等	唐	北宋				明				西夏	江口	新羅	高麗	蒙古	不 明	合 計
		國 元 通 寶	皇 宋 通 寶	嘉 祐 通 寶	聖 宋 通 寶	元 豐 通 寶	元 祐 通 寶	元 符 通 寶	元 祐 通 寶							
相 年 期	621	1039	1056	1068	1078	1098	1108	1108	1108	16C末	1668	1	1	1	1	1
SK028																
SK036																
SK080																
SK101																
SK116	1															
SK118			1													
SK120										1						
SK197																
SX013	1	1	1							3	1				7	
SX014				1											1	
267DQ-64										1					1	
267DQ-73										1					1	
267DQ-83	1									1					2	
268DQ-33															1	
長 崎 探 集										1					1	
合 計	3	1	1	2	3	1	1	7	1	1	2	23				
						20				1	2	23				

第9表 旧石器時代石器・縄文時代石器計測表

博物	図版	番号	出土地点	遺物 番号	器種	石材	計測 値 (mm · g)				備 考
							最大長	最大幅	最大厚	遺存重量	
87	46	1	268DR-84	3	調片	黒色頁岩	21.9	33.6	7.9	2.77	旧石器
87	46	2	268DR-35	3	調片	ガラス質黒色安山岩	26.1	29.1	11.5	8.02	旧石器
87	46	3	SX008	1	調片	ガラス質黒色安山岩	35.4	49.2	6.3	11.57	旧石器
87	46	4	SI020~023	9	石礫	黒曜石	12.8	9.9	4.0	0.39	
87	46	5	SI034	1	石礫未成品	黒曜石	21.2	14.9	7.5	1.54	
87	46	6	SI032	73	石礫未成品	チャート	25.8	21.9	7.4	3.39	
87	46	7	SI029	1	楔形石器	硬質頁岩	22.8	24.8	8.4	4.12	
-	-	8	SX013	3b	楔形石器	黒曜石	13.5	23.4	11.3	3.27	
87	46	9	SX004	36	楔形石器	ホルンフェルス	16.1	11.9	2.9	0.27	
87	46	10	SX011	1	調片	玉髓	22.2	10.5	8.6	1.62	
87	46	11	SI032	3	錐状石器	玉髓	46.8	28.3	11.1	15.49	
87	46	12	SK119	1a	打製石斧 (片状)	砂岩	77.4	38.8	16.2	50.73	
87	46	13	SK151	1	打製石斧	流紋岩	66.2	49.1	27.1	114.30	
87	46	14	SK116	22	磨製 (乳棒状) 石斧	緑色凝灰岩	146.4	47.1	30.1	316.93	
87	46	15	SK116	1	磨製石斧	透閃石岩	103.2	44.8	30.1	211.97	
87	46	16	SX007	1	磨製石斧	緑色凝灰岩	48.6	21.1	14.8	18.78	
87	46	17	SI040	71	磨製石斧	緑色凝灰岩	23.2	19.8	10.5	3.71	
87	46	18	SK204	2	磨製石斧	ホルンフェルス	74.8	38.6	15.2	65.08	
88	46	19	SK120	1	磨製石斧	ホルンフェルス	79.8	44.3	26.4	130.87	
88	46	20	T6	2	磨製石斧	砂岩	67.4	51.0	30.6	149.81	
88	47	21	SK116	8	磨石類	安山岩	103.1	72.9	49.2	560.11	
88	47	22	SK082	2	磨石類	安山岩	122.1	101.3	63.2	925.00	
88	47	23	SX013	6b	磨石類	花崗岩	89.0	70.0	34.5	311.61	
88	47	24	SI009	4	磨石類	ホルンフェルス	78.2	31.2	10.9	37.22	
88	47	25	268DQ-84	1	磨石類	砂岩	116.5	61.5	48.5	481.19	
88	47	26	SI019	17	磨石類	砂岩	86.2	79.2	50.0	534.78	
88	47	27	SK103~104	1	磨石類	砂岩	56.8	84.9	43.0	254.23	
88	47	28	SI020	35	敲石	砂岩	74.8	69.8	52.2	362.10	
88	47	29	SK114	1b	敲石	砂岩	84.6	71.3	30.1	205.80	
89	47	30	SH044	1	敲石 (側面調整型)	砂岩	61.0	50.0	29.0	113.99	
89	47	31	SK114	1a	石皿	安山岩	150.1	113.2	58.2	1050.00	
89	47	32	SK092	3	石皿	砂岩	192.8	148.1	76.1	1758.00	
-	-	33	SI032	74	石皿	安山岩	39.4	34.2	24.8	35.10	
89	46	34	T11	2	石劍	粘板岩	57.4	26.0	8.5	14.04	
89	46	35	SK197	1	石劍	粘板岩	130.6	23.9	9.3	42.16	
89	47	36	SX013	4b	石製品	軽石	72.2	51.0	43.0	31.34	
-	-	37	SI028	23	石製品	軽石	21.8	23.4	13.2	0.77	
-	-	38	SI032	1	石製品	軽石	26.9	34.0	20.3	2.83	
89	46	39	SI036	13	石核	黒曜石	158	21.8	19.0	4.81	
89	47	40	SI008	11	原石	軽石	65.2	74.8	51.9	45.37	
-	-	41	SI025	8	原石	軽石	36.1	35.8	20.1	4.10	
-	-	42	SI009	3	調片	珪質頁岩	17.2	21.3	11.1	2.17	
-	-	43	SI009	6	調片	黒曜石	6.3	10.1	2.0	0.16	
-	-	44	SI028	32	調片	黒曜石	16.2	22.3	7.3	1.49	
-	-	45	SX004	1	調片	ガラス質黒色安山岩	19.9	32.8	6.1	5.20	
-	-	46	T17	1	調片	チャート	30.0	10.4	10.0	3.09	
-	-	47	T17	2	調片	黒曜石	10.1	5.2	5.2	0.17	
-	-	48	267DQ-72	1	調片	黑色頁岩	26.3	27.0	6.9	3.64	
-	-	49	268DR-84	1	調片	黒曜石	8.9	18.1	4.5	0.62	

第4節 動物遺体

1 資料と方法

(1) 資料

資料はいずれも調査時に目視による確認で採集された現地採集資料である。全般に風化が進み、遺存状態は不良である。多くは細片になっていたため、接合は行っていない。SK072からウシの全身、SK189からはウマの頭蓋骨が検出された。

(2) 分析方法

同定 同定は現生標本との比較によって行った。比較に用いた現生標本は分析者所蔵の標本および港区立郷土歴史館所蔵の標本である。同定可能なすべての部位を対象とした。第12表に同定結果の一覧を記載した。

計測 ウシ四肢骨の計測位置はDriesch (1976)、ウマ臼歯の計測位置は西中川駿氏ら (2015) と植月学氏 (2011a) に従った。

体高・年齢推定 ウシは西中川氏らの推定法 (西中川ほか2017) を使用し、計測可能であった尺骨と中手骨の計測結果から体高推定を行った。

ウマは西中川駿氏らの推定法 (西中川ほか2015) を使用し、臼歯中心高 (HC) から年齢推定を、臼歯歯冠長 (L) から体高推定を行った。計測結果は計測可能なものをすべて記載したが、年齢・体高推定は推定式の相間が高いもののみを用いて計算した (第10表、第11表)。

その他観察項目 解体痕、加工痕、銛痕、食肉目によると推測される咬痕などの痕跡は確認できなかった。

2 分析結果

(1) 同定結果

SK072 ウシ一個体分の全身骨が土坑の底部直上で検出された (第12表)。現場検出段階では全身の骨が確認されているが (第61図、図版21)、風化が著しく同定可能な資料は限定された。体部は北西に向かっているが、頭を折り曲げられているため吻端は南東方向を向く。前肢と後肢はそれぞれ関節部分で曲がっており、左右の位置はほぼ重なっている。

SK189 ウマの頭蓋骨が一個体分検出された (第12表)。犬歯がないため、雌と判断した。SK072とは異なり、覆土中からの出土である (第81図、図版28)。土坑西壁付近に出土しており、同定段階では頭蓋骨の風化により歯しか確認できなかったが、上顎、下顎ともに歯列がそろっている。

(2) 体高・年齢推定結果

SK072 (ウシ) 尺骨の計測結果から118.34cm、中手骨の計測結果からは124.00cmの推定体高が得られた (第10表)。

SK189 (ウマ) 推定年齢は 6.69 ± 1.77 歳、推定体高は 120.10 ± 2.06 cmという結果が得られた (第11表)。

3 考察

(1) 埋葬

SK072出土のウシの埋葬姿勢について、頭を折り曲げられ四肢も曲がっている点が注目される。頭部から寛骨までは土坑の底部に押し込められたような状態である。東京都西新宿3丁目遺跡出土のウマ埋葬事例などでは、頭と四肢が強く曲げられて小規模な土坑に押し込められた状態で確認されており、土坑掘削の省力、省スペースを意図した埋葬方法であることが指摘されている (植月2013)。SK072例は西新宿3

丁目遺跡例ほど四肢が曲げられていないものの、頭の屈曲、ウシに対する土坑の規模が小さいことが共通点として認められる。また土坑自体は二次的に利用しているものか、ウシを入れるために掘削したものか不明であるが、土坑底部直上からウシが出土していること、各部位が解剖学的位置を保ち空隙が認められないことが確認できる。また中近世のウシ埋葬事例では、頭部を欠くような特殊な事例として確認されている。さらに各部位を製品として利用する例も確認される。それに対してSK072例は、全身が確認されており、解体痕も確認されない。上記の内容を総合すると、やや小規模な土坑にウシを埋葬するために、頭や手足を折り曲げ、完全に腐敗する前にウシを埋め戻したことが想定される。従来確認されていたウシの埋葬事例では、頭部欠損などから儀礼行為の可能性も指摘されているが、SK072例は異なった埋葬方法をとった可能性が想定される。

SK189においては、ウマの頭部が土坑の西壁に近い部分から出土し、土坑東側に空間が存在することが分かる。植月氏はウマ埋葬土坑と同規模の土坑で、歯のみが腐食せず検出される土坑も埋葬の可能性が高いと指摘している（植月2013）。また頭骨埋納事例（植月2013）をみると、頭骨に合わせた掘り方の土坑や複数の頭蓋骨・顎骨が一括して検出された例があり、SK189例とは一致しない。埋葬土坑の頭部から反対側の土坑壁までの空間の間隔は約1m～1.3m（植月2013）で、SK189例は約1～1.1mである。以上のことから、SK189にウマの全身が埋葬されたが、腐食によりほとんどの部位が風化し、強度の強い歯が残ったという可能性が高い。

（2）年齢・体高復元

西中川氏らの論考によると、九州地方の事例ではあるが、中世の遺跡出土ウシの推定体高は $124.1 \pm 20\text{cm}$ （雄）と $114.6 \pm 2.3\text{cm}$ （雌）、近世では $121.6 \pm 5.2\text{cm}$ （雄）と $114.0 \pm 3.0\text{cm}$ （雌）と示されている（西中川ほか2017）。尺骨（118.34cm）と中手骨（124.00cm）の推定結果で、約6cmの差が確認されるが、西中川氏らの計測結果に当てはめるならば、いずれの計測結果からも雄の個体である可能性が高い。

統いてウマについて検討を行う。遺跡出土ウマの年齢について、中世東国では10歳前後にピークがみられる傾向が指摘されている。近世段階では14歳以上の高齢個体に偏る（植月2018）。本報告の資料に関しては、 6.69 ± 1.77 という結果が得られたが、中近世の東国においては比較的若い個体といえよう。また推定体高については、臼歯冠長の計測結果から $120.10 \pm 2.06\text{cm}$ という結果が得られた。しかし、頭部に関しては、個体ごとのプロポーションの変異が大きいため、四肢骨と比較して推定体高を算出するための資料としては不向きであることが指摘されている（植月2011aなど）。ただし、計測可能な部位が臼歯に限られたため、本報告においては、あくまで暫定的な数値として扱うことをご容赦願いたい。推定体高からは日本在来馬の範疇におさまることが分かる（西中川ほか2015）。

（3）まとめ

SK072出土ウシ、SK189出土ウマともに全身が埋葬された個体であることが想定された。近世農村遺跡の全身骨格がそろう埋葬例について、死後の牛馬の解体や肉食、骨の利用が低調であった可能性について指摘がなされている（植月2018）。特に本報告のウシに関しては、全身骨格が出土している点、解体痕等の痕跡がみられないことなどから、死後利用された可能性が低いと考えられる。またウシ、ウマとともに中近世遺跡出土の牛馬の範疇におさまる年齢・体高であることが確認された。

謝辞

本稿の執筆にあたり、港区立郷土歴史館の山根洋子氏には、現生標本の閲覧等でご協力いただいた。この場を借りて御礼申し上げる。

参考文献

- Angela Von Den Driesch 1976 A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites. Peabody Museum Bulletins 1, Peabody Museum Press,Cambridge
- 植月 学 2011a 「出土馬骨計測値の比較のための基礎的研究」『動物考古学』28号 動物考古学研究会
- 植月 学 2011b 「甲斐における平安・鎌倉時代の馬產－ウマ遺体の分析による検討－」『山梨県考古学協会誌』第20号 山梨県考古学協会
- 植月 学 2013 「甲斐周辺における馬埋葬と頭骨埋納－甲府市朝氣遺跡出土のウマ遺体－」『山梨県考古学協会誌』第22号 山梨県考古学協会
- 植月 学 2018 「東国における牛馬の利用」『季刊考古学』第144号
- 覚張隆史・植月学2016「同位体化学分析に基づく山梨県域遺跡出土馬の給餌形態の復元」『山梨県考古学協会誌』第24号 山梨県考古学協会
- 松井 章 2008 「動物考古学」京都大学学術出版会
- 道上 文 1999 「馬と船橋」船橋市郷土資料館
- 西中川駿・幸村真由美ほか2015「ウマの臼歯の計測値から体高および年齢の推定法」『動物考古学』32号 日本動物考古学会
- 西中川駿・下市寿史ほか2017「ウシの骨計測値から骨長ならびに体高的推定法」『動物考古学』34号 日本動物考古学会

第10表 SK072出土ウシ計測結果と推定体高

番 号	遺 構 番 号	種類	部位	左右	数	残存位置1	残存位置2	計測位置	計測結果 (mm)	各部位の推定 最大長 (mm)	推定体高 (cm)
39	SK072	ウシ	尺骨	L	1	p	清華	DPA	61.50	340.24	118.34
40	SK072	ウシ	中手骨	L	1	w		MB	34.70	34.70	124.00

第11表 SK189出土ウマ計測結果と推定年齢・推定体高

*各推定式は西中川ほか2015の2次回帰式を使用した
**HBはアーチカル質歯面曲の高さ、ICCは歯板中心部での高さ(植月2011a)
△-は破損まで計測不可のもの

番 号	遺 構 番 号	種類	部位	左右	数	残存位置1	計測結果 (mm)			推定年齢	臼歯列長推定結果 (mm)	頭蓋最大長及び 下顎全長推定結果 (mm)	推定体高 (cm)
							HB	HC	L				
56	SK189	ウマ	上顎歯	L	1	P3	47.44	47.37	27.80		162.23	48.26	124.03
57	SK189	ウマ	上顎歯	L	1	M1	48.79	51.91	23.87	5.76			
58	SK189	ウマ	上顎歯	R	1	P2	36.01	38.98	31.23		156.37	47.21	118.96
59	SK189	ウマ	上顎歯	R	1	P3	44.69	45.46	27.21		159.90	47.73	118.96
60	SK189	ウマ	上顎歯	R	1	P4	50.75	50.75	26.54	7.56			
61	SK189	ウマ	下顎歯	R	1	M1	36.60	40.36	23.95	8.46			
62	SK189	ウマ	下顎歯	L	1	P2	36.88	36.83	28.77	5.98	156.43	38.42	118.04
63	SK189	ウマ	下顎歯	L	1	P3	50.74	52.46	26.84	6.14	159.94	39.05	121.72
64	SK189	ウマ	下顎歯	L	1	P4	44.15	45.86	27.28				
65	SK189	ウマ	下顎歯	L	1	M1	46.04	47.58	24.42				
66	SK189	ウマ	下顎歯	L	1	M2	-	52.89	25.32				
67	SK189	ウマ	下顎歯	L	1	M3	-	-	-				
68	SK189	ウマ	下顎歯	R	1	P2	33.29	36.11	29.06	6.21	157.32	38.57	118.90
71	SK189	ウマ	下顎歯	R	1	M1	44.87	47.29	24.05				
72	SK189	ウマ	下顎歯	R	1	M2	-	52.91	25.10				
全 体							6.69 ± 1.77			-	-	120.10 ± 2.06	

第12表 動物遺体の同定結果一覧

標 識 番 号	骨 種 名	種 類	部位	左 右	数	残存位置1	残存位置2	備考
1 10	SK072	ウシ	頭蓋骨	L	1	頭蓋骨	頭蓋骨 頭骨弓	
2 3	SK072	ウシ	頭蓋骨	L	1	頭蓋骨	頭蓋骨 頭骨弓	
3 24	SK072	ウシ	上顎骨	L	1	[Mix M3]		
4 17	SK072	ウシ	上顎骨	L	1	P2		
5 18	SK072	ウシ	上顎骨	L	1	P3		
6 13	SK072	ウシ	上顎骨	R	1	M3		
7 14	SK072	ウシ	上顎骨	L	1	M3		
8 20	SK072	ウシ	上顎骨	R	1	P2		
9 21	SK072	ウシ	上顎骨	R	1	P3		
10 22	SK072	ウシ	上顎骨	R	1	P4		
11 23	SK072	ウシ	上顎骨	R	1	M1		
12 19	SK072	ウシ	下顎骨	R	1	[P3 P4 M1 M2 M3]		
13 11	SK072	ウシ	下顎骨	R	1	?		
14 16	SK072	ウシ	下顎骨	R	1	閉節突起		15と複合
15 9	SK072	ウシ	下顎骨	R	1	易生部		14と複合
16 7	SK072	ウシ	下顎骨?	L	1	?		
17 12	SK072	ウシ	下顎骨?	L	1	閉節突起		
18 15	SK072	ウシ	下顎骨?	L	1	易生部		
19 4	SK072	ウシ	下顎骨	R	1	P2		
20 5	SK072	ウシ	下顎骨	R	1	?		
21 42	SK072	ウシ	頸椎	L	<1>	椎弓		
22 44	SK072	ウシ	頸椎	R	<1>	椎弓		
23 48	SK072	ウシ	頸椎	R	1	椎弓		
24 43	SK072	ウシ	頸椎	R	1	椎弓		
25 46	SK072	ウシ	頸椎	R	1	椎体		
26 47	SK072	ウシ	頸椎?	L	1	椎体		
27 65	SK072	ウシ	仙椎?	L	1	?		
28 52	SK072	ウシ	仙椎?	L	1	?		
29 53	SK072	ウシ	仙椎?	L	1	椎体		
30 55	SK072	ウシ	仙椎?	L	1	椎体		
31 49	SK072	ウシ	仙椎?	L	1	椎体		
32 51	SK072	ウシ	仙椎?	L	1	椎弓		
33 45	SK072	ウシ	仙椎?	L	1	椎弓		
34 49	SK072	ウシ	肩甲骨	L	1	d fr		
35 58	SK072	ウシ	上腕骨	L	1	d		上腕骨類
36 34	SK072	ウシ	上腕骨	R	1	d		上腕骨類
37 8	SK072	ウシ	上腕骨	R	1	M3		
38 60	SK072	ウシ	腕骨	L	1	p		
39 36	SK072	ウシ	腕骨	L	1	p		滑車
40 39	SK072	ウシ	手小骨	L	1	w		
41 74	SK072	ウシ	大指骨	L	1	m br		
42 75	SK072	ウシ	大指骨	L	1	m br+		
43 73	SK072	ウシ	大指骨	R	1	m br		掌養孔
44 67	SK072	ウシ	大指骨	?	1	?		
45 71	SK072	ウシ	腕骨	L	1	<p>><d>		
46 63	SK072	ウシ	腕骨	R	1	w		
47 72	SK072	ウシ	中足骨	R	1	m br		
48 76	SK072	ウシ	中足骨	R	1	p br+		後外
49 61	SK072	ウシ	四肢骨	?	<1>	fr		
50 66	SK072	ウシ	四肢骨	?	<1>	fr		
51 64	SK072	ウシ	四肢骨	?	<1>	m br		
52 57	SK072	ウシ	四肢骨	?	<1>	fr		
53 68	SK072	ウシ	四肢骨	?	<1>	fr		
54 50	SK072	ウシ	?	1	?			
55 2	SK189	ウマ	上顎骨	R	1	[P2br]		
56 26	SK189	ウマ	上顎骨	L	1	P3		
57 25	SK189	ウマ	上顎骨	L	1	M1		
58 27	SK189	ウマ	上顎骨	R	1	P2		
59 28	SK189	ウマ	上顎骨	R	1	P3		
60 29	SK189	ウマ	上顎骨	R	1	P4		
61 30	SK189	ウマ	上顎骨	R	1	M1		
62 31	SK189	ウマ	下顎骨	L	1	P2		
63 32	SK189	ウマ	下顎骨	L	1	P3		
64 33	SK189	ウマ	下顎骨	L	1	P4		
65 34	SK189	ウマ	下顎骨	L	1	M1		
66 35	SK189	ウマ	下顎骨	L	1	M2		
67 36	SK189	ウマ	下顎骨	L	1	M3		
68 37	SK189	ウマ	下顎骨	R	1	P2		
69 38	SK189	ウマ	下顎骨	R	1	P3-P4		
70 39	SK189	ウマ	下顎骨	R	1	P3-P4		
71 40	SK189	ウマ	下顎骨	R	1	M1		
72 41	SK189	ウマ	下顎骨	R	1	M2		
73 70	SK189	ウマ	坐骨		12	I		明前は坂頭の漂札、風化により同定が困難であるため、切歯で一括した

第3章 まとめ

第1節 千田の台遺跡第1次調査の成果について

1 古墳時代～奈良・平安時代の集落（第6図）

千田の台遺跡第1次調査では、古墳時代～奈良・平安時代までの堅穴建物跡35棟を確認した。西調査区で確認されたのは1棟（SI040）で、それ以外の34棟は東調査区で確認した。ただ、西調査区西側は、本来の地形が大きく削平されていること、また西調査区の広い範囲に中世の台地整形区画が及んでいることなどから、古墳時代～奈良・平安時代の堅穴建物跡は失われている可能性がある。東西に長い東調査区は、平坦地が広がり、南北から入り込む谷の縁辺に沿って東西に堅穴建物跡が並んでいた。

集落は、中世遺構との重複、耕作による攢乱などによって遺物の混在が著しいほか、遺存状態のよい遺物が僅かしかなく、特に大型の壺や瓶については遺存状態が悪く、図示可能なものが少なかった。このため、基本的にはどの遺構にも遺存していた杯を基準に時期を推定し、併せて遺構の重複関係を考慮して判断した。この結果、35棟の内訳は、古墳時代1棟、奈良時代17棟、平安時代17棟である。

古墳時代の堅穴建物跡はSI028で、東調査区中央部に立地する。口径が小さく小型化した須恵器模倣杯が出土している。混入品もあるが、土製紡錘車、土製勾玉などが出土しており、古墳時代後期の出土遺物の組み合わせであるといえよう。この時期の遺物は、中・近世遺構覆土の混入遺物や遺構外出土遺物にも見られ、同時期の堅穴建物跡はこのほかにも存在した可能性が高い。

奈良時代の堅穴建物跡のうち古い段階としたのは、SI002、SI007、SI019、SI025、SI032、SI034、SI036などである。堅穴建物跡の規模は、古墳時代後期のSI028とあまり変わらず、長軸の平均規模が5.1mである。この中でもSI032は今回調査した堅穴建物跡中もっとも規模が大きい。SI012とSI025が西にカマドを設置しているほかは、カマドを北壁中央に設置し、主軸を南北に向ける。SI019にはSI028と同様の小型化した須恵器模倣杯の土師器杯も出土しているが、SI002やSI032にみられる丸底の土師器杯も出土しており、この時期に含めた。SI002、SI032には須恵器杯蓋が出土している。扁平なつまみをもち、口縁部にかえりの痕跡が残るものと口縁端部が屈曲したものがある。またSI002出土の土師器高杯は小型化したもので、古墳時代から続く高杯の最終段階のものである。

奈良時代中葉にあたるのはSI003、SI005、SI009、SI022、SI026などで、カマドの位置や主軸方向は前代と変わらないが、遺構の規模が小さくなり、堅穴建物跡の長軸の平均規模は4.1mである。東調査区の北東部に密集している。非ロクロ成形で丁寧にミガキを行った浅い丸底の土師器杯を伴い、SI005のように非ロクロ成形で体部と底部の境が明瞭な杯も現れる。SI026にはフ拉斯コ形の長頸壺が出土しているが、丸底の杯がカマド横の壁際から出土しているため、この時期とした。

奈良時代後半はSI015、SI027、SI037で、堅穴建物跡の長軸の平均規模は3.8mとさらに小型になる。SI037には内外面に赤彩を施すロクロ成形の土師器杯2点が伴っていた。どちらも口縁部に油煙煤が付着し、灯明皿として組み合わせて使用していたものである。

平安時代の古段階と考えられるのはSI014、SI021のほか、西調査区に離れて位置するSI040である。カマドの位置や主軸の方位は奈良時代と変化がない。長軸の平均規模は3.4mである。SI014やSI040のように非ロクロ成形の平底の土師器杯もあるが、ロクロ成形の土師器杯の割合が多くなる。またこの遺跡で墨書

土器が多く見られるようになるのもこの時期前後である。

次の段階はSI001、SI013、SI030、SI035で、竪穴建物跡の規模は前代とあまり変わらないが、確認面からの掘り込みが浅い例が多い。カマドの設置位置が北側だけでなく、SI001やSI035などのように東に設置する場合もある。

最も新しい段階は10世紀代の遺構で、SI004やSI006、SI023などのように確認面からの掘り込みが浅い例が多い点は前代と共通する。

今回、遺構が確認できなかったために竪穴建物跡と認定できず、出土遺物を土坑や中世の台地整形区画内の覆土混入の遺物として取り扱わざるを得なかった、SX003、SX004、SX005やSK029出土の土器類は、掘り込みが浅かったために耕作などで壊された平安時代の竪穴建物跡に帰属する可能性が高く、この時期の竪穴建物跡数は本来もっと多かった可能性が高い。

このほか、出土遺物の中に瓦塔破片が出土している。今回の調査では寺院と直接結びつく内容の墨書き器などを出土した遺構はなかったが、土器片転用硯などが出土しており、周辺に関連施設があった可能性が考えられる。

以上、調査区域内で発見された竪穴建物跡は7世紀後半から10世紀の間、ほとんど途切れることなく継続して営まれていた。過去に一部を調査した南東の芝山町山ノ台遺跡¹⁾でも奈良時代を中心とした時期の竪穴建物跡が確認されている。現在は行政区画で区切られているが、地形から見て同じ集落の一部と考えられる。また、東調査区北側にも未調査の平坦地（圓央道関連で令和2年度以降調査予定）が広がっており、この区域にも同様の集落が確認される可能性が高く、集落の変遷に関してはこれと併せて検討する必要があろう。芝山町境貝塚²⁾は谷を隔ててはいるが、同じ台地上にあり、やはり同時期の集落が所在する。これらとの関係も注目されるところである。

2 中世遺構群（第41・49・69図）

中世～近世に構築されたと考えられる遺構は東・西調査区ともに確認されている。台地整形区画13か所、溝状遺構1条、道路状遺構1条、竪穴状遺構1基、地下式坑8基、井戸5基のほか土坑267基である。いずれの遺構も出土遺物が少なく、遺構の時期を確定することが難しいが、出土銭貨は唐錢、明錢、北宋錢が主体で、中世～近世初頭の時期の所産であることが想定できる。

台地整形区画としたものには、方形、不整形、溝状のものなどがあり、区画といつても掘り込み、土手や溝などの明瞭な境界がある訳ではなく、浅く窪む程度のもので、区画内あるいは周辺に土坑を作う。しかし、多くが調査区外にも広がる様相を見せ、全体を把握できたものはほとんどなかった。

このうちSX013は最も規模が大きい。これを囲むように、地下式坑6基が出口を同じ方向に向けて並び、北側には井戸1基、東側には井戸4基があり、地下式坑と井戸の内側に多数の土坑が確認されている。この部分は人為的に周囲より標高が下がっており、不整形な土坑が重複して存在し、建物などの施設の存在が想定されるものの、明確に捉えることはできなかった。

土坑群は、方形、円形など形態も様々で、遺物を伴わないか伴っても破片が多く、土坑の時期や性格を明らかにできたものは少なかった。この中で、東調査区SX008内のSK072と西調査区南に位置する土坑群の中のSK189はウシ、ウマの埋葬土坑であったことがわかっている（第2章第4節）。SK072の上層には、SK039出土品と接合した石塔があり、SK072が確認されたSX008内からも石塔片を出土しており、石塔が使用されなくなった時期のものと推定される。

土坑類に出土遺物が少ない中で、遺物を多数伴っていたのは地下式坑SK116と井戸SK114で、ほかの土坑類と比較して突出していた。土器はもちろんあるが、それ以外にどちらからも板碑と石塔が出土している点が共通する。SK114出土遺物にはSX013出土遺物と接合したものが含まれ、廃絶の時期が近かったことが想定できる。

石塔は、西調査区でも出土しており、これらの多くに被焼痕跡や煤の付着が見られ、砥石として再利用されているものも多い。また、板碑も小破片となったものが出土している。千田の台遺跡第1次調査の調査区内では、墓跡と断定できる遺構は確認されていないが、これらの出土遺物から周辺に墓地があり、すでに壟されていたことが想定できる。

芝山町境貝塚³⁾でも中世の遺構として、土坑のほか、土坑墓、火葬墓、溝、掘立柱建物跡などを確認している。また、南にある芝山町境砦⁴⁾では郭と土塁が確認されて城館跡とされ、本遺跡との関連が想定される。

第1章第2節でもふれたように、本遺跡の所在する多古町千田は、その地名から中世の荘園である「千田の庄」の役所の所在地候補のひとつとされている。今回の調査では、それを裏付ける遺構や遺物の存在を確認することができなかったが、周辺を含めると奈良・平安時代から続く大きな集落が存在し、また中世の遺構の存在なども明らかとなり、まだ未調査部分を残していることから、今後の調査の進展により、本遺跡の位置付けもより明確になるであろう。

注

1 (財)山武都市文化財センター 2008年『境貝塚 山ノ台遺跡 優田台遺跡 殿部田古墳群』

2 1と同じ

3 1と同じ

4 千葉県教育委員会 1996年『千葉県所在中近世城館詳細分布調査報告書Ⅱ－旧上総・安房国地域－』

第13表 墓書土器等一覧

No	出土遺構	内容	種類	備考	No	出土遺構	内容	種類	備考
1	SI001 - 3	?	ヘラ書き	龜	29	SI040 - 4	仲	墨書	
2	SI002 - 8	?	墨書		30	SI040 - 5	刀酒	墨書	
3	SI008 - 6	四万	墨書		31	SI040 - 7	麿	墨書	
4	SI008 - 7	?	墨書		32	SI040 - 13	?	墨書	
5	SI014 - 1	向	墨書		33	SI040 - 14	野	墨書	
6	SI014 - 7	?	墨書		34	SI040 - 15	?	墨書	
7	SI014 - 9	小野	墨書		35	SX002 - 2	?	墨書	
8	SI014 - 10	斜格子	ヘラ書き		36	SX002 - 3	酒	墨書	
9	SI015 - 4	?	ヘラ書き	龜	37	SX002 - 4	?	墨書	
10	SI017 - 4	?	墨書		38	SX004 - 2	?	線刻	
11	SI017 - 5	?	墨書		39	SX004 - 6	?	墨書	
12	SI020 - 5	?	墨書		40	SX005 - 1	生万	墨書	
13	SI021 - 5	里	墨書		41	SX006 - 1	大	線刻	
14	SI021 - 6	?	墨書		42	SD001 - 1	?	墨書	
15	SI021 - 7	?	墨書		43	SD001 - 2	?	墨書	
16	SI021 - 8	?	墨書		44	SD001 - 3	?	墨書	
17	SI021 - 9	?	墨書		45	SX012 - 1	一	墨書	カワラケ
18	SI021 - 10	?	墨書		46	SK005 - 4	?	墨書	
19	SI021 - 11	?	ヘラ書き		47	SK023 - 2	旭	墨書	
20	SI021 - 13	罫・×	墨書・ヘラ書き	龜	48	SK034 - 1	升	墨書	
21	SI025 - 4	?	墨書		49	SK066 - 1	野	墨書	
22	SI025 - 5	子	墨書		50	SK073 - 1	四万	墨書	SI008帰属
23	SI025 - 6	?	墨書		51	SK073 - 2	子・×	墨書・線刻	SI008帰属
24	SI026 - 4	?	墨書		52	遺構外 - 3	?	墨書	カワラケ
25	SI026 - 5	?	墨書		53	遺構外 - 6	?	墨書	
26	SI032 - 11	?	墨書		54	遺構外 - 12	?	墨書	
27	SI037 - 4	大	線刻	灯明皿	55	遺構外 - 13	?	墨書	
28	SI037 - 5	山	墨書	灯明皿	56	遺構外 - 14	正□	墨書	

第2節 千田の台遺跡と通鑑郡茨城郷（第91図）

承平元年（931年～938年）に、源順によって編さんされた平安時代中期の辞書である『倭名類聚抄』（以下『和名抄』とする）には、各国の郡郷名が記されている。そのうち下総国通鑑郡は、野田郷から中村郷まで18郷が記載されている。古代の郡の等級では16里（郷）以上が大郡である。大郡は下総国のなかでは通鑑郡と海上郡の2郡のみであり、通鑑郡は人口密度の高い郡である。

千田の台遺跡周辺は通鑑郡茨城郷に比定できる¹¹⁾。茨城の遺跡は多古町間倉に「茨城台」の地名がある（多古町1985）。また、吉田東伍によれば千田には中世に千田庄大原郷があったが、この大原は「おおばら」と読まれており、茨城が転記したものである（吉田1903）。大原の「原」は通鑑郡原郷ともかかわり、茨城郷と原郷は隣接する位置関係にある。栗山川の支流である多古橋川の西方が茨城郷、多古橋川の東方で栗山川にはさまれた地域が原郷である。

芝山町小原子も茨城の遺称である。しかし、小原子周辺は、小原子遺跡群作遺跡（松田ほか1990）から出土した「上総国…」の墨書き器から上総国に含まれる。武射郡加毛郷に属する土地である。千田は小原子からみて東方であり、茨城郷の西端が下総国と上総国との国境である。栗山川の支流である高谷川に面する台地が上総国側であり、高谷川の東方で多古橋川に開析された台地が下総国側である。本貫の地名が隣接地にある周辺地域の例としては、山辺郡武射郷（東金市下武射田周辺）がある。また、下総国府・葛飾郡家の所在郷が豊島郷とみられているが（山路2014）、西方に隣接する武藏国には豊島郡が存在する。このような事例はほかにも存在するであろう。

茨城郷に隣接する郡郷についてさらにみると、千田の台遺跡南方の芝山町高谷周辺には、かつて上総国武昌（射）郡高舍里が存在した。高舍里は平城京跡から出土した「上総國武昌郡高舍里荏油」（表）・「四升八合 和銅六年十月」（裏）という木簡に表記されている。これは高舍里から納められた荏胡麻油の付け札木簡である。しかし、高舍里に後続する高舍郷は「和名抄」にはみられず、その周辺は郡郷制になつてからは上総国武射郡笄脛郷に編入された。

千田の台遺跡からはかなり北方となるが、多古町飯笛付近は茨城郷に含まれる可能性が高い。茨城郷の中核地については千田の台遺跡周辺も有力であるが、北方の多古町喜多に所在する大原遺跡（勝又・平岡1986）では掘立柱建物跡が多く見つかっており、喜多周辺の方がより優位とみる。飯笛付近は喜多周辺からみると多古橋川の低地を介して北方に位置しており、飯笛と喜多は比較的近い位置関係である。なお、水系をみると飯笛付近は多古橋川の上流部であり、原郷との地縁が強い。しかし、飯笛付近を原郷とすると原郷の郷域が広くなりすぎる。原郷の有力集落には多古町遺跡群No8地点（戸村2008）や桜宮遺跡（戸村2006）があるが、原郷の郷域のなかでは南側に位置する。発掘調査が少ないため断定しがたいが、飯笛付近は茨城郷に入る可能性が高い。このみかたが妥当であれば、茨城郷の郷域は南北にかなり細長いものとなる。

飯笛北方の成田市（旧大栄町）前林付近にも、奈良・平安時代の集落である天神山遺跡（武田1984）や猿田遺跡（黒沢2008）がある。前林周辺からはかなり北方となるが、成田市（旧大栄町）南敷は真敷駅の遺称地である。真敷駅の経営には駅戸集落群の存在が必要であり、8世紀代には真敷郷が存在していたと考える。そのため前林周辺に養老雜令（国内条）にみえるいわゆる「公私共利」の土地が広がっていないければ、前林周辺は真敷郷の範囲であった可能性がある。真敷駅は香取郡に属しており、茨城郷の北は香取郡と接していた。ただし、飯笛と前林間は南の栗山川（多古橋川）水系と北の大須賀川水系の分水界で

あり、遺跡分布は薄い。この周辺での通璫郡と香取郡の郡界は当初から線状のものではない。

また、真敷駅は延暦24（805）年に廃止されるが、廃止後のほぼ9世紀代以降、旧真敷郷地域のあり方が不明瞭である。香取郡小川郷や健田郷をはじめ、周辺の諸郷に包摂されたとみるが、9世紀代には律令制も変質し、初期荘園の存在も考えられることから、郡郷の比定はあまり意味がないのかもしれない。千田莊がどれだけさかのぼるかわからないが、千田の台遺跡周辺も後世には荘園領となっていく。

上記以外の郡郷比定についての記述は第91図に譲り、省略する。ただし、通璫郡家との関係で通璫郷と千俣郷のみ触れる。なお、第91図の真敷駅は香取郡、山方郷は埴生郡、加毛郷・理倉郷・高舍里・狎賀郷・長倉郷・新居郷は上総国武射郡であるが、それら以外は通璫郡の郷である。

通璫郡家については不明瞭であるが、これまで幾人かの研究者によって通璫市生尾遺跡周辺に存在することが指摘されている²⁾。生尾遺跡が発掘調査された地点は広大な台地の北東部である。狭い調査区ながら飛鳥時代から平安時代の堅穴建物跡・掘立柱建物跡が多く見つかり、特に掘立柱建物跡の多さが目を引く。調査地の南西、同一台地上には式内社である老尾神社が存在する。調査された地点は郡家の主要部分ではないが、筆者もこの生尾遺跡・老尾神社の所在する台地に郡家及び通璫郷の郷家集落が存在するとみる。

生尾遺跡以外の比定地としては、八日市場大寺があり、古郡の小字名をもつ匝瑳市大寺周辺が有力な候補地である。ここは千俣郷の比定地である。しかし、奈良・平安時代は通璫郷東南方の海浜砂堤帯の重要性が高まっていたとみており、台地と低地の双方を掌握する場所として、すぐ東方が椿海となる千俣郷よりも通璫郷の方が郡家比定地にふさわしい。また、生尾周辺は郡名と郷名の双方を兼ねる土地である。あるいは先に千俣郷に詳家があり、後に通璫郷に郡家が建設された可能性があるが、これは今後の検討課題である。

ほかに以前、多古町信濃台遺跡を候補とする考えが提示されたこともあった（平野1994、黒沢1995）。信濃台遺跡は通璫郡内陸の拠点として重要な遺跡であるが、中村郷の郷家集落の候補遺跡であり、郡家本体の比定はできない。また、「中村」という地名を中心地とみて、郡家が中村郷に存在するとみる考え方も存在した（多古町1985）が、地名だけでは弱い。

以上、通璫郡家は生尾遺跡周辺に存在するとみたが、次に印播郡と通璫郡の交通関係をとりあげる。下総国内の交通路としては、国府のある葛飾郡から千葉郡・印播郡・通璫郡…というルートの存在が指摘されている（平川2001、山路2004など）。葛飾から通璫までは、道前・道後の二区分でも、道前・道中・道後の三区分のどちらでも道前である。

印播郡家についても構成する建物遺構などは見つかっておらず、位置は不明である。筆者は酒々井町酒々井付近に所在すると想定しているが、この付近は長隈郷または印播郷内に比定できる地域である。酒々井以外では、山路直充氏が成田市公津の杜周辺と想定している（山路2016）。公津の杜周辺は八代郷内とみられる。しかし、長隈郷・印播郷・八代郷の郷域については、重なるところはあるものの、研究者間で完全な一致はみていない³⁾。印播郡家の所在郷については筆者も確信をもっていないことから、今後の検討課題とする。なお、巨視的にみるとならば印播郡家の位置は印旛沼の南東岸地域であり、本稿においてはそれで十分である。

印播郡家から通璫郡家に至る想定ルートをみる。印播郡家からは高崎川北方の台地に向かい、酒々井町尾上付近に所在する尾上木見津遺跡・富里市駒詰遺跡（小牧ほか2014）の近くを通り、現在の富里市中央

部を東に向かう。富里市から山武郡芝山町の北側に入り、芝山町からは香取郡多古町の中央部や南側を通行する。多古町からは匝瑳市の中央部に向かい、匝瑳郡家に至る。このルートを奈良・平安時代の郡郷でみるとならば、長隈郷または印播郷から上総国武射郡理倉郷に向かうルートとなるが、その途中で、埴生郡山方郷の南側を通行する可能性がある。理倉郷から武射郡加毛郷に至り、そこから再び下総国に入る。匝瑳郡茨城郷・原郷・中村郷・山上郷を通過し、匝瑳郡家が所在する匝瑳郷に至る。

千田の台遺跡はこのルートに比較的近い位置にある。印播郷から匝瑳郡に至る伝路が発掘調査されることはかなり難しいが、千田の台遺跡の北方を通りと想定する。奈良・平安時代の遺構・遺物をもつ圓央道の調査遺跡のなかでは、大塚台遺跡がよりこのルートに近い。大塚台遺跡に住む人々が所持していた希少な奈良三彩陶器⁴は、このような下総国道前の交通関係において入手されたものである。

注

1 匝瑳郡の各郷の比定地については、主として以下の3文献の研究成果を参考とした（今泉ほか2006、天野ほか2012、山路ほか2014）。

2 匝瑳郡家を生尾遺跡周辺とした主な文献としては以下のものがある（西山ほか1982、田形1997、實川1995）。

3 2019年8月24日に開催された2019年古代史サマーセミナー全体会において、木原高弘氏は「酒々井地区の集落」と題して発表された（木原2019）。優れた考察であり、教唆を受ける点が多いが、長隈郷・印播郷の郷域の把握に関しては検討の余地がある。また、印播郷の郷域把握は八代郷にも影響している。氏が長隈郷内として提示した高崎川中・上流の地域について、筆者は印播郷内とみる。同様に、印播郷内とした成田市台方・江井須などの江川中流域及び下流域西岸は八代郷内とみる。そのようにみると、木原氏の郷域把握では結果的に八代郷が極端に狭域になるからである。これは木原氏が郷域把握のもととした山路氏の考察にもいえることである（山路2014）。

郷域についてはほとんどの郷で文献史料がなく、また考古資料も乏しいため、その範囲の把握にあたっては遺跡分布や地形、周辺諸郷とのバランスを考慮する必要がある。川尻秋生氏は印旛沼東方・南方の諸郷が、西方の諸郷に比べて狭域であることを指摘している（川尻2009）。東・南方の諸郷が全体に狭域であるとしても、成田市八代周辺だけを八代郷とすると周辺の諸郷とのバランスが悪い。筆者はむしろ八代郷の郷域は、埴生郡山方郷との関りによっては富里市久能付近まで含む可能性があるとみている。いっぽう、長隈郷の郷域については木原氏の想定とは逆に佐倉市熊周辺から北西の佐倉市飯野周辺まで延びて、鹿島川下流西岸に位置する日理郷と隣接する可能性があるとみる。

なお、木原氏が上記資料で印播郷内とした成田市大袋に所在する大袋腰巻遺跡や大袋小谷津遺跡について、天野努氏は筆者と同様に八代郷内の可能性が高いとみている（天野2019）。以上のように、印旛沼東方・南方の諸郷の郷域については、埴生郡玉作郷・山方郷を含めて、検討すべき余地がある。

4 本書作成時点で未報告であるが、（公財）千葉県教育振興財團2019）に概要が紹介され、その際には「縄軸陶器の獣脚」と記載されている。なお、大塚台遺跡については、「首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書38－大塚台遺跡(1)～(3)－」として、本書と同時に刊行予定である。

引用・参考文献

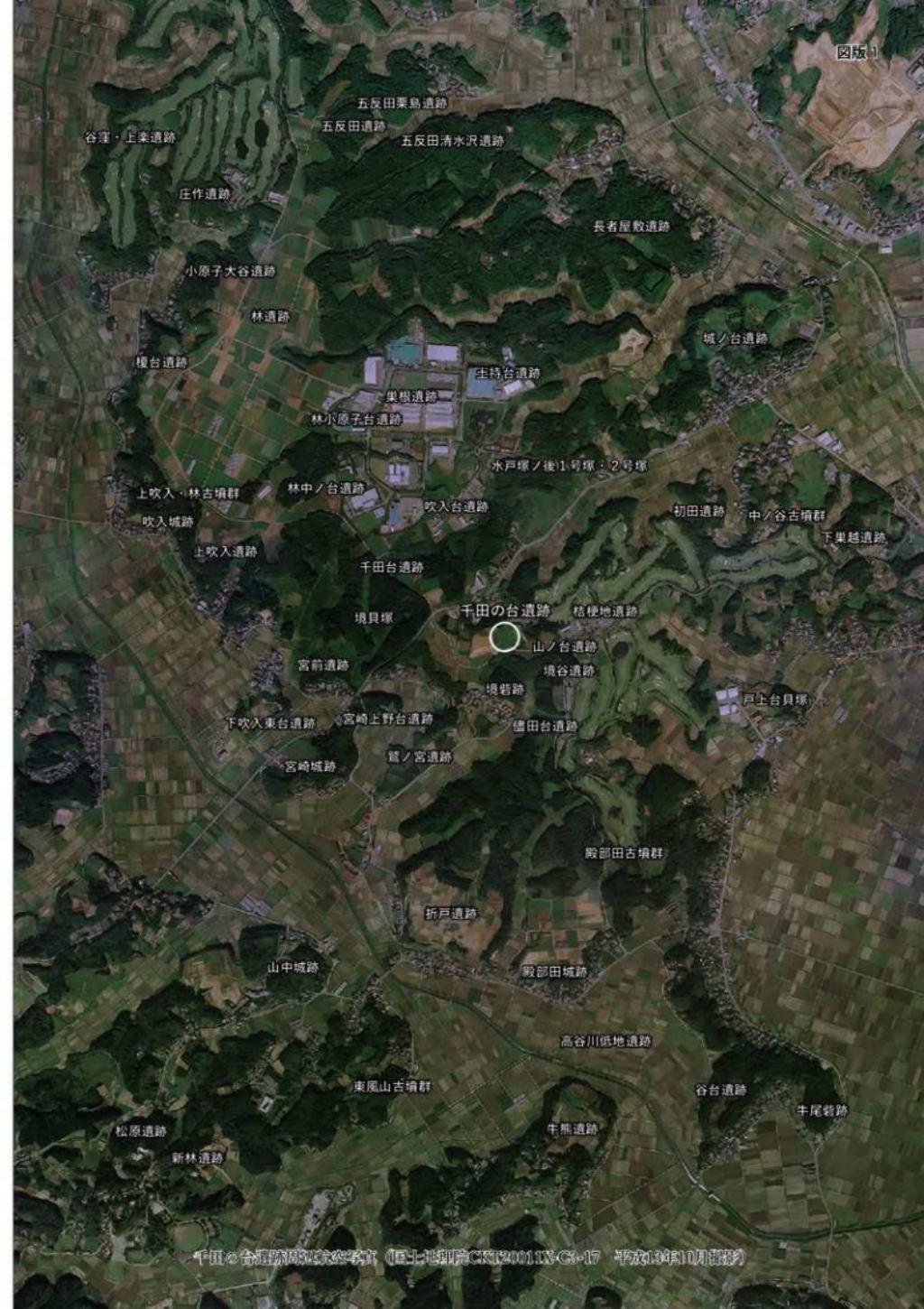
- 天野 努ほか 2012 「古代房総の地域社会をさぐる（2）－海上郡・香取郡・匝瑳郡を中心として－」 房総古代学研究会
 天野 努 2019 「下総国印旛地域の郡・郷と集落－印幡・埴生両郡を中心に－」 『2019年古代史サマーセミナー全体会資料
 古代の郡と郷をさぐる－下総国印旛の事例を中心に－』
 今泉 潔ほか 2006 「研究紀要25」（財）千葉県教育振興財團
 勝又貴賞・平岡和夫 1984 「大原遺跡」 多古町遺跡調査会
 川尻秋生 2009 「古代房総の国造と在地－印波国造と武射国造を中心に－」『房総と古代王権－東国と文字の世界－』 高志
 書院
 木原高弘 2019 「酒々井地区の集落」『2019年古代史サマーセミナー全体会資料 古代の郡と郷をさぐる－下総国印旛の事

- 例を中心に-』
- 黒沢哲郎 1995「信濃台遺跡」「事業報告Ⅳ－平成5年度－」(財)香取都市文化財センター
- 黒沢哲郎 2008「平成19年度 成田市内遺跡発掘調査報告書」成田市教育委員会
- (公財)千葉県教育振興財団 2019「香取郡多古町大塚台遺跡」「房総の文化財 Vol.58」
- 小牧美知枝ほか 2014「千葉県印旛郡酒々井町尾上木見津遺跡(第2・3地点) 千葉県富里市駒詰遺跡(第2~7・9地点)」
(公財)印旛都市文化財センター
- 實川 修 1995「生尾遺跡」(財)東總文化財センター
- 田形孝一 1997「黒潮満ちる道－八日市場市平木遺跡の再検討－」「平成9年度企画展 図録『古代の道と旅』千葉県立房総風土記の丘
- 武田 修 1984「天神山遺跡発掘調査報告書」天神山遺跡発掘調査会
- 多古町 1985「多古町史(上巻)」多古町
- 戸村勝司朗 2006「桜宮遺跡」(財)香取都市文化財センター
- 戸村勝司朗 2008「多古台遺跡群Ⅳ-No8地点の調査-」多古町教育委員会
- 西山太郎ほか 1982「八日市場市史」上巻
- 平川 南 2001「道制と文書行政」「千葉県の歴史 通史編 古代2」千葉県
- 平野 功 1994「古代の地名を考える－小見川町古屋敷遺跡出土の墨書き器を中心として」「香取民衆史」7
- 松田政基ほか 1990「小原子遺跡群調査報告書」山武考古学研究所
- 山路直充 2004「衣河の尻」と「香取の海」「古代交通研究」第13号 古代交通研究会
- 山路直充 2014「下総国の郡・郷・里・駅家」「市川市史編さん事業調査報告書 下総国戸籍 遺跡編」市川市文化国际部
文化振興課
- 山路直充ほか 2014「市川市史編さん事業調査報告書 下総国戸籍 遺跡編」市川市文化国际部文化振興課
- 山路直充 2016「古代の開発と印旛郡松徳郷の大塚前廃寺」「いんざい再発見」第3号 印西地域史研究会
- 吉田東伍 1903「増補 大日本地名辞書 第六卷 坂東」富山房(三版1976)



第91図 奈良・平安時代の千田の台遺跡周辺の郡郷

写 真 図 版



図版2



調査区遠景



千田の台遺跡(1) 調査区全景



確認調査



確認調査



確認調査



表土除去



表土除去



表土除去



調査風景



調査風景

発掘調査状況

图版4



SI001



SI001



SI002-003



SI002-004



SI002



SI003



SI003



SI004

竖穴建物跡(1)



SI005 · 007 · 011



SI005



SI005



SI006



SI006



SI006



SI007



SI007

竖穴建筑物(2)



SI008



SI008



SI008



SI008



SI009-SK005



SI009



SI009



SI10

竖穴建物跡(3)



SI011



SI011



SI011



SI011·012



SI013-014-017



SI013-014-015



SI013



SI013

竖穴建物跡(4)

图版 8





SI019



SI019



SI020-021-022-023-024



SI020



SI020



SI020



SI021



SI021

竖穴建物跡(6)



SI021



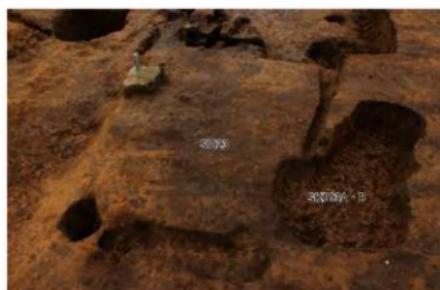
SI021



SI022



SI022



SI023



SI023



SI024



SI024

竖穴建物跡(7)



SI025



SI025



SI026



SI026



SI026



SI027



SI027



SI027

竖穴建筑物迹(8)



竖穴建物跡(9)



SI033



SI034



SI035



SI036



SI037



SI038



SI039



SI040

竖穴建物跡(10)

图版14



SK054



SK054



SK054



SK054



SK057



SK057



SK101



SK101

地下式坑(1)



SK101



SK116



SK116



SK116



SK117



SK117



SK118



SK118

地下式坑(2)



SK118



SK118



SK119



SK119



SK119



SK151



SK151

地下式坑(3)



SK151



SK108



SK108



SK114



SK120



SK120



SK126



SK197



SK126・197



SX001



SX002



SX003



SX003



SX003



SX004



SX004



SX005

東調査区土坑群(1)



SX006



SX006



SX007



SX008



SX009



SX010

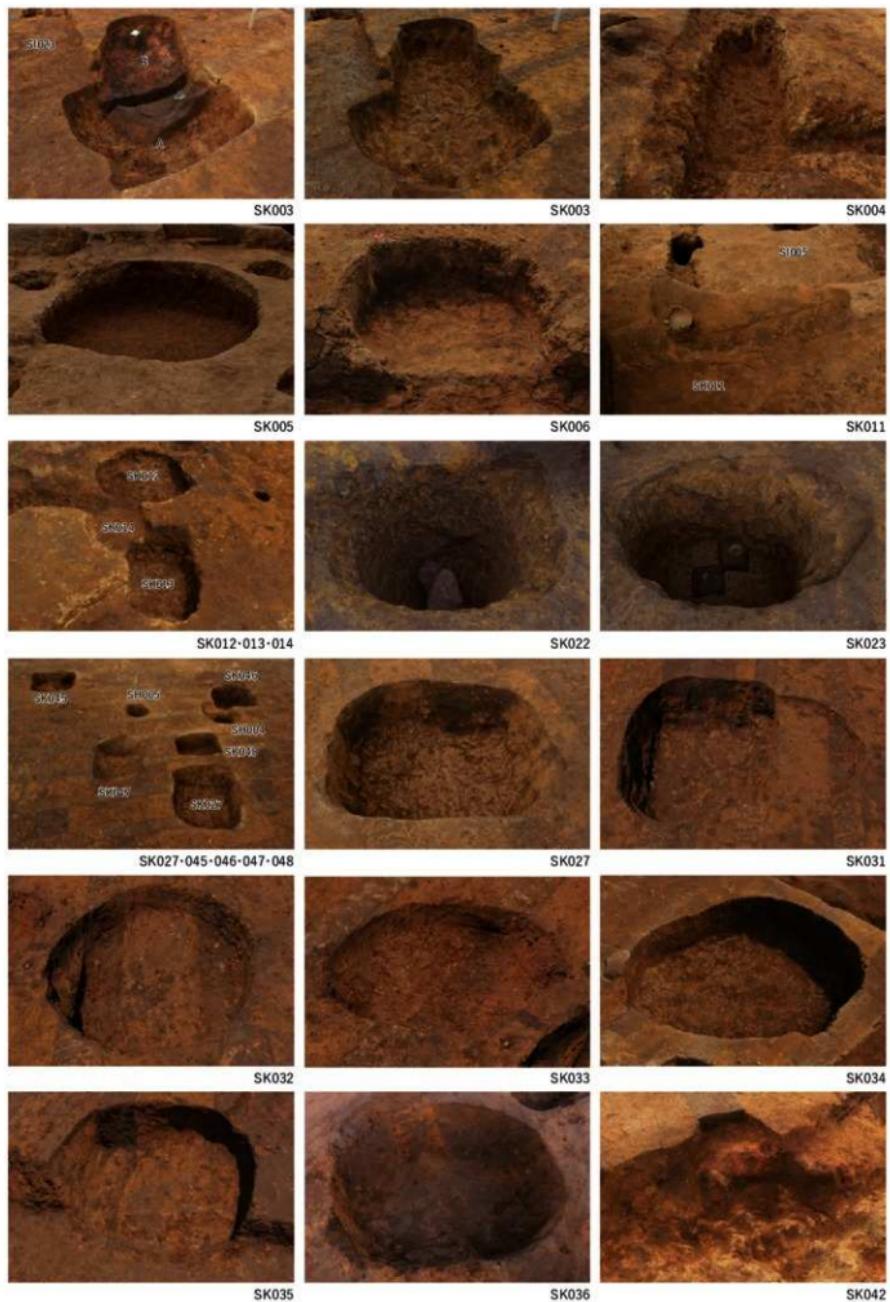


SX11

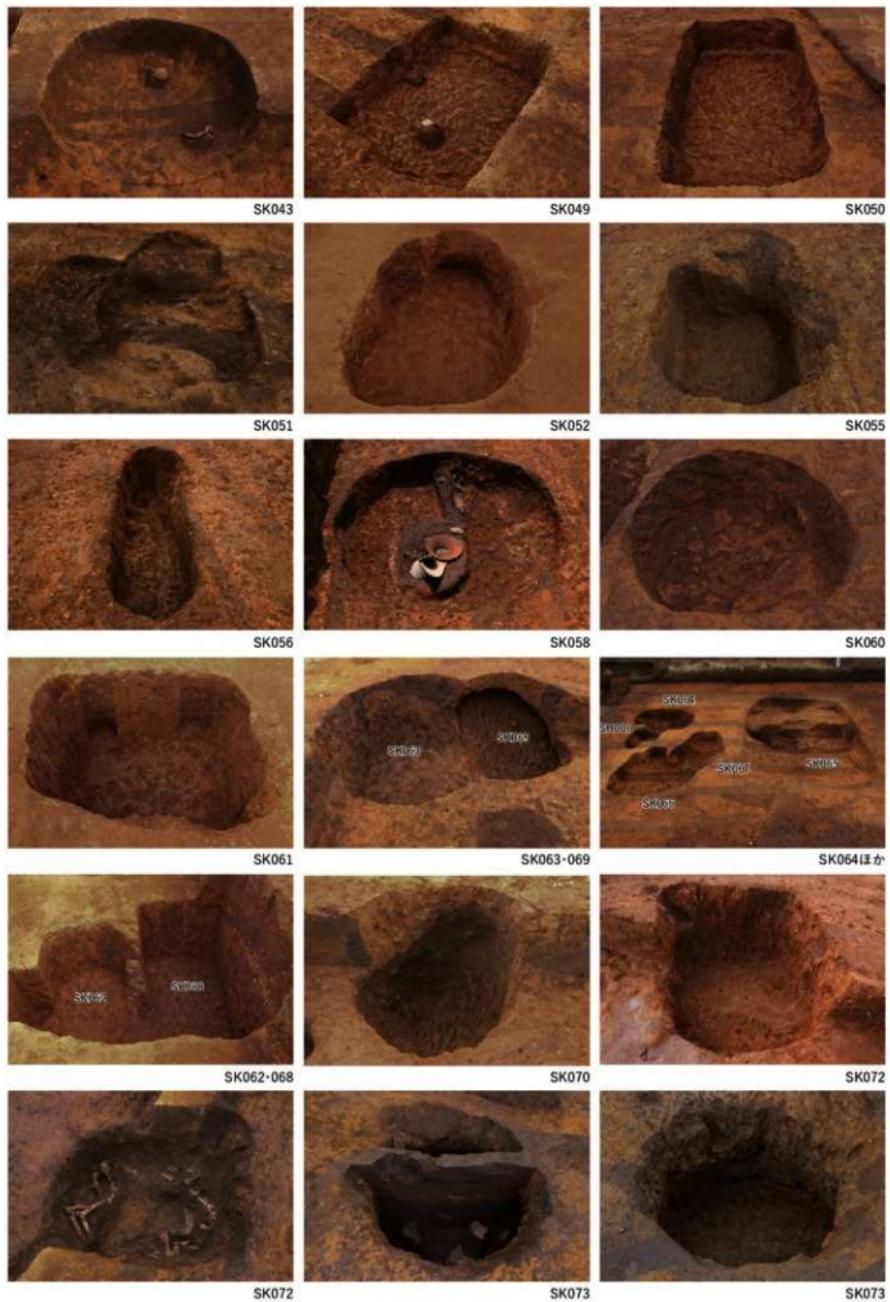


SI038

東調査区土坑群(2)



東調査区土坑群(3)



東調査区土坑群(4)

圖版22



北西部



北東部



南西部



南東部



SX012



SX012



SY013

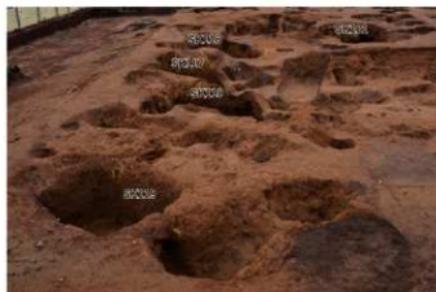


西調查區土壤群(1)



SX013

SX013



SX013



SX013



SX014



SX014

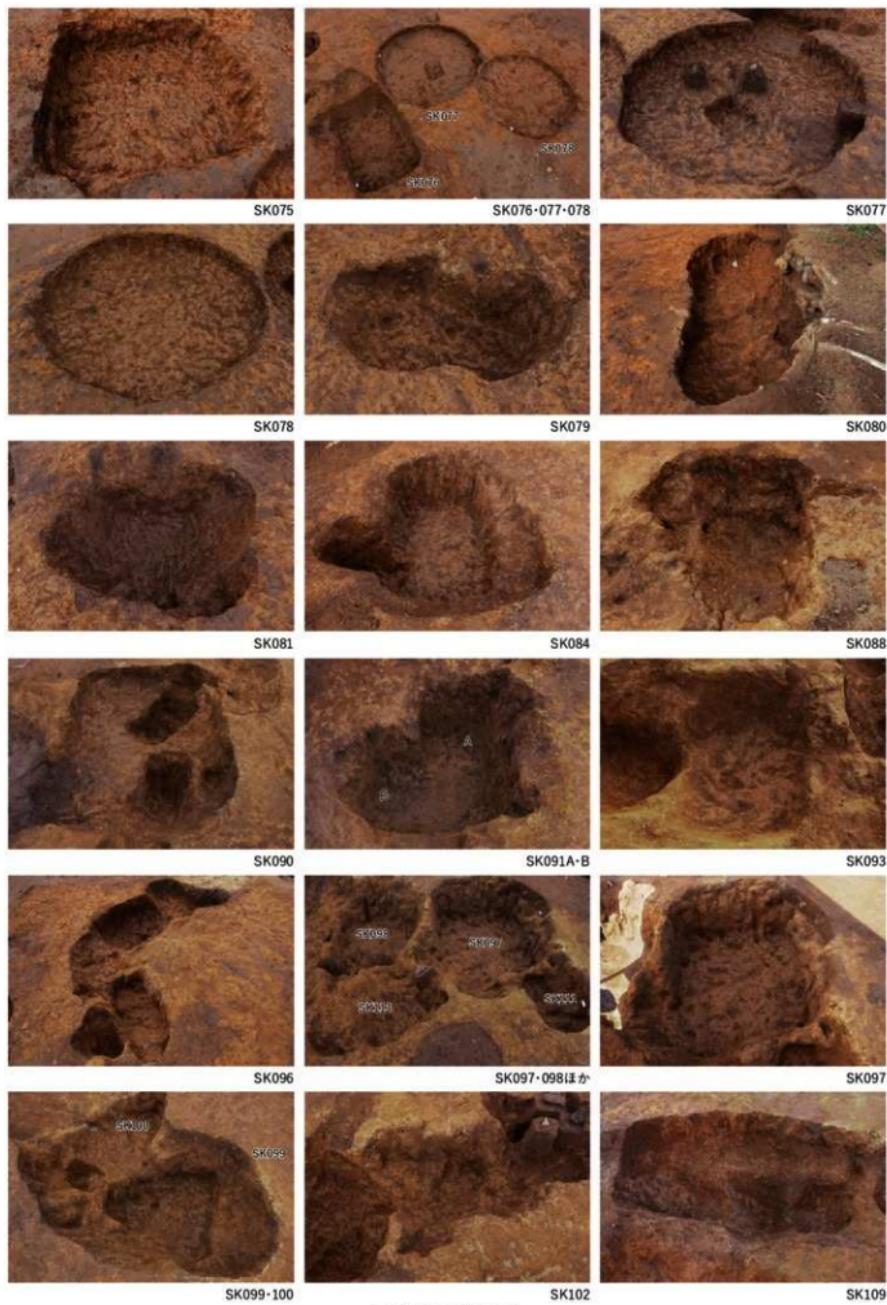


SX014

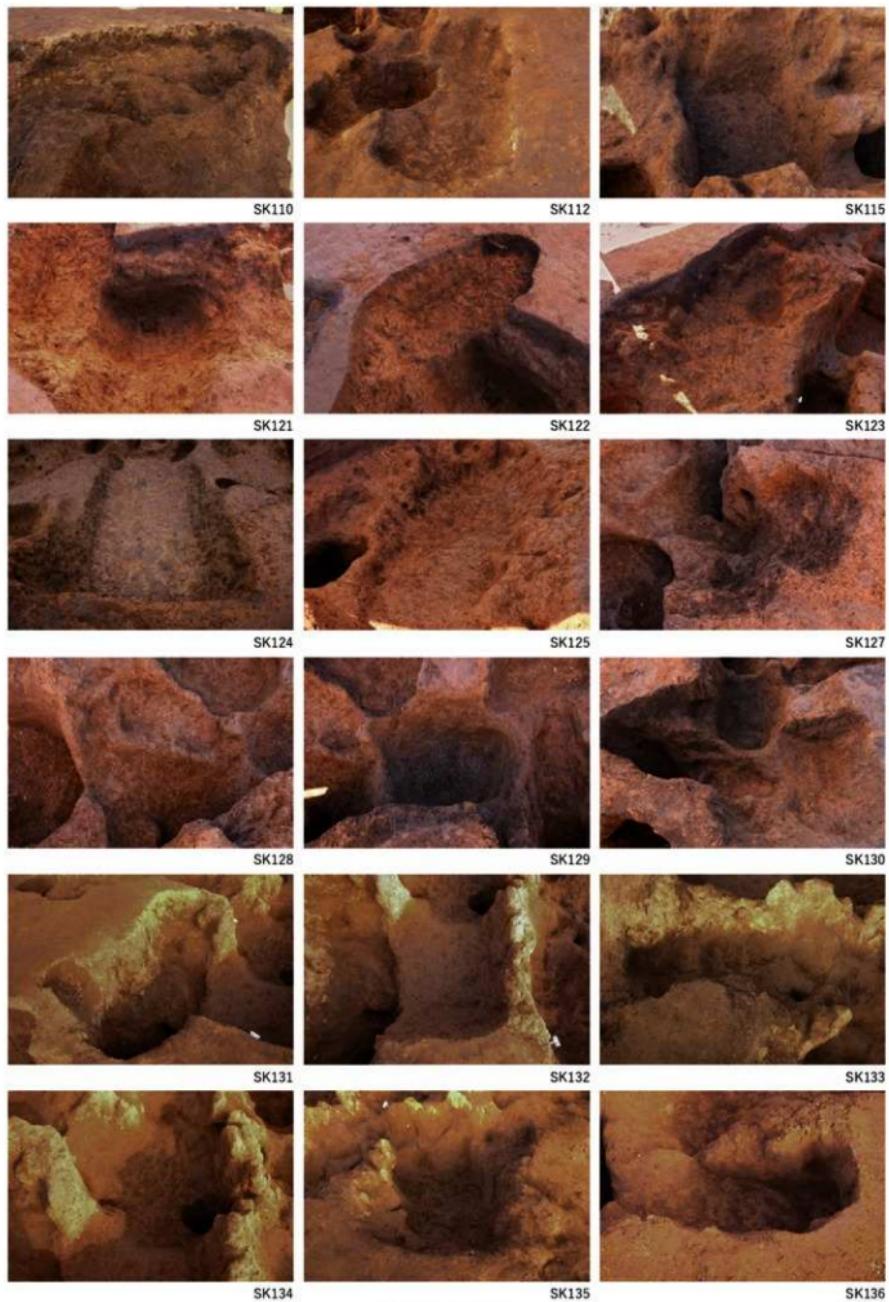


南部

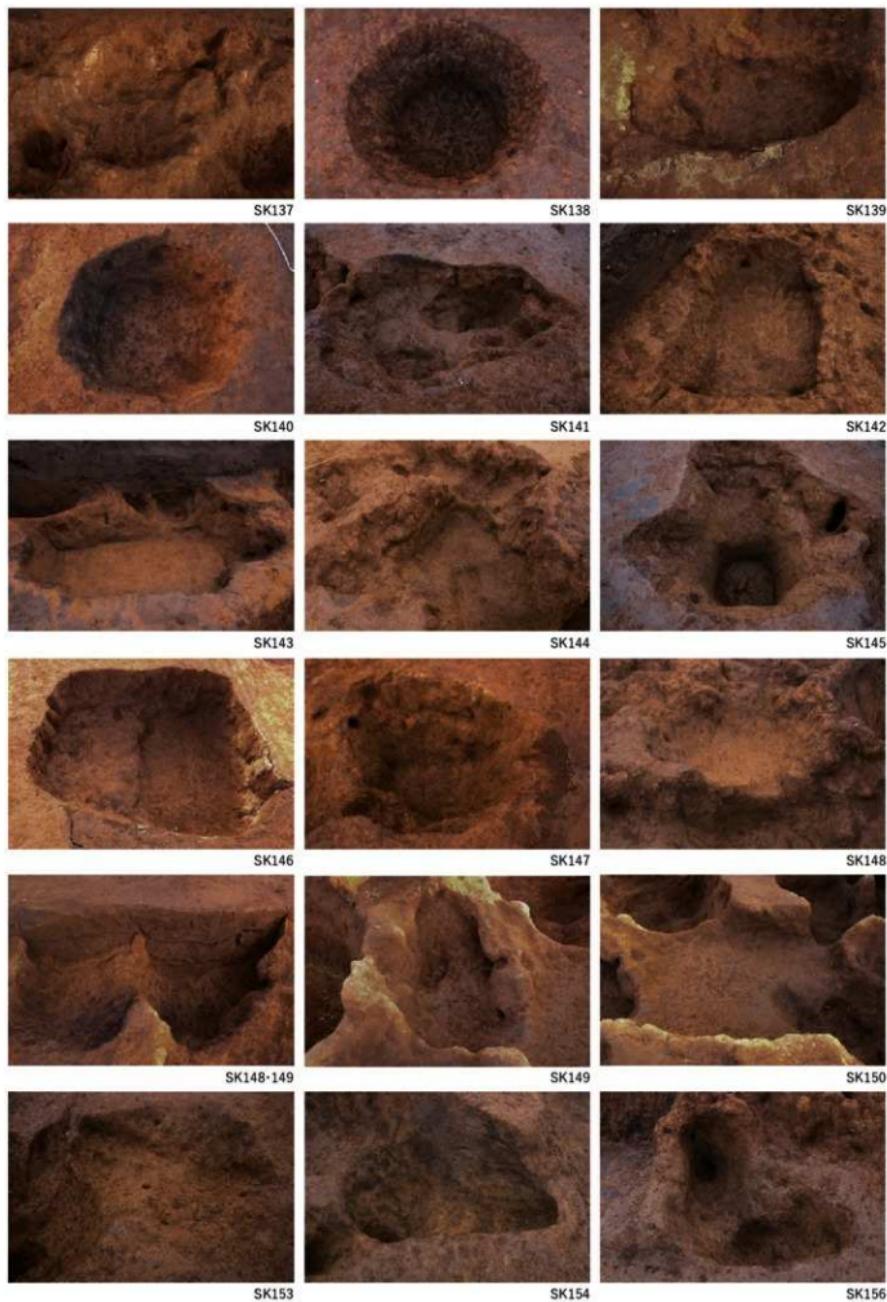
西調査区土坑群(2)



西調査区土坑群(3)



西調查区土坑群(4)



西調查区土坑群(5)





西調査区土坑群(7)



竖穴建物跡出土土器(1)



竖穴建物跡出土土器(2)



竖穴建物跡出土土器(3)



竖穴建物跡出土土器(4)



竖穴建物跡出土土器(5)



土坑等出土土器(1)



土坑等出土土器(2)



墨书土器等



外面



里面

地下式坑出土土器



外面



内面



外面



内面

図版40



外面



内面

西調査区土坑群出土土器(1)



外面



里面

西调查区土坑群出土土器(2)



遗构外出土土器(1) 繩文土器



遺構出土土器(2) 繩文土器・弥生土器



外面



内面



SI02-9



SI028-10



SI028-11



SX008-5



SI019-19



SI019-18



SI019-16



SI019-17



SI028-13



SI028-12



SI025-7



SI028-9



SI028-8



SK073-9



SI028-7



遗模外-29



SI034-5



SI019-20



SI019-21



SI034-6



SI025-8



SI027-6



SI040-24



SK073-10



SX013-13



SK144-1



遗模外-30



SK119-3



旧石器時代の石器・縄文時代の石器(1)



縄文時代の石器



縄文時代の石器(2)・砥石

砥石



石塔·板碑



金属製品(1)



金屬製品



錢貨

金屬製品(2) · 錢貨



外面



内面

報告書抄録

千葉県教育振興財団調査報告第783集

首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書37

- 多古町千田の台遺跡(1) -

令和3年3月12日発行

編 集 公益財團法人 千葉県教育振興財団

發 行 東日本高速道路株式会社
千葉市美浜区若葉2-9-3

公益財團法人 千葉県教育振興財団
千葉県四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 三陽メディア株式会社
千葉市中央区浜野町1397
